

常磐自動車道遺跡調査報告46

はら
原 B 遺跡

おおたぎり
大田切遺跡

序 文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間、平成11年にいわき中央～いわき四倉間、平成14年にはいわき四倉～広野間、平成16年には広野～常磐富岡間が開通し、現在は富岡～相馬間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化遺産が所在しており、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、数多くの遺跡等を確認しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、開発関係機関と協議を重ね、平成5年度以降、埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果をもとに、平成6年度から、現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成18年度から19年度に行った南相馬市の大田切遺跡と平成18年度に行った南相馬市の原B遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書が、文化財に対する御理解を深め、地域の歴史を解明するための基礎資料となり、さらには生涯学習等の資料として広く県民の皆様に活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力いただいた東日本高速道路株式会社、南相馬市教育委員会、財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、感謝の意を表するものであります。

平成20年2月

福島県教育委員会

教育長 野 地 陽 一

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大規模開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

常磐自動車道建設に際しては、平成6年度から埋蔵文化財の調査を実施しています。南相馬市に所在する埋蔵文化財については、平成9・10年度に分布調査、平成15年度から試掘調査を実施し、平成16年度からは発掘調査を開始しました。

本報告書は、平成18・19年度に実施した発掘調査のうちの、南相馬市に所在する原B遺跡と大田切遺跡の調査成果をまとめたものです。

原B遺跡からは、縄文時代早期末葉～前期最初頭、中期前葉の竪穴住居跡が発見され、多数の縄文土器・石器などが出土しました。

大田切遺跡からは、平安時代の竪穴住居跡が発見され、縄文時代後・晩期の土器や石器なども出土しました。

今後、これらの調査成果を郷土の歴史研究の基礎資料として、さらには地域社会を理解することや生涯学習の場などで幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査に御協力いただきました東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所、福島県担当部局、南相馬市並びに地域住民の皆様に、深く感謝申し上げますとともに、当事業団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年2月

財団法人 福島県文化振興事業団
理事長 富田 孝志

緒 言

- 1 本書は、平成18・19年度に実施した常磐自動車道(相馬工区)遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 本書には以下に記す遺跡の調査成果を収録した。
原 B 遺跡 福島県南相馬市原町区馬場字原 埋蔵文化財番号：20600288
大田切遺跡 福島県南相馬市小高区大富字大田切 埋蔵文化財番号：56300135
- 3 本事業は、福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受けて実施し、調査に係る費用は東日本高速道路株式会社が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。
- 5 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査グループの下記の職員を配して調査にあたった。

平成18年度

副 主 幹	安田 稔	文化財主査	国井 秀紀	文化財副主査	青山 博樹
嘱 託	佐藤 洋	嘱 託	小河 厚子	嘱 託	菅野 和博
嘱 託	中野 幸大				

平成19年度

副 主 幹	吉田 功	文化財副主査	門脇 秀典	嘱 託	鈴木 裕一郎
嘱 託	関根 昌毅				

- 6 本書の執筆にあたっては、発掘調査を担当した職員が分担して行った。
- 7 本書に掲載した自然科学分析については、遺跡調査グループ整備保存班 文化財主事 小林啓が土器に付着していた赤色顔料の蛍光X線分析と執筆を行ったほか、各種分析を下記の機関に委託した。結果と考察は各編第3章に掲載している。
石器・石製品の石質鑑定 パリノ・サーヴェイ株式会社
放射性炭素年代測定 株式会社加速器分析研究所
出土炭化材樹種同定 株式会社古環境研究所
- 8 原B遺跡から出土した石器(一部)の実測図作成は、株式会社ラングに委託した。
- 9 本書に使用した地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の20万分の1地形図および5万分の1地形図を複製したものである。〔承認番号〕平19東復第196号
- 10 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 11 発掘調査および報告書作成にあたり、次の諸機関からご協力いただいた。
南相馬市教育委員会 東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所(順不同)

用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 平面座標の国土座標軸を基準とした真北方向を図版の真上とした。それ以外のものは挿図中に真北方向を指す方位を示した。
- (2) 標 高 水準点を基にした海拔標高で示した。
- (3) 縮 尺 各挿図中に縮尺率を示した。
- (4) 土 層 基本土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせで表記した。
(例) 基本層位-L I・L II…、遺構内堆積土-ℓ 1・ℓ 2…
なお、挿図の土層注記で使用した土色名は、『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社)に基づく。
- (5) ケ バ 遺構内の傾斜面は「TT」で表現したが、相対的に緩傾斜の部分は「▽」で表している。また「▼」は後世の擾乱が明らかである場合に使用した。
- (6) 線の表現 破線は推定範囲、一点鎖線は貼床範囲を示す。
- (7) 網 かけ 挿図中の網かけの用例は以下のとおり。それ以外は各図中に表示した。
 焼土・酸化範囲  還元範囲
- (8) 深 さ ビット番号に付した()内の数値は、床面からのビットの深さを示す。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 土器断面 須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で表記し、胎土中に繊維が混ざされたものには▲を付した。
- (2) 遺物計測値 ()内の数値は推定値、[]内の数値は遺存値を示す。
- (3) 縮 尺 各挿図中に縮尺率を示した。
- (4) 網 かけ 挿図中の網かけの用例は以下のとおり。それ以外は各図中に表示した。
 黒色処理  擦り面

3 本書における本文中の遺物の番号は、挿図番号と対照できるようにして、以下のとおり記した。

(例) 図1の1番 → 図1-1

また、写真図版の遺物に付けた挿図番号は以下のとおり記した。

(例) 図1の1番 → 1-1

4 本書で使用した略号は、次のとおりである。

南相馬市…MSC	原B遺跡…H・B	大田切遺跡…OTG	
竪穴住居跡…SI	木炭窯跡…SC	土 坑…SK	焼土遺構…SG
土器埋設遺構…SM	溝 跡…SD	道 跡…SF	特殊遺構…SX
ビット…P	グリッド…G		

5 参考・引用文献は執筆者の敬称を省略し、各編の末にまとめて取めた。

目 次

序 章

第1節 調査経過	1
第2節 地理的環境	3
第3節 歴史的環境	9

第1編 原B遺跡

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 位置と地形	15
第2節 調査経過	15
第3節 調査方法	18

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層	19
----------------	----

遺構の分布(19) 基本土層(19) 遺跡の年代と土器の分類(22)

第2節 竪穴住居跡	24
-----------	----

1号住居跡(24)	2号住居跡(26)	4号住居跡(28)	5号住居跡(30)
6号住居跡(34)	7号住居跡(37)	8号住居跡(39)	9号住居跡(42)
10号住居跡(44)	11号住居跡(49)	12号住居跡(51)	13号住居跡(53)
14号住居跡(58)			

第3節 土 坑	60
---------	----

1号土坑(60)	2号土坑(62)	3号土坑(62)	4号土坑(62)
5号土坑(62)	6号土坑(63)	7号土坑(63)	8号土坑(63)
9号土坑(63)	10号土坑(65)	11号土坑(65)	12号土坑(65)
13号土坑(65)	14号土坑(65)	15号土坑(67)	16号土坑(67)
17号土坑(67)	18号土坑(67)	19号土坑(68)	20号土坑(68)
21号土坑(68)	22号土坑(68)	23号土坑(70)	24号土坑(70)
25号土坑(70)	26号土坑(70)	27号土坑(71)	28号土坑(71)
29号土坑(71)	30号土坑(71)	31号土坑(73)	32号土坑(73)
33号土坑(73)	34号土坑(73)	35号土坑(74)	36号土坑(74)
37号土坑(74)	38号土坑(74)	39号土坑(77)	

第4節	焼土遺構	77
1号焼土遺構	(77)	
2号焼土遺構	(78)	
3号焼土遺構	(78)	
4号焼土遺構	(78)	
5号焼土遺構	(78)	
6号焼土遺構	(78)	
7号焼土遺構	(80)	
8号焼土遺構	(80)	
9号焼土遺構	(80)	
10号焼土遺構	(80)	
11号焼土遺構	(80)	
12号焼土遺構	(82)	
13号焼土遺構	(82)	
14号焼土遺構	(82)	
15号焼土遺構	(82)	
16号焼土遺構	(82)	
17号焼土遺構	(83)	
18号焼土遺構	(83)	
19号焼土遺構	(83)	
20号焼土遺構	(83)	
21号焼土遺構	(83)	
22号焼土遺構	(85)	
23号焼土遺構	(85)	
第5節	土器埋設遺構	85
1号土器埋設遺構	(85)	
2号土器埋設遺構	(87)	
第6節	その他の遺構	87
1号特殊遺構	(87)	
2号特殊遺構	(87)	
ピット	(89)	
第7節	遺構外出土遺物	90
土器	(90)	
石器	(102)	
第3章	自然科学分析	
第1節	赤色顔料の蛍光X線分析	104
第2節	出土石器石質鑑定	105
第3節	炭化材の樹種同定	109
第4節	放射性炭素年代測定(AMS測定)	112
第4章	まとめ	
第1節	遺物について	117
第2節	遺構について	122
第2編	大田切遺跡	
第1章	遺跡の位置と調査経過	
第1節	位置と地形	129
第2節	調査経過	131
第3節	調査方法	132
第2章	遺構と遺物	
第1節	遺構の概要と基本土層	134
第2節	竪穴住居跡	139
1号住居跡	(139)	
2号住居跡	(142)	
3号住居跡	(146)	
第3節	木炭窯跡	149
1号木炭窯跡	(149)	
2号木炭窯跡	(153)	

第4節 溝 跡	156		
1号溝跡(156)			
第5節 道 跡	158		
1号道跡(158)			
第6節 土 坑	161		
1号土坑(161)	2号土坑(161)	3号土坑(161)	4号土坑(162)
5号土坑(162)	6号土坑(162)	7号土坑(164)	8号土坑(164)
9号土坑(164)	10号土坑(166)	11号土坑(166)	12号土坑(166)
13号土坑(166)	14号土坑(167)	15号土坑(167)	16号土坑(167)
17号土坑(168)	18号土坑(168)	19号土坑(168)	20号土坑(168)
21号土坑(170)	22号土坑(170)	23号土坑(170)	24号土坑(172)
25号土坑(172)	26号土坑(172)	27号土坑(172)	28号土坑(174)
29号土坑(174)	30号土坑(174)	31号土坑(174)	32号土坑(175)
33号土坑(175)	34号土坑(175)	35号土坑(175)	36号土坑(177)
37号土坑(177)	38号土坑(177)	39号土坑(178)	
第7節 特殊遺構	179		
1号特殊遺構(179)			
第8節 遺構外出土遺物	180		
縄文土器(180)	須恵器(182)	石器・石製品(183)	
第3章 自然科学分析			
第1節 赤色顔料の蛍光X線分析	184		
第4章 ま と め	186		

挿図・表目次

序 章

[挿 図]	[表]
図1 常磐自動車道位置図	1
図2 常磐自動車道関連遺跡 (原町・小高区)と地形断面図	4
図3 南相馬市の地形と地質	6
図4 周辺の遺跡位置	10
表1 常磐自動車道(南相馬市南部)の 遺跡と立地	5
表2 周辺遺跡一覧	11

第1編 原B遺跡

(挿 図)

図1 原B遺跡調査区位置図……………	16	図36 35～39号土坑……………	75
図2 グリッド配置図……………	17	図37 土坑出土遺物(1)……………	76
図3 遺構配置図・土層観察地点(1)……………	20	図38 土坑出土遺物(2)……………	77
図4 遺構配置図・土層観察地点(2)……………	21	図39 1～9号焼土遺構……………	79
図5 基本土層……………	22	図40 10～16号焼土遺構……………	81
図6 1号住居跡……………	24	図41 17～23号焼土遺構, 出土遺物……………	84
図7 1号住居跡出土遺物……………	25	図42 1・2号土器埋設遺構, 出土遺物……………	86
図8 2号住居跡, 出土遺物……………	27	図43 1号特殊遺構……………	88
図9 4号住居跡, 出土遺物……………	29	図44 2号特殊遺構……………	89
図10 5号住居跡……………	31	図45 ビット, 出土遺物……………	90
図11 5号住居跡出土遺物(1)……………	33	図46 遺構外出土土器分布図……………	91
図12 5号住居跡出土遺物(2)……………	34	図47 遺構外出土石器分布図……………	92
図13 6号住居跡……………	35	図48 遺構外出土遺物(1)……………	93
図14 6号住居跡出土遺物……………	36	図49 遺構外出土遺物(2)……………	94
図15 7号住居跡……………	37	図50 遺構外出土遺物(3)……………	95
図16 7号住居跡出土遺物……………	38	図51 遺構外出土遺物(4)……………	98
図17 8号住居跡出土炭化材……………	40	図52 遺構外出土遺物(5)……………	99
図18 8号住居跡, 出土遺物……………	41	図53 遺構外出土遺物(6)……………	100
図19 9号住居跡……………	43	図54 遺構外出土遺物(7)……………	101
図20 9号住居跡出土遺物……………	44	図55 遺構外出土遺物(8)……………	102
図21 10号住居跡……………	45	図56 赤彩土器のX線スペクトル……………	104
図22 10号住居跡出土遺物(1)……………	46	図57 出土石器の岩種構成……………	108
図23 10号住居跡出土遺物(2)……………	47	図58 炭化材の顕微鏡写真……………	111
図24 11号住居跡……………	50	図59 暦年補正……………	115
図25 11号住居跡出土遺物……………	51	図60 I群土器……………	118
図26 12号住居跡, 出土遺物……………	52	図61 II群土器……………	120
図27 13号住居跡……………	54	図62 縄文早・中期の遺構……………	123
図28 13号住居跡出土遺物(1)……………	56	[表]	
図29 13号住居跡出土遺物(2)……………	57	表1 7号住居跡出土石器石材別重量……………	38
図30 14号住居跡, 出土遺物……………	59	表2 出土石器一覧表……………	106
図31 1～5号土坑……………	61	表3 出土石器の器種一岩種表……………	108
図32 6～13号土坑……………	64	表4 樹種同定結果……………	110
図33 14～21号土坑……………	66	表5 放射性炭素年代測定結果……………	115
図34 22～27号土坑……………	69	表6 暦年較正年代……………	115
図35 28～34号土坑……………	72		

第2編 大田切遺跡

〔挿 図〕

図1 調査区・工事計画図	130
図2 グリッド遺構配置図	133
図3 遺構配置図(Ⅰ区)	135
図4 遺構配置図(Ⅱ区)	136
図5 遺構配置図(Ⅲ区)	137
図6 基本土層	138
図7 1号住居跡	139
図8 1号住居跡カマド	140
図9 1号住居跡出土土師器	141
図10 2号住居跡	143
図11 2号住居跡カマド	144
図12 2号住居跡出土土師器・須恵器	145
図13 3号住居跡	146
図14 3号住居跡カマド	147
図15 3号住居跡出土土師器	148
図16 1号木炭窯跡(1)	150
図17 1号木炭窯跡(2)	151
図18 2号木炭窯跡	154

図19 1号溝跡	157
図20 1号道跡	159
図21 1号道跡, 出土縄文土器・ 磁器・鉄製品	160
図22 1～7・9号土坑	163
図23 8・10～14号土坑	165
図24 15～19・21号土坑	169
図25 20・22～26号土坑	171
図26 27～32号土坑	173
図27 33～37号土坑	176
図28 38・39号土坑, 出土縄文土器・ 土師器・かわらけ	178
図29 1号特殊遺構	179
図30 遺構外出土縄文土器	181
図31 遺構外出土縄文土器・ 須恵器・石器・石製品	182
図32 赤彩土器のX線スペクトル	185
〔表〕	
表1 土器計測表	183

写真目次

第1編 原B遺跡

1 調査区遠景	189
2 調査区全景	189
3 基本土層	190
4 調査区南側住居跡群全景	190
5 調査区北側住居跡群全景	191
6 1号住居跡遺物出土状況	191
7 2号住居跡全景	192
8 2号住居跡細部	192
9 4号住居跡全景	193
10 5・7号住居跡全景	193
11 5・7号住居跡細部	194
12 6号住居跡全景	195

13 6号住居跡細部	195
14 8号住居跡全景	196
15 8号住居跡細部	196
16 9号住居跡全景	197
17 9号住居跡細部	197
18 10号住居跡全景	198
19 10号住居跡細部	198
20 11号住居跡全景	199
21 11号住居跡細部	199
22 12号住居跡全景	200
23 12号住居跡細部	200
24 13号住居跡全景	201
25 13号住居跡細部	201

26	14号住居跡全景	202
27	14号住居跡細部	202
28	調査区中央土坑群全景	203
29	1～4号土坑	203
30	5～12号土坑	204
31	13～19号土坑	205
32	20～24号土坑	206
33	25～32号土坑	207
34	33～36号土坑	208
35	37～39号土坑	209
36	1～5号焼土遺構	209
37	4～11号焼土遺構	210
38	12～19号焼土遺構	211
39	20～23号焼土遺構	212
40	1・2号土器埋設遺構	212
41	1号特殊遺構全景	213
42	2号特殊遺構検出	213
43	1号住居跡出土遺物	214
44	2・5号住居跡出土遺物	214
45	5・6号住居跡出土遺物	215
46	6・7号住居跡出土遺物	215
47	9・10号住居跡出土遺物	216
48	8・11号住居跡出土遺物	217
49	12・14号住居跡出土遺物	217
50	13号住居跡出土遺物	218
51	土坑・土器埋設遺構・ビット 出土遺物	219
52	土器埋設遺構出土遺物	220
53	遺構内出土石器(1)	220
54	遺構内出土石器(2)	221
55	遺構内出土石器(3)	222
56	遺構外出土石器(1)	223
57	遺構外出土石器(2)	223
58	遺構外出土石器(3)	224
59	遺構外出土石器(1)	224
60	遺構外出土石器(2)	225
61	縄文土器細部	226

第2編 大田切遺跡

1	遺跡遠景	229
2	調査Ⅰ・Ⅱ区全景	229
3	Ⅰ区全景	230
4	Ⅱ区全景	230
5	Ⅲ区全景	231
6	調査前近景, 基本土層	231
7	1号住居跡全景	232
8	1号住居跡細部	232
9	2号住居跡全景	233
10	2号住居跡細部	233
11	3号住居跡全景	234
12	3号住居跡細部	234
13	1号木炭竈跡全景(第1操業面)	235
14	1号木炭竈跡細部	235
15	1号木炭竈跡各操業面	236
16	2号木炭竈跡全景	237
17	2号木炭竈跡細部	237
18	1号溝跡全景	238
19	1号溝跡細部	238
20	1号道跡完掘状況	239
21	1号道跡細部	239
22	1～7号土坑	240
23	8～15号土坑	241
24	16～22号土坑	242
25	23～28号土坑	243
26	29～35号土坑	244
27	36～39号土坑, 1号特殊遺構	245
28	1～3号住居跡出土土師器	246
29	1号住居跡出土土師器	246
30	2号住居跡, 1号道跡, 20・25号土坑出土縄文土器・ 土師器・須恵器・鉄製品	247
31	遺構外出土縄文土器(1)	247
32	遺構外出土縄文土器(2)	248
33	遺構外出土縄文土器・須恵器・ 石器・石製品	248

社いわき工事事務所、富岡 I C から大熊町以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが、年度途中から富岡 I C ～浪江 I C までの区間についてもいわき工事事務所が管轄することとなった。平成15年度は、相馬工事事務所が管轄する区域でも発掘調査が実施されるようになり、相馬市の2遺跡、いわき工事事務所管轄区内に所在する浪江町の2遺跡について発掘調査を実施した。平成16年度は、いわき工事事務所管轄区域である双葉町の3遺跡、相馬工事事務所管轄の相馬市の1遺跡と南相馬市鹿島区の2遺跡について発掘調査を実施した。平成17年度の常磐自動車道関連の調査は、いわき工事事務所管轄区域である大熊町の3遺跡・双葉町の2遺跡・浪江町の2遺跡、相馬工事事務所管轄の相馬市の1遺跡・南相馬市の5遺跡である。

平成18年度の調査経過

平成18年度の相馬工事事務所管轄の発掘調査は、相馬市に所在する山岸硝庫跡・西原遺跡、南相馬市鹿島区に所在する北山下遺跡、南相馬市原町区に所在する仲山B遺跡・小池田遺跡・赤柴遺跡・原B遺跡、南相馬市小高区に所在する荻原遺跡(2次調査)・大田切遺跡・大田和広畑・広谷地遺跡の11遺跡を対象に、13名の調査員を配して実施した。

年度前半期の発掘調査は、優先順の高い北山下遺跡・赤柴遺跡・原B遺跡・大田切遺跡の4遺跡を対象に実施した。いずれも4月中旬には表土除去作業を開始し、併せて調査環境を整えた。北山下遺跡は3年目の調査となり、検出された道跡遺構から現道路が中世からの道を踏襲して設けられていることが判明した。赤柴・原B遺跡は縄文時代の集落遺跡であり、住居跡・墓坑・貯蔵穴などが検出されている。大田切遺跡からは木炭窯跡と3軒の平安時代の住居跡が検出されている。なお、大田切遺跡の当初調査指示面積は4,300㎡であったが、試掘調査結果により3,800㎡の追加指示があった。また、赤柴遺跡でも面積調整の必要から3,500㎡の当初面積に2,900㎡の追加指示があった。

北山下遺跡調査班は5月の連休前に調査を終了し、山岸硝庫跡の調査に移動した。原B・大田切遺跡調査班はお盆前に調査を終了し、試掘調査結果によって追加された大田和広畑遺跡と当初から予定の広谷地遺跡に移動した。その後、さらに試掘によって確定した仲山B遺跡と新発見となった小池田遺跡が追加されたことから、年度後半期は再編した調査班によって調査を実施した。

大田和広畑遺跡では鍛冶炉を伴う平安時代の住居跡と縄文時代の貯蔵穴が、広谷地遺跡からは縄文時代の住居跡と平安時代の土坑などが検出されている。

赤柴遺跡と山岸硝庫跡は9月下旬には調査をほぼ終了し、荻原遺跡と西原遺跡へと移動した。山岸硝庫跡は平成15年度調査に続く2次調査であり、相馬藩の火薬庫の全貌がほぼ明らかとなった。

西原遺跡は縄文時代の包含層と平安時代の土坑が検出され、仲山B遺跡では古代末と考えられる精錬鍛冶が跡が検出された。小池田遺跡は、工事計画と調整を図りつつ今年度は1,000㎡の調査としたが、縄文時代の遺物が多量に出土した。荻原遺跡は縄文時代の集落跡と平安時代の製鉄関連遺構の調査となったが、調査終盤に旧石器時代の石器が出土し、調査終了は12月19日であった。なお、平成19年3月に小池田・広谷地遺跡の合計4,500㎡について表土掘削を実施した。

平成19年度の調査経過

平成19年度の常磐自動車道(浪江～相馬)建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき遺跡調査部の職員17名を配置して実施した。計画段階では南相馬市原町区の中山C遺跡を含め13遺跡、計51,040㎡の調査が予定されたが、工事計画の変更等もあり関係機関で協議した結果、調査対象遺跡および調査範囲の調整を行い、南相馬市原町区に所在する小池田遺跡(2次調査)・西内遺跡・石神遺跡・戸島土遺跡・赤柴遺跡(2次調査)・切付遺跡・片倉遺跡の7遺跡と同市小高区に所在する荻原遺跡(3次調査)・君ヶ沢B遺跡・大田切遺跡(2次調査)・横大道遺跡・大田和広畑遺跡(2次調査)・広谷地遺跡(2次調査)の6遺跡、計13遺跡を対象に発掘調査を実施した。調査面積は総計で51,100㎡である。

東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所(以下、相馬工事事務所と略す)との事前協議を受けて、当初、小高区内では工事着手の早い大田切遺跡と広谷地遺跡、調査予定面積の広い荻原遺跡の発掘調査を優先に計画されたが、荻原遺跡では春先にかけて調査予定地の隣接地域で、環境省公表の鳥類レッドリストの準絶滅危惧種に指定されるオオタカの営巣が確認されたことから、調査開始がオオタカの雛鳥の巣立ち以降に先送りされることとなったため、原町区内で優先度の高いとされた小池田遺跡・赤柴遺跡に加えて小高区の大田切遺跡・大田和広畑遺跡・広谷地遺跡の5遺跡について4月より発掘調査を開始した。大田切遺跡の調査は、市道の付け替え工事が終了したことを受けて4月13日から着手した。当初より予定された旧市道金谷大富3号線の道路下500㎡の調査となったが、近世以降の所産とされる道跡等を検出したほか、遺物も縄文土器・陶器のほか鉄製品が出土した。農繁期でもあり、相馬工事事務所および工事施工の共同企業体から依頼された、近接する農地への作業用通路の確保を行いつつの調査となったが、5月15日には調査を終了、同日、工事事務所立ち会いのもとに調査の終了確認・引き渡しを行って、同じ小高区内の横大道遺跡の調査へと移行した。

(吉 田)

第2節 地理的環境

福島県は東北地方南端に位置し、県土面積13,782km²と全国で3番目の広さを有している。この内、およそ8割は山地で占められ、東部には太平洋に沿って阿武隈高地、中央部には奥羽山脈、西部には越後山脈がせまっている。これらの山地はほぼ南北に走り、県内は太平洋側より「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」の三地域に区分される。この内、本報告書に掲載した原B遺跡・大田切遺跡は、浜通り地方北部の南相馬市に所在する。行政区分では原B遺跡は南相馬市原町区馬場字原に、大田切遺跡は南相馬市小高区大富字大田切に位置する。

浜通り地方の地形は、大きく阿武隈高地・河岸段丘(丘陵)地帯・海岸低地帯の3つに分けることができる。阿武隈高地は東西約50km、南北約200kmの規模を有し、標高500～700mのなだらかな平坦面を残す隆起準平原であると考えられている。阿武隈高地の分水界には、霊山(825m)、花塚山

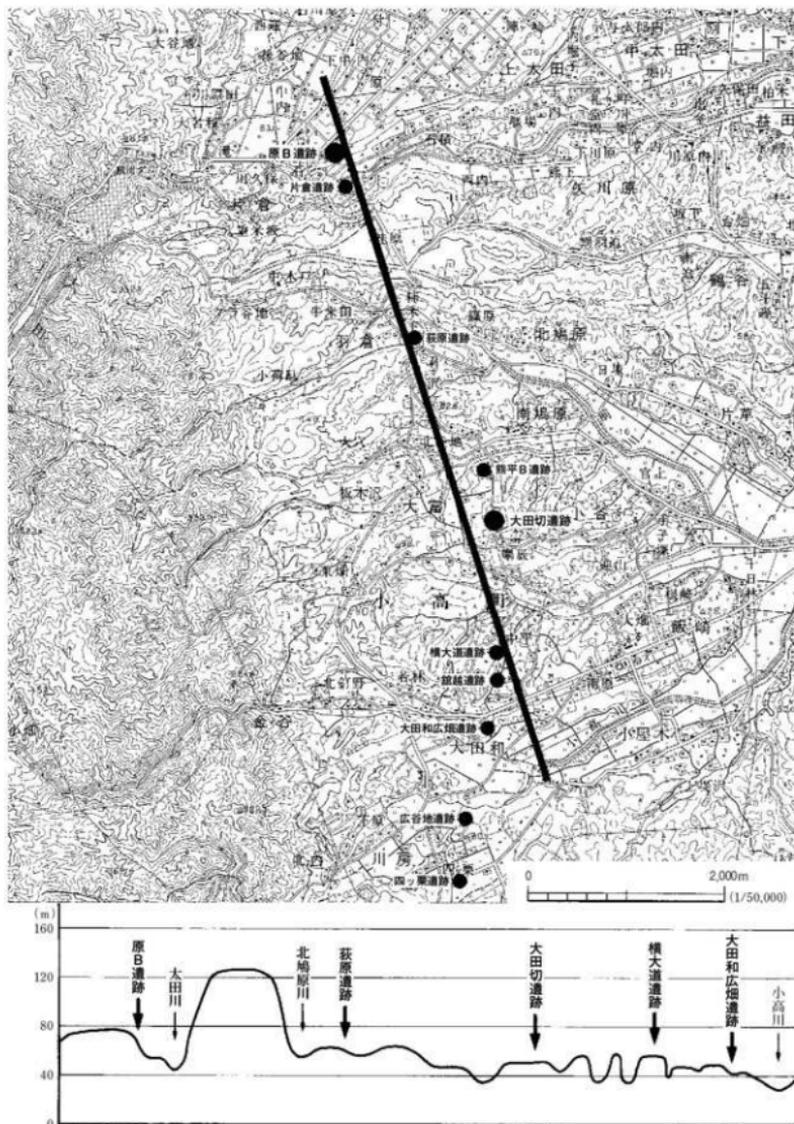


図2 常磐自動車道関連遺跡（原町・小高区）と地形断面図

(919m), 日山(1057m), 大滝根山(1192m)などの山々があるが, どれも残丘状に散在しているにすぎない。これは吾妻山・安達太良山・那須山などの山並が連なる奥羽脊梁山脈とは対照的な山容を示している。

阿武隈高地の東縁には双葉断層(破砕帯)が北北西から南南東方向に縦走し, 浜通り地方中・南部では, 双葉断層崖が阿武隈高地と浜通り低地帯との境界となっている。一方, 南相馬市地域においては, 双葉断層に沿ってあまり断層崖は発達せず, むしろ双葉断層より東側の中生代と鮮新世の地層の境界が, 阿武隈高地と浜通り低地帯との境界となっている。

双葉断層は, 断層の東側に対して断層西側が相対的に高まり, 断層東側が北へ, 断層西側が南へずれた, 左横ずれ逆断層とされている。

南相馬市原町区を流れる河川は, 新田川とその支流にあたる水無川が原町区北部を, 太田川が原町区南部をそれぞれ東流している。これらの河川の勾配は山間部では急傾斜であるが, 双葉断層の東側に入ると緩やかになる。特に新田川上流部は河川の浸食力が強く働き, 険峻で樹枝状の深谷を刻んでいる。南相馬市小高区は小高川とその支流(北鳩原川・大穴川・前川・飯崎川・川房川)がそれぞれ東流し, 小高城址付近で合流している。原B遺跡は太田川流域, 大田切遺跡は飯崎川流域の遺跡である。

南相馬市地域では, これら河川の流路に平行するように標高50~100mの低丘陵が発達している。これらの丘陵の東側先端部は海岸まで達して比高差10~30m程の海蝕崖となっている。

新田川・太田川・小高川の中・下流域には, 低位・中位・高位段丘がよく発達し, 平坦な台地を形成している。常磐自動車道関連遺跡の多くはこうした段丘面上に立地している場合が多く, 原B遺跡は中位Ⅲ段丘面, 大田切遺跡は中位Ⅱ段丘面上に位置している(図2・3, 表1)。

福島県の地質構造は, 阿武隈高地のほぼ西縁を境に, 東側の非グリーンタフ地域と西側のグリーンタフ地域に大別される。非グリーンタフ地域にあたる浜通り地方は, さらに双葉断層を境として二つの地域に分けられる。双葉断層以東の太平洋沿岸の低地域には, 中生代, 古第三紀, 新第三紀の地層が丘陵を形成し, それらが浸食された谷の中に, 第四紀層が段丘地形や平野をつくって発達

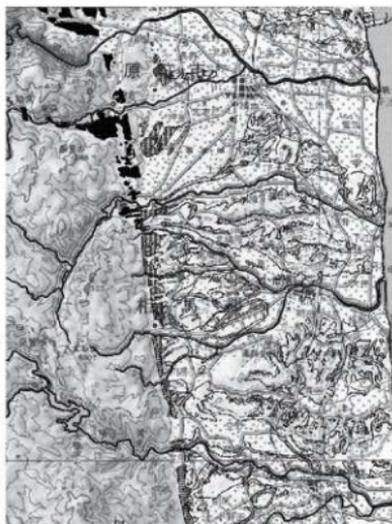
表1 常磐自動車道(南相馬市南部)の遺跡と立地

	遺跡	所在地	地形区分	標高	備考	
1	原B	原町区馬場字原ほか	中位Ⅲ	76m	旧石器出土	
2	大田切	小高区大富字大田切	中位Ⅱ	55m		
3	片倉	原町区片倉字片倉	低位Ⅱ	56m		
4	荻原	小高区羽倉字荻原ほか	中位Ⅱ	52~65m		
5	熊平B	小高区大富字熊平	低位Ⅱ	35~47m		
6	横大道	小高区飯崎字横大道	中位Ⅲ	45~60m		
7	船越	小高区大田和字船越	丘陵	62~74m		
8	大田和吹畑	小高区大田和字吹畑ほか	中位Ⅱ	45~61m		
9	広谷地	小高区川房字広谷地	沖積地・低位Ⅱ	45~62m		旧石器出土
10	四ッ栗	小高区川房字四ッ栗	低位Ⅱ・中位Ⅱ	45~63m		旧石器出土

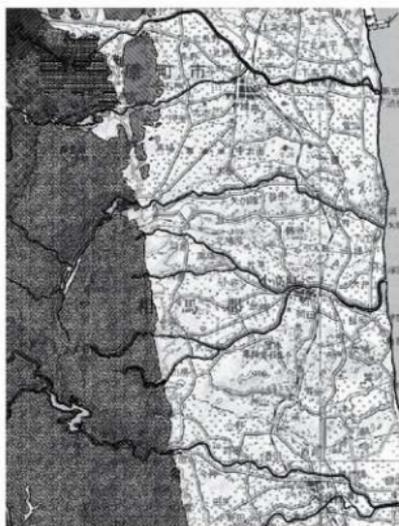
地形区分は「久保和也・柳沢幸夫・吉岡敏和・高橋 浩(1994) 浪江及び磐城富岡地域の地質・地域地質研究報告(5万分の1地質図編), 地質調査所, 104p.」による



1. 第四期の地層



2. 新第三期の地層



3. 中生代～古生代の地層

- | | |
|---|--|
| <p>1. 第四期の地層</p> <ul style="list-style-type: none"> 低位Ⅰ段丘 低位Ⅱ段丘 中位Ⅰ段丘 中位Ⅱ段丘 中位Ⅲ段丘 高位Ⅰ段丘 高位Ⅱ段丘 | <p>3. 中生代～古生代の地層</p> <ul style="list-style-type: none"> 花崗岩層 高倉層 相馬中村層 相馬古生層 松ヶ平変成岩層 |
|---|--|

2. 新第三期の地層
- 大牟寺層
 - 向山層
 - 竜の口層
 - 雲山層
 - 天明山層
 - 塚手層



参考文献
 「久保和也・柳沢幸夫・古岡敏和・山本孝広・滝沢文哉 (1990) 原町及び大婁地域の地質。地域地質研究報告 (5万分の1地質図編)。地質調査所, 155 p.」
 「久保和也・柳沢幸夫・古岡敏和・高橋 浩 (1994) 道江及び野城富岡地域の地質。地域地質研究報告 (5万分の1地質図編)。地質調査所, 104 p.」

図3 南相馬市の地形と地質

している。一方、双葉断層以西の阿武隈高地には花崗岩類が広く分布し、その東縁近くに古生層が発達している。

南相馬市地域には、古生代から新生代までの幅広い時代範囲の地層が分布している。それらは下位より、先デボン系時代未詳の松ヶ平変成岩類、デボン紀から二疊紀の相馬古生層(下位より合ノ沢層、真野層、立石層、上野層、大芦層、弓折沢層)に区別されている。中生代の地層は、ジュラ紀から白亜紀最前期の相馬中村層群(下位より枳窪層、中ノ沢層、富沢層、小山田層)、白亜紀前期の高倉層とその後に活動した花崗岩類を始めとする貫入岩類に区別されている。新生代の地層は、中新世の塩手層・天明山層・霊山層、鮮新世の仙台層群(下位より竜の口層、向山層、大年寺層)、更新世の段丘堆積物および沖積層に区別されている。

各地層の表層分布については、図3に示した。ここでは各層の形成過程等の議論は割愛し、各層から産出される岩石・鉱物を中心に述べる。

本地域で最も古い地層とされる松ヶ平変成岩類は、原町区新田川上流の高の倉地域に、後述する相馬古生層の周囲をとり囲むように分布している。また飯館村松ヶ平から鹿島区上栴窪にいたる真野川中流域にも分布が見られる。松ヶ平変成岩類は主に泥質～珪質片岩からなり、これらに砂質片岩、緑色片岩、角閃岩が小規模な分布を見せる。これらの変成岩は縄文時代においては主に打製・磨製石斧などの石器石材として、また現在では庭石として珍重されている。

次に、古生代のデボン紀から二疊紀に形成された地層として相馬古生層があり、下位より合ノ沢層、真野層、立石層、上野層、大芦層、弓折沢層に区別されている。これらの地層は新田川の上・中流域に分布している。いずれも海成層で、サンゴや紡錘虫等の産出化石の研究がなされている。立石層を除いては、粘板岩・砂岩・頁岩・礫岩等の堆積岩からなる。この内、粘板岩や頁岩は、縄文時代においては打製石斧等、弥生時代においては石砲丁等の石器石材として利用されている。

中生代の地層としては、ジュラ紀後期から白亜紀最前期に形成された相馬中村層群がある。同層群は6層に区別されているが、南相馬市地域には枳窪層、中ノ沢層、富沢層、小山田層が分布している。本層群は、双葉断層に沿って、その東側に東西幅2～4km、南北幅約27kmの細長い分布を見せる。その北限は相馬市初野付近、南限は原町区馬場付近とされる。本層群は、主に砂岩・頁岩からなり、一部に石灰岩や石炭薄層を含んでいる。

原町区高倉の北方地域には、白亜紀前期の火山岩類として高倉層が小規模な分布を見せる。高倉層を刻する河川は新田川と水無川の2河川に限られる。ここで産出される火山岩は、主に安山岩・流紋岩・デイサイトである。これらの岩石の内、緻密でガラス質に富むものは石器石材として利用された可能性がある。よって今後、本層起源であるかを特定するために、理化学的分析を行う必要があろう。なお現在、本層を対象とした砕石場が原町区高屋敷で稼働している。

高倉層堆積後の白亜紀前期には、浜通り地方西部は大規模な造山活動の場となり、花崗岩・閃緑岩に代表される深成岩が貫入した。阿武隈高地はこの頃に形成され、その後の長い年月の浸食と堆積によって準平原化したものと考えられている。また深成岩体の貫入に伴い、その周囲の地層では

接触変成作用が生じる。阿武隈高地では花崗岩・閃緑岩と相馬古生層・相馬中村層群の境界付近で接触変成帯が形成され、ホルンフェルス・結晶片岩・角閃岩などの変成岩が発達している。接触変成帯の一部は、スカルン鉱床を伴い、磁鉄鉱やチタン鉄鉱などの鉱物を産出する。

南相馬市地域に分布する新生代の地層は、新第三紀および第四紀に堆積したものであり、古第三紀の地層は欠層している。新第三紀層最下部は、中新世前期に堆積した塩手層である。本層は双葉断層の西側の谷を埋積するように分布し、新田川・水無川の中流域両岸に堆積している。本層は、河川堆積物、浅海成堆積物、湖成堆積物で構成され、主に礫岩・砂岩・シルト岩などの堆積岩からなる。本層で注目されるのは、堆積物の中に緻密な流紋岩質凝灰岩の地層を挟んでいることである。流紋岩質凝灰岩は、考古学分野においてはこれまで「流紋岩」と記載されてきたものと同質であると考えられる。塩手層は、いわき地方に分布する湯長谷層群們平層(滝層)とフィッシュントラック年代値(20.0±1.2Ma)がほぼ一致していることから、対比関係にあるといわれている。また們平層から産出される「流紋岩」が、石器石材として利用されていることはすでに指摘されている。この他の新第三紀中新世の地層としては、天明山層と霊山層がある。両層はともに玄武岩の溶岩流で、本地域では双葉断層西側に分布している。本層には玄武岩の他、輝石安山岩や流紋岩が含まれている。

次の新第三紀鮮新世の地層としては、仙台地域を模式地とする仙台層群があり、下位より亀山層、竜の口層、向山層、大年寺層の4層に区分されている。竜の口層・大年寺層は海成層、向山層は河川・ラグーン堆積物とされる。仙台層群の各層は主に半固結の泥岩(シルト岩)や砂岩・凝灰岩からなり、層中に多くの火山灰層を介在する。本地域では、大年寺層が丘陵および段丘面の基盤層となっている場合が多い。

第四紀更新世の地層は、本地域では真野川・上真野川・新田川・水無川に沿って分布する段丘堆積物および沖積層がある。本地域の段丘は高位Ⅰ・高位Ⅱ・中位Ⅰ・中位Ⅱ・中位Ⅲ・低位Ⅰ・低位Ⅱ段丘に区分されている。高位段丘の堆積物は礫を主とし、間にラミナのある砂層を挟んでいる。高位段丘の礫は、風化が著しく、部分的に赤色化しているものもある。その上位に風化火山灰質土壤もしくはシルト・砂層をのせる。中位段丘の堆積物も礫を主としているが風化はしていない。礫層は亜円礫から亜角礫からなり、その上に礫混じり砂層、さらに上に風化火山灰質土壤をのせる。中位Ⅰ段丘の礫層直上の砂層中には、厚さ5～10cmの安達太良-岳軽石層(Ad-D)が認められる。低位段丘の堆積物はシルトが介在する淘汰の悪い砂礫層からなり、その上位に粘土質の砂層をのせている。

沖積層は各河川に沿って、低地を形成して分布している。本地域の沖積層の堆積は厚く、真野川と太田川の下流部では層の厚さが20m以上もある。これらの沖積層には泥炭層を挟み、N値が3以下の軟弱地盤である場合が多い。この地盤環境と地下水の汲み上げが要因となり、原町区大甕地区では1960年代頃から地盤沈下が進行している。(門 脇)

第3節 歴史的環境

南相馬市における最も古い人間の生活痕跡は、後期旧石器時代まで遡ることができる。この時期の散布地として知られる遺跡は、原町区畦原A遺跡、熊下遺跡、袖原A遺跡などが太田川流域の畦原段丘上に、原町区陣ヶ崎A遺跡、橋本A・B遺跡、桜井遺跡などが太田川流域の雲雀ヶ原台地に立地する。この他、小高区荻原遺跡では、2カ所のブロックから剥片・石核・石刃・ナイフ形石器・削器等の石器24点が出土している。

縄文時代になると遺跡数は増加する。太田川上流域には原町区畦原F遺跡、八重米坂A遺跡、羽山B遺跡、原遺跡などの早期末～前期前葉の遺跡が分布している。そのうち、原遺跡では住居跡24軒、土坑27基、焼土遺構20基等が確認され、今回調査された原町区原B遺跡と接している。このことから、原遺跡と原B遺跡の関連性が考えられる。この他、小高区荻原遺跡では平面形が長方形あるいは隅丸長方形の住居跡が確認され、それに伴い口縁部に隆帯が巡る撫糸文地文の土器が多く出土している。このような土器の特徴から、原B遺跡に非常に近い時期の遺跡と考えられる。

縄文前期前葉には、海岸から4.5～5km内奥に立地する小高区の貝塚として、小高川流域の片草貝塚、宮田川流域の宮田貝塚がある。片草貝塚は木本2a式期のアサリを主体とする貝塚、宮田貝塚はキサゴ・アサリを主体とする、宮田Ⅲ群土器に代表される縄文前期初頭の遺跡であり、両者のあり方は縄文海進を考える上で重要である。この他の貝塚として、宮田川南岸の丘陵および断丘面に立地する北原貝塚、北原西貝塚、台の前貝塚、西向貝塚、小高川南岸の角部内南台貝塚などがあり、これらの縄文前期初頭～後期にわたる比較的大きな貝塚は、小高区内に集中している。

縄文中期～後期では、小高区大富西畑遺跡、大田和広畑遺跡で集落が営まれており、縄文中期末葉の住居跡からは、「複式炉」と呼ばれる特徴的な炉が確認されている。その中で大富西畑遺跡では、他地域の影響を受けた曾利系や加曾利E3式系の土器が出土していることから、地域的な交流が考えられる。縄文晩期には、小高区磯坂遺跡、小迫貝塚から海水を土器で煮詰めて塩の結晶を取り出した製塩土器が出土しており、土器製塩が行なわれたことが明らかになっている。

弥生時代になると、原町区桜井遺跡は中期末葉の桜井式土器の標識遺跡として知られている。原町区金沢遺跡群の調査による鳥沢遺跡、長瀬遺跡、南入遺跡等からは、丘陵頂部や谷部斜面から弥生土器、石斧・石廬丁・石鍬などが出土している。また、原町区高見A遺跡では十王台式期の集落が営まれており、この存在は弥生時代終焉から古墳時代への移行を知るうえで重要性が高い。

古墳時代になると、当地域最古とされる国指定史跡の原町区桜井古墳は、4世紀末～5世紀前半の前方後方墳であり、また周囲にある12基の円墳からなる古墳群である。古墳後期の7世紀には横穴墓が出現する。特異な例として、装飾壁画をもつ国指定史跡の原町区羽山装飾横穴墓群が挙げられ、ここからは金銅装大刀・銅製釧・馬具などが出土している。このような装飾横穴墓は、浜通り地方に見られる特色でもあり、画一化された墓における特殊性を示したものと考えられる。

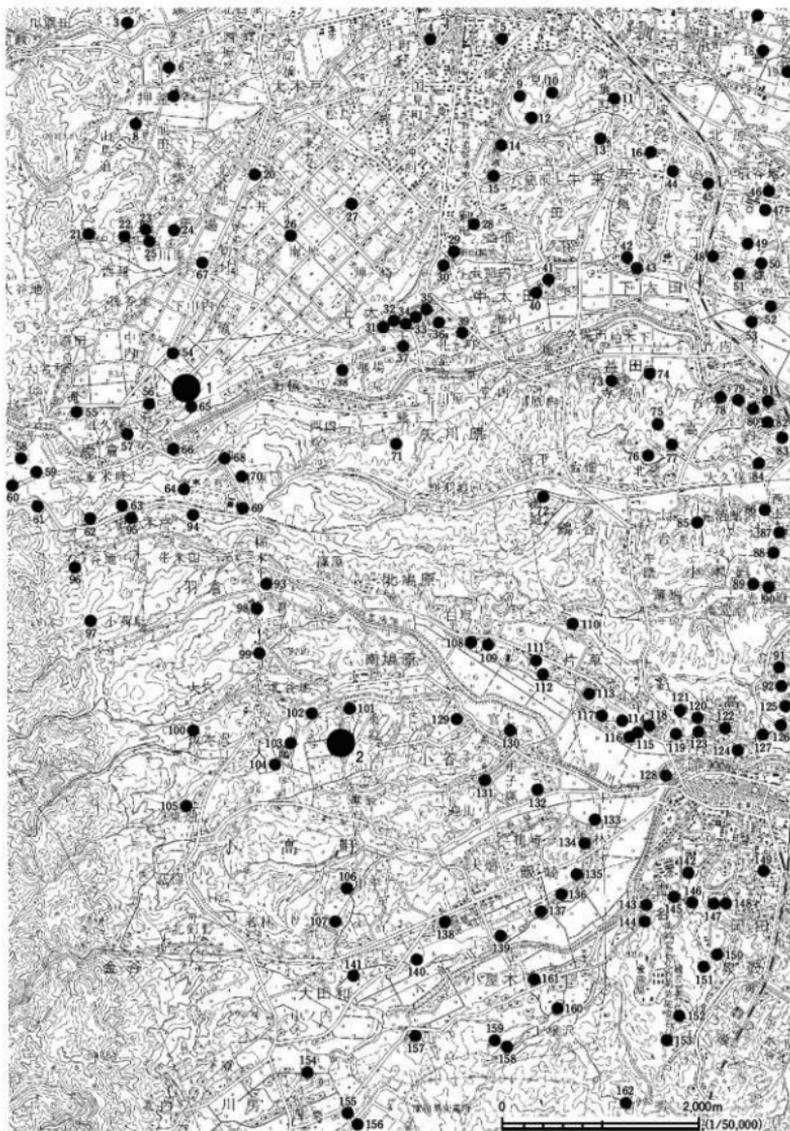


図4 周辺の遺跡位置

表2 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	原B	縄文	35	石倉	縄文	109	堤下	縄文~平安
2	大田切	縄文・平安	36	原	縄文	110	行徳古墳群	古墳
3	石神B	縄文	37	市渡戸	縄文	111	片草南原	縄文~平安
4	夜ノ森	縄文	38	羽山B	縄文	112	片草南原古墳群	古墳
5	橋本町A	旧石器	39	八重米坂A	縄文	113	一里塚古墳群	古墳
6	内畑		40	八重米坂B	縄文	114	荒神前古墳	古墳
7	押釜原		41	八重米坂C	縄文	115	片草貝塚	縄文
8	前田	縄文	42	畦原D	縄文	116	金場館跡	中世
9	橋本町B	旧石器	43	畦原E	縄文	117	荒神前	縄文~平安
10	折ヶ沢宮跡	平安	44	畦原F	縄文	118	相馬家墓地	近世
11	大塚横穴墓	古墳	45	石住	平安	119	東広畑A	縄文~平安
12	折ヶ沢	散布地	46	岩下	縄文	120	東広畑B	平安
13	石橋横穴墓	古墳	47	切付	縄文・平安	121	相馬御厨夫人墓跡	中世
14	出口	平安	48	畦原A	旧石・縄・奈・平	122	相馬とも嵐夫人墓跡	中世
15	出口B	平安	49	畦原B	縄文・奈良・平安	123	西館跡	中世
16	東谷治	平安	50	畦原C	旧石器・縄文	124	馬場内横穴墓群	近世
17	原田	平安	51	熊下	旧石器	125	小高城跡	中世
18	栗掛場	縄文・奈良・平安	52	南迫横穴墓群	古墳	126	岩迫館跡	中世
19	栗掛場B	散布地	53	益田館跡	中世	127	東館跡	中世
20	下荒井	散布地	54	郷塚古墳	古墳	128	堀内	中世
21	川原田	縄文	55	権現壇横穴墓群	古墳	129	西台	古墳~平安
22	地切	縄文	56	高林古墳群	古墳	130	元屋敷	縄文・古墳~平安
23	滝ノ原	縄文	57	高林	弥生	131	渋谷	弥生
24	赤栗	縄文	58	古内	奈良・平安	132	手子塚古墳	古墳
25	滝ノ原宮跡	平安	59	枝の上	奈良・平安	133	中島館跡	中世
26	陣ヶ崎A	旧石器	60	城ノ内	奈良・平安	134	歌語内古墳	古墳
27	陣ヶ崎B	縄文	61	高館跡	中世	135	十日林古墳	古墳
28	中畑横穴墓群	古墳	62	高古館跡	中世	136	杉平古墳群	古墳
29	丸山横穴墓群	古墳	63	大久保	縄・弥・奈・平	137	飯館跡	中世
30	新橋横穴墓群	古墳	64	高野館跡	中世	138	飯崎南原古墳群	古墳
31	後田横穴墓	古墳	65	五治郎内古墳群	古墳	139	飯崎南原塚	中世・近世
32	上大田前田	奈良・平安	66	西山	不明(宮跡)	140	飯崎南原	縄文・奈良・平安
33	前田横穴墓	古墳	67	権現山経塚	中世	141	大田和広畑	縄文
34	重胤公御塚	中世	68	西谷地古墳	古墳	142	玉ノ木平A	縄文~平安
35	上大田前田	奈良・平安	69	堂西	奈良・平安	143	中村平	弥生~平安
36	上ノ内	縄文	70	今野館跡	中世	144	中村平古墳群	古墳
37	坂下	奈良・平安	71	勇婆ヶ館跡	中世	145	玉ノ木平B	縄文・平安
38	塚場	縄文・奈良・平安	72	館山	縄文	146	玉ノ木平C	縄文~平安
39	町川原	縄文・奈良・平安	73	荻原	縄文	147	漆原横穴墓群	古墳
40	別所古墳	古墳	74	畦原野馬上手	近世	148	岩屋堂石仏	平安
41	別所館跡	中世	75	中木戸	縄文	149	圃田館跡	中世
42	藤沼館跡	中世	76	高蒲沢野馬上手	近世	150	浪岩横穴墓A群	古墳
43	道内迫横穴墓群	古墳	77	高木戸野馬上手	近世	151	浪岩横穴墓B群	古墳
44	小原	弥生	78	君ヶ沢	不明(製鉄跡)	152	観音堂石仏	平安
45	川内迫	弥生	79	大穴	旧石器・縄文	153	薬師堂石仏	平安
46	東原	奈良~現代	80	板木沢	縄文	154	広谷地	縄文~平安・近世
47	川内迫C	奈良・平安	81	熊平	縄文	155	四ツ栗	縄文・平安
48	川内迫B	奈良・平安	82	熊平B	縄文・平安	156	精沢	不明(製鉄跡)
49	飯沢	縄文・弥生・平安	83	犬塚B	縄文	157	栗成沢	縄文
50	西迫東迫横穴墓	古墳	84	犬塚C	縄文	158	堀込	奈良・平安
51	西迫	古墳	85	大富西畑	縄文・平安	159	上根沢古墳群	古墳
52	高古館跡	中世	86	横大道	平安	160	原畑	弥生~平安
53	塚田	奈良・平安	87	館越	平安	161	市阿弥	奈良・平安
54	中ノ内	弥生	88	北鳩原花輪	縄文・古墳	162	上根沢	中世

この地域は、「和名抄」に記される陸奥国行方郡として律令体制に組み入れられていたと考えられる。古代行政の中心とされる郡衙として、推定されるのが県指定史跡の原町区泉廃寺跡である。この遺跡からは礎石が確認され、瓦・円面硯、焼け米などが出土しており、今後の調査により官衙域と付属寺院が確認される可能性が高い。

奈良・平安時代になると、大田切遺跡、大田和広畑遺跡、四ツ粟遺跡、広谷地遺跡では、発掘調査や試掘調査から集落が営まれていたことが確認されている。生産遺跡では、製鉄遺跡、瓦や須恵器の窯跡が知られている。原町区内金沢地区の鳥打沢A・B遺跡、長湍遺跡、南入遺跡、船沢A遺跡、大船迫遺跡をはじめとする製鉄遺跡群では、製鉄炉、木炭窯、鍛冶炉、木炭焼成土坑、鑄造遺構等の製鉄関連遺構が数多く確認され、鉄生産の様相を伺うことができる。これらの製鉄遺跡は郡衙等の「官」とのかかわりが指摘されている。常磐自動車道の建設に伴う小高区の横大道遺跡・筋越遺跡・大田和広畑遺跡の試掘調査成果からは、それぞれの遺跡が隣接して製鉄関連遺構が確認されている。今後の調査成果により、これらの遺跡の関係が明らかにされるものと考えられる。原町区入道迫瓦窯跡の瓦は、桶松廃寺跡に供給され、泉廃寺跡の瓦は原町区京塚沢瓦窯跡から、須恵器は鳥打沢A遺跡からそれぞれ供給されたと考えられる。この他、この地域には、平安時代の「延喜式神名帳」に記載された神社(延喜式内社)が推定地として8カ所あり、これらは官社で律令政府が行う国家祭祀に組み込まれた神社である。その多くは、古代の東北経営の一つである蝦夷制圧戦争にかかわって、中央政府によって勧進されたものと考えられる。さらに、古代仏教としては、小高区の国指定史跡である平安後期の観音堂石仏や薬師堂石仏等の大悲山磨崖佛が知られており、この地が中央的な仏教を受け入れるに十分な条件が整備されていたものと考えられる。

鎌倉時代に入ると、海道方面は奥州藤原氏の討伐に功績のあった千葉常胤に所領として与えられ、その後、常胤の子息達に分与されている。常胤の二男相馬師常は、本領である下総国相馬郡とともに、新恩の陸奥国行方郡をも治めるようになった。相馬師常から数えて4代目の胤村は、領地をさらに11人に配分した。その結果、陸奥国行方郡の大部分は五男の師胤に与えられた。その後、建武3(1336)年に相馬光胤は小高中四郎内に小高城を築き、慶長16(1611)年の廃城までの約300年間相馬氏の居城となった。南北朝時代の相馬氏は北朝方に荷担し、支配地を拡大していった。

戦国時代になると、相馬氏は頻発する伊達氏の内部抗争の中で活躍し、有力武将としての地位を固めていき、豊臣秀吉の奥州仕置以後は、相馬中村藩として、宇多・行方・標葉郡の四万八千七百石の領地が確定した。この他、原町区寺家前観音堂には、鎌倉時代の優品とされる「十一面観音像」が安置され、現在でも厚い信仰を集めている。

近世の野馬土手は、本地域を代表する遺跡で、寛文年間(1666)以後に築造され、東西10km・南北2.6kmの広がりを持ち、木戸も数カ所設置され全国的にも貴重な遺跡である。また、山間地では、製鉄が盛んに行なわれ、古代製鉄とは製法に違いはあるが、原町区の藩営馬場鉄山をはじめ、五台山B遺跡・羽山B遺跡など、自給的で小規模な野たたらが数多く分布していることも確認されている。

(国 井)

第1編 ^{はら}原 B 遺跡

遺跡記号 MSC-H・B

所在地 南相馬市原町区馬場字原

時代・種類 縄文時代 集落跡

調査期間 平成18年4月11日～8月11日

調査員 国井秀紀・佐藤 洋・中野幸大

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 位置と地形

原B遺跡は、南相馬市原町区馬場字原に所在する。南相馬市原町区の南西部、JR常磐線の原ノ町駅から南西方向へ直線距離で5.7kmほど離れて位置し、遺跡の西側を主要地方道(相馬・浪江線)である県道34号線が南北方向に、北側を市道118号原町馬場線が東西方向に走っている。

遺跡は、阿武隈高地東縁部にあたる国見山麓から北東へ緩く傾斜する、雲雀ヶ原台地と呼ばれる中位Ⅲ段丘面に立地する。この段丘は、国見山の東側の一部と南側を開析して東西方向に流れる東側の笹部川と南側の太田川に挟まれた、東西に長い台地となっている。遺跡は段丘面の南西端に位置する。遺跡の南端部は、旧太田川によって抉りとられて断崖状を呈する。現在の太田川の川床から遺跡までの比高差は約35mを測る。遺跡は平坦面にあるが、南西側から北東側の市街地方面に向かって標高を減じている。このため標高は遺跡の西端が標高81m、東端が標高74mと、その比高差は約7mを測る。遺跡の現況は、市道に接する北側に宅地があり、それ以外は主に畑地・牧草地として利用されている。

今回の調査区は、遺跡推定範囲の中央付近、市道118号原町馬場線と市道104号上太田馬場線のほぼ中間に位置する。微地形的には標高77～78mの平坦面であるが、調査区の中央部付近から南側にかけて微高地となり、この微高地の範囲からは遺構が集中して検出された。

第2節 調査経過

原B遺跡は、福島県教育委員会が平成10年度に実施した表面調査により確認された。その後、平成17年に、常磐自動車道建設に伴う試掘調査を実施した結果、縄文時代の集落跡と推定され、常磐自動車道の計二路線内では6,200mを要保存範囲と確定した。これにより平成18年度は、福島県教育委員会から委託を受けた(財)福島県文化振興事業団が、原B遺跡の調査として、5,200mを対象に記録保存する目的で発掘調査を実施した。以下、遺跡の調査経過の概要を記述する。

調査は4月11日から開始した。まず、現地に発掘器材の搬入を行なうとともに、調査範囲を確認し、調査区の現況写真撮影を行なった。12日には、重機を使用して表土除去作業を開始した。表土の除去作業については、調査区の中央に東西方向に走る農道を残して調査区の北側から南側への順序で行ない、排土については、運搬にクローラダンプを使用して調査区外東側の路線内に置くこととした。表土除去が終了した調査区北側から、作業員を導入して遺構検出を開始した。下旬には、調査区境の西壁で基本土層を確認した。その結果、調査区北側では第Ⅱ層が欠落しており、第Ⅰ層直下には、縄文早期末葉の土器を含む第Ⅲb層を確認した。遺構検出による排土は、基本的に土砂

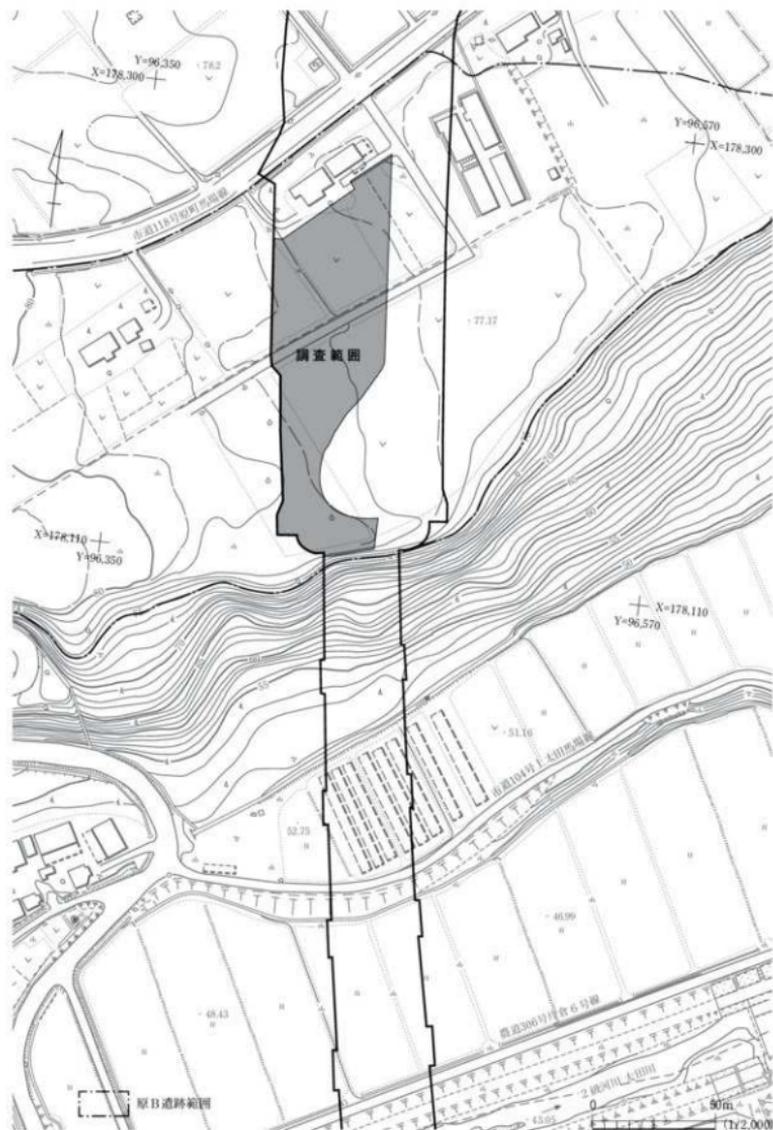


図1 原B遺跡調査区位置図

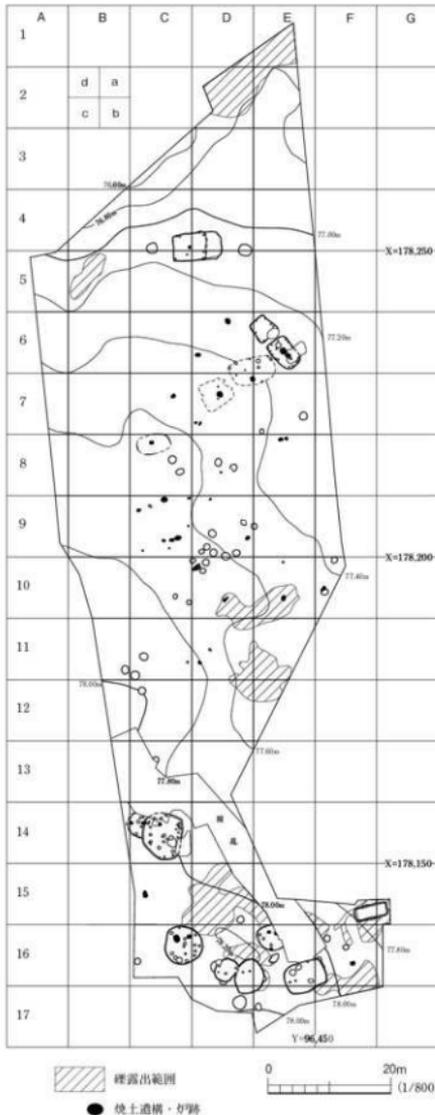


図2 グリッド配置図

運搬用のクローラキャリア2.5tを2台使用して、排土置き場に移動した。また、調査区内にクローラキャリアが入り出すため、作業員と機械との接触事故の防止に注意を払い、安全の確保に努めた。同月末には調査区内の表土除去が終了した。

5月上旬には、調査区北側に基準測量杭を打設した。中旬には遺構検出作業が本格化し、調査区北側では第IV層上面から、縄文早期末葉の竪穴住居跡や土坑等の遺構が検出され始めた。検出した遺構は順次掘り込みを開始した。下旬には、調査区北端では遺構や遺物が極端に少ないことが確認された。

6月上旬には、遺構検出作業を南側に展開するため、調査区南側に基準測量杭を打設した。また、縄文早期末葉の住居跡の遺構検出と精査を並行して行なった。中旬には、調査区中央部の遺構検出作業により、多数の土坑・焼土遺構等が検出された。この付近からは、縄文早期末葉の土器以外に、縄文中期前葉の土器も出土した。下旬には、調査区中央部の農道を調査区北西端に付け替え、旧農道下の遺構検出を行なった。調査区北側の縄文早期末葉の住居跡の調査が終了に近づいたため、調査区南側の遺構検出を開始した。

7月上旬には、調査区南側よりIV層上面で縄文中期前葉の住居跡が検出され始めた。また、調査区中央部では土坑群が確認されたため、順次遺構の掘り込みを開始した。中旬は、調査区南

側の住居跡調査を優先的に進めた。下旬に入ると、発掘調査の進捗に伴い、遺跡の様子が伺えるようになったことから、22日に「遺跡の案内人(ボランティア)」による発掘調査現地公開を行なった。さらに、28日にはラジコンヘリコプターを用いて、上空から遺跡全体や遺構集中範囲等の写真撮影を実施した。

8月上旬には、遺構精査と一部の発掘器材等の片付けを行ない、これに並行して調査区の地形測量を行なった。11日には調査区全体の写真撮影と補足調査後、発掘器材の撤収を行ない、直接調査に関わる作業を終了した。24日には、東日本高速道路株式会社、福島県教育委員会文化財グループ、(財)福島県文化振興事業団の各担当者が、調査経緯や成果、排土等の確認を行ない調査区の引渡しを行なった。

以上のように、原B遺跡の発掘調査は、4月11日から8月11日までの延べ82日をもって、その全日程を終了した。

第3節 調査方法

今回の原B遺跡の調査では、遺跡の位置関係と遺構・遺物の出土位置を明示するため、調査区内に世界測地系に合わせた測量基準点を打設した。この基準杭の座標値をそのまま使い、南北の軸線を真北に合致させ10m四方のグリッドを設定した。グリッドの原点は、 $X=178,290$ 、 $Y=96,400$ の交点で、 X は緯線、 Y は経線を表す。各グリッドの名称は、東西方向に西から東へA・B…とアルファベットの大文字を、南北方向に北から南へ1・2…と算用数字を付し、A1グリッド、C2グリッドなどと呼称した。遺構の記録に際しては、このグリッドを1mの方眼に細分し、交点を測点として用いた。また、交点の表記には座標値をそのまま使用した。

今回の調査では、表土除去作業にバックホー0.7tとクローラダンプ10tを使用した。それ以外には人力で遺跡基底面まで掘り下げ、層位ごとに遺構・遺物の確認に努めた。また、排土の移動には、クローラキャリア2.5tを使用した。遺構の調査では、土層観察用の畦を設け、堆積土の状態や遺物の出土状態に留意しながら精査・記録を行なった。遺構の記録は1/10・1/20、調査区内の地形図は1/200の縮尺で記録した。遺物の取り上げは遺構ごとに、遺構外出土遺物はグリッドごとに行なっており、いずれも出土層位を明記している。遺構外の遺物集中地点については、10mグリッドを5m四方に4分割し、北東から時計回りにa・b・c・dという枝番を付けて取り上げた。出土層位については、遺構外堆積土をLとローマ数字との組み合わせによりL I・L II等とし、遺構内は ℓ と算用数字の組み合わせにより $\ell 1$ ・ $\ell 2$ 等と表記した。また、土層の注記には新版標準土色帖を基準として使用した。記録写真は、検出状況や土層の堆積状況等に留意し、35mm判のモノクロームとカラーリバーサルのフィルムを使用し、同一被写体を同一方向から撮影した。

(国 井)

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層

遺構の分布

原B遺跡で検出された遺構は、住居跡13軒、土坑39基、焼土遺構23基、土器埋設遺構2基、特殊遺構2基、ピット6基である。出土遺物は縄文土器8,213点、土製品1点、石器・剥片755点、チップ170.54gである。遺物の年代は、縄文早期末葉と中期前葉を主体とする。

遺跡は、太田川と笹部川により形成された段丘面に立地する。このため、調査区内は平坦地となる。遺構は、微高地となる調査区の中央付近から南側にかけて、住居跡群や土坑群等が検出されているが、僅かに低くなる調査区北端から北西端では、遺構が認められなかった。時期的に遺構を見ると、縄文早期末葉の住居跡や土坑は北側に、縄文中期前葉の住居跡は南側に、土坑と焼土遺構は調査区の全体に分布する。特に、段丘礫層の露出が著しい南側では、住居跡が礫層を避けて構築されているようである。この他に、縄文中期後葉から晩期の遺物が僅かに出土する地点が確認されている。

基本土層

調査区は、南側が断崖となる段丘面縁辺部の平坦面に立地する。基本土層は、調査区北西側(図3のA A')、南西側(図4のB B')で堆積状態を観察し、5つに大別した。以下、各土層の特徴と遺構・遺物との関係について述べる。

L Iは、暗褐色を呈する耕作土である。調査区全体に広がっており、調査区北側では北に向かって厚く堆積する。層厚は20～110cmを測る。特に耕作による削平は、調査区中央から北側の範囲が著しいため、調査区北側では本層の直下がL III b、中央ではL IV上面を確認している。また、この削平により、本層から出土する遺物が多くなっている。

L IIは黒褐色土である。調査区南側のB B'断面の一部でのみ確認され、その大部分は耕作による削平により欠落したものと考えられる。このため、本層は薄層で層厚は最大で16cmを測る。

L IIIはa・bの2層に細分した。L III aは暗褐色土である。調査区北西端と南側の一部に認められるが、それ以外は耕作等の攪乱により失われたものと考えられる。本層からは縄文中期前葉の土器が多く出土している。層厚は6～38cmを測る。L III bはやや赤味のある褐色土である。調査区の全域で安定した堆積が確認されるが、調査区南側では層厚が薄くなる。調査区北側では、耕作の影響を受けているためL Iの直下に本層が確認され、層厚は15～42cmを測る。本層の上部からは、縄文早期末葉の土器が多く出土している。また、調査区の南部では、本層から縄文中期前葉の土坑が検出されている。

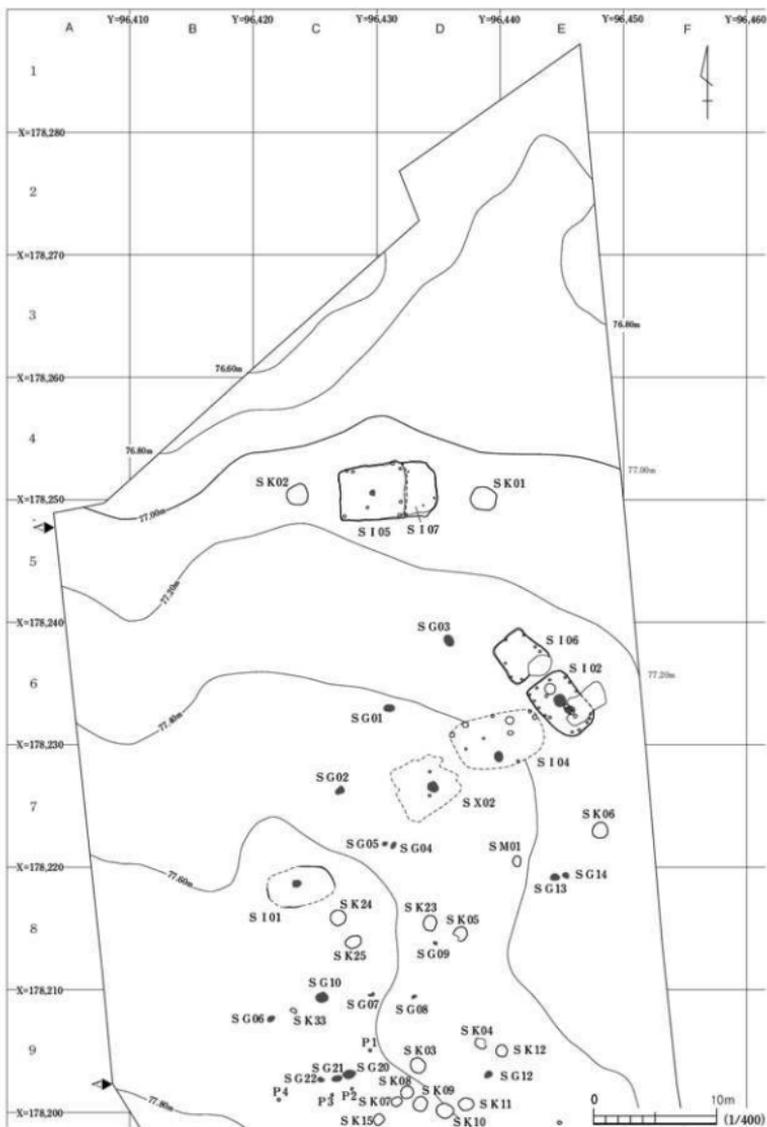


図3 遺構配置図・土層観察地点(1)

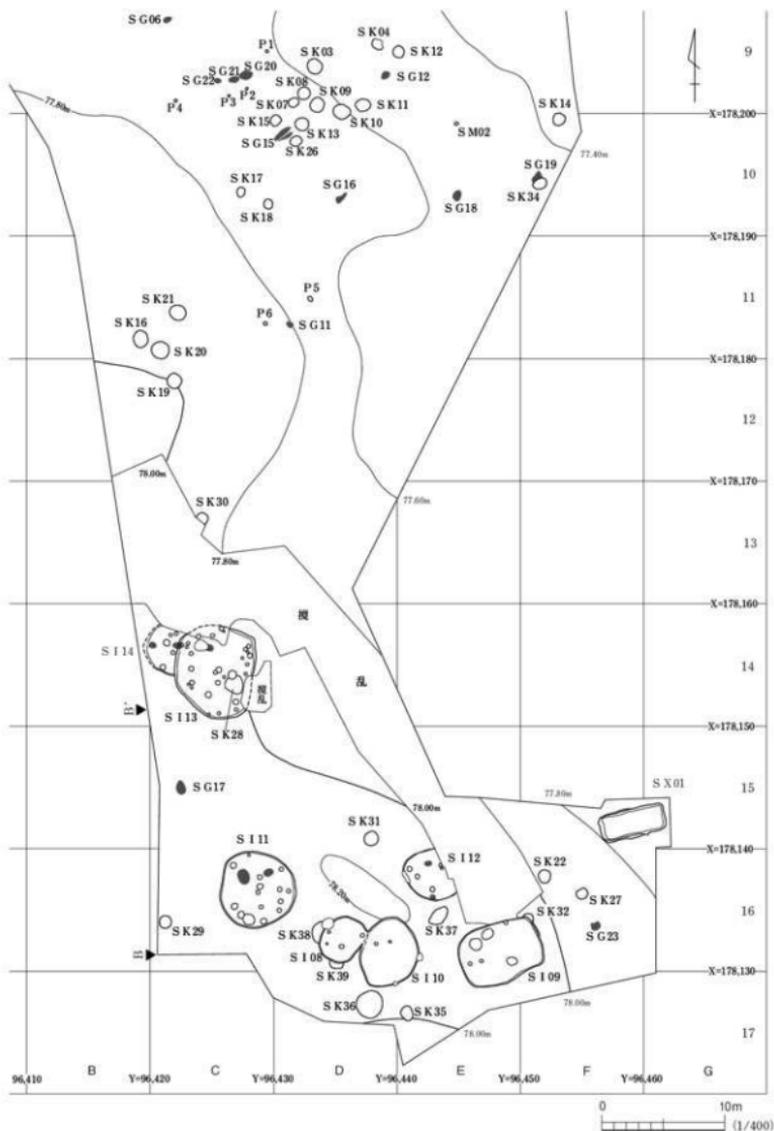


図4 遺構配置図・土層観察地点(2)

第1編 原B遺跡

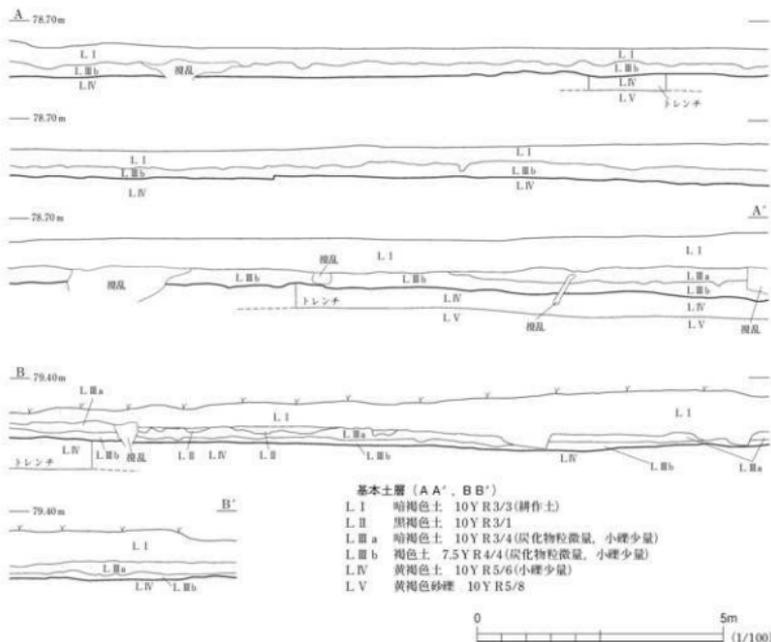


図5 基本土層

L.IVは黄褐色土である。いわゆるローム質の土層で、調査区全体で確認されている。本層の上面は、主に縄文早期末葉の遺構検出面となり、この時期よりも古い遺構や遺物は確認されていない。本調査区における遺跡基底面は本層上面であり、本層以下は無遺物層となる。遺跡基底面には、部分的であるがL.Vの砂礫層が露出しており、調査区南側で顕著である。この礫層露出範囲については図2に示した。

L.Vは黄褐色砂礫層で、段丘礫層の一部と考えられる。調査区西側のA A'断面、12号住居跡の断面(図26)や1号特殊遺構の断面(図43)等で確認している。(国 井)

遺跡の年代と土器の分類

出土土器は便宜上、器形の特徴、文様、施文技法によって以下のように分類を行なっている。ただし、出土した遺物の多くが破片資料であるため、文様要素や施文技法に分類の基準を置いている。I群土器 縄文早期末葉～前期最初頭の土器群である。出土土器の半数以上が本群にあたる。特徴としては、胎土内に繊維混和痕が見られ、土器の内面に貝殻条痕が施されている。これらの土器は、器面に施された地文によって大枠で類別し、さらに文様要素によって種別した。

- 1類 地文に燃糸文を施すもの。
- a種 口唇部に刻目や圧痕を持つもの。
 - b種 口唇部直下に横位方向の隆帯を施すもの。
 - c種 沈線を施すもの。
 - d種 地文のみのもの。
- 2類 地文に縦走縄文を施すもの。
- a種 口縁端部に刻目を施すもの。
 - b種 横位方向に沈線を施すもの。
 - c種 地文のみのもの。
- 3類 地文に斜縄文を施すもの。
- a種 羽状縄文を施すもの。
 - b種 斜縄文を施すもの。
- 4類 底部資料を一括した。
- II 群土器 縄文中期前葉の土器群である。
- 1類 大木7b式土器に相当するもの。
- a種 隆線で区画し沈線を施すもので、隆線のみのものも含む。
 - b種 隆線で区画し縄圧痕文を施すもの。
 - c種 縄圧痕文を施すもの。
 - d種 連続刺突文や交互刺突文を施すもの。
 - e種 沈線で文様を描くもの。
 - f種 地文のみのもの。
 - g種 無文のもの。
- 2類 阿玉台I a式に相当するもの。
- a種 隆線で区画し有節沈線や刺突文を施すもの。
 - b種 重層連続指圧痕文に隆線を施すもの。
 - c種 有節沈線を施すもの。
- 3類 底部資料を一括した。
- III 群土器 中期後葉～晩期にかけての土器群を一括した。
- 1類 大木9式に相当するもの。
- 2類 後期前葉に相当するもの。
- 3類 晩期に相当するもの。
- 4類 底部資料を一括した。

(中 野)

第2節 竪穴住居跡

今回の調査で検出された竪穴住居跡は13軒である。これらは段丘の平坦面で、数軒単位の住居跡群として、調査区北側と南側で認められた。時期的には、北側の縄文早期末葉～前期最初頃のもの、南側の縄文中期前葉のものに分けられる。南側の住居跡群は、図2に示した罫範囲を避けて構築されているようである。3号住居跡については欠番とした。

1号住居跡 S I 01

遺 構(図6, 写真6)

本遺構は、調査区北側のC 8グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。遺構は、調査区北側の住居跡群に位置する。他の遺構との重複関係はないが、遺構の西側と北側は風倒木痕に、南東側は耕作によって失われているため、遺存状態は悪い。

遺構内堆積土は、炭化物粒を多く含む黄褐色土の薄い単層であるため、堆積状況については不明である。



図6 1号住居跡

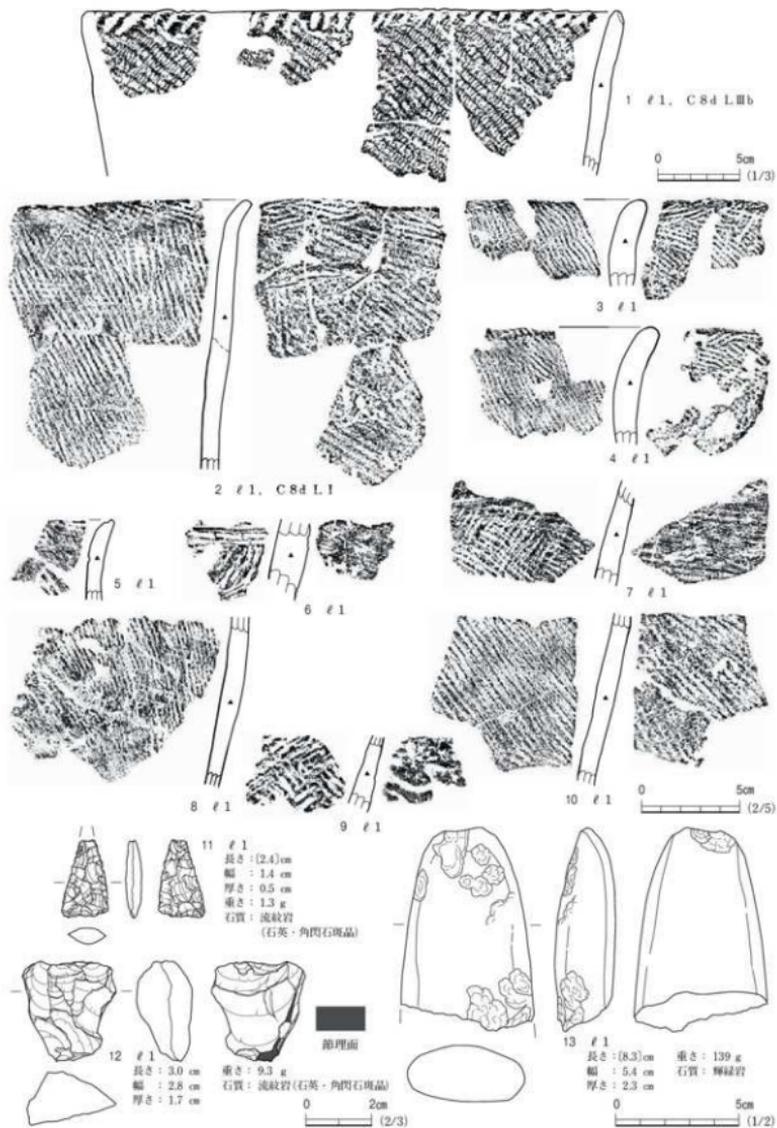


図7 1号住居跡出土遺物

本遺構の平面形は、遺存状態から楕円形と推測される。規模は東西5.40m、南北3.22mを測る。壁高は北側壁で最大9cmである。周壁は、西側の一部と北東側以外は失われているが、概ね70°の角度で立ち上がる。床面は平坦で、踏み縮まりは見られなかった。

本遺構の施設は地床が1基である。炉跡は住居跡の中央で確認されている。形状は楕円形を呈し、規模は長軸70cm、短軸60cmを測る。酸化面の厚さは最大5cmである。全体的に酸化状態は弱い、西側では比較的強く酸化している。炉跡の上面からは、使用面が認められない円礫が出土した。この石は約5cmの範囲が被熱しているため、炉で使用されたものと考えられる。

遺物(図7、写真43・53・54)

遺物は縄文土器320点、石器9点が出土している。縄文土器は全てI群土器であるが、縄文地文に比べ燃糸地文の方が多い。その多くは、北側から東側の床面付近から出土している。

図7-1~10は縄文土器である。1は縄文地文の口縁部資料で、胴部から口縁にかけて外傾気味に立ち上がる深鉢と考えられる。外面に0段多条Rの縄文が施文された後、口縁部上端に斜位方向の刻目が施されている。内面には横位方向の擦痕が観察される。2~10は燃糸地文の土器である。2~5は口縁部の資料で、いずれも外反し、2~4は口縁部上端の内面に横位方向の燃糸文が施されている。6・7は、燃糸地文に角状の工具による横位方向の沈線が施され、内面には横位方向の条痕が施されている。9は燃糸文が羽状に施されるものである。

図7-11~13には石器を掲載した。11は先端が欠損する石鏃で、形状は二等辺三角形を呈する。12は石核である。本資料は、石器の大きさや最終的な剥離面の状態から残核と判断した。13は先端部が欠損する石斧である。表面には自然面を残し、裏面と側面の一部には研磨痕が観察される。

まとめ

本遺構は楕円形の住居跡である。遺構の特徴は、炉を中央に設置していること、柱穴を持たないことである。遺構の所属時期は、出土した土器の特徴から縄文早期末葉と考えられる。(中野)

2号住居跡 S I 02

遺構(図8、写真7・8)

本遺構は、調査区北側のE6グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。本遺構の北側には6号住居跡が近接し、遺構の一部は風倒木痕により壊されていた。

遺構内堆積土は2層に分けられ、いずれもレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。

本遺構の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸5.40m、短軸3.60mを測る。壁高は、遺存状態の良好な西壁で10cmを測る。周壁は概ね50°の角度で立ち上がる。床面は平坦で、踏み縮まりは見られない。

本遺構の施設は、地床が2基とピット20基を検出した。炉跡は床面中央で確認され、南側を1号炉、北側を2号炉とした。1号炉の形状は楕円形を呈し、規模は長軸85cm、短軸70cmを測る。2号炉の形状は円形を呈し、規模は長軸103cm、短軸96cmを測る。いずれも焼き縮まりが確認されている。

酸化面の厚さは1号炉は5cmであるが、2号炉は8cmまで達する。炉跡はP19やP20と重複しており、1号炉はP19・20より古い、2号炉はP20より新しい。このため、1号炉の後に2号炉が使用され、炉の位置が南側から北側に移されたものと考えられる。また、2号炉の上面から、被熱した拳大の円礫が1点出土しているため、この石は炉の使用時に存在していたものと考えられる。

ピットは、概ね住居跡の中央に位置するものと、壁際に位置するものに分けられる。ピットの堆積土は、住居内堆積土の ℓ 1に近似する。住居跡の中央に位置するピットには、P17～19が相当する。これらは住居跡のほぼ中心軸上に位置し、直径20～25cm、床面からの深さは9～20cmを測る。このように、配置や規模等から主柱穴と考えられる。また、P19は1号炉跡より新しいことから、住居の補強等の柱穴として使用されたものと考えたい。壁際に位置するピットには、P2～16が相当する。平面形は円形ないし不整形円形を呈し、規模は直径20cm前後である。床面からの深さは8～20cmを測る。これらは大きさが一定で、壁際に設置されていることから壁柱穴と考えられる。住居内における壁柱穴の位置関係は、東壁側に3基、西壁側に5基、南側に5基、北側に2基である。東西壁際の柱穴は、それぞれの間隔が80～100cmを測る。壁柱穴は床面に対してほぼ垂直に掘り込まれている。壁柱穴間の距離は、P3-P4とP13-P14、P4-P5とP12-P13がほぼ同じであり、これらは東壁と西壁に対称に配列されている。

その他のP1とP20は用途が不明である。P1は住居跡の中心軸上に位置し、規模は直径90cm、深さは22cmを測る。断面形は楕円状を呈し、底面は東側が深くなる。P20は住居跡の中央に位置し、規模は直径28cm、床面からの深さは23cmを測る。1号炉の使用後に掘り込まれている。堆積土は炭化物粒を多く含む褐色土で、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物(図8, 写真44・54)

遺物は縄文土器33点、石器2点が、 ℓ 1から床面にかけて出土している。図8-1・2は撚糸文の縄文土器で、2には撚糸文が交差するように施されている。3は打製石斧で、裏面には自然面が残されている。

まとめ

本遺構は隅丸長方形を呈する住居跡である。床面中央に炉跡2基と20基のピットを検出した。炉跡は柱穴との重複関係から、各炉の使用時期が異なることが確認された。柱穴は主柱穴と壁柱穴に分かれ、企画的な構造を呈する。遺構の所属時期は、出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。

(中野)

4号住居跡 S I 04

遺構(図9, 写真9)

本遺構は、調査区北側のD6・7、E6・7グリッドに位置する。本遺構の検出面は、L1直下のLIV上面である。検出時には焼土範囲、踏み締めまり範囲と複数のピットが確認され、その状況から住居跡と判断した。周壁が失われているため、遺存状態は悪い。隣接する遺構としては、2号住

酸化している。その厚さは最大8cmを測る。

ピットは炉の北側に集中する。南側については削平を受けているためか、P5以外は検出できなかった。P4・6・10は、炉の北側2m前後の位置に東西軸に並んで設置されている。おそらく住居跡の北壁より内側に分布していたと推測される。規模は直径20～45cm、深さ10～20cmを測る。P4は壁面の東側が緩やかに傾斜していることから、柱の抜き取り痕の可能性がある。P2・3・7～9は、北側で東西方向に並んで分布している。P2・3は住居跡の北東隅に、P8・9は北西隅に位置するものと推定される。規模は直径15～45cm、深さ10cm前後である。比較的大きいP8・9は、壁面の東側が緩やかに傾斜しており、柱の抜き取り痕の可能性がある。これらのピットは東西方向に並び、北側にピットが存在しないことから壁柱穴と推測される。この他に、P1は規模が直径65cm、深さ10cmを測り、断面形は楕円状を呈する。堆積土は炭化物粒を含む暗褐色土で、他のピットの堆積土と近似することから、本住居跡に伴うものと考えられる。用途については不明である。

遺物(図9、写真53)

遺物は縄文土器17点、石器4点が出土している。出土状況は、床面より疎らに出土している。縄文土器は、全て胎土に繊維を含む擦糸文のI群土器で、小破片のため図示していない。

図9-1は石鏃である。表裏面の先端部と側縁の一部にのみ調整刻痕が加えられている。

まとめ

本遺構は、地床が周辺の踏み締めり範囲とピットの配置から、住居跡と判断した。柱穴の配置から、7mを超える大型の住居と推測される。遺構の所属時期は、出土土器から縄文早期末葉と考えられる。

(中野)

5号住居跡 S I 05

遺構(図10、写真10・11)

本遺構は調査区北側のC4・5、D4・5グリッドに位置する。本遺跡で検出した遺構の中で最も北に位置する遺構である。遺構検出面はLIV上面である。当初、1軒の住居跡として調査していたが、土層断面の観察から、東側に7号住居跡が重複することを確認した。このため、本遺構の東壁は掘りすぎてしまった。重複関係は、本遺構の方が新しい。本遺構の東側には1号土坑が、西側には2号土坑が近接する。

遺構内堆積土は4層に分けられ、いずれもレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。

平面形は長方形を呈し、規模は東西5.35m、南北4.70mを測る。検出面からの深さは10～15cmであるが、北壁では20cmを測る。周壁は僅かに外傾気味に立ち上がる。床面は概ね平坦であるが、中央から西側にかけて下層の礫層が露出しており、そのため西側が東側に比べ2～3cm程度浅く構築されている。踏み締めりは確認できなかった。この他に、本遺構は重複する7号住居跡と、東西軸の方向や南北軸の長さが一致している。

住居内施設は地床が1基、ピット8基を確認した。炉跡は住居跡の中央で確認したが、攪乱を受

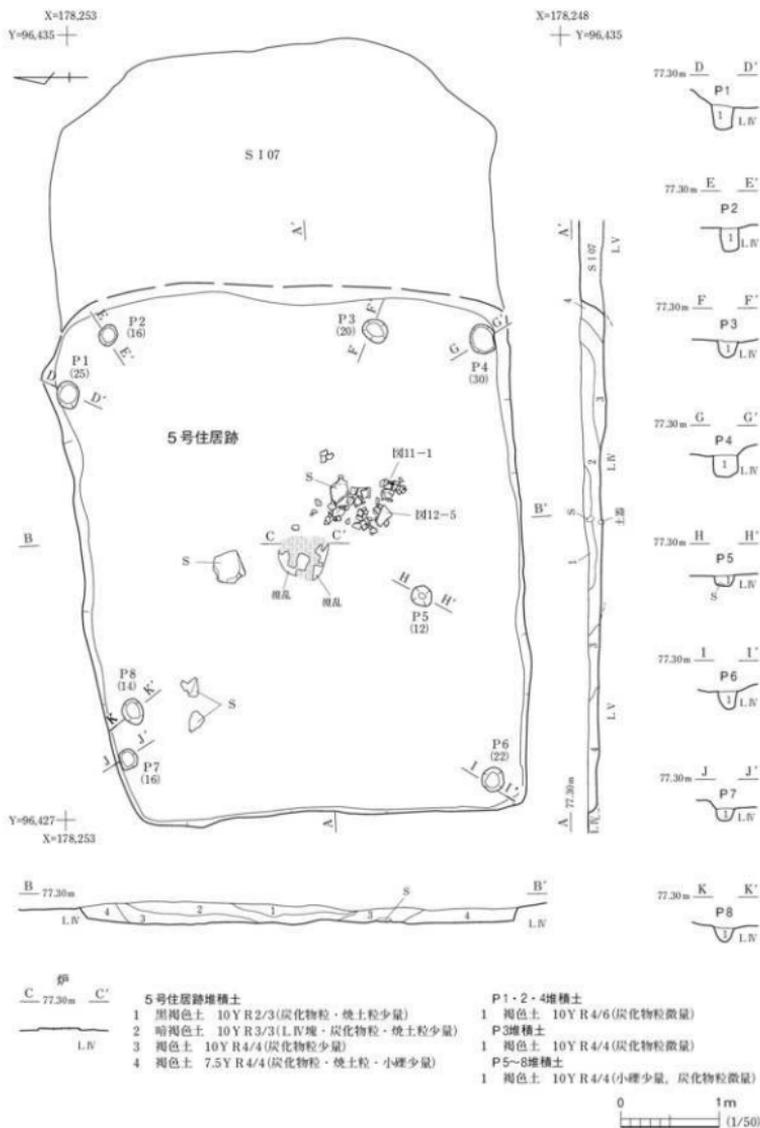


図10 5号住居跡

けているため、形状は不明である。規模は長軸50cm、短軸45cmを測る。床面に粘土を4cmの厚さで貼り付けた上面を炉として使用しているため、この粘土部分のみが焼き締まり、下部の床面までは熱が及んでいなかった。ピットは8基を検出した。P5を除く7基は、それぞれ住居の四隅に位置することから壁柱穴と考えられる。床面からの深さは12~30cmである。また、炉跡の南東側から多量の土器片が出土し、図11-1に示した土器が復元された。この土器片の上からは石皿(図12-5)が出土した。床面からはこの石皿の他に、平らな面を持つ礫3個が出土したが、磨面などの使用痕跡は確認できなかった。

遺物(図11・12、写真44・45・53~55)

遺物は縄文土器613点、石器69点が出土した。縄文土器はいずれもI群土器で、縄文地文よりも燃糸文の方が僅かに多い。また、土器の内面には条痕が確認できるものが多い。石器は住居跡の東側から多く出土しているため、石器が多量に出土した7号住居跡から流れ込んだ可能性が高い。このうち、縄文土器10点、石器9点を図示した。

図11-1~10は縄文土器である。1は口縁部が僅かに外反し、砲弾形の器形を呈する尖底土器である。外面には斜縄文が施され、内面の上半部には横位の条痕が認められる。口唇部には刺突が施されている。また、内面の底部から15cm上部の範囲には多量の炭化物が付着している。この炭化物については放射性炭素年代測定を実施し、その結果は第3章第4節に掲載した。さらに、外面の口縁部から頸部にかけて、部分的ではあるが炭化物の付着が認められる。2~4は口縁部資料でいずれも外反し、燃糸文が施されている。2・3の内面には条痕、4の内面には擦痕が認められる。4の口唇部には刻目が施される。5~8は胴部破片で、外面には燃糸文が施されている。5は1号土坑から出土した土器(図37-1)と同一個体と考えられ、内面の条痕は縦位、横位の順番で施されている。7は縦位の燃糸文上に、先の扁平な工具で横位の沈線が描かれている。9・10は胴部破片で、外面に縦位の縄文が施されている。

図11-11~14、図12には石器を掲載した。図11-11・12は石鏃である。11は凹基鏃、12は平基鏃で、いずれも頂部が欠損している。13・14はつまみを持つ縦型の石匙である。いずれも、表面はつまみ部から基部まで丁寧な調整が行なわれているが、裏面は側縁部にのみ微細な調整が施されている。図12-1は石べらの未製品と考えられる。表面は全面に粗い調整が施され、裏面は自然面を残して、片側縁にのみ調整剝離が見られる。2は削器の欠損品と考えられ、両面の側縁部に微細な剝離調整を施している。3・4は石核である。その大きさや遺存状態から残核と考えられる。5は石皿の欠損品で、扁平な石の片面のみが使用されている。

まとめ

本遺構は長方形を呈する住居跡である。炉は、床面に粘土を貼り付けて構築されていることから、特徴的な作りであることが言える。床面から出土した土器に付着していた炭化物に対し、放射性炭素年代測定を実施した結果は6240±40yrBPであった。本遺構の年代は、床面から出土した土器から縄文早期末葉と考えられる。(佐藤)

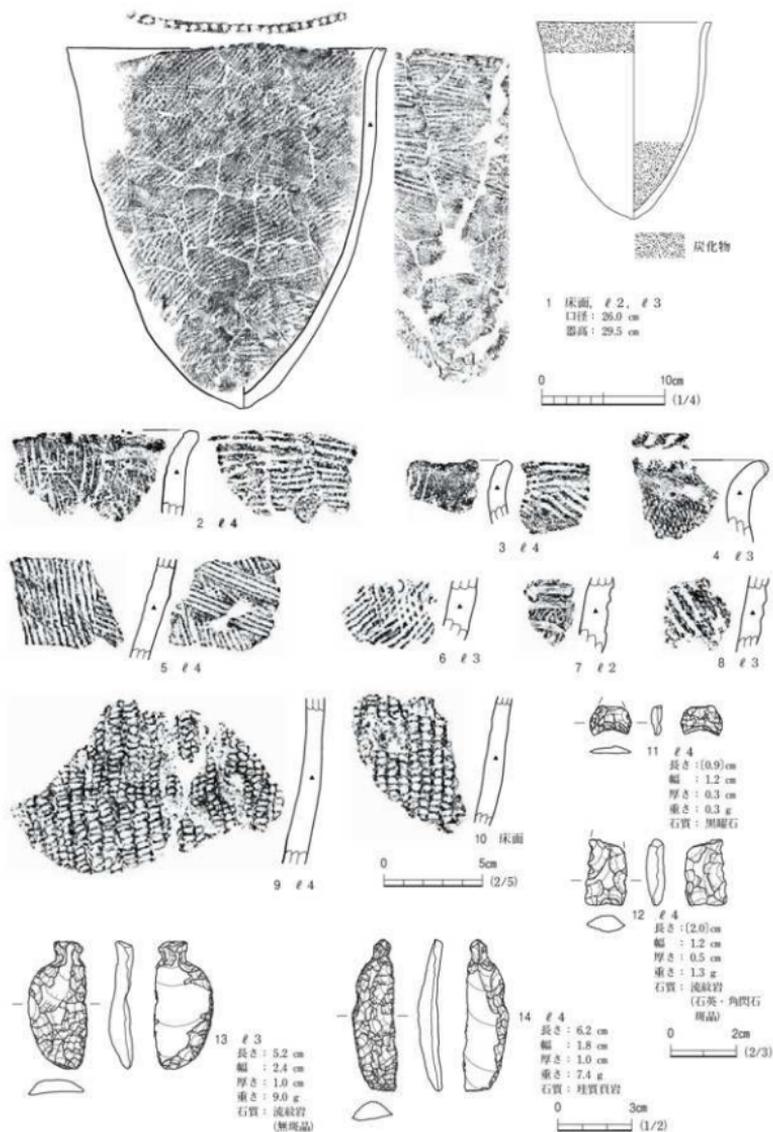


図11 5号住居跡出土遺物(1)

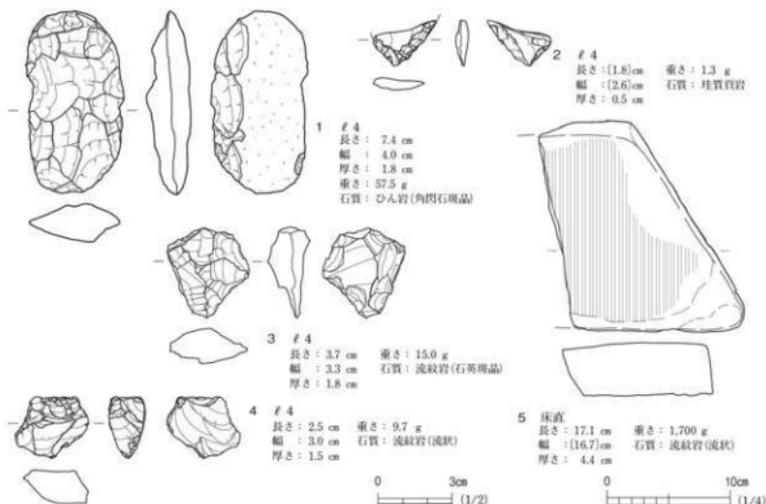


図12 5号住居跡出土遺物(2)

6号住居跡 S I 06

遺 構(図13, 写真12・13)

本遺構は調査区北側のD・E 6グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。住居跡中央部と南側の一部は風倒木痕により壊されている。本遺構の南側には2号住居跡が近接している。

遺構内堆積土は2層に分けられ、共にレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。

平面形は、台形状の隅丸方形を呈する。規模は北辺2.90m、西辺3.60mを測る。壁高は、遺存状態の良い北壁で12cmである。周壁は概ね60°の角度で立ち上がる。床面は平坦であるが、踏み締まりは見られない。

本遺構の施設はピット7基である。P 1～7は規模が直径10～20cm、深さ10～20cmを測る。これらのピットは、壁際に位置することから壁柱穴と考えられる。いずれも床面に対してほぼ垂直に掘り込まれている。ピットの配置は東壁側に3基、西壁側に2基、南壁側に1基、北壁側に1基が認められるが、これらのピットの間隔は不規則である。ピットの堆積土は、住居跡堆積土の#2に近似する暗褐色土である。

遺 物(図14, 写真45・46)

遺物は縄文土器125点、石器4点が出土した。縄文土器は全てI群土器である。土器の多くが、中央やや東側から集中して出土した。これらの遺物は、住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

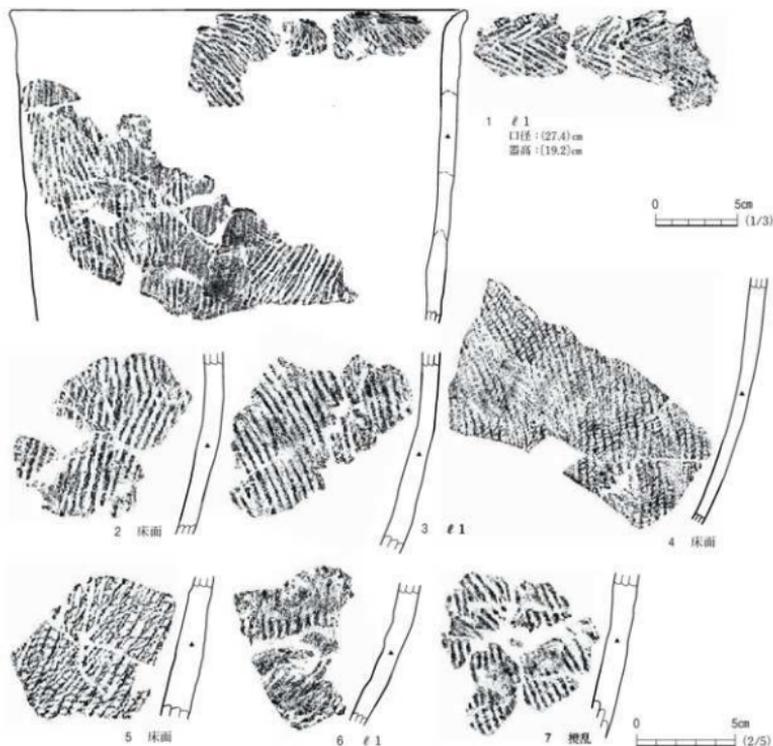


図14 6号住居跡出土遺物

図14-1～7は縄文土器である。4は縄文地文で、それ以外は燃糸地文の土器である。1は口縁部から胴部上半にかけての大破片で、口縁部がやや外反する。口縁部上端の内面には燃糸文を矢羽状に施した後、その端部に斜位方向の絡条体圧痕を連続的に施している。2・3・6・7は、原体や胎土の特徴から同一個体と考えられる。4は0段多条の原体を用いた縦走縄文が施文されている。4・5の内面には横位方向の擦痕が観察される。

まとめ

本遺構は隅丸方形の小型の住居跡である。炉を持たず、壁柱穴のみ7基が検出された。遺構の所属時期は、出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。

(中野)

7号住居跡 S I 07

遺 構(図15, 写真10・11)

本遺構は調査区北側C4・5, D4・5グリッドに位置する。検出した遺構の中で最も北側の遺構である。遺構検出面はLIV上面である。5号住居跡の土層断面観察から本遺構と重複していることが確認された。重複関係は、本遺構の方が古い。

平面形は遺存状態から隅丸方形と推定される。遺存する規模は東西4.40m, 南北4.70mである。検出面からの深さは13~23cmである。周壁は僅かに外傾して立ち上がる。床面はLIVを掘り込んで構築されているが、5号住居跡の床面より僅かに浅い。本住居跡は、東西軸の方向や南北軸の長さが5号住居跡と一致している。

住居の施設としてはピットが4基確認された。P1~4は壁際に位置し、規模が直径10~12cm, 深さは10~12cmである。ピット堆積土はいずれも褐色土である。これらのピットは、大きさや配置から壁柱穴と考えられる。

本遺構の堆積土は2層に分けられる。①はLIV塊と多量の剥片・チップ類が均一に含まれていることから、埋め戻されたものと判断した。本層はLIIIbに近似する。②は壁の崩落による自然堆積土と判断した。①については、剥片・チップ類を回収するため、堆積土の半分に当たる土囊

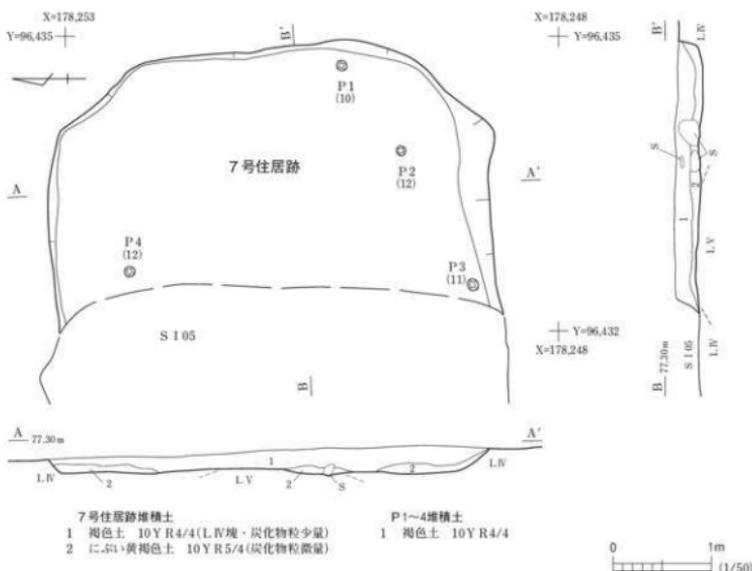


図15 7号住居跡

表1 7号住居跡出土石器石材別重量

石材	大きさ 点数	10mm以上		5mm以上10mm未満		5mm未満		合計 (g)	全重量に占める石材の割合(%)
		重量(g)	割合(%)	重量(g)	割合(%)	重量(g)	割合(%)		
流紋岩(Q,Ho)	275	245.80	68.5	45.66	12.7	67.25	18.7	358.71	72.6
流紋岩(Q)	62	44.59	66.5	11.36	16.9	11.15	16.6	67.10	13.6
頁岩	44	28.21	44.5	21.99	34.7	13.13	20.7	63.33	12.8
黒曜石	2	2.98	100.0	0	0	0	0	2.98	0.6
水晶	1	1.88	100.0	0	0	0	0	1.88	0.4
合計	384	323.46	65.5	79.01	16.0	91.53	18.5	494.00	100%

*10mm以上の遺物については点数と重量を、10mm未満のものについては重量のみを記載した。 Q:石英珪晶 Ho:角閃石珪晶

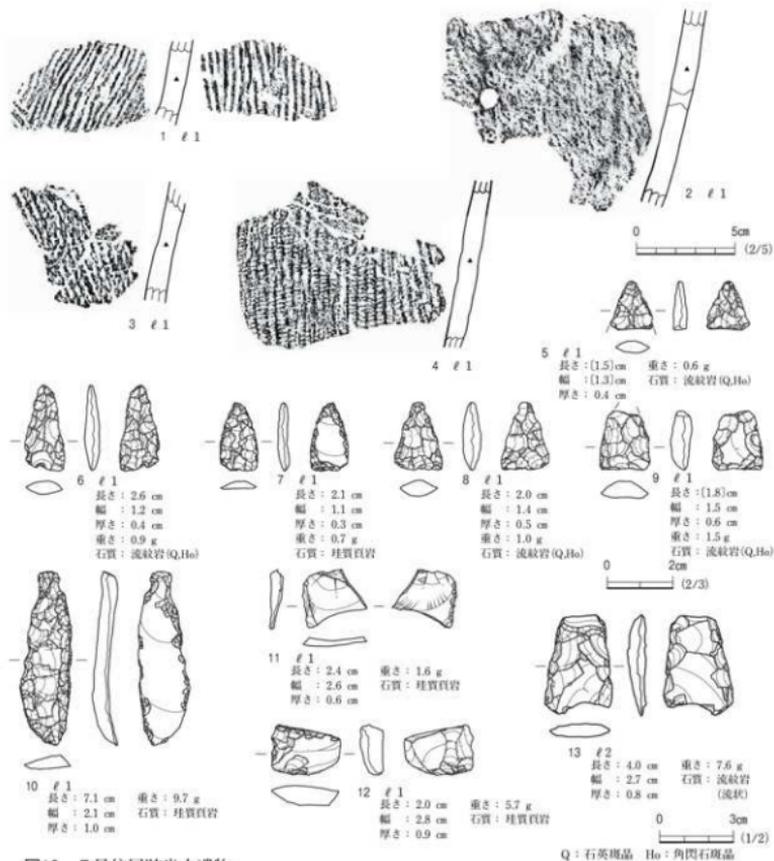


図16 7号住居跡出土遺物

約100袋分の水洗選別を行なった。回収された剥片・チップ類は、その多くが10mm未満の石器であるため、これらについては点数ではなく重量で示した。(表1)

遺物(図16, 写真46・53・54)

遺物は縄文土器209点, 石器384点, 10mm未満の石器170.54gが出土した。この中から縄文土器4点, 石器9点を図示した。縄文土器は縄文早期末葉のI群土器と考えられ, 縄文地文土器と撚糸文土器が混在している。微細石器は分類した結果, 石材が大きく3種類に分けられ, 中でも在地石材と考えられる石英斑晶と角閃石斑晶を含む流紋岩が目立つ。

図16-1~4は縄文土器である。1は外面に原体の細かい撚糸文が斜位に施された土器で, 内面には縦位の条痕が見られる。2は外面の摩滅が著しいが, 縦位の撚糸文が観察され, 内面には横位の擦痕が見られる。また, 補修孔が穿たれている。3は外面に縦位の撚糸文が施文され, 内面には横位の擦痕が見られる。4は外面に縦位の縄文が施文され, 内面には横位の擦痕が見られる。

図16-5~9は石鏃で, 5は基部を欠損している。6・7は凹基鏃で, 6は鏃身が長く, その中央に若干の括れが見られる。7の裏面は側面と基部のみに微細な剥離が認められる。8・9は平基鏃で, 9は先端部を欠損している。10はつまみを持つ縦型の石匙である。裏面は側部に僅かな微細剥離が見られる。11・13は2次加工剥片で, 11の片面の側縁部にのみ微細剥離が見られ, 13は粗い調整剥離が行われている。12は石核で, その形状から残核と判断した。

まとめ

本遺構は伊跡が無い住居跡である。埋土には多量の剥片・チップ類が混じることから, 遺構の周辺で石器製作が行なわれたものと考えられる。遺物はℓ1からの出土が多く, 本遺構に伴う遺物は出土していないが, 縄文早期末葉の所産であると考えている。(佐藤)

8号住居跡 S I 08

遺構(図17・18, 写真14・15)

本遺構は調査区南側のD16グリッドに位置する。検出面はLIV上面である。検出当初, 10号住居跡の北西側で, 焼土粒と炭化物粒を多く含む暗褐色土の範囲として確認した。その状況から, 本遺構については焼失住居の可能性が高いものと判断し, 住居跡堆積土内の焼土範囲と炭化材の位置を記録しながら調査を進めた。炭化材については, 遺存状態が良好なものを樹種同定サンプルとして取り上げた。他の遺構との重複関係は, 10号住居跡, 38・39号土坑と重複しており, いずれも本遺構の方が新しい。

遺構内堆積土は4層に分けられた。ℓ1・2・4は自然流入により堆積した土層である。ℓ3は炭化材や焼土塊を含むことから, 家屋焼失時の崩落材等が腐植したものと考えられる。ℓ3は他の土層と堆積状況が異なっているが, 自然堆積によるものと考えられる。

ℓ3から出土した炭化材は, 住居跡全体に分布しており, 特に西側から出土した炭化材の遺存状態は良好である。これらの炭化材のうち, 図17に示した12点の樹種同定を行なった。炭化材の②・

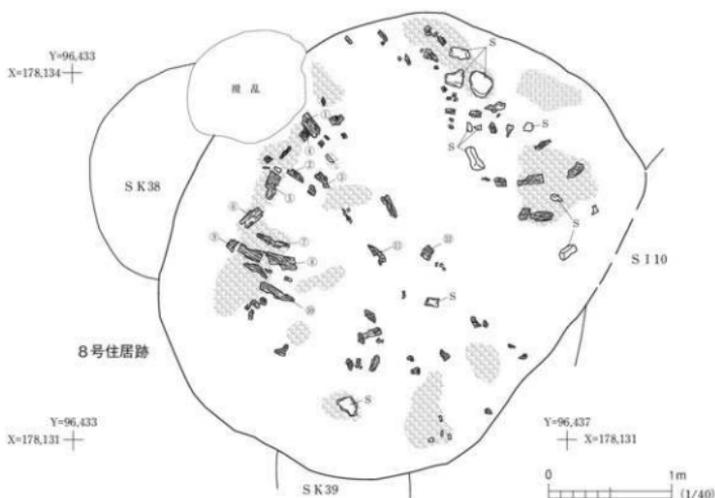


図17 8号住居跡出土炭化材

③・⑧・⑩～⑫は、概ね住居跡の中心に向かうように出土している。④～⑥・⑨は②・③・⑧・⑩～⑪の方向とほぼ直交し、住居跡の長軸に平行するようである。これらの炭化材は、出土状況から上屋構造の部材の可能性が高い。これらの部材には栗とケンボナシが使用されていた。この他、⑫については放射性年代測定を実施した。樹種同定と年代測定の結果については、第3章第3・4節に記載した。

焼土の範囲は、炭化材と同様に住居跡のほぼ全体に分布するが、その中でも集中している範囲を記録した。遺構の南側や西側では、焼土が床面上に堆積していたことが確認され、その層厚は5～10cmを測る。これらの焼土は、住居焼失時に屋根に落ちていた土が焼土化して堆積したものと考えられる。また、焼土は、住居の壁際に厚く堆積しているのに対し、中心部にはほとんど見られない。このため、土は屋根全体を覆っていたのではなく、屋根の周囲のみを覆っていたものと推測される。

本遺構の平面形は、南北に長い楕円形を呈する。規模は東西3.30m、南北3.85mを測る。壁高は西壁で25cmを測る。壁面は概ね80°の角度で立ち上がる。床面はLIVを使用しており、南側から北側に緩やかに傾斜している。踏み締まりは確認されていない。

本遺構の施設はピット4基が確認された。これらは、概ね支柱穴と壁柱穴に分かれるものと考えられる。堆積土はいずれも暗褐色土である。P2は住居跡のやや南側に位置し、直径40cm、深さ60cmを測ることから支柱穴と考えられる。P1・3・4は直径18～34cm、深さ25～32cmを測り、その配置から壁柱穴と考えられる。

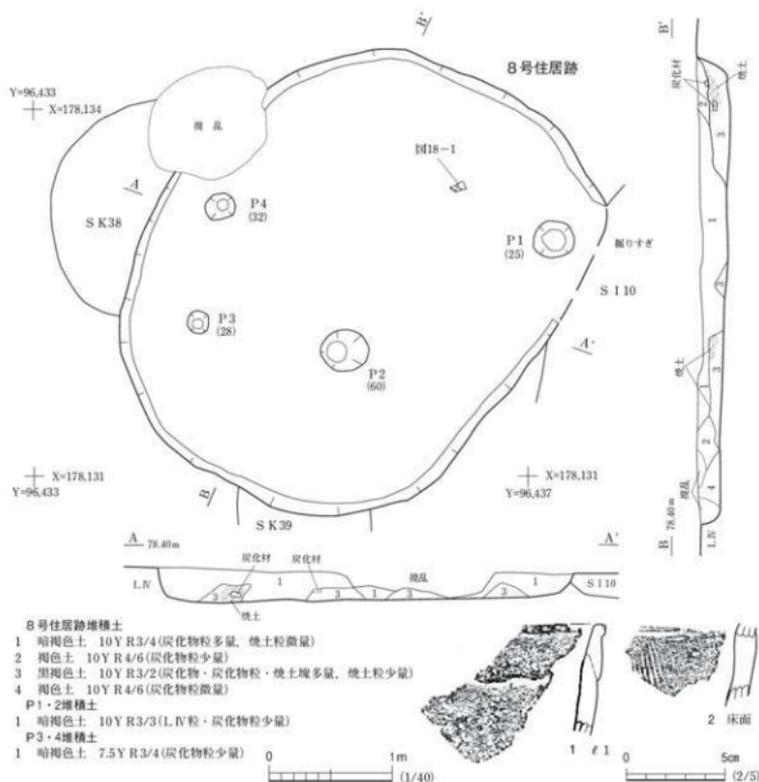


図18 8号住居跡，出土遺物
遺物(図18, 写真48)

遺物は縄文土器8点，石器5点が出土している。図18-1・2は縄文土器である。1は口縁部破片で，外面に積み上げ痕を残すものである。口縁部上端には連続刺突が施され，その下には重層指頭圧痕文が僅かに観察される。2は縄文地文に横位の沈線が施されている。

まとめ

本遺構は楕円形を呈する竪穴住居跡で，炭化材と焼土塊・粒の出土状況から焼失住居と考えられる。上屋を構築していたと考えられる炭化材が出土しており，また焼土の分布から住居の屋根を土で葺いた可能性がある。遺構の所属時期は縄文中期前葉と考えられる。なお，放射性炭素年代測定においても，遺構の時期を示すおおよその値が出ており，出土遺物や重複関係からも矛盾しないと考えられる。

(中野)

9号住居跡 S I 09

遺 構(図19, 写真16・17)

本遺構は、E16・17、F16・17グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。本遺構の西側には10号住居跡が、北西側には12号住居跡が近接する。他の遺構との重複関係は、32号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。

遺構内堆積土は5層に分けられ、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。

本遺構の平面形は、東西に長い隅丸方形を呈する。規模は東西6.80m、南北4.90mを測る。壁高は、遺存状態の良い南壁では35cmを測る。壁面は概ね80°で立ち上がる。床面はLIVが使用されているが、東側ではLVの礫層が露出している。そのため床面は、東側が西側に比べ10cm前後高く、東から西側へ緩やかに傾斜している。床面中央付近では踏み締まりが認められ、その範囲は東西2m、南北1.3mである。この範囲は、礫層の上に貼床を形成していたものと考えられる。

本遺構の施設としてピット6基を確認した。ピットは、礫層が露出していない床面の西側と北側に集中して検出されたが、礫の露出する南側ではP6のみが検出された。ピットの堆積土は、P4がにぶい黄褐色土であるが、それ以外は褐色土である。これらのピットは、大きさからP1・2・5とP3・4・6に分けられる。P1・2・5は、規模が直径25~30cm、深さ14~22cmを測る小型のピットである。P1とP5は壁際に、P2はP1のやや東側に位置する。P1・2・5は、規模から判断して柱穴と考えられる。P3・4・6は北側と南側に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸90~100cm、短軸60~96cmを測る。床面からの深さは22~29cmであり、用途については不明である。

遺 物(図20, 写真47・53)

遺物は縄文土器75点、石器7点が出土している。その多くは住居跡東側の ℓ 4から出土し、住居廃絶後に流れ込んだものと考えられる。

図20-1~7は縄文土器である。1・2は波状口縁の破片であり、胎土や施文の特徴から同一個体と考えられる。それぞれ、口縁部上端と隆線に沿って1段摺りの押捺縄文が施されている。3は隆線と隆線の交差点部に突起状の貼付文が取り付け、その両端には刺突が施されている。また、貼付文の下側に弧線状の平行沈線が施され、その沈線間には交互刺突が施されている。4は2条の垂下する平行沈線が施されている。5・6は、縦方向の単節縄文が間隔を空けて施された後、縦方向の結節回転文が施されていることから同一個体と考えられる。7は胎土に繊維痕が見られる無文の土器である。

図20-8は完形の石鏝である。基部に抉りが入り、形状は二等辺三角形を呈する。

ま と め

本遺構は楕円形を呈する大型の住居跡である。本遺構の特徴は、炉跡を持たず、柱穴も3基と少ない点が挙げられる。遺構の所属時期は、出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。(中野)

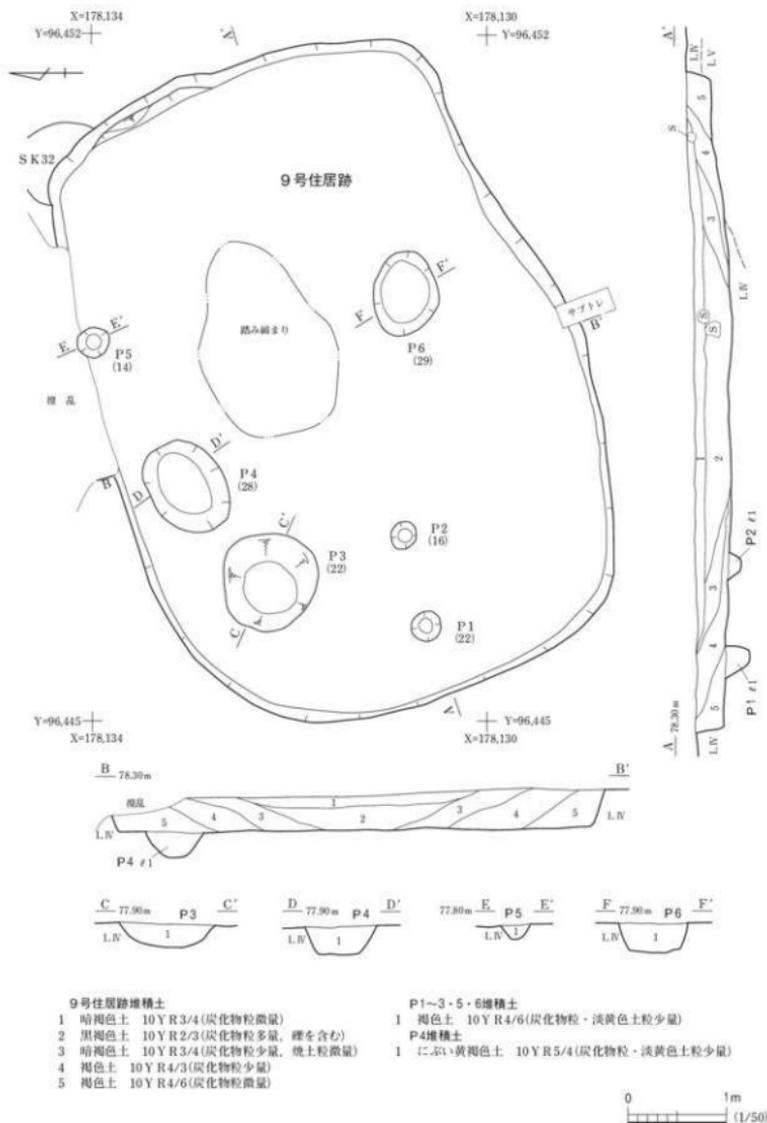


図19 9号住居跡

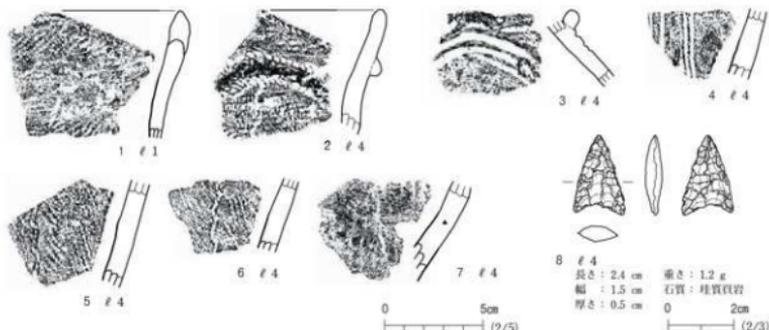


図20 9号住居跡出土遺物

10号住居跡 S I 10

遺 構(図21, 写真18・19)

本遺構は調査区南側のD16・17, E16・17グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。平成17年に行なわれた試掘調査の1号トレンチで確認された遺構である。このトレンチ北側からは多くの縄文土器が出土したため、その周辺の精査を行なって住居跡を確認した。近隣の遺構としては9号住居跡が本遺構の東側に、12号住居跡が北東側に位置する。他の遺構との重複関係は、8号住居跡と重複しており、本遺構の方が古い。

堆積土は3層に分けられ、いずれの層もレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。平面形は南北に長い楕円形を呈する。遺構の規模は東西4.75m, 南北5.65mを測る。壁高は、遺存状態の良い北壁で20cmを測る。壁面は概ね70°で立ち上がる。床面は平坦であり、踏み締まりは見られない。

本遺構の施設は、ビット1基を検出した。P1は直径30cmの円形を呈し、深さ41cmを測る。堆積土は暗褐色土である。床面中央のやや北側には、東西30cm, 南北25cmの範囲に焼土が集積していた。床面から炉は確認されなかったが、焼土の集積からこの周辺に炉が存在していた可能性が高い。

遺 物(図22・23, 写真47・54)

遺物は縄文土器113点, 土製品1点, 石器33点が出土している。その多くは中央北側のℓ1から集中して出土した。これらの縄文土器は、住居廃絶後に複数個体分を廃棄したものと推測され、一括性の強い遺物と考えられる。

図22・図23-1～10は縄文土器である。図22-1は、胴部上半から口縁部にかけての破片である。本資料は、膨らみのある胴部から頸部にかけて強く窄まり、頸部から口縁部が「く」の字状に開く深鉢である。口縁部は波状口縁を呈し、波頂部に横帯S字状突起が取り付け、それ以外は無文部となる。頸部には文様帯が形成され、横位隆線と沈線によって楕円形の横帯区画が描かれている。2は

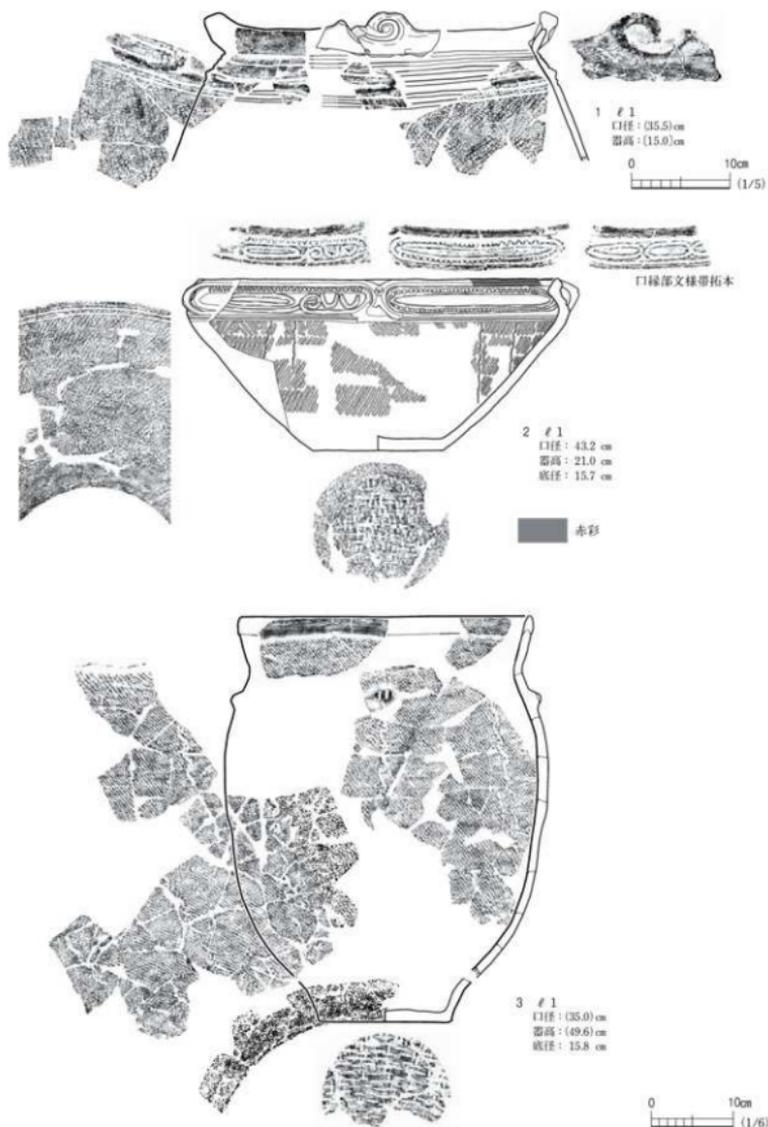


図22 10号住居跡出土遺物(1)

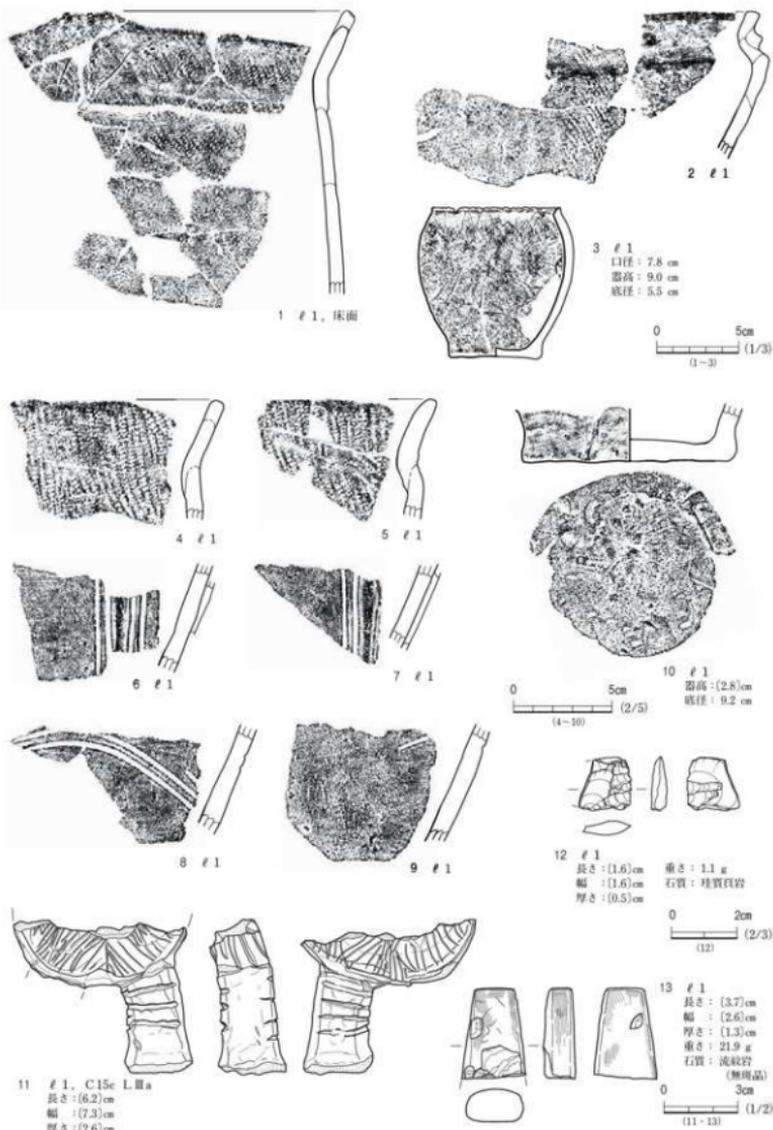


図23 10号住居跡出土遺物(2)

口縁部が内湾する浅鉢で、器形の約半分が遺存している。口縁部には「X」字状の橋状把手が取り付けられており、この把手は口径から見て6単位で取り付けられていたものと推測される。口唇部には部分的にベンガラが塗付されている。口縁部には沈線文で楕円形区画が描かれ、区画内には非対称の楕円文や渦巻文、弧線文が平行沈線により描かれている。また、平行沈線間には、刺突文や交互刺突文が施されている。胴部には単節縄文の施文後、縦回転による結節回転文が施されている。底部には網代痕が見られる。3は深鉢土器である。底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がり、窄まった頸部から口縁部が外傾気味に開く。約3割が遺存する。口縁部は複合口縁になり、無文帯を形成する。頸部には、刻目を持つ瘤状の貼付文が取り付け、胴部には結節文が貼付文に対応して施文されている。底部には網代痕が見られ、使用時に付着したと見られる白色の粘土が観察される。図23-1・4・5は口縁部破片である。1は波状口縁の波頂部に刻目が施され、頸部には積み上げ痕が認められる。4・5は口縁部から頸部にかけての破片である。内面の頸部の下に積み上げ痕が観察され、製作状況や胎土等の特徴から同一個体と考えられる。2は頸部が「く」の字状に括れ、肩部が張る器形を呈する。頸部には刻目を持つ瘤状の貼付文が取り付け、本資料は14号住居跡出土の土器(図30-2)と、原体の撚り方に違いがあるものの、胎土や器形の特徴が極めて近似しているため同一個体の可能性もある。3は約半分が遺存し、口縁部がやや内湾する小型の土器である。口唇部には刻目を施す。6~9は胎土や施文の特徴から同一個体と考えられる。このうち、6・7は無文地に縦方向の隆線を貼り付け、隆線沿いに平行沈線を施している。10は網代痕が見られる底部破片である。

図23-11は胴部下半から片側の脚部にかけての土偶片である。この土偶は、C15グリッドのLⅢaから出土した脚部分と、本住居跡内から出土した胴部分が接合したものである。胴部には鋭利な工具によって沈線が放射状に描かれ、脚部には角状工具による3条の沈線が横位に深く施されている。また、胴部上端の割れ口には白色粘土が付着しており、破損時の補修剤として粘土が用いられたものと考えている。

図23-12・13には石器を掲載した。12は調整剥片である。両面とも片側からのみ調整剥離が加えられている。13は定角式の磨製石斧で、先端部が欠損している。全面に入念な研磨が施され、光沢が見られる。

まとめ

本遺構は、隅丸方形を呈する中型の住居跡である。遺構の特徴としては、炉跡を持たないことや柱穴が1基しか検出されない点が挙げられる。また、堆積土から複数個体の縄文土器や赤彩塗付された浅鉢、小型土器、土偶が出土している。所属時期は、出土した遺物等から縄文中期前葉と考えられる。

(中野)

11号住居跡 S I 11

遺 構(図24, 写真20・21)

本遺構は、調査区南側のC・D16グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。L III a掘削時には、縄文土器と被熱した礫が比較的多く出土した。他の遺構との重複関係はない。

堆積土は2層に分けられ、共にレンズ状の堆積であることから自然堆積と考えられる。

本遺構の平面形は不整形円形を呈する。遺構の規模は東西6.00m、南北6.20mを測る。壁高は、最も遺存する北壁で10cmである。周壁は概ね50°で緩く立ち上がる。床面はLIVに形成されており、概ね平坦である。

本遺構の施設として、地床が2基とピット15基を検出した。地床は、床面の北側で2基確認され、西側を1号が、東側を2号とした。いずれも酸化範囲の形状は楕円形を呈する。1号は規模が長軸120cm、短軸95cmである。北側がやや強く酸化しているが、全体的に焼き締まりは弱い。酸化面の厚さは最大7cmである。2号は規模が長軸82cm、短軸60cmである。酸化面の厚さは最大5cmである。中央部が強く酸化しており、焼き締まりが認められる。また、がの検出面からは、被熱痕跡が認められない礫が1点出土した。

ピットは床面の中央に位置するものと、壁際に位置するものに分けられる。平面形は円形あるいは楕円形を呈する。P 8・9・11は床面の中心に位置する。その中でもP 9は住居のほぼ中心に位置し、直径50cm、床面からの深さは36cmを測り、ピットの中では最も深い。P 1～4・6・7・10・12～14は壁際に近い位置に設置されている。規模は直径25～50cmとやや幅がある。床面に対してほぼ垂直に掘り込まれており、床面からの深さは概ね15～20cmを測る。P 5は直径95cm、深さ26cmを測る。断面形は錐錐状を呈する。住居に伴うピットと考えられるが、用途は不明である。これらの柱穴の堆積土は、住居内堆積土とほぼ同質の暗褐色土である。

遺 物(図25, 写真48・54・55)

遺物は縄文土器51点、石器6点が出土している。遺物の出土状況は、多くがℓ1から散在して出土している。

図25-1～5は縄文土器である。1は胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が内湾する深鉢である。口縁部には有節沈線による区画文が描かれ、胴部には重層指頭圧痕が施されていることから、東関東系の阿玉台I a式と考えられる。2は重層指頭圧痕に垂下する隆線が施されている。3は縄文地文のみのものである。4は口縁部がやや外反し、口唇部に連続的に刺突文、口縁部上端に沿って2段の押捺縄文が施されている。5には隆線が施されている。

図25-6は楕円形の礫を用いた磨石で、片側側面を主な磨面として使用している。7は石皿の欠損品である。表面の平坦面に僅かな磨面の痕跡が観察される。磨面の裏側は粗い剥離面が連続しており、安定して置けるように加工したものと考えられる。

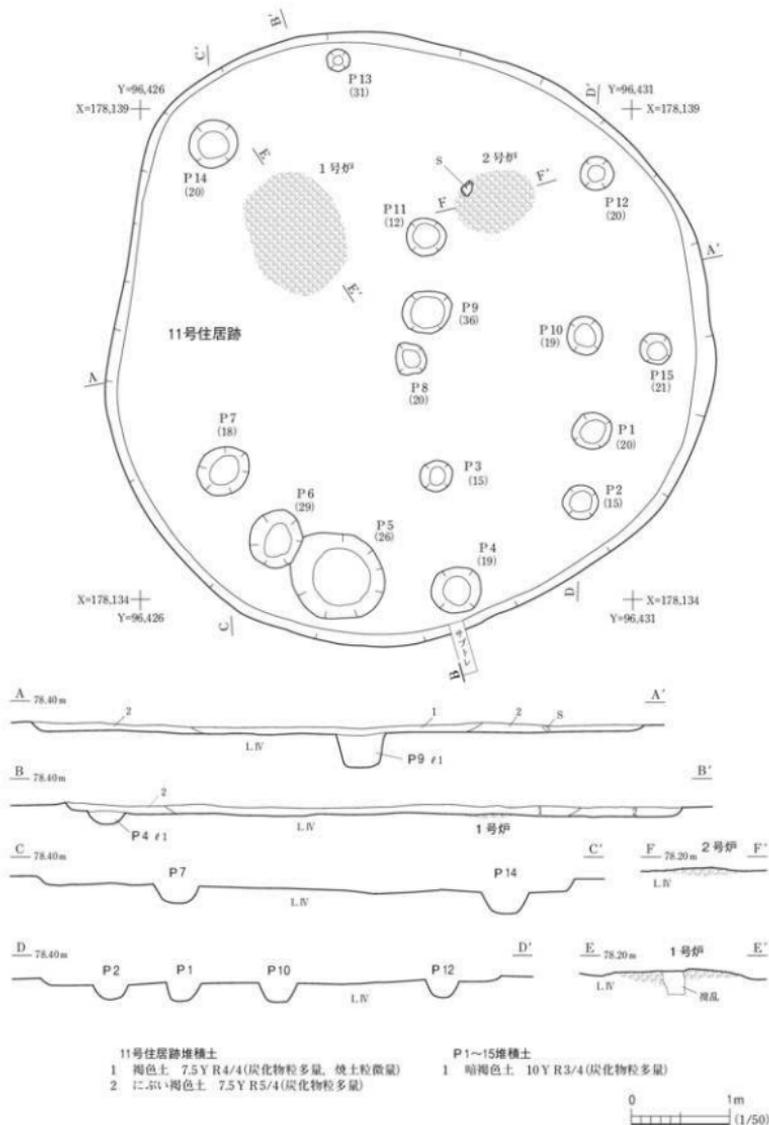


図24 11号住居跡

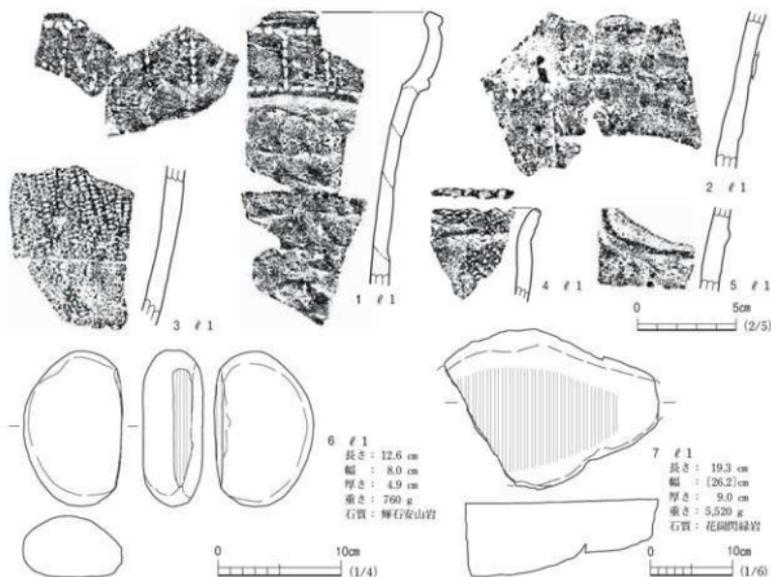


図25 11号住居跡出土遺物

まとめ

本遺構は、楕円形を呈する比較的大型の住居跡である。遺構の特徴として、2基の地床が床面北側に偏っていること、柱穴が15基検出されたことが挙げられる。遺物は、東関東系の阿玉台1a式と、東北系の大木7b式が混在して出土している。遺構の所属時期は出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。

(中野)

12号住居跡 S I 12

遺構(図26, 写真22・23)

本遺構は、調査区南側のE16グリッドに位置する竪穴住居跡である。遺構検出面はLIV上面である。本遺構は、東側半分が後世の掘削により失われているため、遺存状態は悪い。南側には、同時期と考えられる8・10号住居跡が隣接する。

堆積土は単層の暗褐色土である。堆積状況については、層厚が薄いため不明である。

平面形は遺存範囲から楕円形と推測される。規模は東西3.20m、南北4.20mを測り、検出面からの深さは最大5cmである。周壁は床面から緩やかな角度で立ち上がる。床面は西側から東側に向かって緩やかに傾斜するが、概ね平坦である。また、床面は北側で礎の露出が認められる。踏み縮まりは確認できなかった。

住居に伴う施設としては、床面から炉跡とピットが確認された。炉跡は赤褐色に焼土化した地床炉が3基確認され、北側から1号炉・2号炉・3号炉とした。1・2号炉は床面の北側に位置するが、3号炉は南壁側で検出された。炉の形状はいずれも楕円形を呈する。その規模は1号炉が長軸63cm、短軸45cm、2号炉が長軸30cm、短軸24cm、3号炉が長軸46cm、短軸35cmを測り、焼土の厚さは最大2～3cmまで達する。ピットは4基確認され、P1が中央付近、P2～4が住居跡西側に位置する。規模はP1が直径25cm、P2～4が直径40cm前後を測り、床面からの深さは18～50cmである。壁際に近いピットは、中央付近のP1に比べて規模が大きく深さもある。これらのピットについては、その形状や配列、堆積土から柱穴と考えている。

遺物は床面に近い ℓ 1から出土した。図26-5・6に示した石器は、住居跡西側から壊れた状態で出土し、その状況から本遺構廃絶後に投棄されたものと考えられる。

遺物(図26、写真49・54・55)

遺構からは縄文土器72点、石器15点が主に ℓ 1から出土している。縄文土器はI群土器を僅かに含んでいるが、主体はII群土器である。

図26-1～4は縄文土器である。1・2は口縁部資料で、1には波状口縁の頂部下に楕形の貼付文が認められ、2にはV字状の隆線が取り付けられている。3は縦方向から施文された単節の斜縄文で、間隔が空く様に浅めに施文されている。4は浅鉢の胴部から底部にかけての破片で、底部には網代痕が見られる。

図26-5・6は石器を掲載した。5は縦長の河原石を使用した磨石の欠損品である。磨面が部分的に確認されている。本資料は6点の破片が接合したもので、その中には13号住居跡の ℓ 1から出土したものも含まれる。このため本資料については、出土量が多い本遺構に掲載した。6は台石あるいは石皿未製品と判断した。本資料は拳大の破片が接合したものである。側縁や裏面は丁寧に打ち欠いて整形されているが、表面は自然面を残しており平滑である。磨面や火を受けた痕跡は認められなかった。

まとめ

本遺構は、約半分が遺存する住居跡である。壁際に位置する炉は、ほぼ同時期と考えられる14号住居跡でも確認されている。住居内から出土した磨石は、13号住居跡から出土した磨石の破片と接合するため、本遺構の廃絶時期は、13号住居跡の廃絶時期に近いものと考えられる。本住居跡の時期は、出土遺物から縄文中期前葉と考えている。(国 井)

13号住居跡 S I 13

遺構(図27、写真24・25)

本遺構は、調査区南側のC14グリッドに位置する。LⅢ a掘削時、炭化物粒を含む不定形の暗褐色土が東西12m、南北8mに広がることを確認し、少なくとも2軒以上の住居跡が想定された。この周辺の精査により、遺構はLⅣ上面で検出された。しかし、平面プランでは遺構の重複関係が判

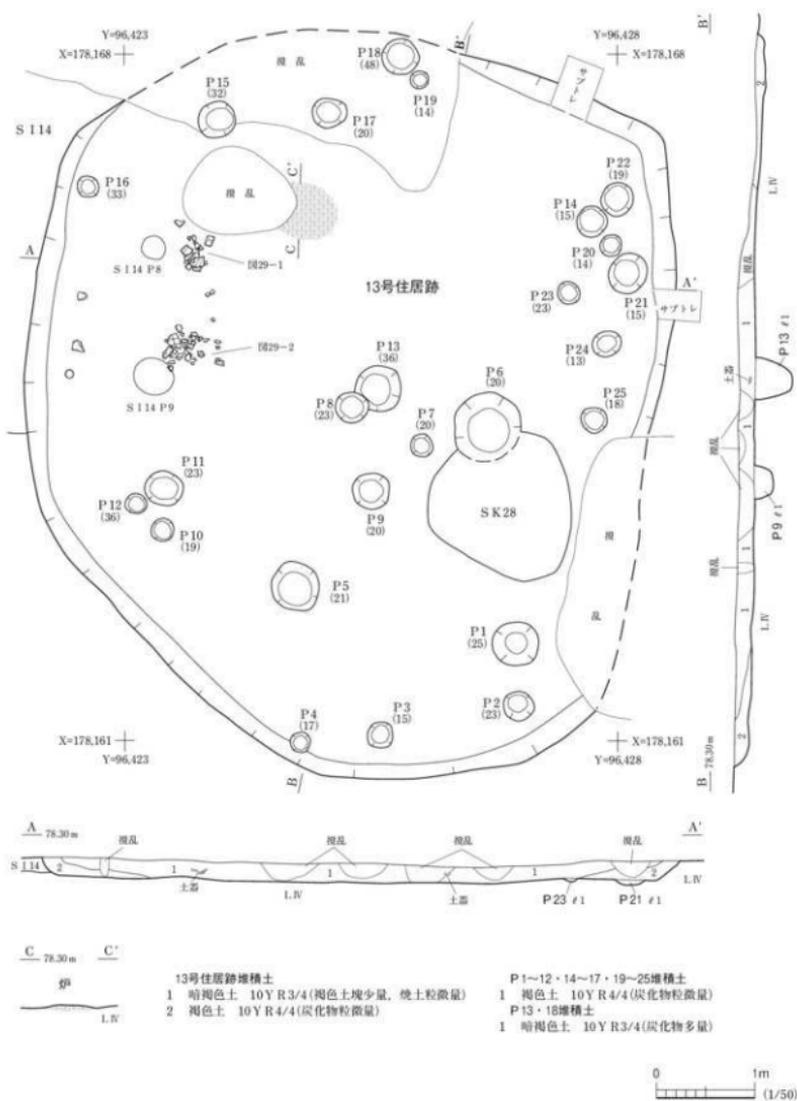


図27 13号住居跡

断できないため、東西方向に設定した土層断面で確認した。その結果、重複する2軒の住居が確認され、東側の新しい住居を本住居跡とし、西側の住居跡を14号住居跡とした。他の遺構との重複関係は、28号土坑と重複し、本住居跡の方が古い。

遺構内堆積土は2層に分けられた。 $\ell 1$ はレンズ状の堆積、 $\ell 2$ は壁際に三角形に堆積することから、共に自然堆積土と考えられる。

本遺構の平面形は、南北にやや長い楕円形を呈する。遺構の規模は東西6.40m、南北7.50mを測る。壁高は遺存状態の良い南壁で20cmを測る。壁面は概ね 50° で緩く立ち上がる。床面は平坦であるが、踏み縮まりは見られない。

本遺構の施設は、地床が1基とピット25基を検出した。地床は、住居跡の北壁から約1.5mに位置し、西側が乱れによって壊されている。形状は楕円形を呈し、規模は長軸75cm、短軸55cmを測る。全体的に強く酸化しており、酸化面の厚さは最大5cmである。

ピットは25基が確認された。住居跡の中央に位置する柱穴と、壁際に位置する柱穴に分けられる。P5～9・13は中央に位置する。平面形は円形あるいは不整形である。規模は直径20～50cm、深さ20～36cmを測る。P1～4・10～12・14～17・19～25は、壁際に位置する。平面形は概ね円形である。規模は20～35cm、深さ14～23cmを測り、大きさには幅が見られる。これらのピットは、床面に対してほぼ垂直に掘り込まれていた。また、P18は壁際に位置し、規模は直径38cm、深さ48cmを測る。ピットの中でも比較的大型のものである。

遺物(図28・29, 写真50・53～55)

遺物は縄文土器439点、石器14点が出土している。遺物の出土状況は、その多くが $\ell 1$ 下部から床面にかけて、住居跡の中央から北側で散在して出土している。出土状況から住居廃絶後、縄文土器片や石皿片などを廃棄したものと推測され、ある程度一括性の高い遺物と捉えている。

図28・図29-1～9は縄文土器である。図28-1は口縁部が外傾し、頸部が「く」の字状に括れる深鉢で、器形の約3割が遺存する。口縁部は波状口縁で、波頂部には刻み状の刺突が施されている。上半部には隆線が波状に描かれ、平行沈線が隆線に沿うように施されている。また、平行沈線の間には交互刺突文が施されている。2は1と同様な器形を呈し、器面には単節縄文を施す。3は、膨らみの小さい胴部から頸部にかけての大破片である。地文には無節の原体を用いた縄文を施し、胴部上半部には1段階りの押捺縄文が不規則に施されている。

図28-4～8・10、図29-1・3は、有節沈線を多用する阿玉台I a式のⅡ群2類土器である。図28-4～8・10は、口縁部が内湾し、波状口縁を呈する土器である。4は隆線に沿って有節沈線を施している。胴部には重層する指頭圧痕文が施され、「Y」字状の隆線が垂下する。5は波状口縁の破片で、波頂部には刻目を持つ瘤が取り付けられ、波頂部と口唇部にも刻目が施されている。波頂部下には、有節沈線によって十字文が描かれ、その内面には三角形の沈刻文が施されている。6は有節沈線が横位方向と、そこから垂下するように施されている。7・8・10は、口縁部上端に沿ってペン先状工具による連続刺突文が施されている。図29-1・3は、胴部から頸部にかけての破片

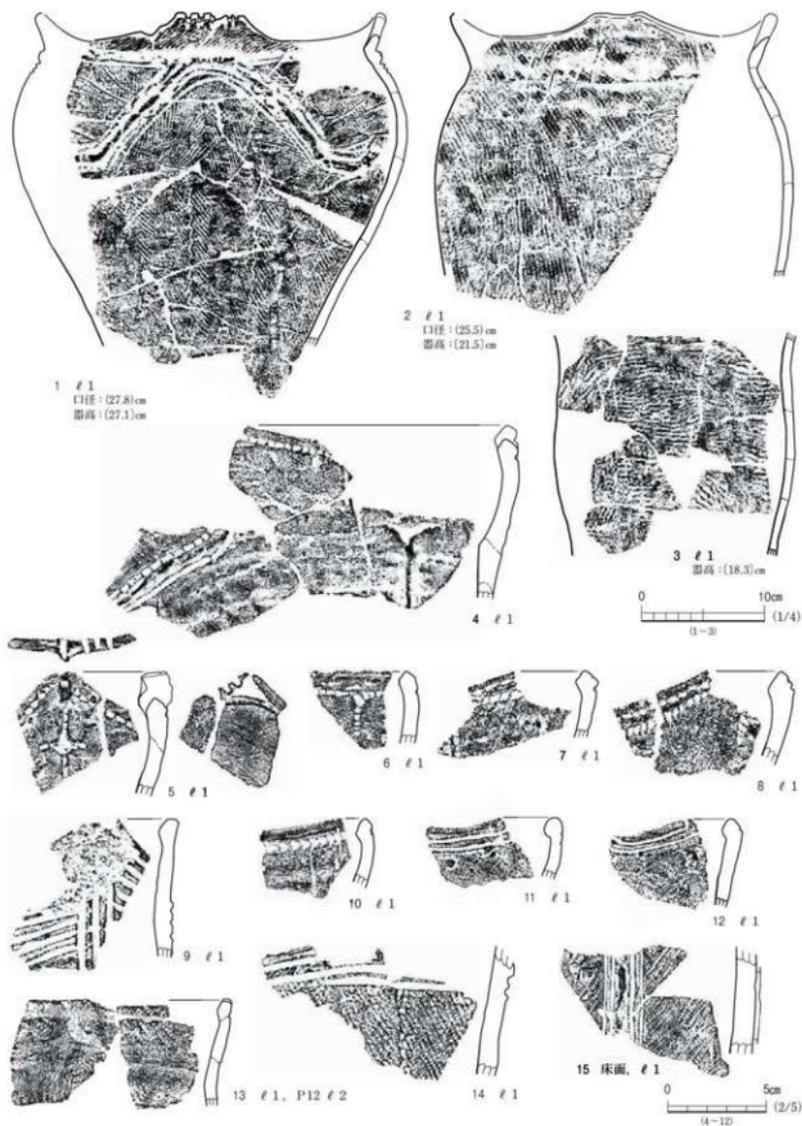


图28 13号住居跡出土遺物(1)

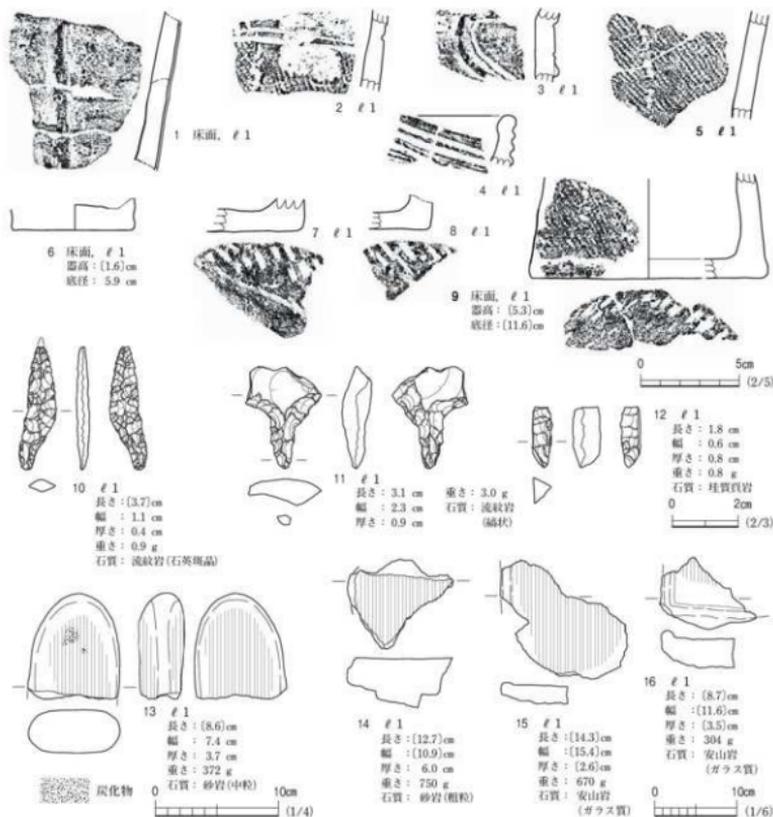


図29 13号住居跡出土遺物(2)

である。1は隆線が胴部を垂下するものである。3は頸部下に横位方向の隆線が貼り付けられ、それに沿って有節沈線が施されている。胴部には、逆「ノ」の字状隆線の片側に沿うように沈線が施されている。

図28-9・14、図29-2・4・5・9は、胎土や原体の特徴から同一個体と考えられる。これらは、底部から波状の口縁部にかけての破片であるが、復元には至らなかった。図28-9と図29-4は口縁部破片であり、9は波頂部から3条の沈線が垂下し、そこから斜位に沈線が施されている。図28-14、図29-2・5は、頸部から胴部にかけての破片で、単節の縄文地上に結節回転が施された後、横位の沈線が施されている。図28-11・12は波状口縁の資料で、口縁部上端に沿って平行沈線が施されている。胎土や口縁部の特徴から、同一個体と考えられる。同図13は口縁部が緩やか

な波状口縁を呈し、僅かに外反する破片である。器面には積上げ痕が残され、単節縄文が施されている。同図15は、垂下する隆線に平行沈線が沿うものである。図29-6～9は底部破片であり、7～9には網代痕が見られる。

図29-10～16は石器を掲載した。10は先端が欠損する片足状の石鎌である。11はつまみ部を有する石錐である。つまみ部を除いた両面から調整剥離が加えられている。12は調整剥片である。両面から剥離を加えており、製品の破片の可能性もある。13は楕円形礫を用いた磨石である。両面に磨面が見られ、表面には黒色の付着物が見られる。14～16は石皿の欠損品である。いずれも磨面は平坦で、15・16の周縁部分は硯の縁のように一段高くなっている。この他に、本住居出土の磨石片の一部が12号住居跡出土の遺物(図26-5)と接合している。

まとめ

本遺構は、長楕円形を呈する大型の住居跡である。地床が1基と柱穴が25基検出された。本遺構の特徴として、柱穴が多く検出されたことと、住居跡の規模に比べがが小型であることが挙げられる。柱穴の配置やが跡の設置場所が北側に偏る点など、形態的に11号住居跡と共通点が多く、該期の住居形態の特徴と思われる。また出土遺物は、比較的まとまった東関東系の阿玉台I a式土器と大木7 b式土器が混在して出土しており、関東と東北の中期前葉の編年を考える上で重要な資料である。遺構の所属時期は、出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。(中野)

14号住居跡 S I 14

遺構(図30, 写真26・27)

本遺構は、調査区南側のB・C13グリッドに位置する。検出面はLIV上面である。他の遺構との重複関係は、13号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。

遺構内堆積土は2層に分けられた。ℓ1はレンズ状の堆積、ℓ2は壁際に三角形に堆積していることから、共に自然堆積土と考えられる。本遺構の平面形は、不整形円形もしくは楕円形を呈するものと推測される。遺存する規模は東西2.75m、南北4.30mを測り、壁高は15cm前後を測る。周壁は概ね50°で比較的緩く立ち上がる。

本遺構の施設は、地床が2基と9基のピットを検出した。が跡は西側から1号が、2号がとした。1号がは長軸63cm、短軸57cmの楕円形を呈する。酸化面の厚さは2cmで、床面は僅かに焼けている。2号がは長軸87cm、短軸50cmの楕円形を呈する。酸化面の厚さは5cmで、床面は全体的に強く酸化している。また、が跡の東側は13号住居跡のP15により壊されている。

ピットは9基を検出した。平面形は概ね円形を呈する。P1とP9は南壁際に位置し、P1は直径45cm、深さ55cm、P9は直径42cm、深さ50cmを測る。この2基は大型であることから、支柱穴と考えられる。それ以外の柱穴は、P2～8が2号が跡を囲むように配置されている。P1・9を除くピットは、直径22～35cm、深さ20～30cmを測る。これらのピットは大きさや深さにばらつきが見られ、小型のピットが多い。

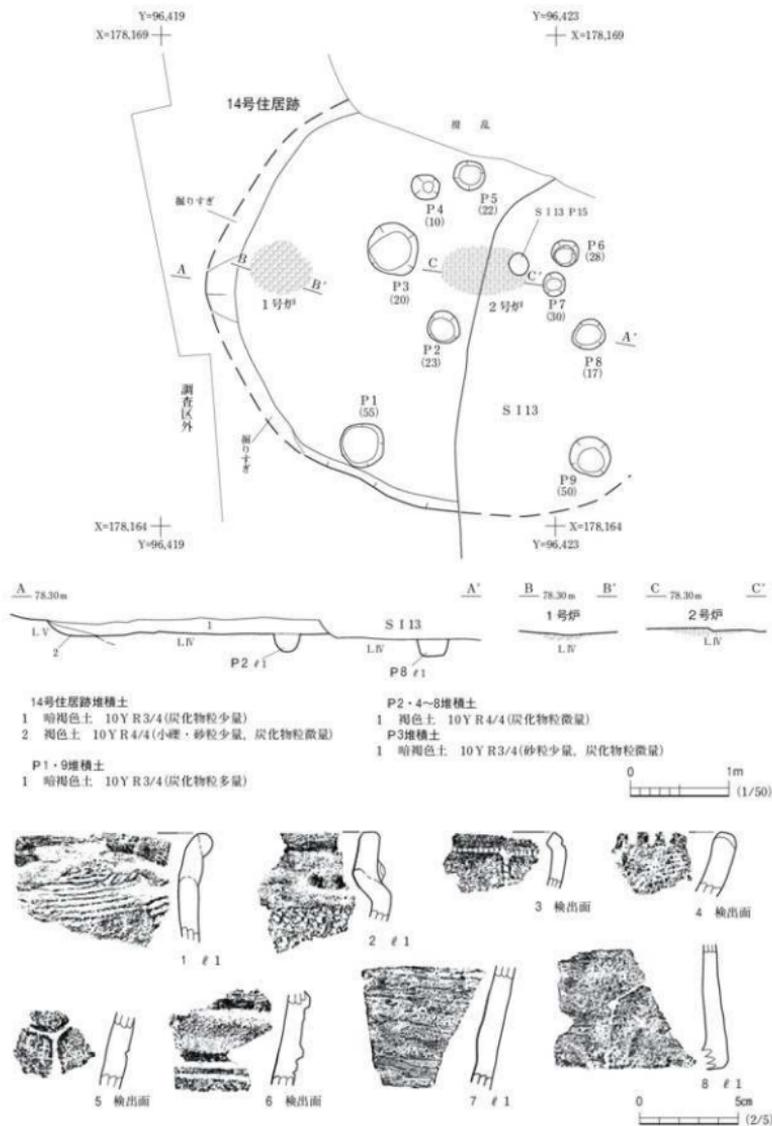


図30 14号住居跡, 出土遺物

遺物(図30, 写真49)

遺物は縄文土器47点, 石器4点が出土している。遺物は多くが ℓ 1から散在して出土している。石器はいずれも剥片である。

図30-1~8は縄文土器である。1~4は口縁部破片, 5~7は胴部破片である。8は胴部下半から底部にかけての破片である。1は複合口縁を呈し, 無節の縄文が施されている。地文や胎土の特徴から, 13号住居跡出土の土器(図28-3)と同一個体と考えられる。2は頸部が「く」の字状に括れ, 肩部が張るものである。頸部には瘤状の貼付文が取り付けられている。3は有節沈線が口縁部に沿うように横位方向と, そこから垂下するように施されている。4は口唇部に刻み状の刺突が施されている。5・6は胎土の特徴から同一個体と思われる。5は沈線で剣先状のモチーフを描いている。6は横位の隆線に沈線が沿うように施されている。7・8は横位方向の丁寧なミガキが施された, 無文の土器である。

まとめ

本遺構は遺存状態の悪い住居跡である。遺構の特徴として, 南壁際に支柱穴が2基設置されていることと, 地床炉を囲むように柱穴が配置されていることが挙げられる。13号住居跡によって壊されていることから, 本遺跡で検出された縄文中期の住居跡の中で, 最も古く構築された住居跡の一つと考えている。遺構の所属時期は, 住居跡の重複関係や出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。

(中野)

第3節 土坑

土坑は39基検出された。これらは調査区のほぼ全域で確認され, 調査区中央部に約半数が集中する一方, 北側では希薄となる。規模は小型から大型まで, 形状は円形や楕円形を呈するものが多い。時期的には, その大半が住居跡と同様, 縄文早期末葉と中期前葉に分けられる。

1号土坑 SK01(図31・37・38, 写真29・51・53)

本遺構は, 調査区北側のD4・5グリッドに位置し, LIV上面で検出した。平面形は楕円形を呈し, 規模は長径207cm, 短径184cmを測る。検出面の深さは最大25cmである。周壁は全体に急角度で傾斜し, 底面は概ね平坦である。堆積土は2層に分けられ, ℓ 1は土器片やLIV塊を含むことから人為堆積の可能性が高く, ℓ 2は壁際に三角形に堆積していることから自然堆積と判断した。土坑中央部の ℓ 1下部からは, 縄文土器がまとまって出土しており, これらの土器は出土状況から投棄されたものと判断した。

遺物は縄文土器185点, 石器6点が出土した。土器はI群土器に相当するもので, その多くは撚糸地文のものである。図37-1~5は縄文土器である。1~3は撚糸地文のもので, 1の内面には条痕が施されている。1は5号住居跡出土の土器(図11-5)と撚糸文の原体や条痕の幅が同様であ

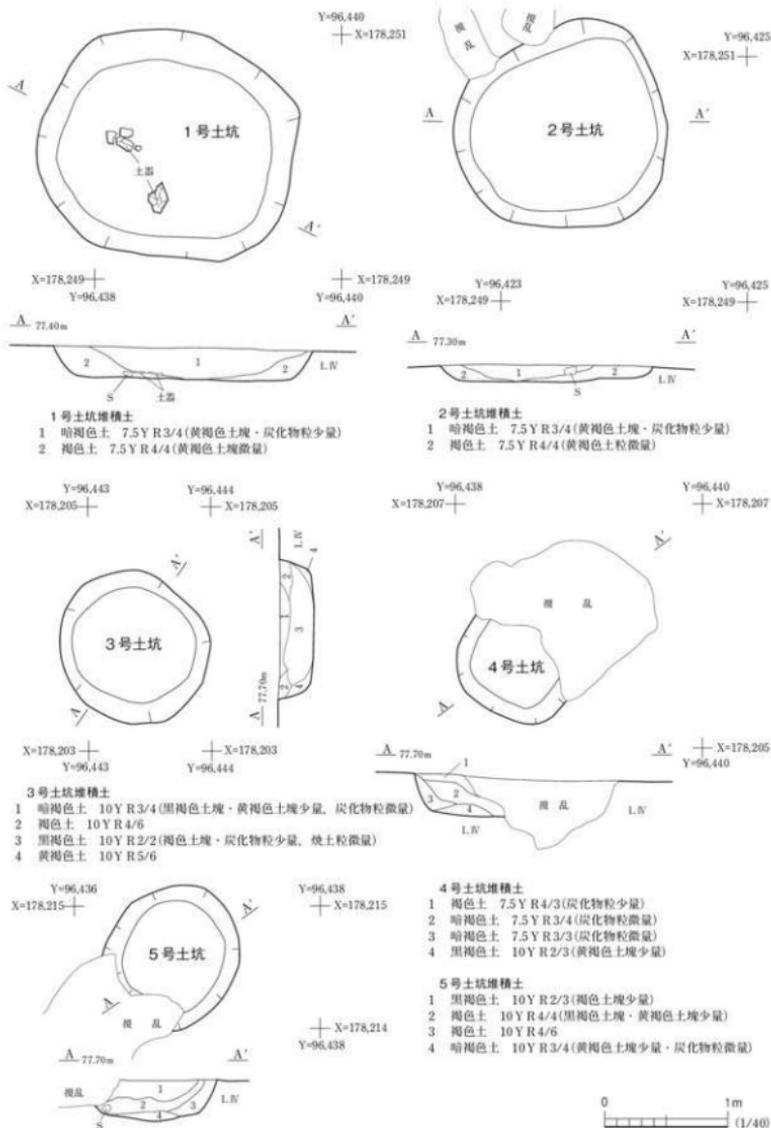


图31 1~5号土坑

ることから、同一個体と考えている。4は縦位の縄文が施され、口唇部には縄文が回転施文されている。図38-2は石楯で周縁部に細かい調整が施されている。4は磨石の欠損品で側面に磨面が認められる。本遺構の時期は出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。(国 井)

2号土坑 SK02(図31・37・38, 写真29・51・53)

調査区北側のC4・5グリッドに位置する土坑である。遺構検出面はLIV上面である。遺構の北側は、木根により一部壊されている。平面形は楕円形を呈し、規模は長径171cm, 短径169cmを測る。検出面からの深さは最大12cmである。周壁は西壁を除いて緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺構内堆積土は2層に分けられ、いずれもレンズ状に堆積しており自然堆積と判断した。

遺物は縄文土器55点、石器1点が出土している。土器は ℓ 1から多く出土しており、全てI群土器である。1号土坑と同様に燃糸地文の土器が大半を占める。図37-6～8は縄文土器である。7は無文であり、6には斜縄文、8には燃糸文が施されている。図38-3は縦長の石匙である。表面は丁寧な調整剝離を加えているが、裏面はつまみ部周辺と片側の側縁にのみ調整剝離を施している。本遺構の性格は不明であるが、時期は出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。(国 井)

3号土坑 SK03(図31・37, 写真29・51)

本遺構は、調査区中央部のD9グリッドに位置し、LIV上面で検出した。遺構内堆積土は4層に分けられ、 ℓ 1・2・4は流入や壁崩落による自然堆積、 ℓ 3は混入物を含むことから人為堆積と判断した。平面形は円形を呈し、規模は直径126cmを測る。検出面からの深さは最大28cmである。周壁は全体に急な角度で立ち上がり、底面は概ね平坦である。

遺物は ℓ 1から縄文土器10点が出土した。いずれも胎土中に植物繊維を含まないものである。図37-9・10は口縁部片である。9の口縁端部には刻み状の刺突が加えられ、10～12には斜縄文が施されている。本遺構の時期は出土遺物から縄文中期前葉と考えている。(国 井)

4号土坑 SK04(図31, 写真29)

本遺構は、調査区中央部のD9グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。本遺構は、後世の擾乱により北東側が失われていた。遺構内堆積土は4層に分けられ、いずれもレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。遺存範囲から平面形は楕円形と推定され、遺存する規模は長径101cm, 短径77cmを測る。検出面からの深さは最大33cmである。周壁は急角度で立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺物は出土していない。本遺構の時期は、周辺の遺構から縄文中期前葉と考えたい。(国 井)

5号土坑 SK05(図31, 写真30)

調査区中央部のD8グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。本遺構は、後世の擾乱

により南西側が失われていた。遺構内堆積土は4層に分けられ、いずれもレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。遺存範囲から平面形は楕円形と推定され、遺存する規模は長径107cm、短径105cmを測る。検出面からの深さは最大33cmである。周壁は急角度で立ち上がり、底面は概ね平坦である。

遺物は、 $\ell 1 \cdot 2$ から縄文土器3点が出土した。いずれもⅡ群土器である。本遺構の時期は、出土遺物から縄文中期前葉と考えている。(国井)

6号土坑 SK06(図32, 写真30)

本遺構は、調査区北側のE7グリッドに位置する。遺構の上面が農道であったため耕作による削平を受けず、LⅢbで検出された。堆積土は3層に分けられ、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。平面形は円形を呈し、規模は直径が128cmを測る。検出面の深さは最大62cmである。周壁は全体に急角度で立ち上がる。底面はLVの礫層を掘り込んでいるが、概ね平坦である。遺物は $\ell 2$ から縄文土器が2点出土した。いずれもⅠ群土器に該当する。本遺構の時期は、検出層位から縄文中期前葉と考えたい。(国井)

7号土坑 SK07(図32, 写真30)

調査区中央のD9グリッドに位置する小型の土坑である。遺構検出面はLⅣ上面である。平面形は楕円形を呈し、規模は長径87cm、短径71cmを測る。検出面からの深さは最大21cmである。周壁は全体に急角度で立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺構内堆積土は2層に分けられ、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。 $\ell 1$ は基本層位のLⅢaに近似する。遺物は $\ell 1$ から縄文土器が3点出土している。これらの土器は、器面が丁寧に磨かれた無文のものである。本遺構の時期は、堆積土の特徴や出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。(国井)

8号土坑 SK08(図32, 写真30)

本遺構は、調査区中央部のD9グリッドに位置し、LⅣ上面で検出された。遺構内堆積土は3層に分けられ、 $\ell 1 \cdot 2$ は流入や壁崩落による自然堆積、 $\ell 3$ は混入物を含むことから人為堆積と判断した。平面形は円形を呈し、規模は直径100cmを測る。検出面からの深さは最大20cmである。周壁は、北側が急角度で立ち上がるが、南側では緩やかである。底面は概ね平坦である。遺物は出土していないが、周辺の遺構から縄文中期前葉と考えたい。(国井)

9号土坑 SK09(図32, 写真30)

本遺構は、調査区中央部のD9グリッドに位置する。遺構検出面はLⅣ上面である。平面形は円形を呈し、規模は直径120cmを測る。検出面からの深さは最大20cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺構内堆積土は2層に分けられ、レンズ状の堆積を示すことから自

然堆積と判断した。また、7号土坑の堆積土に近似する。遺物は ϕ 1から縄文土器1点が出土した。細片のため土器の文様は観察できないが、胎土には繊維が混和されている。遺構の性格は不明であるが、時期は周辺の遺構から縄文中期前葉と考えている。(国 井)

10号土坑 SK10(図32, 写真30)

調査区中央部のD9・10グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。平面形は楕円形を呈し、規模は長径140cm、短径121cmを測る。検出面からの深さは最大29cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺構内堆積土は3層に分けられ、いずれもレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。遺物は出土していないが、周辺の遺構から縄文中期前葉に所属するものと考えている。(国 井)

11号土坑 SK11(図32, 写真30)

調査区中央部のD9グリッドに位置する土坑である。遺構検出面はLIV上面である。遺構内堆積土は2層に分けられ、いずれもレンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。平面形は楕円形を呈し、規模は長径115cm、短径102cmを測る。検出面からの深さは最大22cmである。周壁は全体に緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺物は出土していないが、周辺の遺構から縄文中期前葉に所属するものと考えている。(国 井)

12号土坑 SK12(図32, 写真30)

調査区中央部のD・E9グリッドに位置する土坑である。遺構検出面はLIV上面である。遺構内堆積土は2層に分けられ、いずれもレンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。平面形は円形を呈し、規模は直径95cmを測る。検出面からの深さは最大18cmである。周壁は急角度で立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺物は出土していないが、周辺の遺構から縄文中期前葉に所属するものと考えている。(国 井)

13号土坑 SK13(図32, 写真31)

調査区中央部のD10グリッドに位置する土坑である。遺構検出面はLIV上面である。遺構内堆積土は3層に分けられ、いずれも流入による堆積であることから自然堆積と考えられる。平面形は円形を呈し、規模は直径110cmを測る。検出面からの深さは最大20cmである。周壁は南側が緩やかであるが、北側の立ち上がりは急角度である。底面は概ね平坦である。遺物は出土していないが、周辺の遺構から縄文中期前葉に所属するものと考えている。(国 井)

14号土坑 SK14(図33, 写真31)

調査区中央部のF10グリッドに位置する土坑である。遺構検出面はLIV上面である。遺構内堆積

第1編 原B遺跡

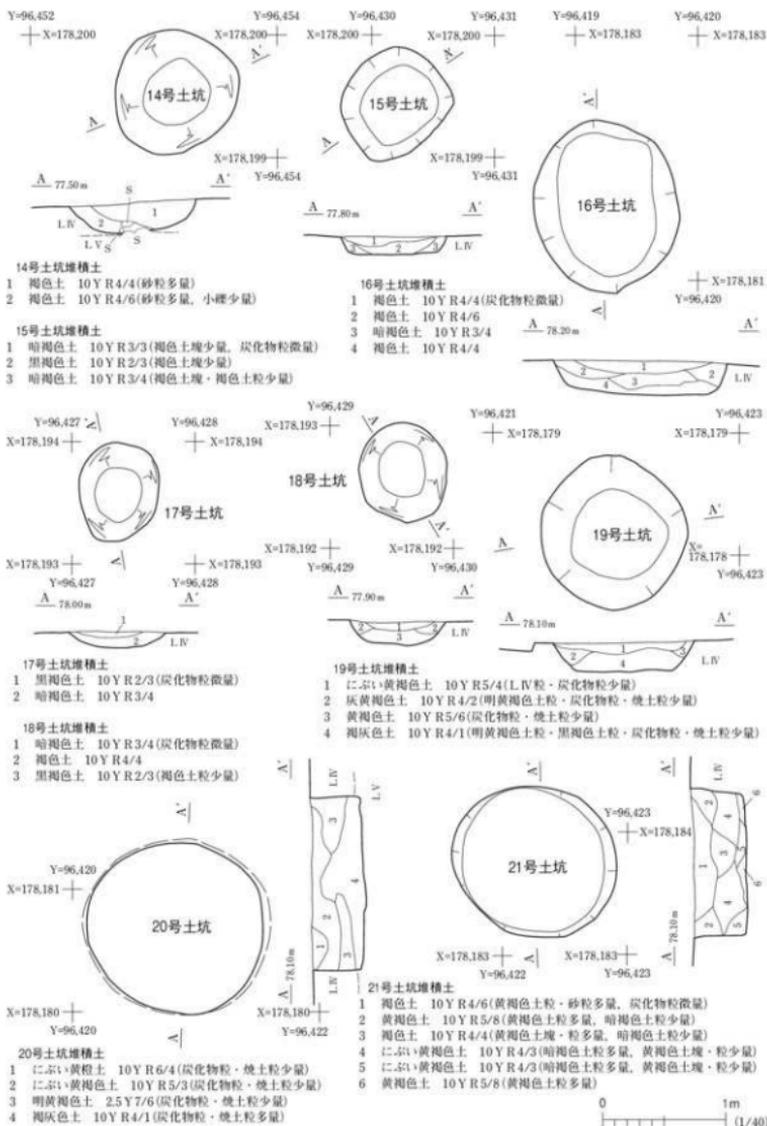


図 33 14~21号土坑

土は2層に分けられ、レンズ状の堆積から自然堆積と判断した。いずれの層もLⅢbに近似する。平面形は円形を呈し、規模は直径106cmを測る。検出面からの深さは最大23cmである。周壁は全体に緩やかに立ち上がる。底面は下層のLVが露出しているが、概ね平坦である。遺物は出土していない。遺構の年代は、堆積土から縄文早期末葉と推測される。(国 井)

15号土坑 SK15(図33, 写真31)

本遺構は、調査区中央部のC・D10グリッドに位置する、小型の土坑である。遺構検出面はLIV上面である。遺構内堆積土は3層に分けられ、レンズ状の堆積から自然堆積と判断した。ℓ1はLⅢaに近似する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径86cm、短径80cmを測る。検出面からの深さは最大14cmである。周壁は全体的に急角度で立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺物はℓ1から縄文土器1点が出土した。性格は不明であるが、本遺構の時期は、周辺の遺構から縄文中期前葉と考えている。(国 井)

16号土坑 SK16(図33・37, 写真31・51)

本遺構は、調査区中央部のB11グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。遺構内堆積土は4層に分けられ、概ねレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。平面形は、長軸方位が真北を指す楕円形を呈し、規模は長径140cm、短径117cmを測る。検出面からの深さは最大29cmである。周壁は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。遺物はℓ2から縄文土器2点、石器1点が出土した。図37-13・14は、植物繊維を混和する燃系地文の縄文土器である。14は尖底の底部資料で、その大きさから小型の土器と考えられる。遺構の年代は、出土土器から縄文早期末葉と推測される。(国 井)

17号土坑 SK17(図33, 写真31)

本遺構は、調査区中央部のC10グリッドに位置する小型の土坑である。遺構検出面はLIV上面である。遺構内堆積土は2層に分けられ、レンズ状の堆積から自然堆積と判断した。平面形は楕円形を呈し、規模は長径80cm、短径65cmを測る。検出面からの深さは最大13cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、全体に皿状を呈する。このため底面は中央部が最も低くなる。遺構の形状は18号土坑に近似する。遺物が出土していないため本遺構の時期は不明である。(国 井)

18号土坑 SK18(図33, 写真31)

本遺構は、調査区中央部のC10グリッドに位置する小型の土坑である。遺構検出面はLIV上面である。遺構内堆積土は3層に分けられ、ℓ2が壁の崩落土で、それ以外はレンズ状の堆積を示すことからℓ2も含め自然堆積と判断した。平面形は円形を呈し、規模は直径81cmを測る。検出面からの深さは最大19cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺構の形状は17号

土坑に近似する。遺物が出土していないため、本遺構の時期は不明である。(国 井)

19号土坑 SK19(図33, 写真31)

本遺構は、調査区中央部のC12グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。遺構内堆積土は4層に分けられる。堆積状況は18号土坑に近似するが、自然堆積あるいは人為堆積かは不明である。平面形は円形を呈し、規模は直径125cmを測る。検出面からの深さは最大24cmである。周壁は急な角度で立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺物は縄文土器2点、石器2点が出土した。本遺構の時期は、出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。(国 井)

20号土坑 SK20(図33・37, 写真32・51)

本遺構は、調査区中央部のC11・12グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。遺構内堆積土は4層に分けられる。φ4は山状に堆積しているが、人為堆積を示す状況は確認できなかった。平面形は円形を呈し、規模は直径143cmを測る。検出面からの深さは最大43cmである。周壁は僅かにオーバーハンクスし、直立気味に立ち上がる。このため全体に円筒形を呈する。底面はLV上面を使用しており、概ね平坦である。

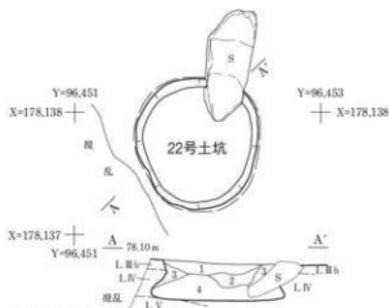
遺物は縄文土器18点が出土しており、全てⅡ群土器である。図37-15~17は縄文土器である。15・17は口縁部資料で、15の外面には斜縄文が、17の口唇部直下には2段の縄文が施されている。16は胴部資料で、横位の隆帯上に刺突を施している。遺構の性格は、形状から貯蔵穴と考えられる。本遺構の年代は、遺構の性格や出土遺物から縄文中期前葉と推定される。(国 井)

21号土坑 SK21(図33・37, 写真32・51)

本遺構は、調査区中央部のC11グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。遺構内堆積土は6層に細分され、いずれも壁崩落や流入によるものと考えられることから、自然堆積と判断した。平面形は円形を呈し、規模は直径134cmを測る。検出面からの深さは最大43cmである。周壁は直立気味に立ち上がり、全体に円筒形を呈する。底面は平坦である。遺物は縄文土器12点、石器3点が出土している。土器はⅠ群とⅡ群が混在する。図37-18は捻系地文の縄文土器であるが、本遺構に伴う遺物ではない。性格については、20号土坑と同様の形状から貯蔵穴と考えられる。本遺構の年代は、遺構の性格や出土遺物から縄文中期前葉と推定される。(国 井)

22号土坑 SK22(図34・37, 写真32・51)

本遺構は、調査区南側のF16グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢbである。堆積土は4層に分けられ、堆積状況から、いずれも流入もしくは壁崩落の様相を示す自然堆積と判断した。平面形は円形を呈し、規模は直径107cmを測る。検出面からの深さは最大31cmである。周壁は断面形がフラスコ形を呈する。底面は、西側でLVの礫が露出しているが、概ね平坦である。遺物は縄文土器



22号土坑堆積土

- 1 暗褐色土 10 Y R 3/3(炭化物粒少量)
- 2 黑褐色土 10 Y R 2/3(暗褐色土塊、炭化物粒少量)
- 3 褐色土 10 Y R 4/4
- 4 黒色土 10 Y R 2/1(黒褐色土塊、炭化物粒少量)

Y=96,426
X=178,217



24号土坑堆積土

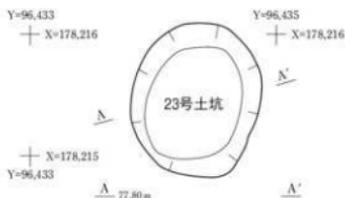
- 1 暗褐色土 10 Y R 3/4(炭化物粒少量)
- 2 暗褐色土 10 Y R 3/3(炭化物粒微量)
- 3 黒褐色土 10 Y R 2/3(炭化物粒微量)

Y=96,431
X=178,198



26号土坑堆積土

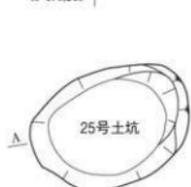
- 1 黒褐色土 10 Y R 3/2(炭化物粒少量)
- 2 暗褐色土 10 Y R 3/4(褐色土粒、炭化物粒微量)
- 3 暗褐色土 10 Y R 3/3(炭化物粒微量)



23号土坑堆積土

- 1 暗褐色土 10 Y R 3/3
- 2 黒褐色土 10 Y R 3/2(褐色土塊多量)
- 3 暗褐色土 10 Y R 3/4(褐色土塊多量)

Y=96,428
X=178,215



25号土坑堆積土

- 1 褐色土 10 Y R 4/6(砂粒少量、炭化物粒、焼土粒微量)
- 2 黄褐色土 10 Y R 5/6(小礫少量、炭化物微量)

Y=96,455
X=178,137



27号土坑堆積土

- 1 暗褐色土 7.5 Y R 3/4(焼土塊、粒多量、小礫、炭化物粒少量)
- 2 暗褐色土 10 Y R 3/4(小礫少量、炭化物粒微量)
- 3 暗褐色土 10 Y R 3/3(小礫、炭化物粒少量、焼土粒微量)
- 4 暗褐色土 10 Y R 3/3(小礫、炭化物粒少量)

0 1m
(1/40)

図34 22~27号土坑

1点、石器1点が出土している。図37-19は縄文土器の口縁部資料で、内湾し、口唇部下に横位の有筋沈線が施されている。本遺構の性格は、形状から貯蔵穴と考えられる。年代は、遺構の性格や出土遺物から縄文中期前葉と推定される。(国 井)

23号土坑 SK23(図34・37, 写真32・51)

本遺構は、調査区中央部のD8グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。遺構内堆積土は3層に分けられ、 ℓ 1が流入、 ℓ 2・3が壁の崩落による自然堆積と判断した。平面形は楕円形を呈し、規模は長径125cm、短径105cmを測る。検出面からの深さは最大25cmである。周壁は急な角度で立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺物は ℓ 3から縄文土器2点が出土しており、いずれもII群土器である。図37-20は胴部破片で、器面には節の細かい斜縄文が施されている。本遺構の時期は、出土遺物や周辺の遺構から縄文中期前葉と考えている。(国 井)

24号土坑 SK24(図34・37, 写真32・51)

本遺構は調査区中央部のC8グリッドに位置する。遺構の上部は農道による削平を受けているため、LIV上面で検出した。堆積土は3層に分けられる。 ℓ 3が土坑の底面中央で山状に、 ℓ 1・2が壁際に堆積している。平面形は円形を呈し、規模は直径125cmを測る。検出面からの深さは最大27cmである。周壁は垂直に近い状態で立ち上がり、西壁は僅かにオーバーハングしている。底面は平坦である。遺物は縄文土器2点、石器6点が出土した。石器はいずれも剥片である。図37-21は縄文土器で、縄文地文上に縦方向の隆線が貼り付けられている。本遺構の時期は、出土遺物や周辺遺構から縄文中期前葉と考えられる。(佐 藤)

25号土坑 SK25(図34, 写真33)

本遺構は、調査区中央部のC8グリッドに位置する。遺構の上部は農道による削平を受けているため、LIV上面で検出した。堆積土は2層に分けられ、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。平面形は長楕円形を呈し、規模は長径134cm、短径96cmを測る。検出面からの深さは最大25cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。遺物は縄文土器7点、石器3点が出土した。縄文土器は全て小片のため図示していない。石器はいずれも剥片である。時期は、出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。(佐 藤)

26号土坑 SK26(図34, 写真33)

本遺構は、調査区中央部のD10グリッドに位置する。遺構検出面はLIII bである。遺構内堆積土は3層に分けられ、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。平面形は楕円形を呈し、規模は長径90cm、短径79cmを測る。検出面からの深さは最大23cmである。周壁は底面より急角度で立ち上がる。底面は礫層のLV上面を使用しているが、概ね平坦である。遺物は ℓ 1から石器剥片

1点が出土している。本遺構の時期は、検出層位から縄文中期前葉と考えている。(国 井)

27号土坑 SK27(図34, 写真33)

本遺構は調査区南側F16グリッドに位置し、LⅢbで検出した。堆積土は4層に分けられる。ℓ1は多量の焼土塊・焼土粒を含むことから人為堆積土、ℓ2～4は流れ込みの様相を示す自然堆積土と判断した。平面形は楕円形を呈し、規模は長径90cm、短径82cmを測る。周壁は西壁が僅かに外傾して立ち上がるが、東壁は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは最大26cmである。底面は平坦に構築されている。遺物は縄文土器1点が出土した。本遺構の時期は、検出層位から縄文中期前葉と考えている。(佐 藤)

28号土坑 SK28(図35・37, 写真33・51)

本遺構は調査区南側のC14グリッドに位置する。遺構検出面は13号住居跡の検出面である。13号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。遺構内堆積土は3層に分けられる。ℓ2・3は多量の褐色土塊を含んでいるが、いずれも流入による自然堆積と判断した。平面形は楕円形を呈し、規模は長径158cm、短径148cmを測る。検出面からの深さは最大44cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺物はℓ2から縄文土器5点が出土している。図37-22は縄文土器の胴部破片で、器面には単節の斜縄文が浅く施されている。本遺構の時期は、重複関係や出土遺物から縄文中期前葉と考えている。(国 井)

29号土坑 SK29(図35, 写真33)

本遺構は、調査区南側のC16グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢbである。遺構内堆積土は2層に分けられ、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。平面形は円形を呈し、規模は直径102cmを測る。検出面からの深さは最大23cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央部が最も低くなる。遺物は出土していないが、検出層位から縄文中期前葉と考えている。

(国 井)

30号土坑 SK30(図35・37, 写真33・51)

本遺構は、調査区中央部のC13グリッドに位置する。遺構検出面は、耕作土直下のLⅣである。遺構の西側は攪乱により失われている。遺構内堆積土は4層に分けられた。ℓ1は壁の崩落土であり、ℓ2・3は流入土である。ℓ4は、中央部が高くなる山状の堆積を示し、有機物を多く含む土層と考えられる。いずれも自然堆積の様相を示すものと考えられる。遺存状態から、平面形は楕円形と推定され、遺存する規模は長径93cm、短径70cmを測る。壁高は最大20cmを測る。周壁は北西壁のみがオーバーハンクス、それ以外は55°の角度で緩やかに立ち上がる。遺物は、縄文土器3点がℓ1とℓ3から出土している。図37-23の土器は、無節の縄文が施され、内面には炭化物が付着し

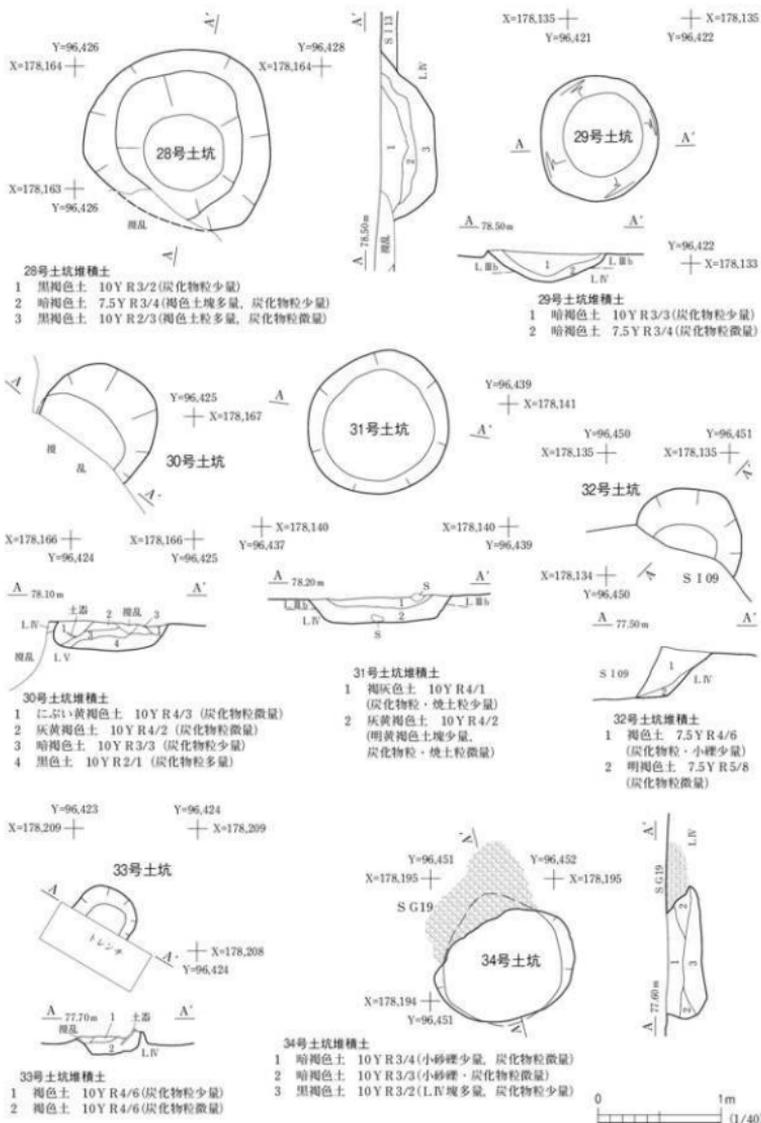


図35 28~34号土坑

ている。

本土坑は、北西壁がオーバーハングする点や、遺構内堆積土の $\ell 4$ が山状の堆積を示すことから、開口部の狭いフラスコ状土坑の可能性もある。遺構の所属時期は、出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。(中野)

31号土坑 SK31(図35, 写真33)

本遺構は、調査区南側のD15グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢbである。遺構内堆積土は2層に分けられ、流入による自然堆積と判断した。平面形は円形を呈し、規模は直径120cmを測る。検出面からの深さは最大20cmである。周壁は比較的緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出層位から縄文中期前葉と考えている。(国井)

32号土坑 SK32(図35, 写真33)

本遺構は、調査区南側のF16グリッドに位置する。遺構検出面はLⅣである。9号住居跡と重複しており、本遺構の方が古い。このため、遺構の南半分が失われている。遺構内堆積土は2層に分けられ、流入による自然堆積と判断した。平面形は遺存状態から楕円形と推定され、遺存する規模は長径93cm、短径53cmを測る。検出面からの深さは最大32cmである。周壁は急角度で立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺物は出土していない。本遺構の時期は、周辺の遺構や9号住居跡との重複関係から縄文中期前葉と考えられる。(国井)

33号土坑 SK33(図35・37, 写真34, 51)

本遺構は調査区中央部のC9グリッドに位置し、LⅣ上面で検出した。検出時に土器片の端部が露出していたことから、土器埋設遺構と判断し断ち割りを行なったところ、堆積土中に土器を含む土坑と判明した。平面形は楕円形を呈し、遺存する規模は長径50cm、短径32cmを測る。検出面からの深さは最大21cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は2層に分けられ、レンズ上の堆積を示すことから自然堆積と判断した。土器は非常に脆く、取り上げ時には細片になってしまった。出土遺物は縄文土器10点である。いずれも捺糸文で、内面には条痕が施されたI群土器である。本遺構の時期は、出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。(佐藤)

34号土坑 SK34(図35・38, 写真34・53・54)

本遺構は調査区中央部F10グリッドに位置する。遺構検出面はLⅣ上面である。19号焼土遺構と重複関係にあり、本遺構の方が新しい。堆積土は3層に分けられた。 $\ell 1$ は流入、 $\ell 2 \cdot 3$ は壁の崩落による自然堆積土である。平面形は楕円形を呈し、規模は長径120cm、短径83cmを測る。検出面からの深さは最大32cmを測る。周壁は、南壁と北壁がオーバーハングしているが、西壁と東壁は僅かに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。遺物は縄文土器4点と石器2点が出土した。図38

ー1は凹基石礎で、形状は二等辺三角形を呈する。5は磨石の欠損品で側面に磨面が認められる。本土坑は出土遺物や周壁の状況から、縄文中期前葉のフラスコ状土坑の可能性が高い。(佐藤)

35号土坑 S K 35(図36, 写真34)

本遺構は調査区南側のE17グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢbである。遺構内堆積土は4層に分けられ、流入や壁崩落による自然堆積と判断した。平面形は楕円形を呈し、規模は長径118cm、短径92cmを測る。検出面からの深さは最大28cmである。周壁は急な角度で立ち上がる。底面は中央部がやや低くなるものの、概ね平坦である。遺物は出土していないが、検出層位と周辺の出土遺物から縄文中期前葉の所産と考えられる。(国井)

36号土坑 S K 36(図36・37, 写真34・51)

本遺構は、調査区南側のD17グリッドに位置する大型の土坑である。遺構検出面はLⅢbである。遺構内堆積土は12層に細分した。いずれも、流入や壁崩落による様相を示すことから、概ね自然堆積と判断した。平面形は円形を呈し、規模は直径220cmを測る。検出面からの深さは最大101cmである。断面形はフラスコ形を呈する。このため、周壁は底面から中央部にかけてオーバーハングし、開口部に向かって外傾気味に立ち上がる。底面はLⅤの砂礫を掘り込んでいるが、概ね平坦である。遺物はⅠから縄文土器5点が出土しており、いずれもⅡ群土器である。図37-25は無文の波状口縁の資料である。遺構の性格は、形状から貯蔵穴と考えられる。時期は、検出層位と周辺の遺構から縄文中期前葉と考えられる。(国井)

37号土坑 S K 37(図36, 写真35)

本遺構は、調査区南側のE16グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢbである。北側には12号住居跡が近接する。遺構内堆積土は4層に分けられ、いずれも流入による自然堆積と判断した。平面形は不整な長楕円形を呈する。規模は長径182cm、短径108cmを測る。検出面からの深さは最大19cmである。周壁は緩やかに立ち上がる。底面はLⅤの礫層が露出するが、概ね平坦である。遺物はⅠから縄文土器2点が出土しており、いずれもⅡ群土器と考えられる。遺構の時期は、検出層位と周辺の出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。(国井)

38号土坑 S K 38(図36・37, 写真35・51)

本遺構は調査区南側のD16グリッドに位置する。遺構検出面はLⅣ上面である。8号住居跡と重複しており、本遺構の方が古い。このため遺構東側の約半分が失われている。遺構内堆積土は単層で、LⅢbに相当する褐色土である。堆積状況は層厚が薄いため不明である。平面形は遺存状態から楕円形と推定され、遺存する規模は長径180cm、短径87cmを測る。検出面からの深さは最大15cmである。周壁は急な角度で立ち上がる。底面は重複する8号住居跡の床面とほぼ同じ高さで、概ね

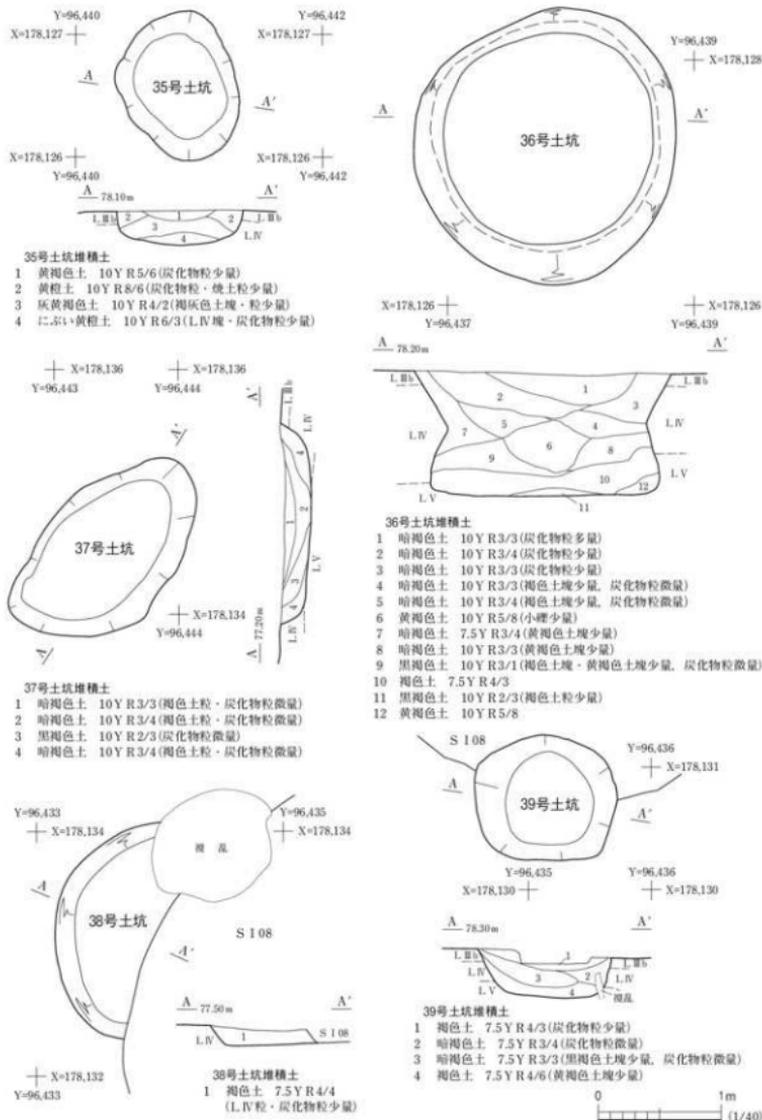


図36 35~39号土坑

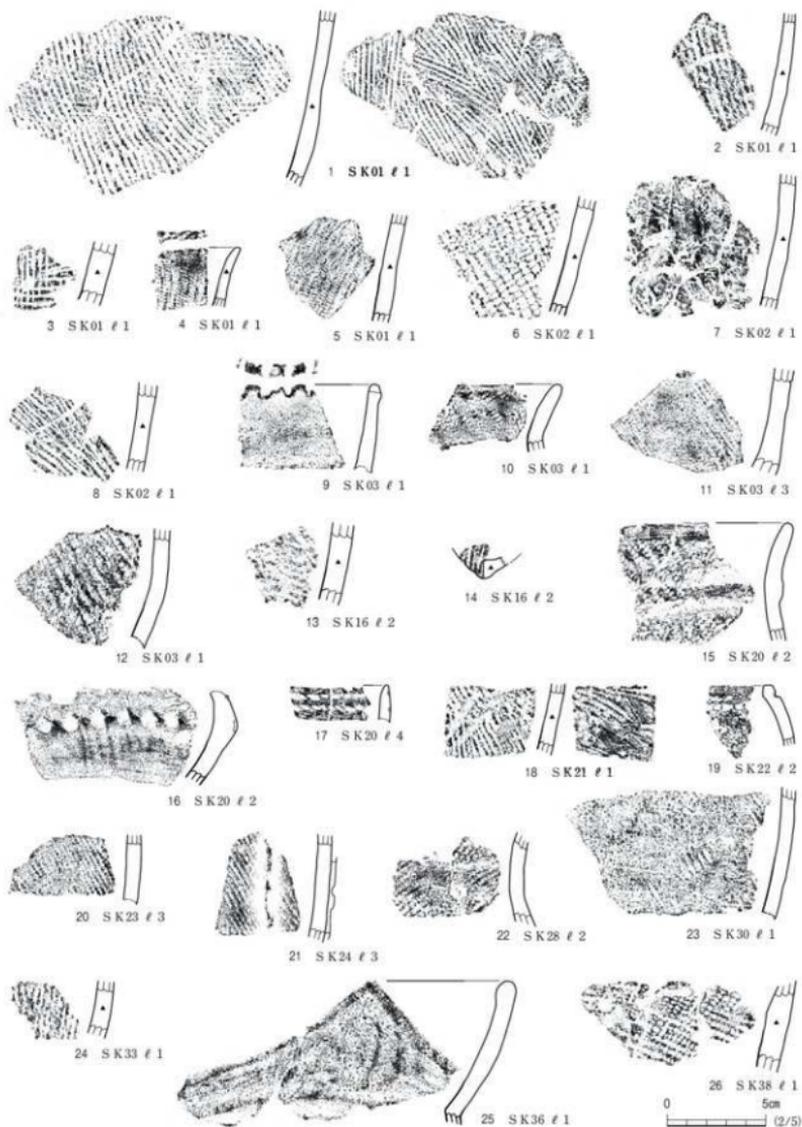


図37 土坑出土遺物(1)

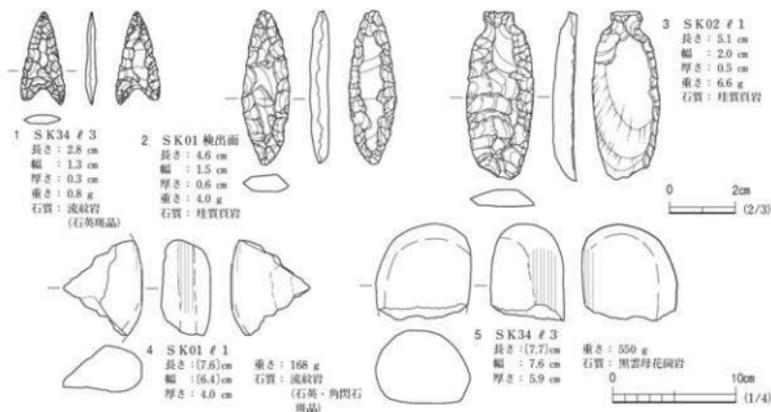


図38 土坑出土遺物(2)

平坦である。遺物は $\#1$ から28点出土している。いずれも斜縄文や撚糸文が施されたI群土器である。図37-26は縄文土器の胴部破片で、撚りが異なる2本の原体を使用して縄文を施している。本遺構の時期は、堆積土や出土遺物から縄文早期末葉と考えている。(国 井)

39号土坑 SK39(図36, 写真35)

本遺構は、調査区南側のD16グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢbである。8号住居跡と重複しており、本遺構の方が古い。このため、遺構北側の周壁上半が失われている。遺構内堆積土は4層に分けられ、流入や壁崩落による様相を示すことから、概ね自然堆積と判断した。平面形は遺存状態から不整な楕円形と推測される。遺存規模は長辺115cm、短辺101cmを測り、検出面からの深さは最大36cmである。周壁は比較的急な角度で立ち上がる。底面は重複する8号住居跡の床面より一段低くなり、概ね平坦である。遺物は出土していないが、重複関係や検出層位から縄文中期前葉と考えている。(国 井)

第4節 焼土遺構

今回の調査で焼土遺構は23基検出された。これらは、調査区南側に一部認められる他は、調査区中央部から北側で確認されている。

1号焼土遺構 SG01(図39, 写真36)

本遺構は調査区北側のD6グリッドに位置する。耕作土直下のLⅣ上面で検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長径91cm、短径55cmを測る。使用面は削平によって失われたと考えられる。焼

土の厚さは4～6cmであり、焼き締まり等は確認できなかった。本遺構の時期は、検出層位や周辺遺構の状況から縄文早期末葉と考えている。(佐 藤)

2号焼土遺構 SG 02(図39, 写真36)

本遺構は調査区北側のC7グリッドに位置する。耕作土直下のLIV上面で検出した。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長径81cm、短径59cmを測る。使用面は削平によって失われたと考えられる。焼土の厚さは3～5cmであり、焼き締まり等は確認できなかった。本遺構の時期は、検出層位や周辺遺構の状況から縄文早期末葉と考えている。(佐 藤)

3号焼土遺構 SG 03(図39・41, 写真36・54)

本遺構は調査区北側のD6グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。平面形は楕円形を呈し、規模は長径100cm、短径80cmを測る。酸化面の厚さは6cmで、全体的に強く酸化している。遺物は、検出面や周辺から縄文土器5点、石器3点が出土している。図41-1は調整剥片である。側面全体に細かい剝離を加えることによって、刃部を作り出している。遺構の所属時期は、出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。(中 野)

4号焼土遺構 SG 04(図39, 写真36・37)

本遺構は調査区北側のD7グリッドに位置する。耕作土直下のLIV上面で検出した。5号焼土遺構が西側に隣接している。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長径66cm、短径30cmを測る。使用面は削平により失われたものと考えられる。検出面から6cmの厚さで赤褐色に熱変化した焼土が認められ、焼き締まり等は確認できなかった。本遺構の時期は、検出層位や周辺遺構の状況から縄文早期末葉と考えている。(佐 藤)

5号焼土遺構 SG 05(図39, 写真36・37)

本遺構は調査区北側のD7グリッドに位置する。耕作土直下のLIV上面で検出した。4号焼土遺構が東側に隣接している。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長径48cm、短径36cmを測る。使用面は削平により失われたものと考えられる。検出面から5～8cmの厚さで赤褐色に熱変化した焼土が認められ、焼き締まり等は確認できなかった。本遺構の時期は、検出層位と周辺遺構の状況から縄文早期末葉と考えている。(佐 藤)

6号焼土遺構 SG 06(図39, 写真37)

調査区中央部のC9グリッドに位置する。耕作土直下のLIV上面で検出した。焼土化範囲は楕円形を呈し、規模は長径74cm、短径49cmを測る。赤褐色に焼けており、その厚さは最大4cmを測る。西側では若干の焼き締まりが確認された。本遺構の時期は、検出層位と周辺の出土遺物から縄文早

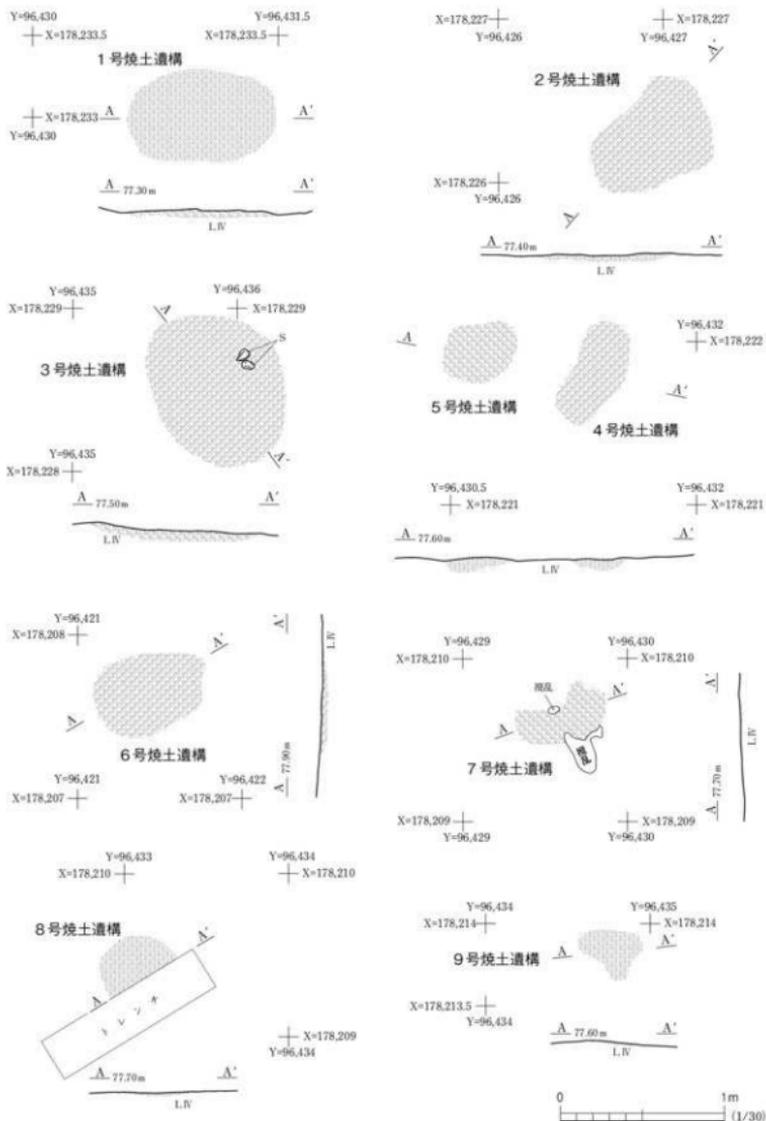


図39 1~9号焼土遺構

期末葉と考えている。

(国 井)

7号焼土遺構 SG 07(図39, 写真37)

調査区中央部のC9グリッドに位置し、耕作土直下のLIV上面で検出した。北側の一部と南側は擾乱を受けている。焼土化範囲は不整な楕円形であり、規模は長軸57cm、短軸32cmを測る。赤褐色に焼けており、その厚さは最大2cmを測る。焼き締まりは確認されなかったが、西側に比べ東側が強く焼けている。検出層位と周辺の出土遺物から縄文早期末葉の所産と考えている。(国 井)

8号焼土遺構 SG 08(図39, 写真37)

調査区中央部のD9グリッドに位置する。耕作土直下のLIV上面で検出した。本遺構は、平成17年度試掘調査で確認されたもので、この時の11号トレンチにより遺構の南東側が失われている。遺構の形状は、遺存状態から楕円形と推測される。遺存する規模は長径74cm、短径49cmを測る。暗赤褐色に焼けており、その厚さは最大3cmを測る。焼き締まりは確認されなかったが、周縁部に比べ中央部が強く焼けている。本遺構の時期は、検出層位と周辺の出土遺物から縄文早期末葉と考えている。(国 井)

9号焼土遺構 SG 09(図39, 写真37)

調査区中央部のD8グリッドに位置する焼土遺構である。耕作土直下のLIV上面で検出した。遺構の形状は不整な楕円形を呈する。規模は長軸39cm、短軸30cmを測る。赤褐色に焼けており、その厚さは最大2cmを測る。焼き締まりは確認されなかったが、周縁部に比べ中央部が強く焼けている。遺構の時期は、検出層位と周辺の出土遺物から縄文早期末葉と考えている。(国 井)

10号焼土遺構 SG 10(図40, 写真37)

本遺構は調査区中央部のC9グリッドに位置する。耕作土直下のLIV上面で検出した。平面形は円形を呈し、規模は長径108cm、短径86cmを測る。使用面は削平により失われたものと考えられる。検出面から10~20cmの厚さで赤褐色に熱変化しており、焼き締まり等は確認できなかった。本遺構の時期は、検出層位と周辺遺構の状況から縄文早期末葉と考えている。(佐 藤)

11号焼土遺構 SG 11(図40, 写真37)

調査区中央部のD11グリッドに位置する焼土遺構である。耕作土直下のLIV上面で検出した。焼土化範囲は長方形を呈し、規模は長辺59cm、短辺41cmを測る。赤褐色に焼けており、その厚さは最大2cmを測る。焼き締まりは確認されなかったが、周縁部に比べ中央部が強く焼けている。遺構の時期は、検出層位と周辺の出土遺物から縄文早期末葉と考えている。(国 井)

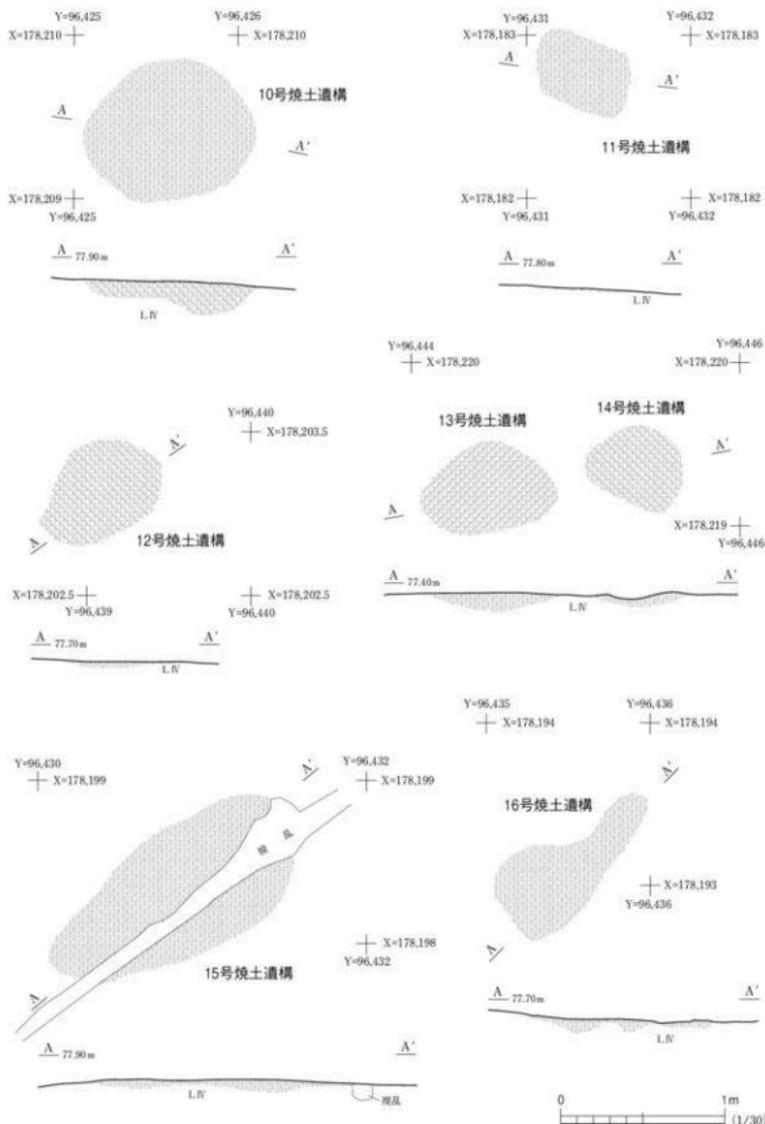


図40 10~16号焼土遺構

12号焼土遺構 S G 12(図40, 写真38)

調査区中央のD 9グリッドに位置する。検出層位はL IV上面である。遺構の形状は不整な楕円形を呈し、規模は長径79cm, 短径57cmを測る。赤褐色に焼けており、その厚さは最大4cmを測る。焼き締まりは確認されなかったが、周辺に比べ東側の酸化度合いが強いようである。遺構の時期は、検出層位と周辺の出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。(国 井)

13号焼土遺構 S G 13(図40, 写真38)

本遺構は調査区中央部のE 8グリッドに位置する。遺構の上部にはL III bが確認され、検出面はL IV上面である。東側には14号焼土遺構が近接する。形状は不整な楕円形を呈し、規模は長径83cm, 短径59cmを測る。赤褐色に焼けており、その厚さは最大11cmを測る。遺構の中央付近では、僅かな焼き締まりが認められた。本遺構の時期は、検出層位から14号焼土遺構と同様の縄文早期末葉と考えている。(国 井)

14号焼土遺構 S G 14(図40, 写真38)

調査区中央部、E 8グリッドのL IV上面で検出した。本遺構は、13号焼土遺構と同様の状態で確認された。形状は不整な楕円形を呈し、規模は長径63cm, 短径46cmを測る。赤褐色に焼けており、その厚さは最大7cmを測る。焼き締まりは確認されなかったが、周縁部に比べ中央部が強く焼けている。遺構の時期は、検出層位から13号焼土遺構と同様の縄文早期末葉と考えている。(国 井)

15号焼土遺構 S G 15(図40, 写真38)

調査区中央部のD 10グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面である。遺構は中央部が耕作により壊されている。焼土化範囲は、遺存状況から楕円形と推測され、長径167cm, 短径77cmの規模で赤褐色に焼けている。特に、強く焼けた所が中央部の南西側と北東側で確認され、その厚さは最大7cmを測る。このことから本遺構は、僅かに場所を変えて火を使用したものと考えられる。本遺構の時期は不明であるが、検出層位から縄文時代のものと考えたい。(国 井)

16号焼土遺構 S G 16(図40, 写真38)

本遺構は調査区中央部のD 10グリッドに位置する。耕作土直下のL IV上面で検出した。平面形は無花果形を呈し、規模は長径110cm, 短径54cmを測る。使用面は削平により失われたものと考えられる。検出面から2~9cmの厚さで赤褐色に熱変化しており、焼き締まりは確認できなかった。本遺構の明確な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代のものと考えている。(佐 藤)

17号焼土遺構 SG17(図41, 写真38)

調査区南側のC15グリッドに位置する。本遺構は、耕作土直下のLⅢbで検出した。南側の一部が根による擾乱を受けている。焼土化範囲は楕円形を呈し、長径114cm、短径73cmを測る。全体に明赤褐色に焼けており、その厚さは最大5cmを測る。本遺構の明確な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代のものと考えている。(国 井)

18号焼土遺構 SG18(図41, 写真38)

本遺構は調査区中央部のE10グリッドに位置する。耕作土直下のLⅣ上面で検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長径90cm、短径68cmを測る。使用面は削平により失われたものと考えられる。検出面から6～12cmの厚さで赤褐色に熱変化しており、焼き締まりは確認できなかった。本遺構の明確な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代のものと考えている。(佐 藤)

19号焼土遺構 SG19(図41, 写真38)

本遺構は調査区中央部F10グリッドに位置する。耕作土直下のLⅣ上面で検出した。34号土坑と重複関係にあり、本遺構の方が古い。遺存状況から平面形は推測できない。遺存する規模は長軸92cm、短軸57cmを測る。検出面から10～19cmの厚さで赤褐色に熱変化しており、焼き締まりは確認できなかった。本遺構の時期は、重複遺構から判断して縄文中期前葉以前と考えている。(佐 藤)

20号焼土遺構 SG20(図41, 写真39)

調査区中央部のC9グリッドに位置する。検出面は耕作土直下のLⅣ上面である。遺構の西側には21・22号焼土遺構が近接し、これらは本遺構を含めて一直線に並ぶ。平面形は楕円形を呈し、長径112cm、短径73cmにわたって焼けている。その厚さは最大4cmを測る。焼き締まりは確認されなかったが、周縁部に比べ中央部が強く焼けている。遺構の明確な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代のものと考えている。(国 井)

21号焼土遺構 SG21(図41, 写真39)

調査区中央部のC9グリッドに位置する。遺構検出面は耕作土直下のLⅣ上面である。遺構の東側と西側には、20・22号焼土遺構が近接する。焼土化範囲は楕円形を呈し、長径87cm、短径50cmを測る。赤褐色に焼けており、その厚さは最大4cmを測る。焼き締まりは確認されなかったが、周縁部に比べ中央部が強く焼けている。遺構の明確な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代のものと考えている。(国 井)

第1編 原B遺跡

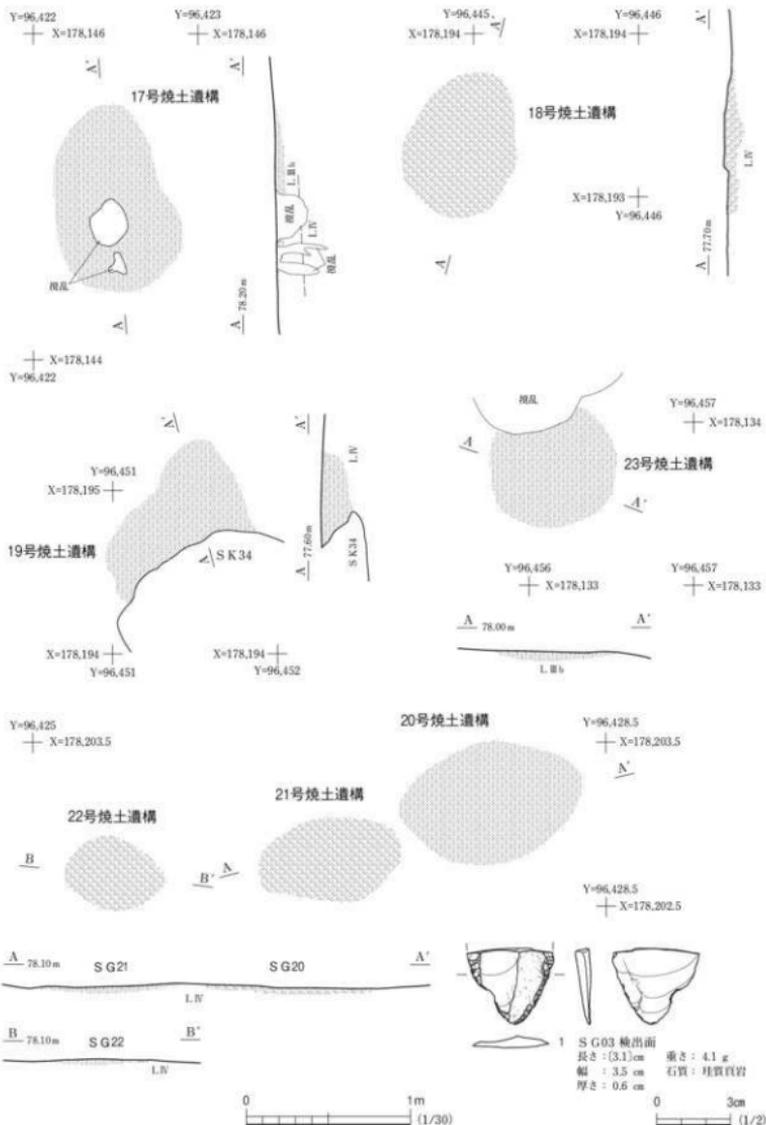


図41 17~23号焼土遺構，出土遺物

22号焼土遺構 SG22(図41, 写真39)

調査区中央部のC9グリッドに位置する。遺構検出面は、耕作土直下のLIV上面である。遺構の東側には、20・21号焼土遺構が近接する。焼土化範囲は楕円形を呈し、長径60cm、短径45cmを測る。赤褐色に焼けており、その厚さは最大2cmを測る。焼き締まりは確認されなかったが、周縁部に比べ中央部が強く焼けている。遺構の明確な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代のものと考えている。

(国 井)

23号焼土遺構 SG23(図41, 写真39)

調査区南側のF16グリッドに位置する。遺構検出面はLIIIbである。遺構の北側は、後世の擾乱により失われている。遺存状態から平面形は円形と推測され、遺存する規模は長径77cm、短径59cmを測る。赤褐色に焼けており、その厚さは最大4cmを測る。中央部は僅かに焼き締まりが認められ、周縁部に比べ強く焼けている。遺構の明確な時期は不明であるが、検出層位から縄文時代のものと考えたい。

(国 井)

第5節 土器埋設遺構

今回の調査では、2基の土器埋設遺構を検出した。いずれも調査区中央部のLIV上面で確認されたが、時期は異なる。1号土器埋設遺構が縄文早期末葉、2号土器埋設遺構が縄文中期前葉の遺構と考えられる。

1号土器埋設遺構 SM01(図42, 写真40・51・52)

本遺構は、調査区北側のE7グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。検出時に土器の上端が確認され、掘形と土器の状態から土器埋設遺構と判断した。

掘形の上には、楕円形を呈する浅い窪みが見られ、規模は長径85cm、短径65cmを測る。掘形の平面形は円形を呈し、規模は直径30cmを測る。検出面からの深さは22cmである。埋設土器は、口縁部と底部を欠いた胴部のみが正位の状態埋設されている。掘形は埋設土器より一回り大きく掘られており、土器と掘形の隙間は3～5cmと狭く、周壁は直立気味に立ち上がる。掘形底面は丸味を持つ。堆積土は3層に分けられる。ℓ1・2は流入等による自然堆積土、ℓ3は土器埋設時の埋土と判断した。

遺物は縄文土器が3点出土した。いずれもI群土器である。図42-1・2は縄文土器である。2は胴部のみが遺存する埋設土器で、外面には目の細かい縞糸文が施され、内面には条痕が認められる。1は2と同様に縞糸文の土器であるが、2とは別個体の土器である。本遺構の時期は、埋設土器から縄文早期末葉と考えられる。

(佐 藤)

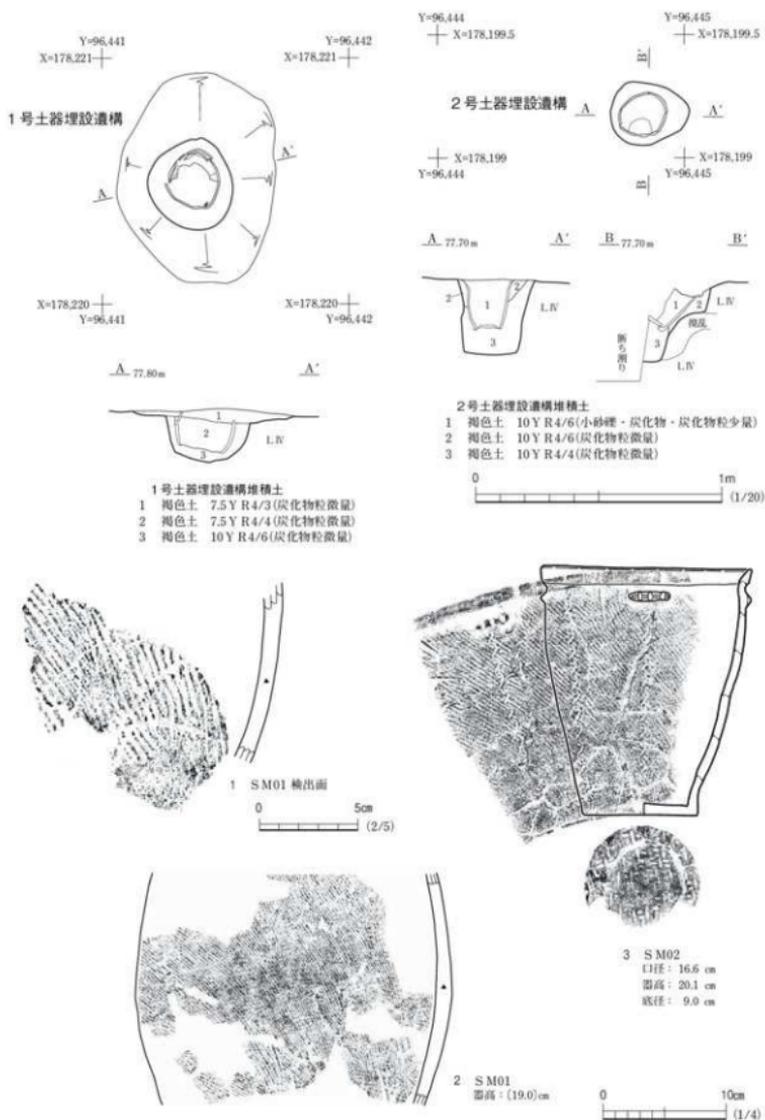


図42 1・2号土器埋設遺構，出土遺物

2号土器埋設遺構 SM02(図42, 写真40・52)

本遺構は、調査区中央部のE10グリッドに位置し、LIV上面で検出された。検出時に土器の口縁部が巡っているのが確認され、掘形と土器の状態から土器埋設遺構と判断した。

掘形の形状は楕円形を呈し、規模は長径32cm、短径25cmを測る。周壁は僅かに外反して立ち上がり、全体に円筒形を呈する。検出面からの深さは32cmを測り、底面は平坦に構築されている。埋設土器は、土器の底部が掘形の底面から10cm上の位置にあり、北側に傾いた状態で埋設されていた。また、底部が本来の位置から2cm程浮いた状態で出土している。堆積土は3層に分けられる。ℓ1は土器内堆積土、ℓ2・3は土器埋設時の埋土と判断した。

遺物は埋設土器のみで、II群土器と考えられる。図42-3に図示した。完形の深鉢土器で、底部から外傾気味に立ち上がる器形を呈する。口縁部は無文で、胴部には単節の縄文地文が施された後、頸部の直下に4単位の貼付文が施されている。貼付文の直下と、その中間から垂下する結節文が底部付近まで施されている。底部には網代痕が見られる。本遺構の時期は、埋設土器から縄文中期前葉と考えられる。

(佐藤)

第6節 その他の遺構

1号特殊遺構 SX01(図43, 写真41)

本遺構は、調査区南側のF・G15グリッドに位置する。遺構検出面はLIIIbである。検出当初、堅穴住居跡として調査を行なったが、遺構に伴う施設が見られず、用途が不明であるため特殊遺構とした。遺構内堆積土は9層に分けられた。いずれにも10~30cmの礫が多く入り、レンズ状堆積や壁際での三角堆積を示すことから自然堆積と考えられる。本遺構の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は東西5.40m、南北2.30mを測り、壁高は50cmである。全体にLVの礫層まで掘り込んでいる。周壁は概ね60°で立ち上がる。底面は平坦であるが、踏み締まりはみられない。遺物はℓ3から縄文土器2点、石器1点が出土しており、全て縄文中期前葉のものと考えられる。

本遺構は、隅丸長方形を呈する特殊遺構である。底面に炉跡やピットが認められないため、遺構の性格は不明である。遺構の所属時期は、出土遺物に乏しく決定材料が少ないが、堆積土にLIIIaに相当する土層が認められる点や出土遺物から、縄文中期前葉と考えている。

(中野)

2号特殊遺構 SX02(図44, 写真42)

本遺構は、調査区北側のD7グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面である。当初、耕作土直下から焼土遺構が確認され、その周辺を精査したところ、部分的ではあるが炭化物粒を含む踏み締まり範囲とピットが確認された。本遺構は検出段階では、削平により壁が失われた住居跡と判断していたが、調査の進行に伴い、住居跡とする根拠に欠けるため特殊遺構としたものである。隣接

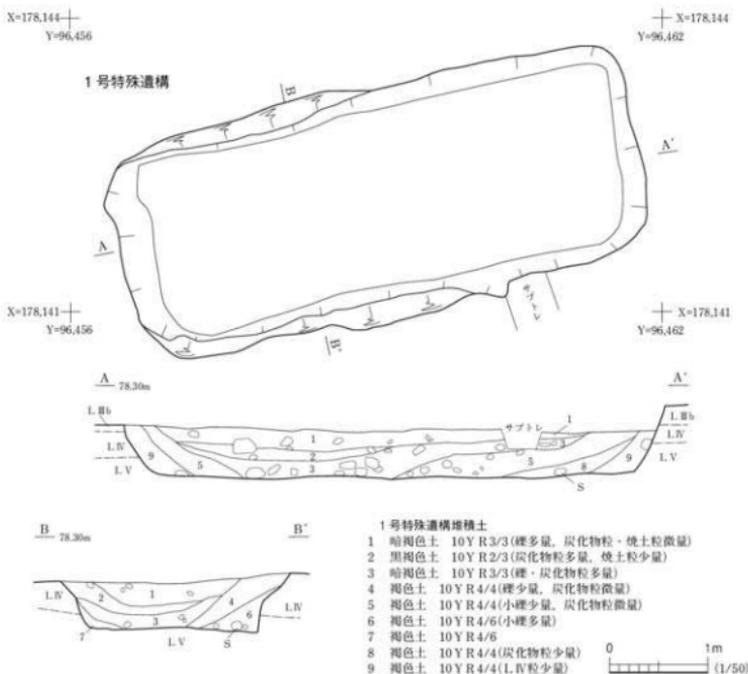


図43 1号特殊遺構

する遺構としては、4号住居跡が本遺構の東側に位置する。他の遺構との重複関係はない。遺構は耕作による削平を受けているため、遺存状態が悪い。

踏み締まりの範囲は、一辺4.00m前後の隅丸正方形を呈し、焼土遺構を中心に形成されている。また、この範囲では、5mm前後の炭化物粒が確認されている。焼土遺構は1基確認され、形状は楕円形を呈する。規模は長軸100cm、短軸90cmを測る。全体に強く酸化しており、酸化面の厚さは最大8cmである。ピットは焼土遺構を南北に挟んだ対角線上に2基検出された。P1・2共に直径20cm、深さ10cmを測る。P2の北側で、15cm四方、厚さ10cmの範囲で白色の粘土塊が検出された。

遺物は縄文土器12点、石器6点が出土している。遺物の多くは焼土遺構の周辺から出土している。全てI群土器で、燃糸地文のものが多い。いずれも小破片のため図示していない。

本遺構は焼土遺構、踏み締まり範囲、ピットからなる特殊遺構である。東側に近接する4号住居跡は、周壁が失われた住居跡で、確認された柱穴を除くと本遺構の状況に近似するものである。本遺構の性格については不明であるが、明確な柱穴の掘り込みを持たない、周壁が失われた住居跡とも考えている。遺構の所属時期は、出土土器から縄文早期末葉と考えられる。(中野)

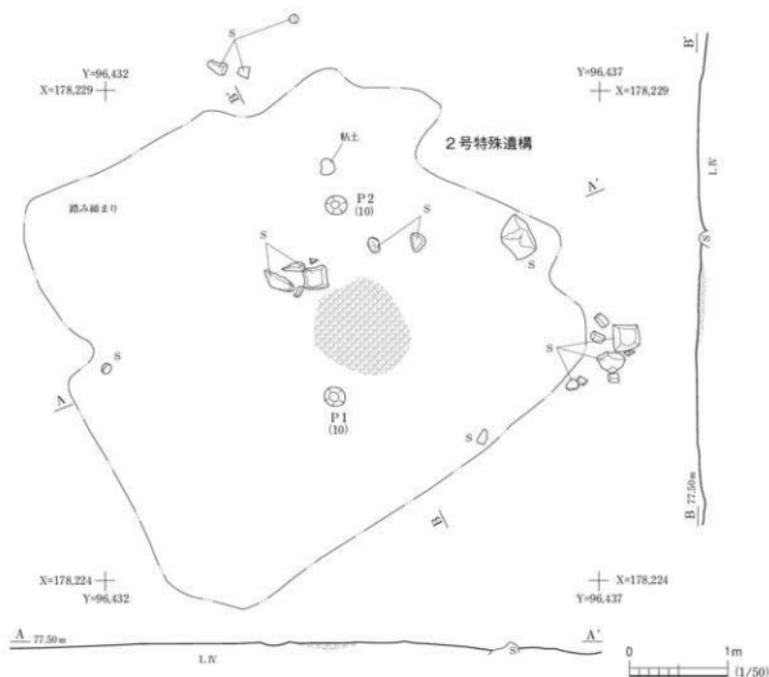


図44 2号特殊遺構

ピット (図45, 写真51)

調査区中央部のC9・C11・D11グリッドに位置する。ピットは総計6基がLIV上面で検出され、大きく2地点に分けられる。P1～4は20～22号焼土遺構に、P5・6は11号焼土遺構に近接し、特にP1～4は、20～22号焼土遺構を東側から南側にかけて囲むように配置されている。ピットの平面形はいずれも円形を呈し、規模は直径20～49cmを測る。検出面からの深さは24～49cmである。ピット内堆積土は、P1～4がLIII bに近似する褐色土、P5・6は黒褐色土や暗褐色土である。

遺物は、P6から縄文土器1点が出土している。図45-1は縄文土器片で、口縁部と胴部の境界分と考えられる。口縁部には横方向のナデ調整が認められ、胴部には単筋の斜縄文が施されている。縄文晩期のものと考えられる。

P1～4は、堆積土やその配置からも関連が深いものと思われ、堆積土の特徴から縄文早期末葉～前期最初頭の所産と考えられる。P5の時期は不明である。P6は縄文晩期以降のものと考えられる。(国井)

第1編 原B遺跡

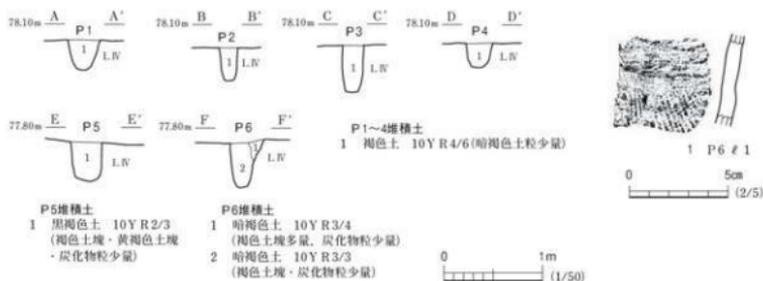
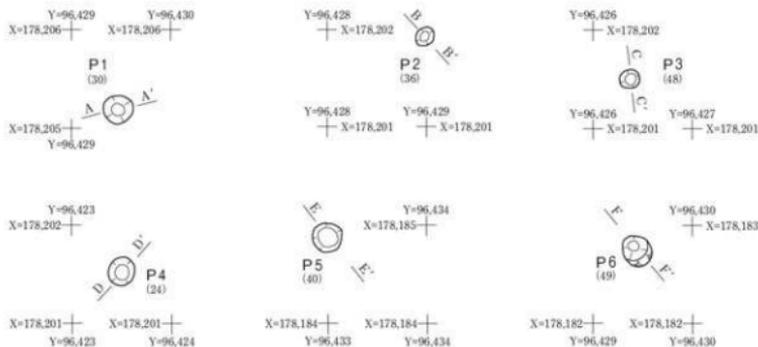


図45 ビット，出土遺物

第7節 遺構外出土遺物

遺構外からは縄文土器3,377点，土製品1点，石器225点が出土している。全て縄文時代の遺物と考えている。各地点の出土量を図46・47に示した。時期ごとの分布をみると，縄文早期末葉～前期最初頭の遺物が調査区北側から，同中期前葉の遺物が調査区南側と北側から出土している。

土 器 (図46・48～53，写真56～58)

出土した土器は縄文早期末葉から同晩期までのものである。このうち，縄文早期末葉～前期最初頭の土器はLⅢbから，同中期前葉の土器はLⅢaから多く出土している。本節においては，第2章第1節の分類基準に遵って記述する。

I群土器

縄文早期末葉～前期最初頭の土器群で，図48～50が該当する。I群土器は本遺跡出土土器の中で

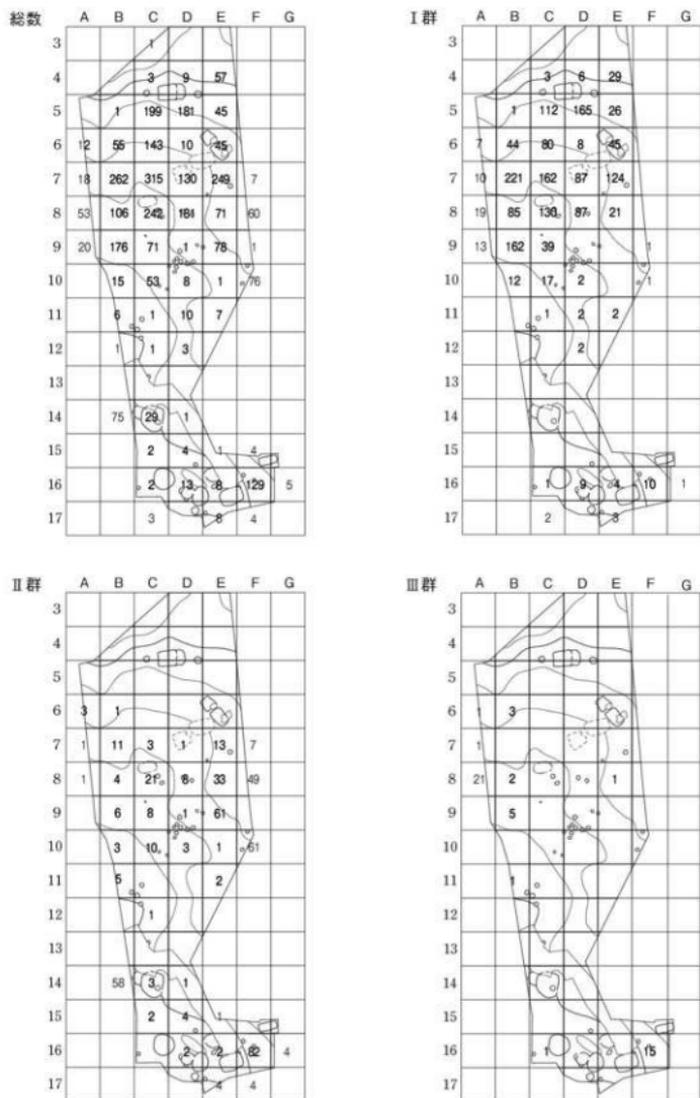


図46 遺構外出土土器分布図

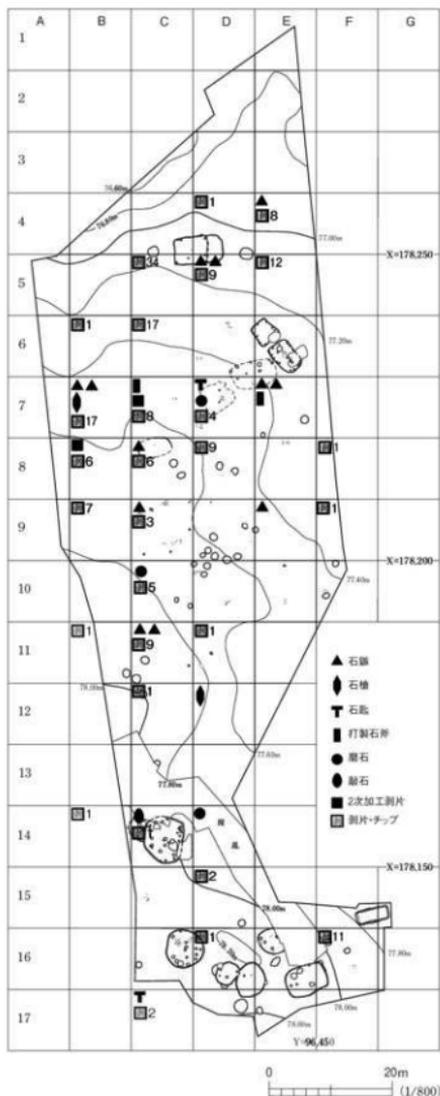


図47 遺構外出土石器分布図

最も多く、特に1類が約8割を占める。

1類 地文に燃糸文を施すものである。口縁部は緩やかに外傾するものが多い。原体はR燃りのものが8割を占め、条間は密なものが多い。条間を3～5mm空けたものも少量あり、その中には条を交差させたものが見られる。内面調整は条痕やナデ、擦痕状のものが見られる。条痕は、口縁部から胴部上半で横位方向に、胴部下半で縦位や斜位方向に施されている。調査区北側のLⅢbから、また、遺構内やLⅠなどからも多く出土している。第1節では本類を4種別しているが、遺構外からはc種に該当する遺物が確認されなかった。

a種 口唇部に刻目や圧痕を持つもので、図48-1・2・5・8が該当する。口縁部が外傾するものが多い。1・2は口唇部に刻目が、内面に横位方向の燃糸文が施されている。5は口唇部に貝殻圧痕文が、内面に斜位方向の燃糸文が施されている。8は、口唇部表面に先端の鋭利な施文工具で、裏面に先端がささくれた角状の施文工具で刺突文が施されている。

b種 口唇部直下に横位方向の隆帯を施すもので、図48-3・4・6・7が該当する。3は口縁部が外反する。6の口唇部は燃糸文の後に刺突文が施され、内面は横位方向の条痕が施されている。4・7は口唇部が剝離しており、隆線上まで燃糸文が施されている。

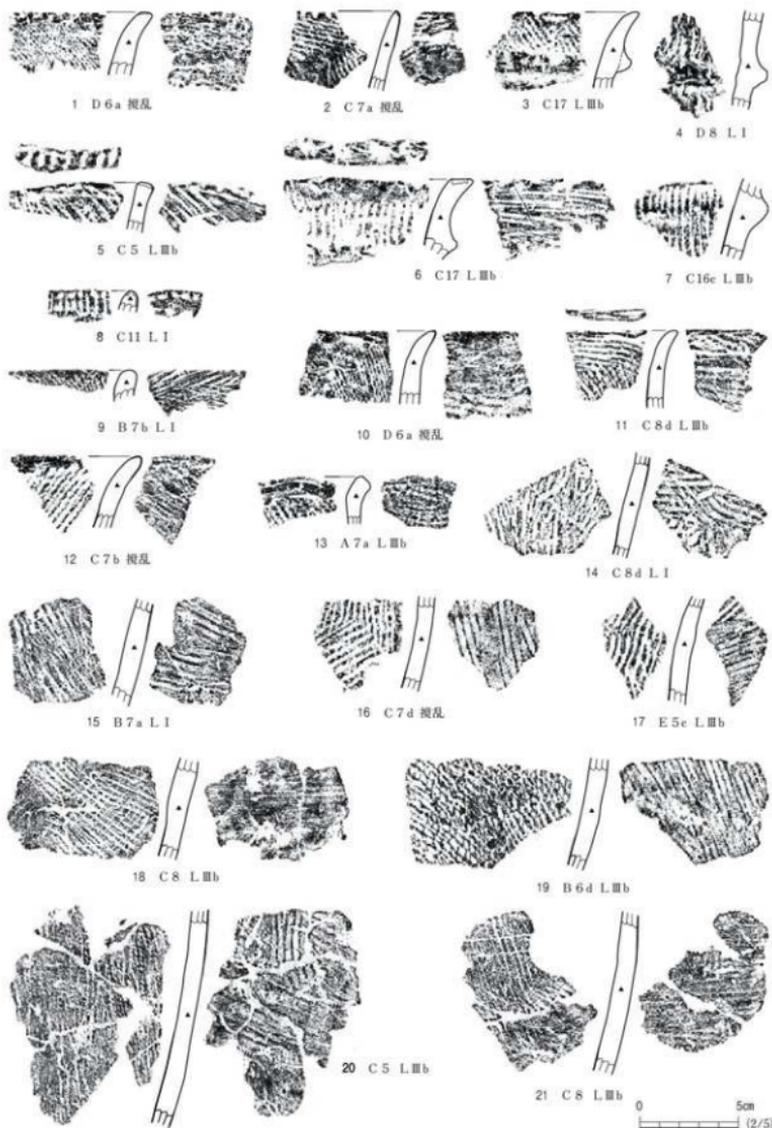


図48 遺構外出土遺物(1)

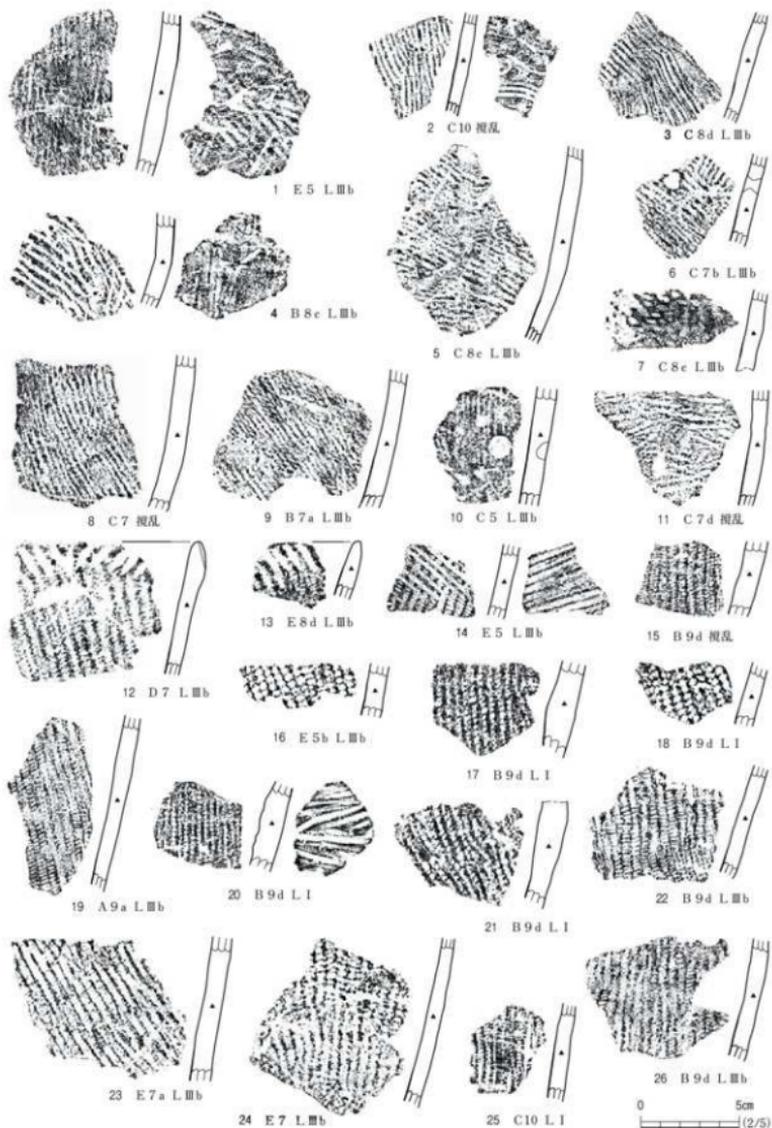


図49 遺構外出土遺物(2)

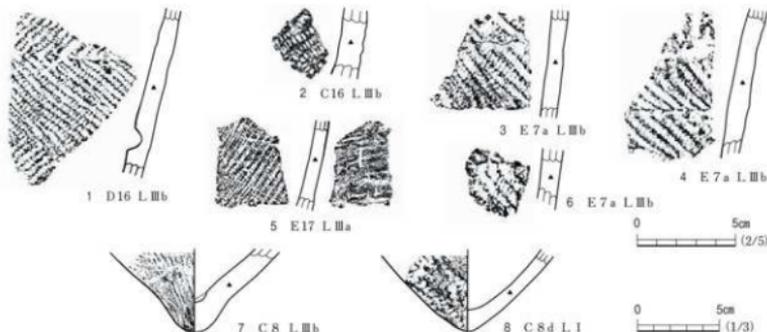


図50 遺構外出土遺物(3)

d種 地文のみのものである。図48-9~21, 図49-1~11, 図50-7・8が該当する。図48-9~13は口縁部破片であり, 9以外は外反する。内面には, 横位や斜位方向に捻糸文が施されている。10は節の細かい捻糸文が施されている。11は, まず縦位方向に, 次に口縁部に沿って横位方向に捻糸文が施されている。図49-1~11は胴部破片で, 1・2・4の内面には横位方向や斜位方向の条痕がみられる。6・10には補修孔が見られるが, 10は途中で放棄されている。7は幅4mm前後の太い原体で施文されている。

2 類 地文に縦走縄文を施文するものである。地文に0段多条の縄文や単節縄文によって縦走する縄文を表出するものである。0段多条原体が使用されているものが約8割を占める。内面は条痕のものは少なく, ナデ調整や擦痕のあるものが多い。出土位置は, 1類とほぼ同様に調査区北側のL.IIIbから多く出土している。

a種 口縁端部に刻目を施すもので, 図49-12・13が該当する。口縁部がやや外傾する器形である。口唇部に縦位や斜位方向の刺突文を施す。内面には横位方向の擦痕がみられる。

b種 横位方向に沈線を施すもので, 図49-14が該当する。半截竹管状工具によって平行沈線が施されている。

c種 地文のみのもので, 図49-15~26が該当する。いずれも単節縄文が斜位方向に施されている。15・19・22・23・25・26は0段多条の原体で施文されている。内面は, 20に横位方向の条痕が見られるが, それ以外は概ねナデ調整である。

3 類 地文に斜縄文を施すもので, 図50-1~6が該当する。出土量は少ない。原体は0段多条が約8割を占める。内面は条痕のものは少なく, ナデ調整や擦痕のあるものが多い。出土位置は, a種が調査区南側であるのに対し, b種の多くは調査区北側である。

a種 羽状縄文を施すもので, 図50-1・2が該当する。これらは, 異なる捻りの単節縄文を横方向回転で施文することによって羽状縄文を表出している。

b種 斜縄文を施すもので, 図50-3~6が該当する。5は0段多条原体を用いて横位方向に施

文されており、内面は横位方向に浅い条痕が施されている。3・4・6は、縄文が器面に強く施文されている。胎土は、I群1類や2類に比べ繊維の量が少ない。

4類 底部資料である。図50-7・8が該当する。共に燃糸文が施され底部が平底となる。

II群土器

中期前葉の土器群で、図51・52、53-1~3・11~13・15が該当する。本遺跡では主体となる大木7b式に、少数ながら関東系の阿玉台式が共存して出土している。

1類 大木7b式に相当するもので、図51・52が該当する。土器は頸部から口縁部にかけて「く」の字状に括れ、口縁部が緩やかに外傾する深鉢土器が主体を占める。浅鉢土器は極めて少ない。胎土は雲母や白色砂粒を比較的多く含み、焼成は良好なものが多い。内面はミガキも見られるが、丁寧なナデ調整が施されたものが多い。地文は単節縄文が多く使用され、その上に部分的に結節回転文が施されたものも見られる。文様は、隆線と沈線が平行して描かれたものが多く、交互刺突文や刺突文が施されたものも見られる。縄圧痕文は刺突文に比べて少ない。II群土器は、中期前葉の住居跡群が見られる調査区南側、B14・F16グリッドのLⅢaからまとまって出土している。

a種 隆線で区画し沈線を施すもので、隆線のみのもも含めた。図51-3・6、図52-1~4・6~8・11・16が該当する。図51-3は波状口縁を呈し、波頂部は楕円形の区画内に沈線が施されている。また、波頂部下に隆線が垂下する。同図6は波状口縁を呈し、口縁端部に沿って半截竹管による平行沈線が施文されている。図52-1は隆線と沈線が対弧線文が描かれ、その交点にボタン状の貼付文が取り付けられている。同図2・8・11は隆線が垂下するものである。同図3は横位方向の隆線に沿って平行沈線が施され、横帯楕円区画文が描かれており、区画内には刺突文が施されている。同図6・7・16は隆線が施されたもので、6は楕円形の横帯区画文が描かれ、7は横位方向の隆線上に縄文が施されている。16は地文に、縦方向回転による縄文が間隔を空け浅目に施されている。また、焼成後に補修孔が穿たれている。

b種 隆線で区画し縄圧痕文を施すもので、図51-1・8、図52-10・12が該当する。1は頸部が「く」の字状に括れ、胴部がやや膨らむ深鉢土器である。波状口縁を呈し、隆線が波頂部から垂下し、頸部では横位に巡る。また、隆線に沿って縄圧痕文が施されている。胴部には、波状口縁に対応したY字状の隆線が施されている。底部には網代痕が見られる。図51-8と図52-10は同一個体であり、頸部の横位隆線に沿って縄圧痕文が施されている。また、8には縦位方向の縄圧痕文が施される。図52-12は、横位の隆線に沿って縄圧痕文が施されている。

c種 縄圧痕文を施すもので、図51-7・9・10が該当する。7は波状口縁を呈する小型の土器である。内外面共に丁寧なミガキ調整を行なっている。9・10は口縁端部に沿って縄圧痕文が施されている。

d種 連続刺突文や交互刺突文を施すもので、図51-2のみが該当する。2は波状口縁を呈し、口縁端部に沿って隆線と沈線が施されている。頸部にも同様な横位の隆線が施され、その下側に「ハ」の字状の刺突が施されている。

e種 沈線で文様を描くもので、図52-5・9が該当する。5は上部に栴円文が、下部に波線が描かれている。9は平行沈線が3条垂下するものである。

f種 縄文のみのもので、図51-16、図52-13・15・17・19・21が該当する。単節縄文が縦方向回転で施文されたものが多い。図51-16は口縁部が内湾するもので、口縁端部に横方向回転の縄文が施されている。図52-14は結節縄文が縦位方向に施されている。同図18は縦方向回転で施文した羽状縄文である。同図21は無節縄文が施されている。

g種 無文のものを一括した。図51-4・5・11~15、17~21、図52-20・22・23が該当する。図51-4・5・13・14は複合口縁で口縁部に無文帯を持ち、4・5・14は外側に、13は内側に折り返されている。同図11・12は口唇部に刻目が施されている。同図20・21は内面に丁寧なナデ調整が施されており、21の口縁部内面には段が見られる。図52-23は胴部が内湾する破片で、表面にはミガキ調整が施されている。図51-20・21、図52-23は器形や器面調整から浅鉢土器と考えられる。

2類 阿玉台I a式に相当するものである。出土量は少ない。第1節では本類を3種別したが、遺構外からはb種に該当する遺物は確認されていない。

a種 隆線で区画し有節沈線や刺突文を施すもので、図53-1・3が該当する。1は瘤状の隆線が垂下し、口縁端部に沿って有節沈線が施されている。3は半截竹管状工具を用いた連続刺突文が隆線に沿って施されている。阿玉台式の範疇に入るものと推測される。

c種 有節沈線を施すもので、図53-2に該当する。波状口縁を呈し、波頂部には刻目が、口縁端部に沿って有節沈線が施されている。

3類 底部資料を一括したもので、図53-11~13・15が該当する。11は底面に網代の痕跡が見られ、その底径から比較的小型の土器と考えられる。12・13・15は無文で、丁寧なナデ調整が施されている。

Ⅲ群土器

縄文中期後葉~晩期の土器を一括した。図53-4~10・14が該当する。出土量は極めて少ない。そのほとんどがL Iから出土したものである。

1類 大木9式に相当するもので、図53-4が該当する。調査区内からは1点のみ出土した。口縁部が内湾する破片で、横位の太沈線が施され段が見られる。

2類 縄文後期前葉に相当するもので、調査区内からは2点が出土した。図53-5が該当する。沈線文が施され、縄文地文が磨消されている部分も見られる。

3類 縄文晩期に相当するもので、図53-6~10が該当する。全て半精製あるいは粗製土器であるが、概ね晩期中葉~後葉頃と思われる。6は網目状燃糸文が縦方向回転で施文され、下側には単節縄文が施されている。7・8は単節縄文を地文とするものである。9・10は、網目状燃糸文が縦方向回転で施された胴部破片である。

4類 底部資料である。図53-14が該当する。14は単節縄文を地文にもつ。

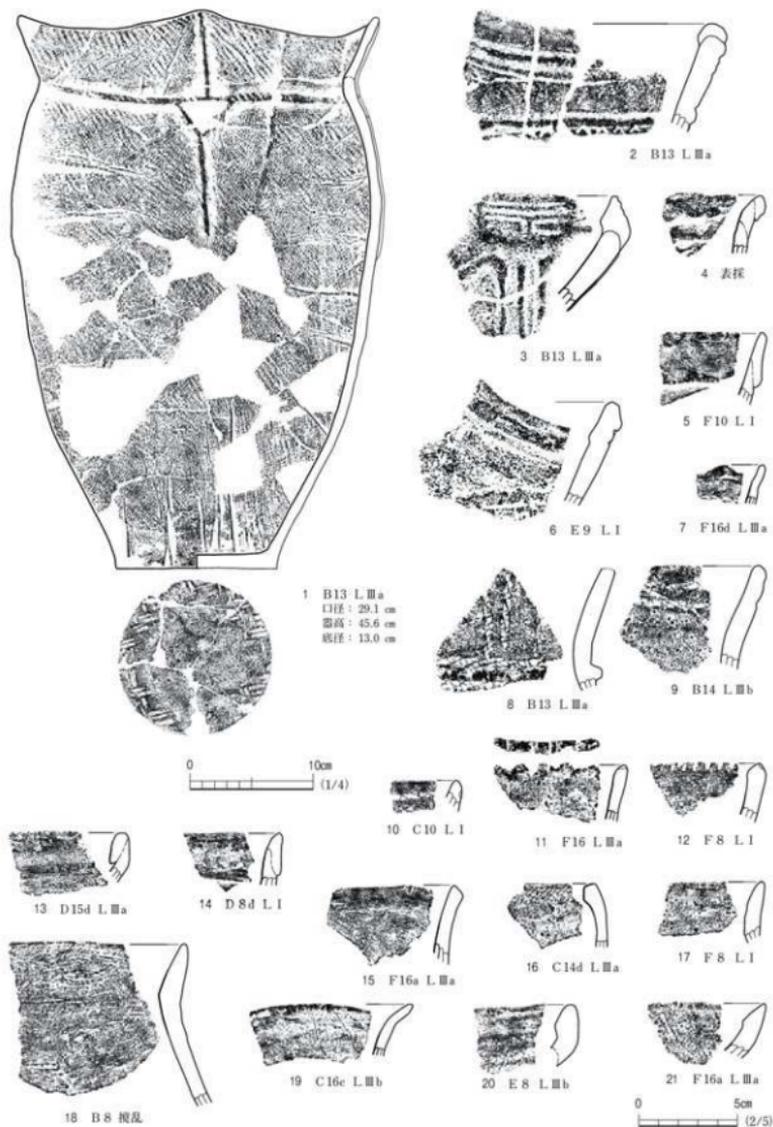


圖51 遺構外出土遺物(4)

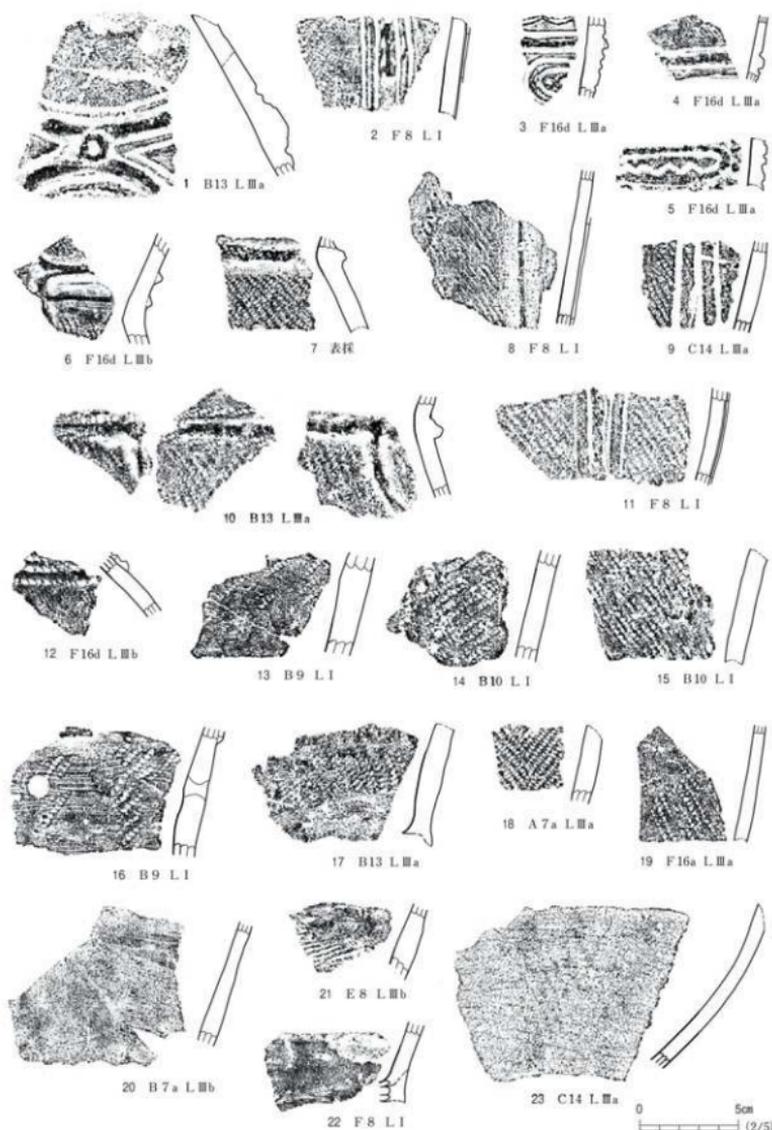


図52 遺構外出土遺物(5)

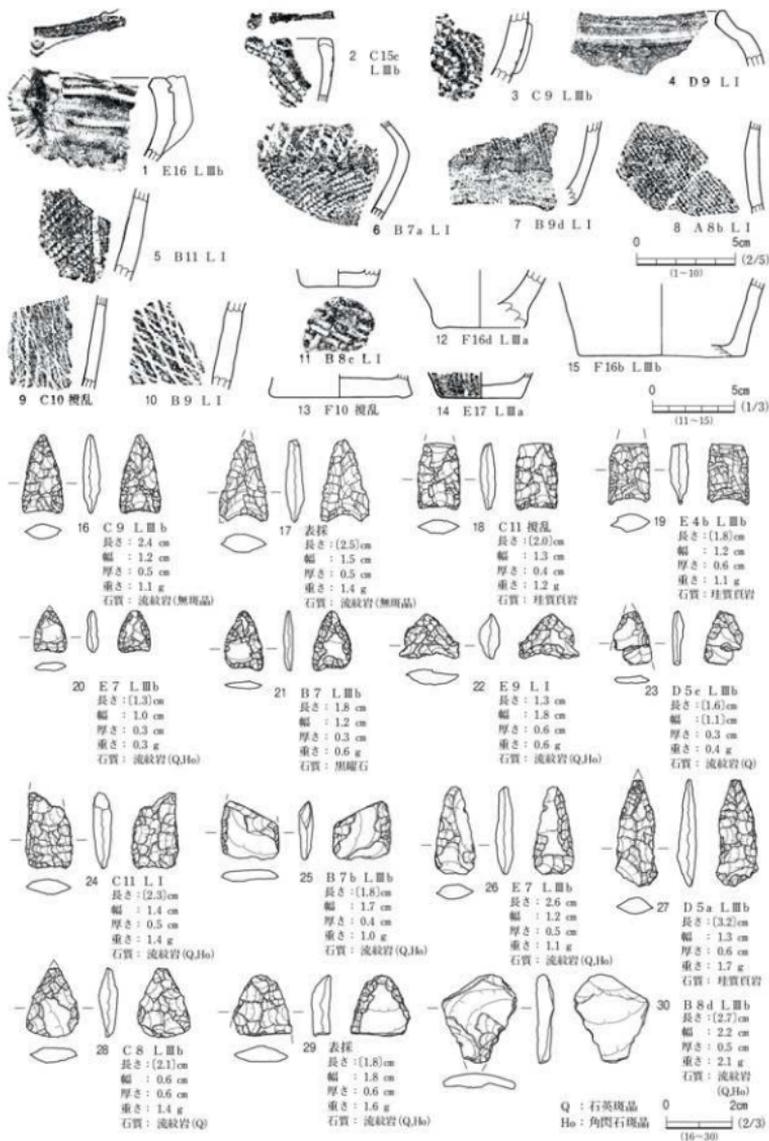


圖53 遺構外出土遺物(6)

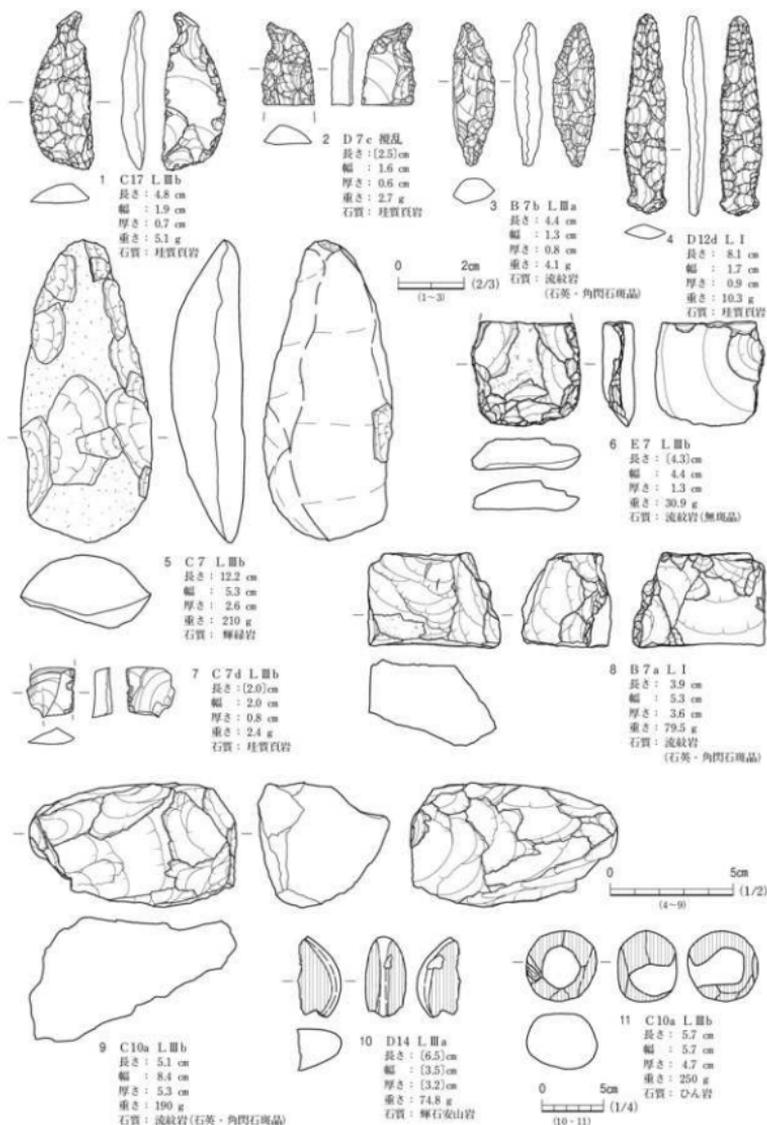


図 54 遺構外出土遺物(7)

石 器 (図47, 図53~55, 写真59・60)

出土石器の内訳は、製品や2次加工されたものが30点、剥片・チップ類が195点である。特に、調査区北側の縄文早期末葉の住居跡群周辺から多く出土している。

石 鎌 出土石器の中で最も多く、図53-16~29が該当する。16~22は基部の挟りが浅い凹基鎌である。このうち17~20は先端部が欠損している。20~22は小型の石鎌であり、22は鎌身が厚く不整形である。23~26は平基鎌である。23は先端部と基部の一部が欠損し、24・25は先端部が欠損している。25は基部が無加工で側縁部だけに調整が施されている。26・27は細身の石鎌で、26の側縁には無調整部分が見られる。27は胴部が僅かに括れ、基部に向かって鎌身がやや広がる。28は凹基鎌である。29は基部が失われているため、その形状が不明である。裏面には側縁部だけに調整が見られる。

石 錐 図53-30と図54-3が該当する。図53-30は表面の両側縁に調整剥離が施され、基部と裏面は無調整である。形状や調整から石錐のつまみ部と考えている。図54-3は一側縁部に厚みが残るため調整が施されていない。この厚さから石鎌には含めなかった。

石 匙 図54-1・2が該当する。縦型の石匙であり、裏面に比べ表面に丁寧な調整剥離が施されている。

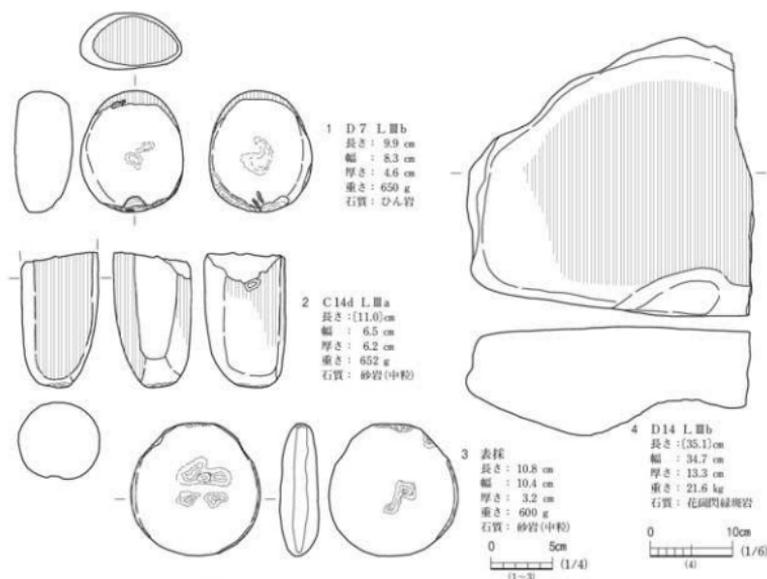


図55 遺構外出土遺物(8)

石 槍 図54-4が該当する。4は細身で長く、つまみ状の基部をもつ。

打製石斧 図54-5・6が該当する。5は表面の側縁部に調整が集中し、裏面は無調整に近い。刃部は自然面を使用したものと考えられる。6は欠損品で、表面には粗い調整が施されているが、裏面にはほとんど調整が見られない。

二次加工剥片 図54-7が該当する。7は上下の両端を欠損しているが、一側縁部に表裏面からの微細な調整剥離がみられる。

石 核 図54-8・9が該当する。いずれも各方向から剥片を採取した痕跡が確認される。8は大きさや形状から、これ以上剥片を取ることが難しいため残核と考えられる。

磨石・凹石・敲石 図54-10・11、図55-1～3が該当する。図54-10は磨石の破片資料で、表裏面に磨面が認められる。同図11は球状の磨石で、表裏面に多数の磨面が形成されている。図55-1は凹石で下部側面に敲打痕があり、上部側面には粗い磨面が形成されている。同図2は上半部が欠損する磨石で、両側面部に磨面、下端部に敲打痕が見られる。同図3は凹石で、表裏面の中央に凹部が見られる他、側面部には磨面、上端部には敲打痕が認められる。

石 皿 図54-4は大型の石皿で、表面に磨面が形成されている。また、裏面は粗い調整が施されており、安定して置けるように整形したものと考えられる。 (佐 藤)

第3章 自然科学分析

第1節 赤色顔料の蛍光X線分析

小林 啓(福島県文化振興事業団)

1. はじめに

縄文時代に使用されていた赤色顔料はベンガラ(Fe_2O_3)と水銀朱(HgS)の2種類であり、各々の発色原因となる金属元素が異なる。土器に付着した赤色顔料の種類を明らかにするため、X線分析顕微鏡(エネルギー分散型蛍光X線分析装置)による元素定性を行った。

2. 試料

縄文土器片1点。(図22-2, 縄文中期前葉の所産)文化財の分析は非破壊を原則とするため、分析用サンプルは採取せず土器そのものを分析した。

3. 方法

試料の元素分析はX線分析顕微鏡を用いて以下の条件により行った。

【分析条件】X線分析顕微鏡(堀場製作所製XGT-2700), X線管球:ロジウム(Rh), 検出器:半導体検出器, 測定雰囲気:大気, 管電圧:50kv, 管電流:1.0mA, 分析径:100 μm , 測定時間:120秒

4. 結果

分析の結果、赤色顔料が付着する箇所から鉄(Fe)が顕著に検出された。(図56)鉄(Fe)の検出は、

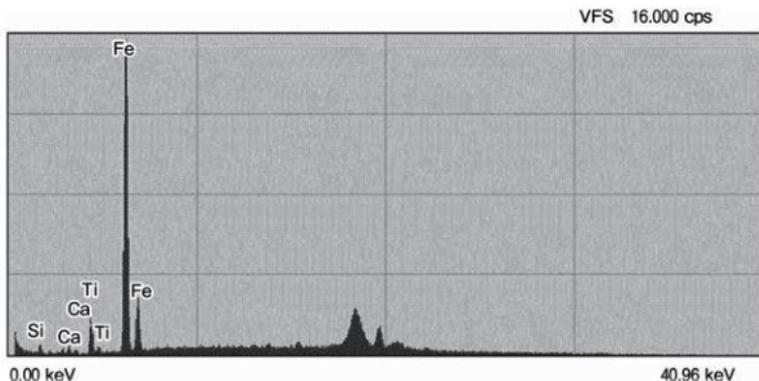


図56 赤彩土器のX線スペクトル

土器本体より顔料付着箇所において優位である。また、いずれの分析箇所からも水銀(Hg)が検出されないことから、付着する顔料は鉄由来の赤色顔料「ベンガラ」である可能性が高い。今後、顕微鏡観察による赤色顔料の粒形確認やX線回折分析による結晶構造の解析などが望まれる。

参考文献

成瀬正和1988「薄磯貝塚出土の赤色顔料関係遺物」『薄磯貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第19冊
松井敏也ほか1998「赤色顔料成分分析」『桜井古墳群上流佐支群7号墳』原町市埋蔵文化財報告書第27集

第2節 出土石器石質鑑定

パリオ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

常磐自動車道相馬工区の建設に伴う遺跡発掘調査で、原B遺跡からは縄文時代の各種の遺構や遺構外より石器が多数出土している。

本報告では、これらの石器類を対象として肉眼による石質鑑定を行い、器種と岩種の関係や、石材の産地について検討する。

2. 試料

今回鑑定した石器は原B遺跡出土試料73点である。各試料の遺物番号、種別、出土位置、層位等の詳細は、表2に示す。

3. 分析方法

当社技師1名が平成19年3月13日、財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部遺跡調査グループにおいて実施した。野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、五十嵐(2006)に示される分類基準に従って肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付す。

4. 結果

肉眼鑑定による結果を表2に示す。本遺跡における石材組成は円グラフとして図57に示す。器種および岩種についての集計結果は表3に示した。

原B遺跡においては、石器原石として火山岩類がもっとも多く使用され、流紋岩と黒曜石が合計34試料、次いで珪質頁岩が20点を占める。この3岩種の合計は54試料で今回調査した試料(73試料)の74.0%となる。

表2 出土石器一覧表

遺物番号	種類	出土位置	層位	材質	備考	遺物番号	種類	出土位置	層位	材質	備考
1	石鏃	B 7	L Ⅱ b	燧石		38	石鏃(欠)	B 8 4	L Ⅱ b	流紋岩	石英・角閃石含む
2	石鏃	E 7	L Ⅱ b	流紋岩	石英・角閃石含む	39	打製石斧	E 7	L Ⅱ b	流紋岩	無機品
3	石鏃	E 7	L Ⅱ b	流紋岩	石英・角閃石含む	40	2次加工副片	S G 03	礫岩	珩質頁岩	
4	石鏃	E 9	L 1	流紋岩	石英・角閃石含む	41	石鏃	S 1 01	Ⅰ	流紋岩	石英・角閃石含む
5	石鏃(欠)	C 11	L 1	流紋岩	石英・角閃石含む	42	石鏃		表採	流紋岩	無機品
6	石鏃(欠)	C 11	礫岩	珩質頁岩		43	石鏃(欠)	E 4 5	L Ⅱ b	珩質頁岩	
7	石鏃	D 5 a	L Ⅱ b	珩質頁岩		44	石鏃	B 7 b	L Ⅱ a	流紋岩	石英・角閃石含む
8	石鏃(欠)	D 5 c	L Ⅱ b	流紋岩	石英含む	45	石鏃	S K 01	礫岩	珩質頁岩	
9	石鏃	C 8	L Ⅱ b	流紋岩	石英含む	46	石鏃	S K 02	Ⅰ	珩質頁岩	
10	石鏃	C 9	L Ⅱ b	流紋岩	無機品	47	石鏃(欠)	D 7 c	礫岩	珩質頁岩	
11	石鏃	S 1 04	礫岩	珩質頁岩		48	磨製石斧	S 1 01	Ⅰ	輝緑岩	
12	石鏃	S 1 05	Ⅰ 4	流紋岩	石英・角閃石含む	49	打製石斧	S 1 02	礫岩	輝緑岩	細粒
13	石鏃	S 1 05	Ⅰ 4	燧石		50	打製石斧	S 1 05	Ⅰ 4	ひん岩	角閃石含む
14	石鏃	S 1 07	Ⅰ	珩質頁岩		51	磨製石斧	S 1 10	Ⅰ	流紋岩	無機品
15	石鏃	S 1 07	Ⅰ	流紋岩	石英・角閃石含む	52	打製石斧	C 7	L Ⅱ b	輝緑岩	
16	石鏃	S 1 07	Ⅰ	流紋岩	石英・角閃石含む	53	石鏃	S 1 05	Ⅰ 4	流紋岩	石英含む
17	石鏃	S 1 07	Ⅰ	流紋岩	石英・角閃石含む	54	磨石	D 7	L Ⅱ b	ひん岩	
18	石鏃	S 1 07	Ⅰ	流紋岩	石英・角閃石含む	55	磨石	S 1 11	Ⅰ	輝石安山岩	
19	石鏃	S 1 09	Ⅰ 4	珩質頁岩		56	磨石	S 1 12 S 1 13	Ⅰ Ⅰ	砂岩	粗粒
20	石鏃	S 1 13	Ⅰ	流紋岩	石英含む	57	磨石	S 1 13	Ⅰ	砂岩	中粒
21	石鏃	S K 34	Ⅰ 3	流紋岩	石英含む	58	石鏃	S 1 13	Ⅰ	砂岩	粗粒
22	石鏃(欠)		表採	流紋岩	石英・角閃石含む	59	磨石	S K 01	Ⅰ	流紋岩	石英・角閃石含む
23	2次加工副片	S 1 05	Ⅰ 4	珩質頁岩		60	磨石	S K 34	Ⅰ 3	黒雲母花崗岩	
24	石鏃	D 12 4	L 1	珩質頁岩		61	磨石	D 14	L Ⅱ a	輝石安山岩	
25	石鏃	S 1 05	Ⅰ 3	流紋岩	無機品	62	磨石	C 14 4	L Ⅱ a	砂岩	中粒
26	石鏃	S 1 05	Ⅰ 4	珩質頁岩		63	磨石	C 10 a	L Ⅱ b	ひん岩	
27	石鏃	S 1 07	Ⅰ	珩質頁岩		64	磨石		表採	砂岩	中粒
28	石鏃	C 17	L Ⅱ b	珩質頁岩		65	石鏃(欠)	S 1 05	表採	流紋岩	流状
29	石鏃	S 1 13	Ⅰ	流紋岩	縞状	66	石鏃(欠)	S 1 11	Ⅰ	花崗閃緑岩	
30	2次加工副片	S 1 13	Ⅰ	珩質頁岩		67	石鏃(欠)	S 1 12	Ⅰ	花崗閃緑岩	
31	2次加工副片	S 1 10	Ⅰ	珩質頁岩		68	石鏃(欠)	S 1 13	Ⅰ	安山岩	ガラス質
32	石鏃	S 1 07	Ⅰ	珩質頁岩		69	石鏃(欠)	S 1 13	Ⅰ	安山岩	ガラス質
33	石鏃	B 7 a	L 1	流紋岩	石英・角閃石含む	70	石鏃	D 14	L Ⅱ a	花崗閃緑岩	
34	石鏃	S 1 05	Ⅰ 4	流紋岩	流状	71	2次加工副片	S 1 07	Ⅰ 2	流紋岩	流状
35	石鏃	S 1 01	Ⅰ	流紋岩	石英・角閃石含む	72	2次加工副片	S 1 07	Ⅰ	珩質頁岩	
36	石鏃	C 10 a	L Ⅱ b	流紋岩	石英・角閃石含む	73	2次加工副片	C 7 4	L Ⅱ b	珩質頁岩	
37	石鏃(欠)	B 7 b	L Ⅱ b	流紋岩	石英・角閃石含む						

5. 考察

(1) 地質の概要

原B遺跡は阿武隈山地の東縁に位置する南相馬市原町市街の西部丘陵にある。本地域の西方には阿武隈山地東縁を構成する先デボン系から完新統まで幅広い地質系統が分布している。大局的には遺跡西方約1～2kmを南北に走る双葉断層を境に西側に中・古生界、東側には一部に中生界、大部分は新生界が分布する。当地方の中・古生界は双葉断層とさらにその西方約8kmを双葉断層と平行に走る畑川破砕帯に挟まれ、この地帯に分布する変成岩類や堆積岩類は岩質的な特徴から南部北上帯からの延長部と考えられている。

1) 双葉断層以西の中・古生界

畑川破砕帯と双葉断層に挟まれた地域には苦鉄質変成岩を主とする助常変成岩類、泥質岩・砂岩・石灰岩よりなる相馬古生層、下部白亜系とみなされる流紋岩質の火砕流堆積物、安山岩溶岩とデイ

サイト溶岩で構成される高倉層および白亜紀前期の貫入とされる中—粗粒黒雲母花崗岩体と中粒角閃石黒雲母花崗閃緑岩体が分布する。

2) 双葉断層以東の中生界(相馬中村層群)

双葉断層の東側に沿って分布し、もっとも厚い部分で約3kmの幅を示すが、大谷地付近以南には露出していない。相馬中村層群はジュラ紀—白亜紀に堆積した地層で、7層から構成されるが、久保ら(1990)によると赤柴地域では上位4層の柄窪層・中の沢層・富沢層・小山田層が露出する。柄窪層・中の沢層・富沢層はいずれも砂岩優勢の堆積層で、アルコース質の砂岩に富み、一部に頁岩を挟む。地域北方の小池に露出する中の沢層の上部には「鳥の巣型石灰岩」の小池石灰岩が存在するが、当地域では欠如している。

相馬中村層群の最上部の小山田層は海成黒色頁岩で構成される地層である。

3) 新生界

中新統・鮮新統で構成される新第三系とこれを覆って第四系が分布している。新第三系はおもに双葉断層の西側に分布する中新統の名取層群塩手層と天明山層、および双葉断層東側に分布する鮮新統の仙台層群亀岡層、辰の口層、向山層および大年寺層が堆積している。

久保ら(1990)によると本地方に分布する地層の主な構成物は次のとおりである。最下部層の亀岡層は青灰色の泥岩を主とし、亜炭層と酸性凝灰岩層を挟む。亀の口層は貝化石を含む塊状の泥岩、向山層は礫岩・砂岩・泥岩・亜炭および凝灰岩で構成され、本層の一部の石英質砂岩相は珪砂として採掘された。大年寺層は、下部は砂岩、上部は泥岩で構成される。

第四紀は高位—低位段丘堆積物として海岸に近い丘陵地に広く堆積している。

(2) 原B遺跡

1) 岩種と器種の関係

石鏃には流紋岩が最も多く使用されて18点、次いで珪質頁岩6点および黒曜石が2点用いられる。いずれも堅硬緻密な岩質を有している。

石匙・石錐・石槍はいずれも石鏃と同じで流紋岩と珪質頁岩が使用される。石匙は全6試料中の5点が珪質頁岩、石錐は逆に全3試料が流紋岩である。石槍は2試料で珪質頁岩である。2次加工剥片と石核にも流紋岩と珪質頁岩がみられる。2次加工剥片は全7試料中6試料が珪質頁岩で1試料が流紋岩、石核では全6試料中の5点が流紋岩で1試料が珪質頁岩となっている。石鏃・石匙・石錐・石槍・石核・2次加工剥片の岩種構成は図57に示されるとおりであり、流紋岩および珪質頁岩が大部分を占める。

これら石器に使用されている流紋岩は次の5種に細区分される。(1)黒曜石：流紋岩のガラス岩が黒曜石である。2試料検出され、石鏃に用いられている。(2)無珪晶流紋岩：白色緻密質で堅硬な岩質を示す。全部で5試料が検出されている。石鏃に2点、石匙、磨製石斧および打製石斧各1点に使用されている。(3)石英珪晶を有する流紋岩：基質は無珪晶流紋岩と類似し、堅硬緻密質である。石鏃に4試料用いられるほかに、石核1点に認められた。(4)石英・角閃石珪晶を含む流紋

表3 出土石器の器種・岩種表

		石鏃	石匙	石錐	石核	磨製石斧	打製石斧	石核	石皿	2次加工剥片	敲石	磨石	凹石	計
堆積岩類	珉質頁岩	6	5	0	2			1		6				20
	砂岩								1		1	2	1	5
火山岩類	黒曜石	2												2
	流紋岩	18	1	3	0	1	1	5	1	1				32
	安山岩								2			2		4
半溶成岩類	花崗斑岩								2					2
	ひん岩						1				2			3
	輝緑岩					1	2							3
溶成岩類	花崗岩										1			1
	花崗閃緑岩								1					1
計		36	6	3	2	2	4	6	7	7	1	8	1	73

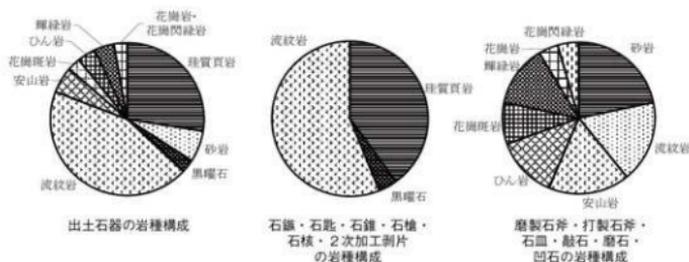


図57 出土石器の岩種構成

岩：石英と角閃石の斑晶が明瞭に認められる流紋岩。前記石英斑晶を有する流紋岩中にも微晶の角閃石が認められることからこの両岩は互いに漸移する関係にある可能性がある。12試料が石鏃に、3試料が石核として検出されている。(5)縞状の流状組織を有するガラス質流紋岩。4点検出され、石錐1点、石皿1点、2次加工剥片および石核1点である。

石鏃・石匙・石錐・石核・石杖・2次加工剥片が珉質頁岩と流紋岩を用いているのに対し、石斧・石皿・磨石は前者とは異なる岩種の組み合わせがみられる(図57)。

磨製石斧は全2試料のうち1試料が輝緑岩、1試料は無斑晶流紋岩と判定された。打製石斧はひん岩・無斑晶流紋岩が各1試料、輝緑岩が2試料認められた。

石皿はガラス質安山岩が2試料見られるほかは、粗粒砂岩・花崗斑岩・花崗閃緑岩・花崗閃緑岩・流状組織を示す流紋岩を原料とする。

敲石は中粒砂岩、磨石は輝石安山岩・ひん岩が各2点、粗粒砂岩と中粒砂岩・黒雲母花崗岩および石英・角閃石斑晶を含む流紋岩が各1試料と認められた。凹石1試料は中粒砂岩と判定される。

2) 岩石の産地推定

遺跡が分布する地域は阿武隈山地の東縁にあり、阿武隈山地の岩石が在地性の原料として供給されやすい環境にあるが、阿武隈山地の岩石と認識されるものは少ない。

a) 異地性の岩石

珪質頁岩、黒曜石、流紋岩は54試料で調査を行った試料の74.0%を占める。これらはいずれも原町地域には産地が見られない岩種である。ここで、相馬中村層の最上部にある小山田層は黒色頁岩を主とするが、しばしば珪質頁岩を挟在する。しかし、本遺跡から出土する珪質頁岩とは岩相を異にする。出土した珪質頁岩は新第三系中新世に産し、硬質頁岩あるいは硬質泥岩・珪質泥岩とも呼ばれる岩石である。秋田県の女川層、山形県の草薙層、新潟県の七谷層およびその相当層に広汎に分布し、その産地を特定することはできない。また、流紋岩については、郡山市北西の高玉地域、福島市飯坂地域から宮城県刈田郡七ヶ宿町にかけての地域、および、宮城県白石市などにその分布が知られている。また、石斧に使用されている輝緑岩は阿武隈山地にも産する岩石であるが、搬入されることの多い器種であり、その判定は難しい。

b) 在地性の岩石

遺跡群の東方には阿武隈山地を形成する変成岩類・花崗岩類・中・古生層・斑れい岩等が分布する。これらの岩石は小型の精巧な石器に使用されることは少なく、比較的大型の石器に使用される。石皿・巖石・磨石・凹石に用いられている砂岩・安山岩・ひん岩・花崗岩・花崗閃緑岩はいずれも双葉断層西側の阿武隈山地に産する在地性の岩石と判定される。

引用文献

久保和也・柳沢幸夫・吉岡敏和・山元孝広・滝沢文教, 1990, 原町及び大豊地域の地質, 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 地質調査所, 155p.

柳沢幸夫・山元孝広・坂野靖行・田沢純一・吉岡敏和・久保和也・滝沢文教, 1996, 相馬中村地域の地質, 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 地質調査所, 144p.

五十嵐俊雄, 1986, 福島県相馬地区の粘土鉱床, 陶磁器原料資源調査報告書(昭和60年度), 工業技術院地質調査所, p.41-56.

五十嵐俊雄, 2006, 考古資料の岩石学, バリノ・サーヴェイ株式会社, 194p.

第3節 炭化材の樹種同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

表4 樹種同定結果

番号	資料番号	遺構	出土地点・層位	種別	備考	結果(学名/和名)
1	F B2006. H01	S 108	ℓ 3	炭化材	No.2 <i>Hovenia</i>	ケンボナシ属
2	F B2006. H02	S 108	ℓ 3	炭化材	No.3 <i>Hovenia</i>	ケンボナシ属
3	F B2006. H03	S 108	ℓ 3	炭化材	No.4 <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
4	F B2006. H04	S 108	ℓ 3	炭化材	No.5 <i>Hovenia</i>	ケンボナシ属
5	F B2006. H05	S 108	ℓ 3	炭化材	No.6 <i>Hovenia</i>	ケンボナシ属
6	F B2006. H06	S 108	ℓ 3	炭化材	No.7 <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
7	F B2006. H07	S 108	ℓ 3	炭化材	No.8 <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
8	F B2006. H08	S 108	ℓ 3	炭化材	No.9 <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
9	F B2006. H09	S 108	ℓ 3	炭化材	No.10 <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
10	F B2006. H10	S 108	ℓ 3	炭化材	No.12 <i>Hovenia</i>	ケンボナシ属
11	F B2006. H11	S 108	ℓ 3	炭化材	No.16 <i>Hovenia</i>	ケンボナシ属
12	F B2006. H12	S 108	ℓ 3	炭化材	No.19 <i>Hovenia</i>	ケンボナシ属

2. 試料

試料は、縄文時代中期前葉の焼失した住居跡(8号住居跡)より出土した、柱、屋根等の住居の構築材と考えられる炭化材12点である。

3. 方法

試料を割折して新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柁目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

結果を表4に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図58に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図58-1

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメドキ科 図58-2・3

横断面：大型で厚壁の丸い道管が、単独あるいは2~3個放射方向に複合して配列する環孔材である。晩材部では小型で厚壁の道管が単独あるいは放射方向に2~3個複合してまばらに散在する。

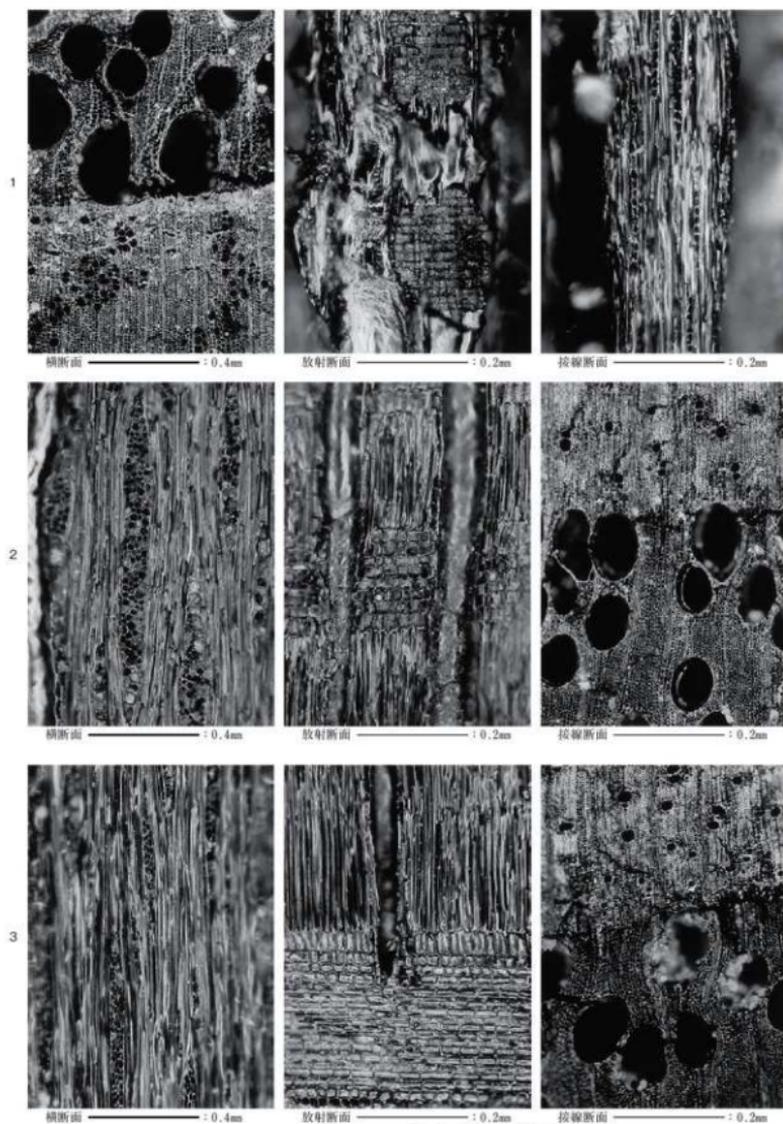


図58 炭化材の顕微鏡写真

- | | | | |
|-------|--------------|-------|--------|
| 1. 3 | F B2006, H03 | No.4 | クリ |
| 2. 2 | F B2006, H02 | No.3 | ケンボナシ属 |
| 3. 11 | F B2006, H11 | No.16 | ケンボナシ属 |

道管の径は早材から晩材にかけて徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。軸方向柔細胞は周囲状を示す。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～6細胞幅である。

以上の形質よりケンボナシ属に同定される。ケンボナシ属には、ケンボナシ、ケケンボナシがあり、ケンボナシは北海道(奥尻島)、本州、四国、九州に分布する。ケケンボナシは本州(西部に多い)、四国に分布する。どちらも落葉高木である。材は建築、家具、楽器、器具など広く用いられる。

5. 所見

同定の結果、原B遺跡の炭化材は、クリ5点、ケンボナシ属7点であった。クリは温帯に広く分布する落葉高木で、暖温帯と冷温帯の中間域では、純林を形成することもあり、乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。材質は重厚で保存性が良く、柱材などの建築材などに適する。ケンボナシ属は温帯に広く分布する落葉高木で山野に生育する。材質は強さ中庸で、切削、加工は容易である。いずれの樹種も広葉樹ではあるが、高木であり大きな材が取れ、住居の構築材に適する。いずれも当時、遺跡の周辺に分布していたと考えられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.20-48。

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.49-100。

島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第1号，植生史研究会，p.242

第4節 放射性炭素年代測定(AMS測定)

株式会社 加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

原B遺跡は、福島県南相馬市原町区馬場字原(北緯37°36'41"，東経140°55'47")に所在し、太田川北側の段丘面上に立地する。

(2) 測定の意義

遺跡内に位置する複数の住居跡の前後関係および集落の継続期間を明らかにする。

(3) 測定対象試料

測定対象試料は、2号特殊遺構底面直上から出土した土器付着炭化物(FB2006.001)、5号住居跡床面直上から出土した土器付着炭化物(FB2006.002)、8号住居跡覆土3層から出土した炭化物

(FB2006.003), 合計3点である。

(4) 化学処理工程

- 1) メス・ビンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理, アルカリ処理, 酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(還元)し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(5) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

(6) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。
複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰;パーミル)で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_\text{S} - {}^{14}\text{A}_\text{R}) / {}^{14}\text{A}_\text{R}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_\text{S} - {}^{13}\text{A}_\text{R}) / {}^{13}\text{A}_\text{R}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{14}\text{A}_\text{S}$: 試料炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度: $({}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C})_\text{S}$ または $({}^{14}\text{C} / {}^{13}\text{C})_\text{S}$

${}^{14}\text{A}_\text{R}$: 標準現代炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度: $({}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C})_\text{R}$ または $({}^{14}\text{C} / {}^{13}\text{C})_\text{R}$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度(${}^{13}\text{A}_\text{S} = {}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C}$)を測定し、PDB(白亜紀のベレムナイト(矢石)類の化石)の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に ${}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に[加速器]と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰)であるとしたときの ${}^{14}\text{C}$ 濃度(${}^{14}\text{A}_\text{N}$)に換算した上で計算した値である。(1)式の ${}^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_\text{N} = {}^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_\text{S} \text{として } {}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_\text{S} \text{として } {}^{14}\text{C} / {}^{13}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_\text{N} - {}^{14}\text{A}_\text{R}) / {}^{14}\text{A}_\text{R}] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好でその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

${}^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC(percent Modern Carbon)がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \text{ (‰)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age; yrBP)が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(\text{pMC} / 100)$$

表5 放射性炭素年代測定結果

試料番号	遺跡名	遺構	層位	形態	Libby Age (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加藤法)	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	ρMC (‰)
F B2006_001	原田	S X02	戦前	炭化物	6320±40	-21.53±0.56	-544.7±2.2	45.53±0.22
F B2006_002	原田	S 105	塚高	炭化物	6240±40	-26.92±0.56	-539.9±2.2	46.01±0.22
F B2006_003	原田	S 108	#3	炭化物	4420±40	-27.65±0.60	-423.4±2.7	57.66±0.27

表6 暦年較正年代

試料番号	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し			暦年較正年代 (yrBP)	暦年較正年代 (1 σ)	暦年較正年代 (2 σ)
	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	ρMC (‰)	Age (yrBP)			
F B2006_001	-541.4±2.2	45.86±0.22	6260±40	6319±38	5330 B C - 5220 B C (68.2%)	5370 B C - 5210 B C (95.4%)
F B2006_002	-541.7±2.2	45.83±0.22	6270±40	6255±39	5300 B C - 5200 B C (53.4%) 5160 B C - 5110 B C (9.4%) 5100 B C - 3070 B C (5.3%)	5310 B C - 5190 B C (26.5%) 5180 B C - 5060 B C (26.9%)
F B2006_003	-426.6±2.6	57.34±0.26	4470±40	4423±37	3270 B C - 3240 B C (6.1%) 3190 B C - 3090 B C (46.1%) 2990 B C - 2930 B C (15.9%)	3330 B C - 3210 B C (19.8%) 3180 B C - 3150 B C (2.1%) 3130 B C - 2910 B C (73.5%)

【参考例】暦年補正 Radiocarbon determination

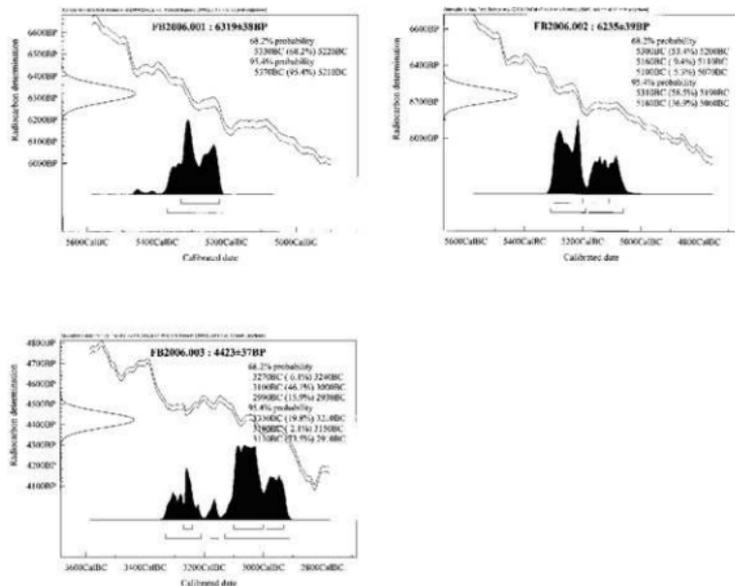


図59 暦年補正

- 5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。
- 6) 校正暦年代の計算では、IntCal04データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCal3.10校正プログラム(Bronk Ramsey1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

(7)測定結果

2号特殊遺構出土の土器付着炭化物(FB2006.001)が $6320 \pm 40\text{yrBP}$ 、5号住居跡出土の土器付着炭化物(FB2006.002)が $6240 \pm 40\text{yrBP}$ 、8号住居跡出土の炭化物(FB2006.003)が $4420 \pm 40\text{yrBP}$ の ^{14}C 年代である。暦年校正年代($1\sigma = 68.2\%$)は、2号特殊遺構出土試料が $5330\text{BC} \sim 5220\text{BC}$ 、5号住居跡出土試料が $5300\text{BC} \sim 5200\text{BC}$ (53.4%)・ $5160\text{BC} \sim 5110\text{BC}$ (9.4%)・ $5100\text{BC} \sim 5070\text{BC}$ (5.3%)であり、縄文時代早期末に相当する。8号住居跡出土試料は、 $3270\text{BC} \sim 3240\text{BC}$ (6.1%)・ $3100\text{BC} \sim 3000\text{BC}$ (46.1%)・ $2990\text{BC} \sim 2930\text{BC}$ (15.9%)であり、縄文時代中期前葉から中葉にかけての年代である。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。(図59,表5・6)

参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program. *Radiocarbon*, 37 (2) 425-430
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon*, 43 (2 A) 355-363
- Bronk Ramsey C., J. van der Plicht and B. Weninger (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 43 (2 A) 381-389
- Reimer et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

第4章 ま と め

第1節 遺物について

土 器

ここでは、本遺跡から出土したⅠ・Ⅱ群土器について若干のまとめを試みる。

Ⅰ群土器

縄文早期末葉～前期最初頃に位置づけられる土器群である。今回の調査では土器群の中で最も多く、2,000点以上出土している。本群は4類10種別し、主なものを図60に集成した。器形は口縁部が外反し、底部が尖底を呈するものが主体を占める。胎土には多くの繊維混入痕が見られる。内面調整は、貝殻条痕が施されたものが約半数を占めるが、ナデ調整や擦痕のあるものも比較的多く見られる。

1類a種は口縁端部に刻目や圧痕を施すものである。6号住居跡の図14-1は絡条体圧痕が口縁上端内面に斜位方向に施され、図48-5は貝殻圧痕が施されている。

b種は口縁端部直下に横位方向の隆帯を施すものである。隆帯は断面が三角形を呈し、器面に強く貼り付けられている。主に調査区南端からまとまって出土しており、この地点からは、前期最初頭まで下る可能性のある3類a種も共に出土している。調査区北側では1・2類土器が多く出土しているが、1類b種はほとんど出土していない。このため、1類b種と他の1・2類土器との間には時期差がある可能性も考えられる。

c種は沈線を施すもので、出土量が少なく、1・5号住居跡のみから出土している。図7-6・7と図11-7は大畑G式に近い特徴が見られ、先端が幅広い工具による沈線で施文されている。

d種は地文のみのもので、縄文早期末葉の土器の約8割を占める。器形は、尖底の底部から胴部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反する。地文の撚糸文は、胴部に斜位や縦位方向で施文され、一部格子目状に交差させたものも見られる。このため施文法は乱雑な印象を受ける。口縁上端の内面には、横位や斜位方向に撚糸文が施されている。

2類土器も1類と同様、地文のみのc種が多数を占める。口縁端部に刻目や沈線を施したa・b種は極めて少なく、中でもb種は図49-14に示した1点のみである。本類土器は、いわゆる日向前B式に比定される土器群と考えられる。本遺跡の5・6号住居跡と遺構外のLⅢbからは、1・2類土器が共伴して出土しており、このような例は、上田郷VI遺跡包含層や中ノ沢A遺跡4号住居跡でも見られる。上田郷VI遺跡1次調査報告の中でそれらの土器の共伴関係について本間宏氏が指摘しているが、本遺跡の共伴関係でも同様のことが言えよう。

3類は羽状縄文や斜縄文を施すもので、図50-1・2のように、原体の施文方向を変えて羽状縄文を施したのや、図50-3・4・6のように器面に原体を強く押し当て施文したのが見られる。

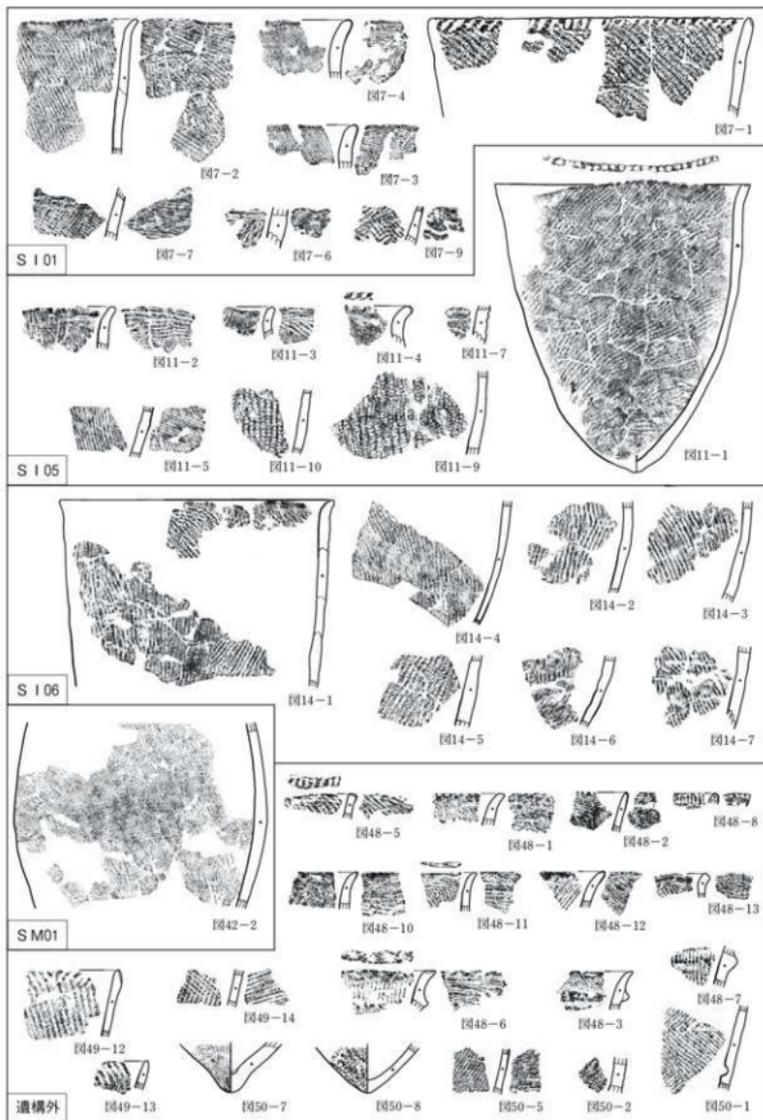


図60 I群土器

これらは、縄文原体の施文技法や胎土に混和される繊維の量が1・2類土器に比べて少ない点から、前期初頭の花積下層式に近い特徴を持つと考えられる。b種は、0段多条原体で施文され、内面に条痕や擦痕の見られる土器である。出土量は少ないものの、1号住居跡の図7-1や5号住居跡の図11-1など、器形を復元できる資料が出土している。口縁端部に刻目(スリット)や刺突を持つ点、0段多条原体を用いる点など、2類a種に非常に近い特徴を持つ。おそらく、原体を施文する際に2類土器が変異したものと考えられる。また、この類型は羽白D遺跡5号住居跡の例でも見られるように、後続する花積下層式まで残るものと考えられる。

以上のように本群土器は、器形の特徴や燃糸文を主体とする点等、大畑G式に近い特徴が強く見られる。しかし、大畑G式に特徴的な沈線が描かれた土器が極めて少数である点や、地文主体の土器が多数を占める点など、大畑G式とは異なる点も見られる。このことは地域差、もしくは時間的な差異を意味するものと考えられる。

本遺跡と同様の土器組成を示す福島県の代表的遺跡としては、いわき市中ノ内C遺跡14・15号住居跡、南相馬市萩原遺跡3号住居跡、中ノ沢A遺跡4号住居跡などが挙げられる。これらの遺跡の中には、前述した大畑G式土器の分布範囲と重なるものもあり、このことから地域的な差異とは言いつけられないようである。また、3類b種には後続する花積下層式の特徴が見られる。このことから本群土器は、縄文早期末葉から前期最初頭への過渡期に位置づけられるものとする。

本群土器の中では、1類b種とした隆帯を口縁端部直下に貼り付ける土器が、他の1・2類の土器とは別の地点から出土している点に留意する必要がある。このような差異が段階的な差によるものなのか、今後の重要な検討課題となろう。

II 群土器

本群土器は、大木7b式と阿玉台Ia式に比定される。図61に本群土器の主なものを集成した。1類は、頸部が「く」ノ字状に括れ、胴部が緩く膨らむ深鉢土器が主体を占める。浅鉢土器は少ない。文様はa～g種に区分した。隆線で区画し沈線を施すもの(a種)、隆線で区画し縄瓦痕文を施すもの(b種)、縄瓦痕文を施すもの(c種)、連続刺突や交互刺突を施すもの(d種)、沈線で文様を描くもの(e種)が本群土器の文様を構成する主要要素である。この他、粗製な土器として縄文地文のみのもの(f種)と無文のもの(g種)がある。今回の調査において、10・13号住居跡やB14グリッドLⅢaから比較的まとまって出土しており、これらは若干の差異が見られるものの、ほぼ同時期の土器群と考えられる。

10号住居跡の土器は、図22-1がa種、図22-2がd・e種、図22-3・図23-1～3がf種に該当する。図22-3は刻目を持つ瘤と結節縄文を特徴とするもので、図42-3の2号埋設土器に共通する。図22-2は大型の浅鉢土器で福島県内では類例が少ないが、宮城県嘉倉貝塚446号住居跡からは同様な浅鉢土器が出土している。図22-1は波頂部にS字状の横位渦巻が施され、頸部に隆線や沈線で楕円形横帯区画が描かれている。このような土器は法正尻遺跡、上ノ台A遺跡、上ノ台B遺跡、大平・後関遺跡など県内全域で出土しており、仙台湾岸地域では類例が少ないことから、

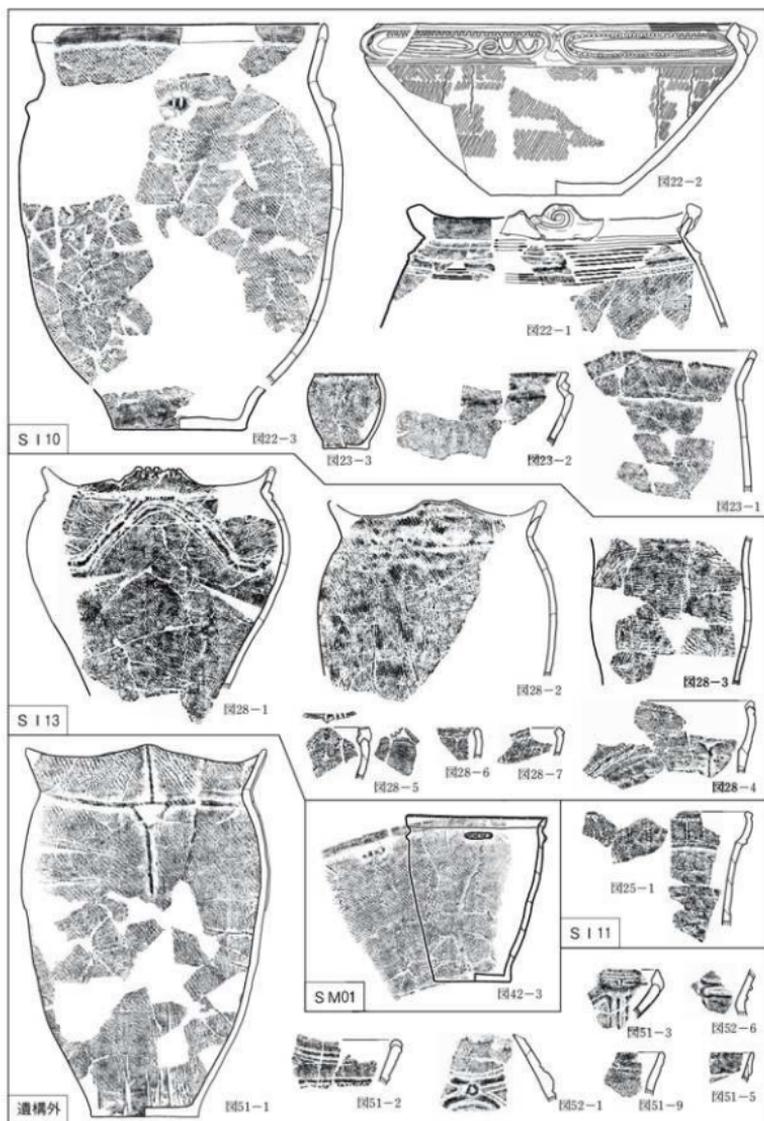


図61 II群土器

福島県内の大木7b式の代表的な類型と考えられる。

13号住居跡の土器組成は、図28-1のd種、図28-2・3のf種、図28-4～7のⅡ群2類からなる。図28-1は、隆線に弧線を描いた上下に並行沈線を施し、一部に交互刺突を加えている。このような土器は、宮城県小梁川遺跡包含層に類例が多く見られ、仙台湾岸地域の影響を受けたものと考えている。図28-5～7は阿玉台I a式の特徴を持つもので、有筋沈線やY字状垂下隆線が施されている。これらの胎土は雲母を含むものが多い。これに対し、同じ阿玉台I a式である図28-4や11号住居跡の図25-1には、大木7b式と同様に雲母の少ないき細かい胎土が使用されており、興味深い。

遺構外ではB14グリッドLⅢ aから多く出土している。これらは住居内から出土した土器に比べ、図51-1・9のように、縄圧痕文が施されたものが多い。

本群と同様な土器組成が報告されている福島県内の遺跡として、上ノ台B遺跡、大平・後関遺跡、月崎A遺跡、法正尻遺跡等が挙げられる。法正尻遺跡からは該期の土器が多く出土しているが、基準とされた415号土坑出土土器は、口縁部に波状口縁から変形した突起が貼付されている点や、沈線で文様が描かれている点が本群土器と異なっている。また、阿玉台I b式が共伴することから、これらの土器は本群土器より新しいものと考えられる。大平・後関遺跡の10号住居跡と上ノ台B遺跡包含層から出土した土器は、交互刺突文や隆線に沈線を沿わせて描いた区画文、頸部に刻目を施した瘤、結節縄文、複合口縁等が文様構成の主な要素である。これに阿玉台I a式が伴う点は、本群土器に最も近い内容である。

本遺跡は、上ノ台B遺跡や大平・後関遺跡と同様、福島県北部に位置し、仙台湾岸地域に多く見られる対弧文を特徴とする土器群の影響を強く受けているものと考えられる。その一方で、東関東を中心に分布する阿玉台I a式と大木7b式が共伴することから、南北の文化の接点に位置するとと言える。

本遺跡から出土した土器は、これまで不明瞭であった大木7b式と阿玉台I a式の共伴関係を明らかにするだけでなく、関東地域と福島県地域、そして仙台湾岸地域を結ぶ広域編年に大きな役割を果たす資料となると考えられる。
(中野)

石 器

本遺跡から出土した石器は755点である。この他に、7号住居跡から出土した微細剥片については、表1に示したとおりである。石器の内訳は石鎌26点、石錐3点、石槍2点、石匙6点、石斧6点、磨石・凹石・敲石10点、石皿類7点、2次加工剥片7点、石核6点で、それ以外は剥片である。これらの石器は、概ね縄文早期末葉～前期最初頭と縄文中期前葉に所属するものと考えている。石器の器種組成は、一般的な縄文集落で認められるものである。ここでは、出土量の多い縄文早期末葉～前期最初頭の特徴的な石器についてまとめる。

石鎌の多くは三角形を呈する。無茎で、基部の形状が平らなもの、挟りが入るもの、丸くなるもの

のに分けられる。このうち、基部が平らなものと基部に僅かな抉りが入るものが多い。縦長の石鏃は、器面全体に調整剥離が施されているが、それ以外は周縁部に簡単な調整剥離が行なわれたのみで一次剥離面が残されている。

石匙は全て縦長である。表面は全面に調整剥離が施され、右側縁が直線的に、左側縁が弧を描くように整形されている。裏面は一側縁に調整剥離が加えられただけで主要剥離面は残されている。

石斧は打製石斧4点と磨製石斧1点である。打製石斧は楕形・木葉形・短冊形に分けられ、小型のものが多い。小型の3点は、礫や厚手の剥片に粗雑な加工を施した片刃石斧で、裏面には自然面や主要剥離面が残されている。図54-5は大型の石斧で、側縁部に僅かな調整を加えただけで、先端の尖った自然面を両刃としている。打製石斧の刃部は、大型が両刃の丸刃に、小型が丸刃と直刃に分けられる。図7-13の磨製石斧は刃部が欠損しているが、形状は楕形を呈する。部分的に磨いて形状を整えたものである。基部には敲打痕が認められることから、楔あるいはノミ等に使用されたものと考えられる。これらの石斧は、刃部に使用痕が認められないため、縦斧あるいは横斧の判断ができなかった。

剥片石器の石材としては、石英と角閃石斑晶を含む白色の流紋岩が多用されている。この流紋岩は、いわき市連合遺跡で露頭が確認されていることから、この遺跡の周辺から持ち込まれたものと考えられる。この他に、特徴的な石材として黒曜石が挙げられるが、産地は不明である。石鏃2点と小剥片2点だけが出土し、量が少なく製品や剥片が小さいことから、製品あるいは小さな原石として搬入された可能性が高い。

以上のことから、本遺跡の縄文早期末葉～前期最初頭の石器の特徴として、石鏃や石匙の形状に統一性が見られること、石斧は非常に簡素な作りであることが挙げられる。石材は、石英と角閃岩を含む白色の流紋岩が石器全体の約7割を占めることから、この流紋岩がこの地域で最も入手しやすい石材であったと考えられる。また、黒曜石の出土は、当時の広域的交流を示す貴重な資料と言える。(国井)

第2節 遺構について

原B遺跡からは竪穴住居跡13軒、土坑39基、焼土遺構23基、土器埋設遺構2基、特殊遺構2基、ピット6基の縄文時代の遺構が検出された。これらの遺構は、概ね縄文早期末葉～前期最初頭と縄文中期前葉の2時期に分けられ、各時期の遺構が分かるように図62に示した。本節では、これらの遺構の構造や機能等の特徴についてまとめる。なお、今回の調査では、各時期の遺構が調査区外に広がりを示すことや、後世の削平や調査区南縁の段丘崖崩落等によって遺構が消失している可能性が高いことから、集落の全貌が明らかになったとは言えない。

縄文早期末葉～前期最初頭の遺構

該期の遺構には、竪穴住居跡6軒(1・2・4～7号)、土坑7基(1・2・14・16・25・33・38号)、

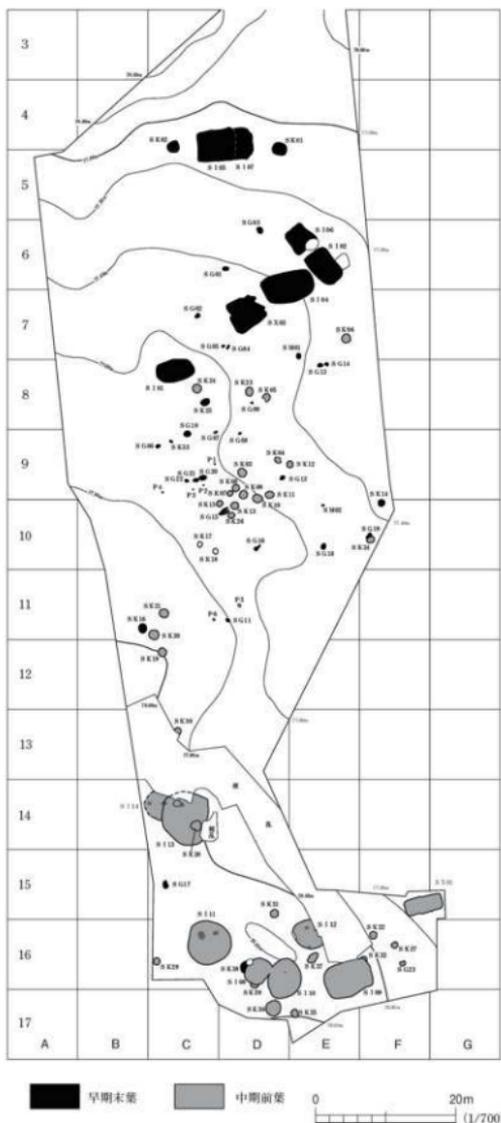


図62 縄文早・中期の遺構

焼土遺構22基(1～22号), 土器埋設遺構1基(1号), 特殊遺構1基(2号), ビット4基(1～4号)が挙げられる。これらの遺構の多くは、段丘縁辺部よりやや奥まったところで確認されている。遺構の分布は、主体となる住居跡が調査区北側に集中し、その南側に焼土遺構や土器埋設遺構、ビットが見られる。この他、特殊遺構は住居跡群の中に位置し、土坑は少なく散漫である。この時期の集落は、遺構の配置や出土土器の分布から、東側に広がるようである。

竪穴住居跡は、平面形が長方形や隅丸長方形のもので、規模は長軸が5.4m前後のものが多い。軸方向は一定していない。柱穴は、1号住居跡を除く住居跡で確認されている。支柱穴は2号住居跡で確認され、長軸線上に位置することから、棟に相当する部分が高くなるものと考えられる。壁柱穴は径10～20cm程の柱穴が壁際に巡るように確認されている。炉は地床炉であるが、他の住居跡の規模に比べてやや小型の6号住居跡では認められない。これは大きさに関係があるのではないだろうか。炉の位置は床面の中央に多く見られ、2号住居跡では、住居の長軸線上に複数の炉があること

から、炉の移転が考えられる。炉は焼き締まりが認められ、焼土の厚さが5～8cmまで達することから、使用頻度が高かったと推測される。

土坑は平面形が楕円形で、断面形が鍋底状のものが多い。規模は長径130～200cmで、掘り込みが浅く、底面が平坦になるものが多いようである。該期の一般的な集落に比べ、住居跡の割合に対して土坑数が少なく、調査区外に存在するものと考えられる。

焼土遺構はLⅣで検出したものを該期のものと判断した。この多くは屋外炉と考えられるが、中には、住居跡の地床炉も含まれているものと考えている。このように、該期の焼土遺構が多く確認されることは、本遺跡の特徴と考えられる。

この他、土器埋設遺構では土器の中から副葬品を確認できず、また、この時期の類例が少ないため、現時点では本遺構が埋葬形態の一つとは判断できない。特殊遺構や20～22号焼土遺構、1～4号ピットについては、住居跡と判断する根拠が乏しいため住居跡として扱わなかったものである。

遺構の重複関係は、5号住居跡が7号住居跡より新しいことが確認されている。この他、1号土坑には、5号住居跡から出土した土器と同一のものが投棄されていたため、1号土坑と5号住居跡はほぼ同時期に存在していた可能性が高い。

以上のことから、遺構は2期以上の変遷が考えられるが、住居跡の構造に時間差は認められない。また、出土土器は燃糸地文のものが主体となり、少数の破片資料からいくつかの土器形式の特徴が認められるが、この時期の集落は、比較的短い時期に限定されるものと考えている。

縄文中期前葉の遺構

該期の遺構には、竪穴住居跡7軒(8～14号)、土坑30基(3～13・15・19～24・26～32・34～37・39号)、焼土遺構1基(23号)、土器埋設遺構1基(2号)、特殊遺構1基(1号)が挙げられる。これらの遺構は、段丘縁辺部と調査区中央で確認されている。住居跡は段丘縁辺部にまとまり、その付近に土坑の一部や焼土遺構、特殊遺構が見られる。土坑の多くは、調査区中央に集中することから、住居跡群域と土坑群域は、区別する傾向があったと思われる。住居跡群と土坑群の間には空白部が見られ、集落内の広場であったとも考えられる。この時期の集落は、住居跡の配置や土器分布から、調査区外の南西側や東側の一部に広がるものと考えられる。

竪穴住居跡は平面形が楕円形を呈するものが最も多く、隅丸長方形と円形のものが各1軒ずつである。一般的に後続する時期の住居跡の平面形は、円形になる傾向が強いことから、該期は楕円形から円形に変化する過渡期と考えられる。柱穴は、住居の中央部や壁際で主柱穴が確認されているが、配列に規則性が認められないため上屋構造については不明である。炉は地床炉で、住居跡の約半数で認められ、住居のやや北側と壁際に位置する。

土坑は調査区南側の住居跡付近と調査区中央に2分される。平面形は円形と楕円形からなる。20～22・34・36号土坑のように、フラスコ形や円筒状の土坑は、その形態から推測して貯蔵穴と考えられる。貯蔵穴の中でも、22・36号土坑は住居跡に近接するが、20・21・34号土坑は土坑群から南西側や南東側に離れて確認されている。このうち、大型の36号土坑は、住居の近くに存在している。

このように、大型と小型の貯蔵穴では構築地点に違いが認められる。また、貯蔵穴以外の土坑は、平面形が円形と楕円形を呈するが、性格は不明である。これらの土坑の多くは、調査区中央で重複することなくまとまっている。

その他、土器埋設遺構は、住居跡群から離れた調査区中央に単独で存在する。土器の中からは、副葬品は出土していないが、これまでの事例から埋葬形態の一つと推測される。また、特殊遺構は、底面から炉や柱穴が確認されなかった竪穴状の遺構で、軸方向は9号住居跡と一致するが、性格については不明である。

遺構の重複関係や出土土器からは、38・39号土坑⇒10号住居跡⇒8号住居跡、14号住居跡⇒13号住居跡のように数期の変遷が認められる。

以上のことから、遺構は3時期以上の変遷が考えられるが、遺構の単位集団として捉えることはできなかった。また、出土土器に大きな変遷が認められないことから、この時期の集落は、大木7b式と阿玉台I a式土器が並行関係にある限られた期間に営まれたものと考えられる。(国 井)

参考文献

- 相原 淳一 1986 『小梁川遺跡』宮城県教育委員会
- 相原 淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉土器群の様相について」『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸問題』縄文セミナーの会
- 猪狩 英究 1995 「大平・後関遺跡」福島市教育委員会・(財)福島市振興公社
- 井 憲治他 2001 「上田郷VI遺跡(第2次)」『常磐自動車道遺跡調査報告18』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 今村 啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年—その細分および東北地方との関係を中心に」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第4号』
- 押山 雄三他 1999 「大槻八頭遺跡」社会福祉法人くわの福祉会・福島県郡山市教育委員会・(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 新海 和弘 2002 「本町西C遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告36』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 鈴鹿 良一他 1984 「上ノ台A遺跡(第1次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告V』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 鈴鹿 良一他 1988 「羽白D遺跡(第2次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XI』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 鈴鹿 良一他 1988 「羽白C遺跡(第1次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XII』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 鈴鹿 良一他 1988 「福島県の早期後半から前期初頭の土器について」『第4回縄文文化検討会シンポジウム資料』

第1編 原B遺跡

- 西村 正衛 1984 『石器時代における利根川下流域の研究 —貝塚を中心として—』早稲田大学出版部
- 丹羽 茂 1981 『大木式土器』『縄文文化の研究4』雄山閣
- 丹羽 茂 1989 『大木式土器様式』『縄文土器大観』1 小学館
- 藤谷 誠 1995 『萩原遺跡』『諫戸川地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 古川一郎他 1987 『中の内A遺跡』『中の内A遺跡・本屋敷遺跡他』宮城県教育委員会
- 堀 耕平 1995 『原遺跡—遺構編—』『県道相馬浪江線付替え工事関連遺跡発掘調査報告書』福島県原町市教育委員会
- 本間 宏他 1989 『中ノ沢A遺跡』『東北横断自動車道遺跡調査報告4』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 本間 宏他 1999 『上田郷VI遺跡(第1次)』『常磐自動車道遺跡調査報告18』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 松本 茂他 1991 『法正尻遺跡』『東北横断自動車道遺跡調査報告11』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 松本 茂 1995 『福島県における中期初頭の様相』『第8回縄文セミナー—中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 馬目 順一他 1975 『大畑貝塚』いわき市教育委員会
- 山内 幹夫 1984 『一斗内遺跡』『母畑地区遺跡発掘調査報告16』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 山内 幹夫 1983 『阿武隈山地を中心とした縄文前期初頭土器編年について—牡丹平2群1類土器を中心として』『しのぶ考古8』
- 山内 幹夫他 1990 『上ノ台A遺跡(第2次)』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XIV』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・福島県土木部
- 山元 出他 2005 『堂田A遺跡・西田H遺跡』『こまちダム遺跡発掘調査報告3』福島県教育委員会・(財)福島県文化振興事業団・福島県土木部

第2編 おお た ぎり 大田切遺跡

遺跡記号 MSC-OTG

所在地 福島県南相馬市小高区大富字大田切

時代・種類 縄文・平安時代 集落跡

調査期間 (1次)平成18年4月11日～8月10日

(2次)平成19年4月12日～5月15日

調査員 (1次)青山 博樹・小河 厚子・菅野 和博

(2次)門脇 秀典・鈴木裕一郎・関根 昌毅

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 位置と地形

大田切遺跡は、福島県南相馬市小高区(旧小高町)大富字大田切に所在している。阿武隈高地の東麓には、太平洋に向かって東流する諸河川が形成した台地・段丘と沖積平野が広がり、本遺跡はこれらの台地のうち、小高川とその支流である前川・北鳩原川・大穴川・飯崎川などが開析している「摩辰ヶ原(まだつがはら)」と通称される台地の中央部に位置する。

序章の図3に示した「地形地質図」にしたがえば、摩辰ヶ原と呼称される台地のほとんどは阿武隈高地の東麓に取り付く「中位Ⅱ段丘」に属し、この中に阿武隈高地から太平洋に向かって舌状に張り出す丘陵が点在している。本遺跡の大部分はこの「中位Ⅱ段丘」に立地する。遺跡の南側には舌状に張り出す丘陵尾根があり、本遺跡の南部はこの尾根の北側斜面にまで延びている。標高は、台地の上面で約45～50m、南側の丘陵の頂部で約60mである。本遺跡から海岸線までの距離は約7.3kmである。

遺跡は、きわめて緩やかな起伏の台地に位置している。調査を開始する前は畑・牧草地であり、一部が宅地・水田であった。調査区周辺は、畑・牧草地、南側の丘陵は自然林と杉の人工林である。丘陵の最高所には山津見神社がある。遺跡内の南部の丘陵裾に、小水路が西から東に流れているほか、前川の支流となる小谷が本遺跡付近を起点として開析を始め、遺跡の北縁と中央を横断している。地元住民はこの小谷を「サク」と呼称している。遺跡の中央には市道赤坂摩辰線が南北方向に走り、遺跡を東西に分断している。

遺跡の西側には阿武隈高地の東縁が望見される。本遺跡から望めるもっとも高い山は標高522mの「懸の森山」で、本遺跡のほぼ真西に位置する。頂上部が円錐形に盛り上がって見え、ふくしま百名山のひとつに選ばれている。山頂には大山祇神社が祀られ、現在も信仰の対象となっている。

周囲の大字は、北西側が羽倉、北東側が南鳩原、南東側が飯崎、南西側が金谷である。遺跡周辺の小字は、角間沢、一ノ関、赤坂、摩辰、大塚、向田、東迫、熊平などである。

通称「摩辰ヶ原」と呼ばれる台地上にある遺跡の多くは、小高川や前川が形成した沖積平野に面した縁辺部にもっとも多く、次いで台地西部の阿武隈高地東麓に多く分布している。本遺跡が位置する台地の中央部に立地する遺跡は少ない。

台地の縁辺に立地する遺跡には、熊平B遺跡、西台遺跡・元屋敷遺跡・飯崎南原遺跡・大田和広畑遺跡などの縄文時代・古代の散布地、手子塚古墳・歡請内古墳・十日林古墳・杉平古墳群などの古墳、飯崎筋跡などがある。阿武隈高地の東麓に立地する遺跡には、板木沢遺跡・大富西畑遺跡・大塚A遺跡・大塚B遺跡・大塚C遺跡がある。いずれも、縄文時代と平安時代の散布地である。台地の中央部には、本遺跡のほか横大道遺跡など古代の製鉄に関わる遺跡がある。(青山)

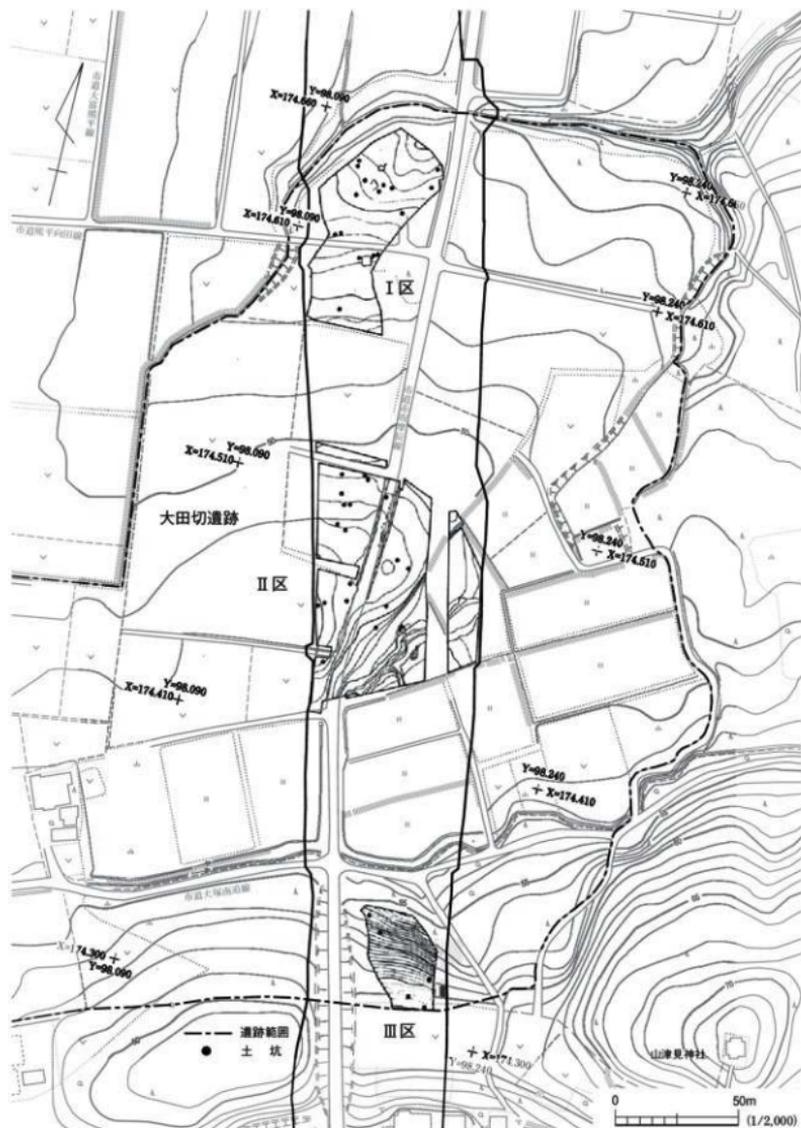


図1 調査区・工事計画図

第2節 調査経過

大田切遺跡は平成9年度に実施した表面調査によって発見された遺跡である。平成16年に行われた試掘調査は、15,200㎡を試掘対象とし、このうち5,800㎡が要保存面積となった。試掘調査では2基の木炭窯跡と木炭焼成土坑が検出されていた。

発掘調査は、平成18～19年度の2カ年にわたって行った。平成18年度は、遺跡内を通る町道部分を除いた部分、平成19年度は、町道の付け替え工事を行ったのち、その真下の部分500㎡の発掘調査を行った。

以下に、年度ごとの調査経過を述べる。

平成18年度

平成18年度の調査は、福島県教育委員会による4月6日の指示を受け、財団法人福島県文化振興事業団が調査員3名を配置し実施した。まず調査の指示が出されたのは遺跡中央部の4,300㎡である。

4月11日から、プレハブ用地の造成とプレハブの設置、表土剥ぎ、機材搬入など発掘調査の準備を行った。同14日からは作業員40名を雇用し、遺構の検出作業を開始した。4月18日には、調査区の南部に戦後の水田造成の際に埋め立てられた最大幅約13mの谷が埋没していることが判明し、この谷を埋めていた客土を機械力を用いて除去することとした。谷は最も深い部分で5mの深さに達し、調査区壁などの崩落防止、安全作業対策、湧水と周辺から流入する雨水の排水に時間を費やした。試掘の時に検出されていた2基の木炭窯跡は、この谷の斜面を利用して掘り込まれていることがわかった。

4月27日には測量基準杭の打設が完了し、検出された遺構の掘り込みと記録を開始した。5月24日には南相馬市教育委員会の川田・荒・佐川の三氏が来跡した。

本遺跡の本調査と平行して行われていた平成16年度未試掘部分の試掘調査の成果を受けて、5月29日には遺跡北側の2,900㎡、6月8日には遺跡南側の900㎡の調査指示が出された。これらをそれぞれⅠ区・Ⅲ区と呼称することとし、すでに調査を行っていた調査区をⅡ区とした。各調査区の間は試掘で遺構・遺物とも確認されず要保存範囲から除外された部分で、同じ遺跡の中ながら3つの調査区は分断された形となった。Ⅰ区・Ⅲ区ともそれぞれ表土剥ぎを開始し、次いで遺構の検出作業と掘り込みに移行した。

本年度の梅雨は本格的なものとなり、6月中旬から7月中旬は雨が多く、連日谷に流れ込む雨水の排水作業に追われた。谷が完全に水没したことも一度や二度ではなく、谷の中で見つかった2基の木炭窯跡の調査は滞りがちであった。Ⅱ区で検出された遺構の調査が終了したのは、6月下旬であった。

7月はⅠ区の調査が中心となり、同下旬にはⅢ区の調査に移行した。7月26日にはラジコンヘリ

コプターによる空中撮影を行った。8月10日をもってすべての調査が完了し、東日本高速道路株式会社への引渡しを行った。(青山)

平成19年度

平成19年度の調査は、福島県教育委員会による4月6日の指示を受け、財団法人福島県文化振興事業団が調査員3名を配置し実施した。調査の指示が出されたのは、旧町道219号金谷・大富3号線の道路部分500㎡である。

4月12日から、プレハブ用地の造成とプレハブの設置、機材搬入など発掘調査の準備を行った。同13日からは作業員19名を雇用し、16日から重機により表土掘削を行った。その後、遺構の検出作業を開始し、4月下旬にはおおよその遺構の配置状況が明らかになった。調査期間中は晴天に恵まれ、順調に遺構検出が進行した。5月に入ってから調査区の南部の検出に移行し、北部の1号道跡の調査を実施した。

5月上旬には遺構の精査および遺跡全体の写真撮影を終了したため、平成19年5月15日に東日本高速道路株式会社への引渡しを行った。(門脇)

第3節 調査方法

大田切遺跡の調査方法は、財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部がこれまで行ってきた調査の方法をおおむね踏襲した。表土の除去は機械力を用いて行い、各遺構・遺物包含層の掘り込みは人力で行った。

遺構の掘り込みに際しては、遺構の全体を検出したのちに、その遺構の堆積土の状況をもっともよく示すと思われた位置に土層観察用の畦を残すこととした。

基本土層の把握に際しては、深く掘り込まれた土坑や溝跡、視乱坑などの壁のほか、調査区内に数カ所の土層観察用の深掘りを行って土層を観察した。

調査記録に際しては、遺構・遺物の位置を表示するためのグリッドで遺跡全体を覆い、このグリッドを基準に行った。グリッドの方位・座標・単位は世界測地系座標に一致させ、グリッドは、一辺10mとした。グリッドの名称は、西から東へA・B・C…、北から南へ1・2・3…とし、これを組み合わせて「G7グリッド」などと呼称した。

グリッドの境界は、本杭を用いて標示した。グリッドの設定に際しては、調査区内に国家三角点をもとにした3級基準点を3カ所打設し、これを基準とした。各基準点には、標高を表示した。基準点の打設は、測量会社に委託し、GPS測量を行った。各遺構の位置は、世界測地系座標で示している。

遺構の記録は、実測による作図、観察所見の註記、写真撮影によって行った。各遺構につき、平面図、断面図を作成し、必要に応じて立面図を作成した。平面図作成のための計測はグリッド杭を基準に光波測距儀で行い、断面図作成のための計測は基準点の標高をもとに水平に張った本糸から

コンベックスを用いて行った。

平面図・断面図は方眼紙に1/20の縮尺で鉛筆を用いて記録し、遺物出土状況図などは必要に応じて1/10で作図した。断面図の作成に際しては、層ごとの土色・包含物・しまりの有無などを註記した。土色の判定に際しては、土色帖を用いた。

写真撮影には35mmカメラを常用し、必要に応じて6×4.5カメラを使用した。フィルムは、モノクロームとリバーサルフィルムを使用した。

遺物の取り上げは、出土した遺構、層位ごとに行い、必要に応じて出土地点の記録、出土状況図を作成した。出土したすべての遺物について水洗いし、出土地点と層位のネーミングと接合を行ったうえで、報告書に掲載する遺物を選び出した。選び出した遺物は1/1の縮尺で実測し、方眼紙に記録した。

なお、出土した遺物と調査記録一式(図面と写真)については、福島県文化財センター白河館に保管している。(青山)

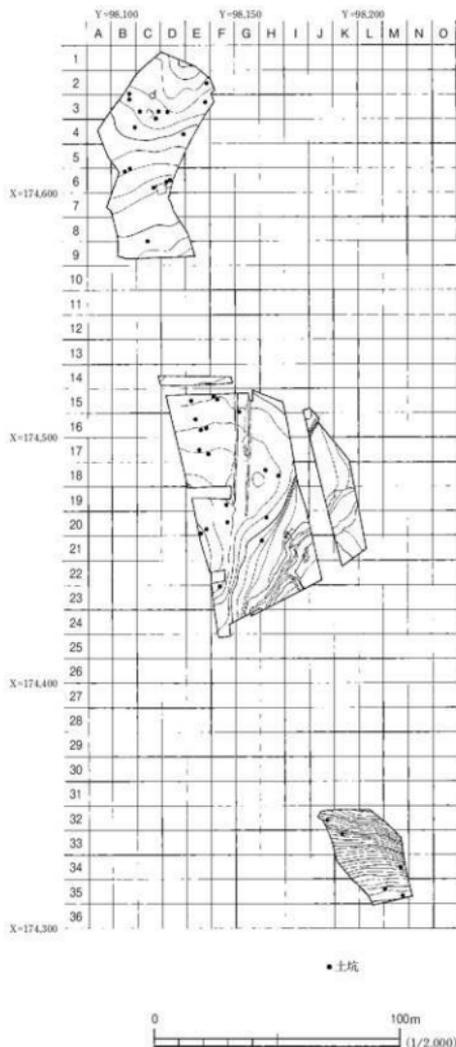


図2 グリッド遺構配置図

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の概要と基本土層

遺構の分布(図3～5, 写真3～5)

本遺跡の調査で発見された遺構は、3つの調査区をあわせて、竪穴住居跡3軒、木炭窯跡2基、溝跡1条、道跡1条、土坑39基、特殊遺構1基である。

I区で検出されたのは、竪穴住居跡3軒、土坑16基である。I区には遺構の密度が高い部分が2カ所認められる。一つは調査区北部のB～Dの2～4グリッド付近、もう一つは中央部のC・Dの6～7グリッド付近である。いずれも竪穴住居跡とその周囲に複数の土坑が分布する。調査区北端の小谷に面した部分では縄文土器が多数出土している。

II区で検出された遺構は、溝跡1条、道跡1条、木炭窯跡2基、土坑18基である。溝跡としたのは、台地を開析する自然の小谷で、調査区の最南部に位置する。2基の木炭窯跡はこの溝跡の斜面に掘り込まれている。これらを除くと遺構の分布に偏りはなく、散漫である。

III区で検出された遺構は、土坑5基である。斜面の上方面にあたる南部に3基、下方にあたる北部に2基が位置する。

出土した遺物は、縄文土器1,533点、土師器973点、須恵器42点、かわらけ1点、陶磁器1点、石器2点、石製品1点、鉄製品1点、が壁片8,006gである。これらの遺物の年代は、縄文時代と平安時代、近現代の3時期である。

基本土層(図6, 写真6)

「表層地質図」にしたがえば、本遺跡の地盤の大部分は、「礫・砂・泥」の「未固結堆積物」で、遺跡南部の丘陵斜面にあたる部分が「中粒～粗粒砂岩・凝灰岩」の「半未固結堆積物」からなっている。調査区でいえば、前者がI区とII区、後者はIII区に対応する。

「礫・砂・泥」の「未固結堆積物」を地盤とするI・II区は、II区のほぼ中央部を最高点に南北に緩やかに傾斜し、斜面下方に行くにしたがい表土が厚く堆積している。頂部付近では40cm、斜面の下部では100cm以上の厚さをもつ。ただし、I区はゴミ穴や廃材坑などによる攪乱のため表土の残りが悪く、残りのよい部分でも厚さ10～20cm程度であった。これはI区が宅地だったことによるものと考えられる。これらを含めて表土に含められるものをL Iとした。

L I直下には地点によって異なる土層が堆積している。I区の南部を除いた大部分には、厚さ15cmほどの明黄褐色砂質土が堆積している。これをL IIとした。L IIのうち調査区北側の小谷に接した部分には、縄文時代晩期の遺物を包含していた。II区付近のもっとも標高が高い部分には明褐色のロームの堆積がみられた。これをL IIIとした。L IIIの厚さは、もっとも厚い部分で100cmである。

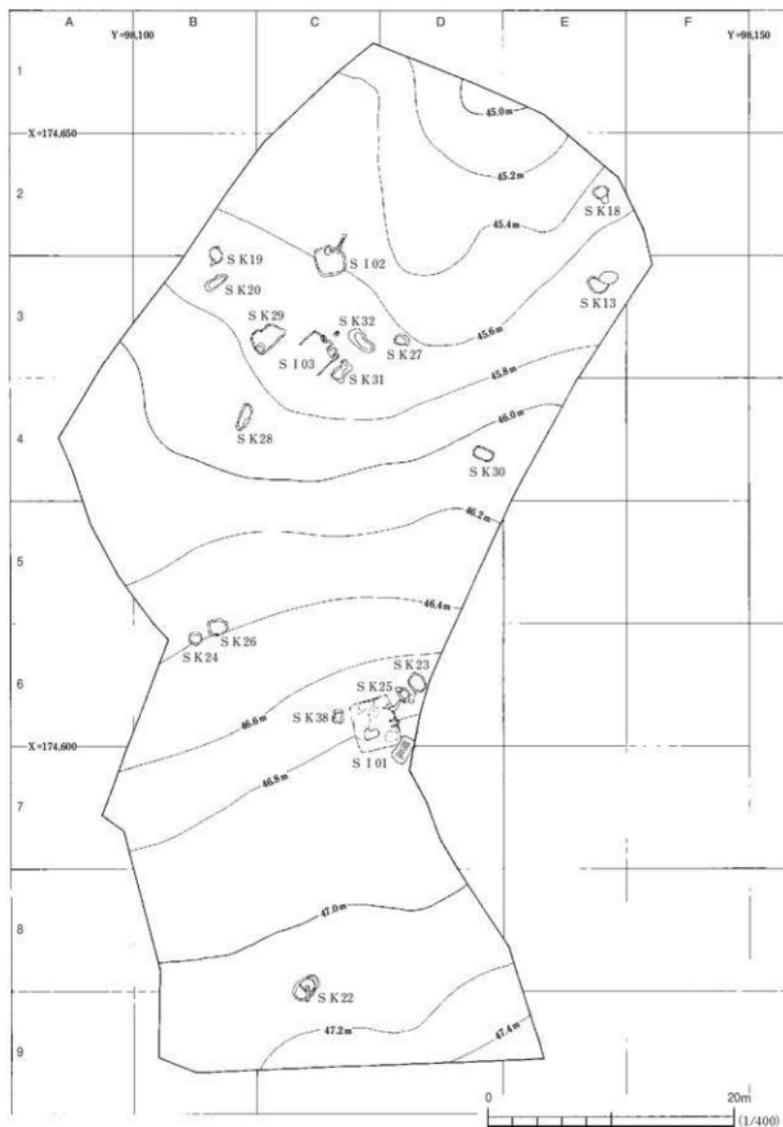


図3 遺構配置図(1区)

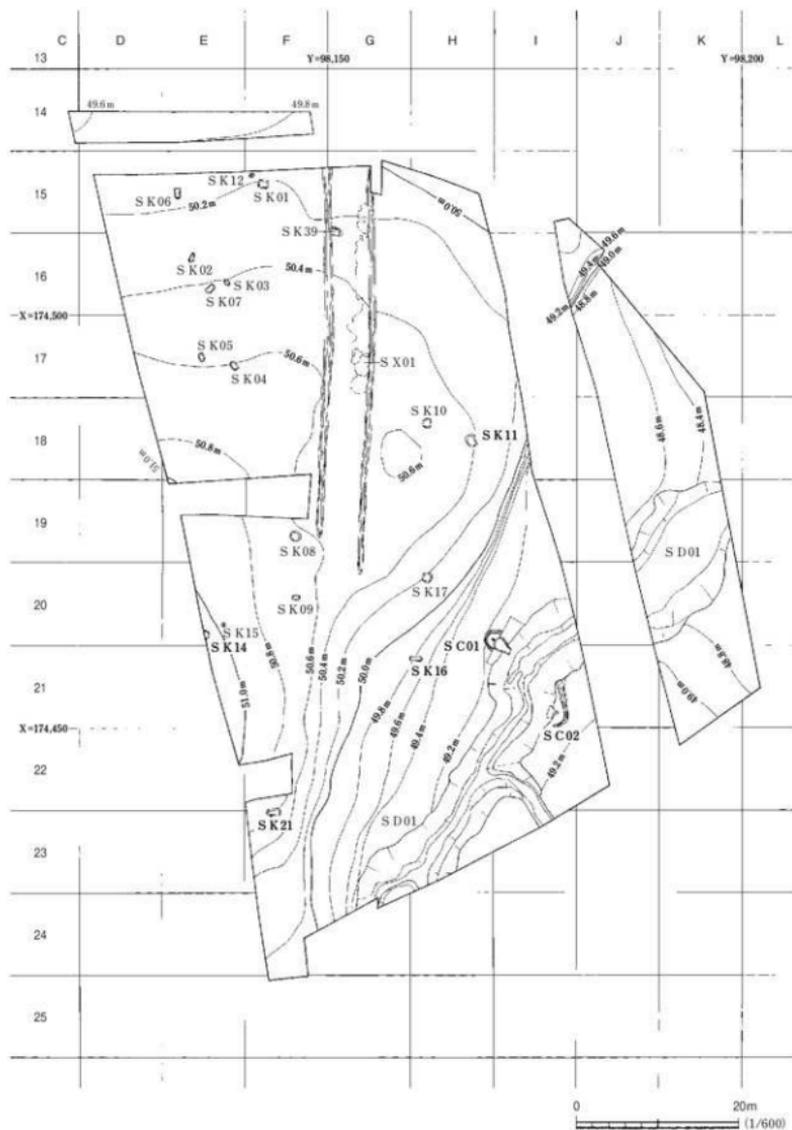


図4 遺構配置図(Ⅱ区)

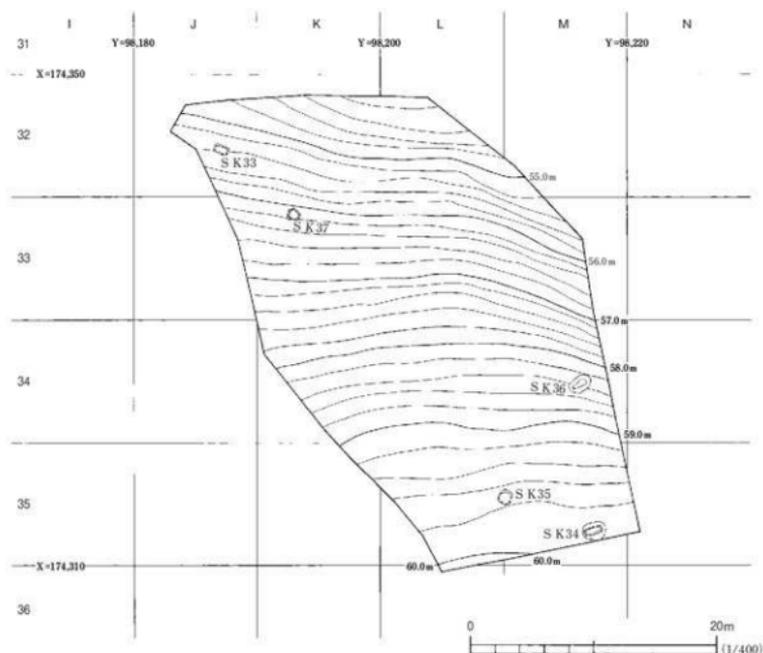


図5 遺構配置図(Ⅲ区)

LⅡ・Ⅲは調査区内に部分的に堆積しているのみである。LⅡ・Ⅲの下には、ふい黄橙色粘土が堆積している。これをLⅣとした。LⅣは、Ⅰ区の北端部分を除いた部分からⅡ区の北端部分にかけてⅡ区の南端部では、LⅠの直下に堆積している。いずれも緩やかな起伏をもつ台地の頂部付近からやや下った部分である。本遺跡で見つかった遺構は、すべて表土直下で検出され、LⅡ・Ⅲ・Ⅳのいずれかの上面を検出面としている。

LⅣ以下には、LⅤ・Ⅵが堆積している。LⅤは浅黄橙色砂層で、白色の小礫と礫を多く含んだしまりの強い層である。LⅥは灰黄褐色粘土層である。Ⅱ区の小谷の掘削の際、底面付近でのみ確認された。

「中粒～粗粒砂岩・凝灰岩」の「半未固結堆積物」を地盤とするⅢ区では、表土であるLⅠの厚さが約30cmで、その下に明褐色のローム層が堆積している。この層はⅡ区のLⅢに対応するものと考えられる。Ⅲ区の遺構検出面はこのLⅢ上面である。LⅢの下には、黄褐色土層が堆積している。この層はLⅣに対応するものと思われるが、色調と土質に違いがあることからLⅣ'とした。

(青山)

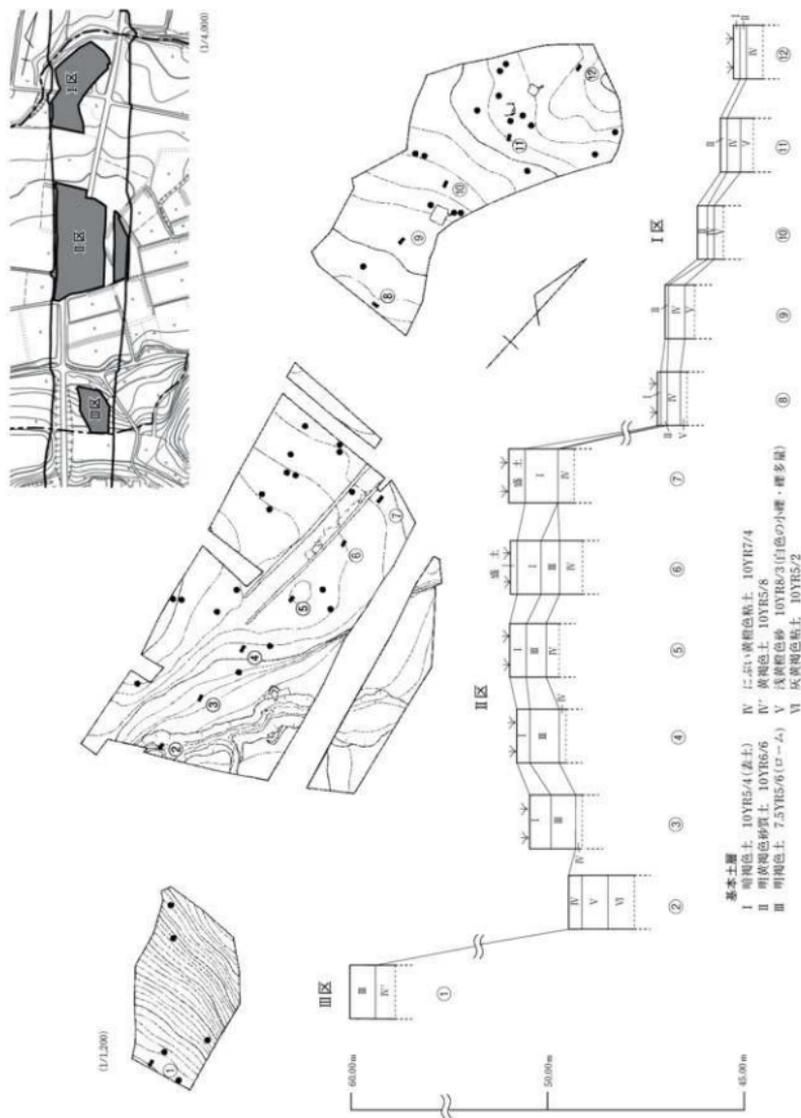


図6 基本土層

第2節 竪穴住居跡

1号住居跡 S I 01

遺 構(図7・8, 写真7・8)

本遺構は調査I区中央部のC6・7, D6・7グリッドに位置する。表土層であるL Iを除去した時点で本住居跡の床面が露出し, 土器片や焼土粒が散見していた。また, 遺構の存在は容易に把握できたが, 遺構の内外に木の根や後世の擾乱, さらにL IIに部分的に含まれていた礫層などの存在から検出は困難であった。遺構の輪郭を確定できたのはL IIを少し掘削した段階であった。重複する遺構はないが, 北東側にSK23・25, 西側にSK38がそれぞれ位置する。

遺構内堆積土は2層のみである。①は暗褐色土で, 焼土・炭化物を多く含む遺構廃絶後の堆積

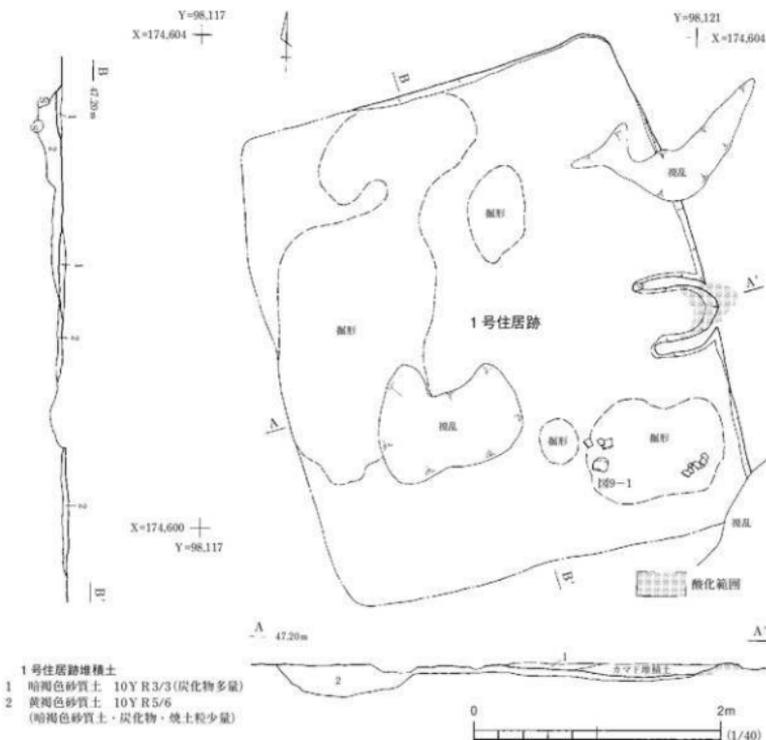


図7 1号住居跡

土である。カマド周辺と北辺のみに残存していた。ℓ 2はしまりのややある黄褐色土で、この上にカマドなどが構築されていた点などから貼床と判断した。

平面形はやや歪んだ方形を呈し、西辺と東辺の中点を結んだ線はN74°Eを指す。貼床の残存範囲での規模は長軸401cm、短軸354cm、残りのよい北壁付近の検出面から床面までの深さ8cmをそれぞれ測る。周壁は北壁とカマドのある東壁のみ残存しており、本来の形状は不明であった。遺存高は北壁で8cm、東壁で6cmをそれぞれ測る。床面はほぼ全面に貼床が施され平坦化していたものの、堅固な踏みしまりなどは認められない。

この床面からは柱穴などは検出されず、カマドのみが確認された。カマドは東壁の中央やや南側に位置する。遺存状態は悪く、両袖と煙出しの痕跡がわずかに確認された。カマドの規模は長さ62cm、幅70cmを測る。両袖はLⅢ起源の明黄褐色土とにぶい黄褐色土の混土で構築され、袖の長さは、右袖で56cm、左袖で58cmを測る。袖の床面からの高さは両方とも6cm程度の残存であった。

燃焼部の範囲は奥行き61cm、最大幅40cmで特に煙道付近が被熱により強く酸化していた。煙道は基底面のみの検出で、本来の長さやその形状は不明である。

カマド堆積土は3層からなる。最上層のℓ 1は住居内堆積土と共通し、ℓ 3は焼土塊を多く含むことからカマド天井の崩落土と考えられる。

なお、貼床除去後に掘形を確認した。掘形は住居の各コーナー部のみが高く、中央部にかけて3～5cmほど掘り込まれて低くなる。さらに一部を小穴状に掘り込んだ痕跡が4カ所認められた。堆積土はいずれも貼床と同じℓ 2で、掘り込んですぐ埋められており、このことから掘形と判断した。また、小穴の位置からは建て替えられた古い住居が存在した可能性も有するが、基盤層のLⅡは礫が多く、居住に適さないことから貼床を施したものと考えられる。

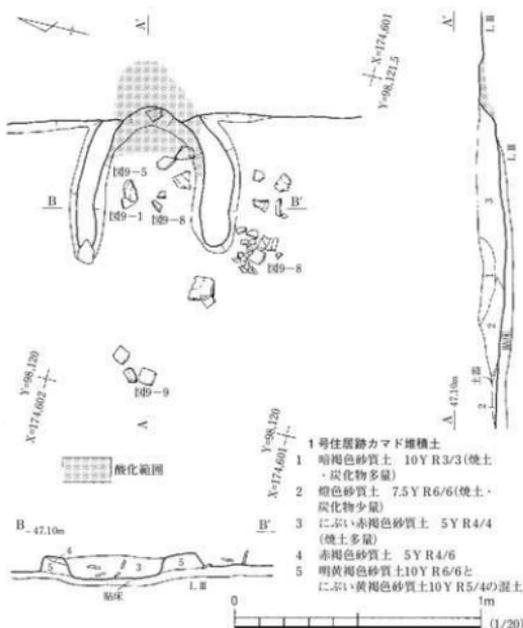


図8 1号住居跡カマド

遺物(図9, 表1, 写真28・29)

遺物は、床面や貼床を中心に土師器593点、須恵器2点、炉壁片2,446gが出土し、このうち図示したものは18点である。筒形土器を除く土師器はすべてロクロ成形で、甕類が大半を占める。瓶なしの壺の須恵器胴部片や炉壁片の大半は掘形内から出土した。

図9-1~6はロクロ成形の土師器杯で、すべて内面黒色処理されている。1は住居内で唯一完形の杯である。底部から体部下端に回転ヘラケズリが施され、体部外面中半から口縁部にかけて油煙の付着が観察される。3は底部が15%残存する資料で、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが観察される。4・5は底部切り離しが回転糸切りとなる。6は25%の残存で口縁部が欠損する資料である。全体的に摩滅が著しく底部切り離しは不明、体部外面下端に手持ちヘラケズリが観察され、内面は被熱により焼けはせている。なお、体部外面には一部墨書がかすかに確認できるが、判読は不可能であった。

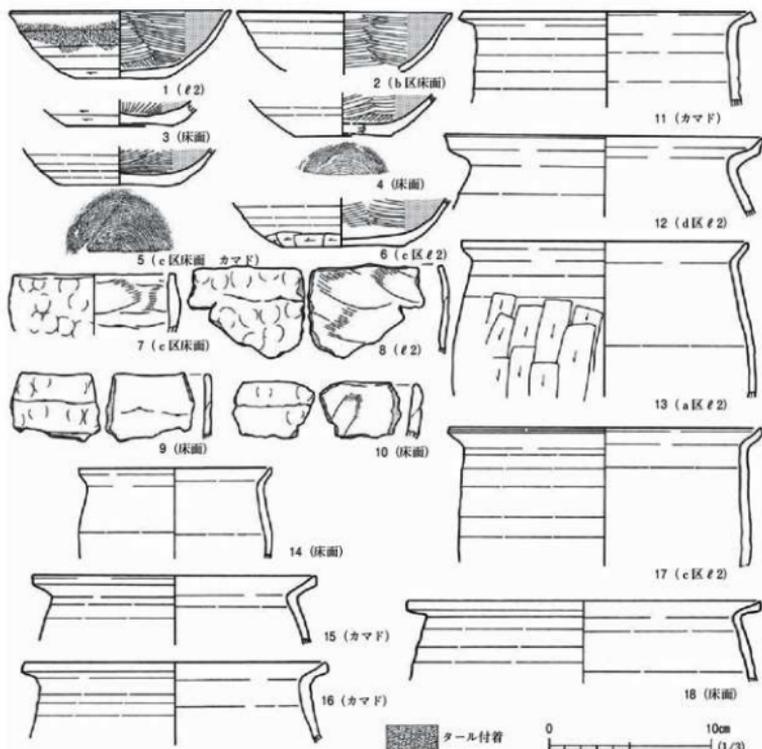


図9 1号住居跡出土土師器

7～10は筒形土器である。いずれの資料も粘土紐積み上げ後、外面が指頭痕、内面ナデによって整形している。特に8・9はカマド右袖脇から集中して出土したものの一部である。全体的に多く出土したものの、土器間の接合はほとんどなかった。

11～18はロクロ成形の甕となる。12は、直立気味につまみ出した口縁端部を有する。13は、「く」の字状の口縁部と胴部外面に下方向のヘラケズリが観察される資料である。14は小型の甕で、口縁部は頸部から引き出されるように移行し、口縁端部はやや直立する器形となる。15～18は11と同様に、口縁部が肥厚し、端部が短く直立する形態を示す甕となる。

ま と め

本住居跡は一辺4m弱の住居跡である。柱穴は確認されなかったが、東側にカマドを有する。出土土器の年代観から9世紀中頃の所産と考えられる。(菅野)

2号住居跡 S I 02

遺 構 (図10・11, 写真9・10)

本遺構は、調査I区の北部、C2・3グリッドに位置する。検出面はLⅡ上面である。本遺構の堆積土の上部は黒色であったのに対し、下部は検出面であるLⅡの土色に近い褐色で、当初は上部の黒色土の範囲のみを土坑と判断したが、掘り込みの途中で住居跡であることが判明した。検出された場所は平坦であるが、南から北に向かってきわめて緩やかに下っている。南方約5mにはS I 03とSK29・32、西方約8mにはSK19・20がある。

平面形は、隅がやや丸く、各辺がやや外側に湾曲した方形で、東西側の辺は北から15～25°西にふれている。規模は西辺で2.0m、南辺で2.1mである。各辺のほとんども張り出した部分の間で計測すると、それぞれ2.5mである。壁の高さは各辺ともほぼ同じで、23cmである。

住居内堆積土は、3層がレンズ状に堆積していた。ℓ1は黒色土であるのに対し、ℓ2・3は基本土層のLⅡに近い褐色土と暗褐色土であった。

北東隅にはカマドが敷設され、煙道が北東方向に伸びる。カマドは床面上に構築され、幅110cmである。カマドの底面は皿状に浅く掘りくぼめられていた。左右の袖が遺存し、左袖の長さは60cm、右袖の長さは39cmである。袖は、カマド底面から最大30cmの高さで遺存していた。袖の大部分はにぶい黄褐色土の盛土で構築され、床面直上のみ炭化物粒と焼土粒を多く含んだ暗褐色土が薄くみられた。袖の中には構築材と考えられるこぶし大ほどの川原石が多く、鉄滓の溶着した製練炉の炉壁片を少量含んでいた。カマド内の堆積土からも、川原石が多く出土した。カマドの底面に、焼土化した部分は認められず、カマド内の堆積土にも焼土粒や炭化物はほとんど含まれていなかった。これらのことから、このカマドはほとんど使用されなかったものと思われる。ただし、左袖の燃焼室側に扁平な面を露出していた1個の川原石だけは、一部が赤変していた。

煙道はやや幅を狭めながらほぼ直線的に伸び、先端には煙出し穴が煙道より深く掘り込まれている。煙道の長さは、煙出し穴を含めて133cmである。煙道の幅は、最も広い部分で25cm、最も狭い

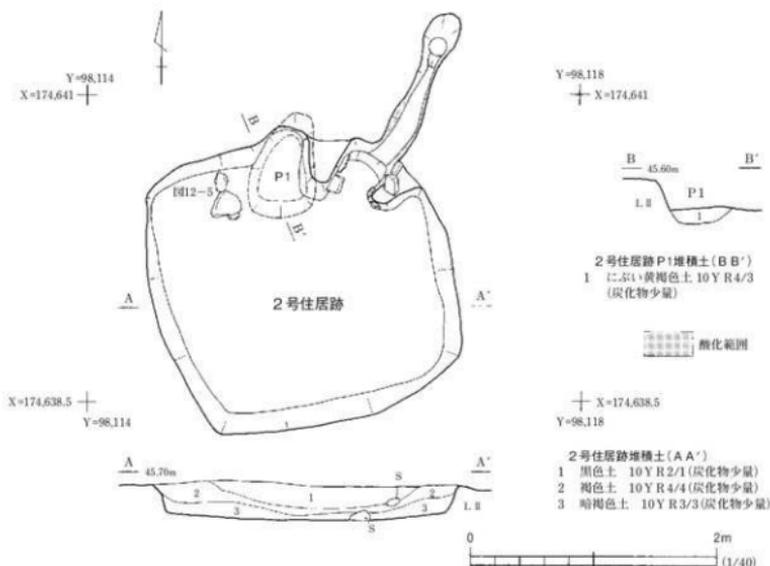


図10 2号住居跡

部分で14cmである。煙道の底面はカマドの底面より7cm高く、両者は緩やかなスロープでつながっている。煙道の底面はほぼ平坦で水平に伸び、深さはもっとも深い部分で22cmである。煙出し穴の深さは34cmで、煙道の底面との差は17cmある。煙道のうち、カマドに近い部分のみが被熱のため赤変硬化していた。赤変硬化していた部分は、両側壁のカマドに接する部分から45cmほどの範囲で、底面は赤変硬化していなかった。

北壁際のほぼ中央、カマド左袖の脇の床面からビットが検出された。これをP1とした。P1の掘り込みの時、その堆積土の一部がカマド左袖の下に延びていくことがわかった。カマド袖との上下関係を検討した結果、カマドの左袖の一部は、P1の堆積土の上面に構築されていることがわかった。このことはP1の埋没ののち、カマドが構築されたことを示している。

P1の平面形は南北方向にやや長い楕円形で、長径44cm、短径29cm、床面からの深さ7cmである。北壁に接する部分では壁の一部を10cmほど横穴状に掘り込んでいる。

カマドとP1の関係は、カマドには火が焚かれた痕跡がないにもかかわらず、カマド袖構築土の下部に炭化物と焼土を多く含み、煙道にも被熱の痕跡があること、カマド袖に含まれる川原石の一つだけが被熱しているという前述の所見から、カマドが一定期間使用されたのちに造り替えが行われたことが示唆される。造り替えの時に、カマド底面を掘りくぼめることによる焼土面の除去と、P1を埋めた上への新しいカマド袖の構築が行われたものと考えられる。壊されたカマドの構築材

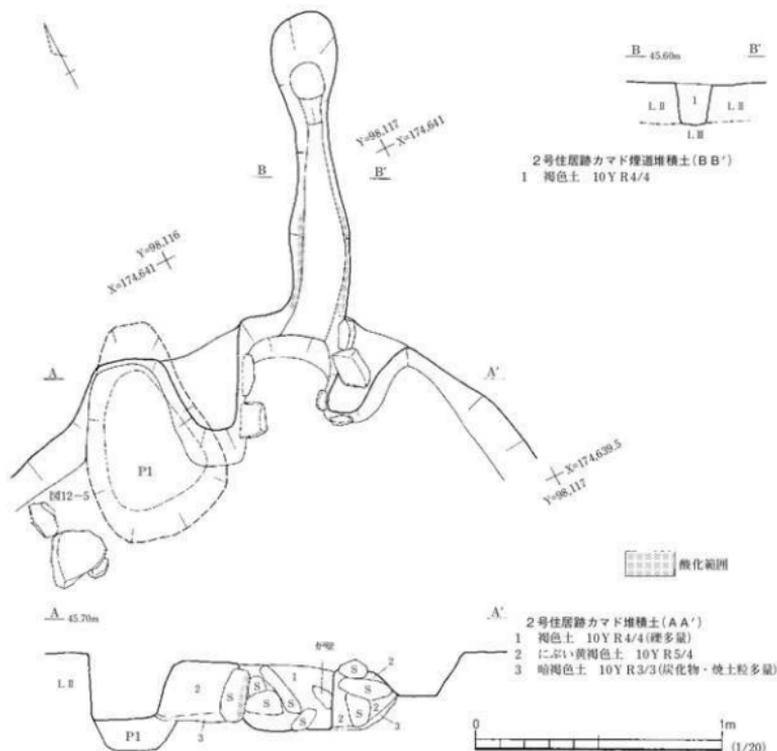


図11 2号住居跡カマド

に使われ被熱した川原石が、新しいカマドの構築に際して再利用されたものと思われる。ただし、新しく構築されたカマドは何かの理由でほとんど使用されなかったようである。

北壁際のP1西側の床面には、やや扁平な自然石が置かれていた。大きさは、長軸25cm、短軸20cm、厚さ10cmほどであった。この自然石と北壁の間の床面から、土師器の壺が1点出土している。このほか床面、カマド内、堆積土から土師器と須恵器が出土している。

床面から柱穴は見つからなかった。床面の断ち割りを行ったが、貼床は確認できなかった。

遺物(図12、表1、写真28・30)

本住居跡からは、土師器175点、須恵器34点、縄文土器4点、カマド構築材に使われた製錬⁹⁾の炉壁片が2,750g出土している。このうち土師器5点、須恵器4点を図示した。

図12-1~4は、土師器の杯である。いずれもロクロ成形で、外面底部付近に回転ヘラズリによる再調整が、内面はミガキののち黒色処理が施されている。

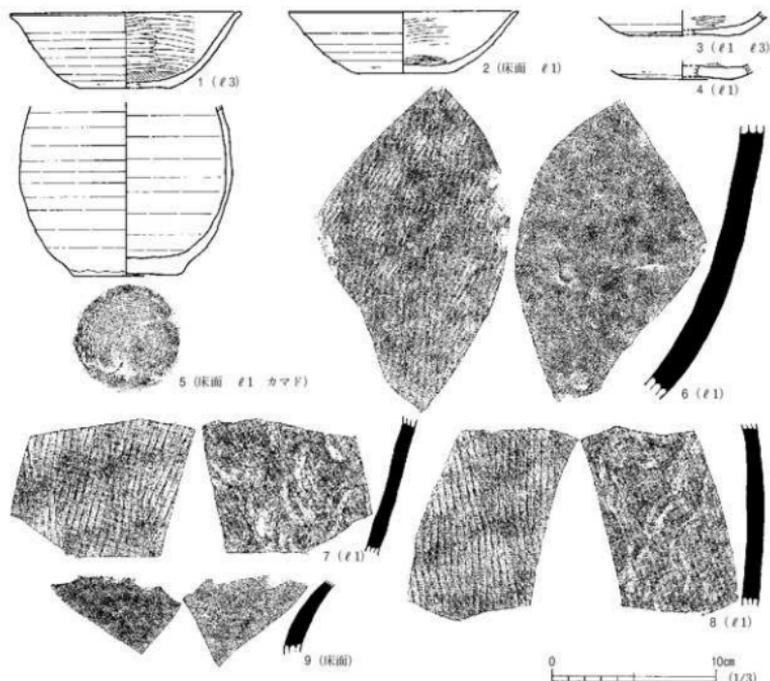


図12 2号住居跡出土土師器・須恵器

1は全体の30%ほどが遺存している。床面に近い ℓ 3から出土した。平底の底部から口縁部にかけて直線的に外傾する。2は全体の70%ほどが遺存している。床面から出土した。平底の底部から口縁部にかけて直線的に外傾する。全体的に被熱のために赤変劣化している。特に内面の底部付近は器面の剥落が激しく、黒色処理がとんでいる。3・4は底部のみの破片である。

5は、土師器の壺である。床面とカマド内から出土した破片が接合した。平底の底部と内湾する体部をもつ。体部上半と口縁部を欠損する。内外面ともロクロナデが施され、底部外面は糸切り痕が残されている。

6～9は、須恵器の大甕である。6～8は堆積土から、9は床面から出土し、いずれも破片である。6～8は体部の一部で、いずれも外面にタタキメが施されている。内面は、6が指頭圧痕とナデが、7・8はアテ具痕がみられる。7と8は、胎土・色調・調整が似ていることから同一個体と思われる。9は頸部の破片である。内外面にロクロナデが施されている。

まとめ

本遺構は、一辺2mほどの小型の竪穴住居跡である。北東隅の壁にカマドを設けている。カマド

は造り替えが行われているようであるが、造り替え後のカマドはあまり使用されなかったようである。時期は出土した土器から、およそ9世紀の前半頃と思われる。(青山)

3号住居跡 S I 03

遺 構(図13・14, 写真11・12)

本遺構は、調査I区の北部、C3グリッドに位置する。検出面はLⅡ上面である。本遺構の堆積土の上部は黒色であったのに対し、下部は検出面であるLⅡの土色に近い灰黄褐色で、当初は上部の黒色土の範囲のみを土坑と判断したが、掘り込みの途中で住居跡であることが判明した。検出された場所は平坦であるが、南西から北東に向かってきわめて緩やかに下っている。本遺構の周辺には遺構が比較的多い。北方約5mにはS I 02、東側約1mにはS K 31、北東約2mにはS K 32、西側約2mにはS K 29がある。

本住居跡は遺存状態が悪く、西側の約半分は遺存していなかった。平面形はほぼ方形であったものと思われる。住居跡の向きはふれが大きく、東南辺と北西辺で測れば北から約50°東にふれている。規模は、四辺のうち唯一全体が遺存している北東辺で長さ283cmである。東南辺は235cm、北西辺は175cmのみがそれぞれ遺存していた。南西辺はまったく遺存していなかった。壁の高さは、もっとも残りのよい東側で14cmである。

住居内堆積土は、2層に分けられ、これらは自然堆積と判断した。ℓ1は黒褐色土であるのに対し、ℓ2は基本土層の土色に近い灰黄褐色土であった。いずれの層にも、こぶし大までの大きさの礫を少量含んでいた。

北東辺のほぼ中央部の壁にはカマドが付されている。

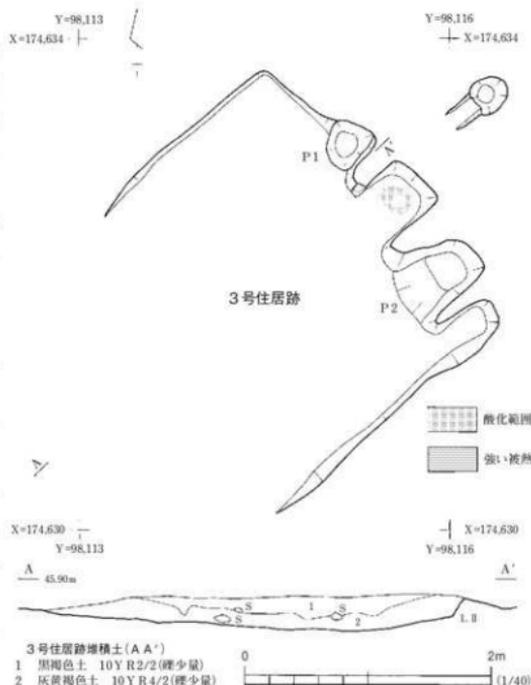


図13 3号住居跡

カマドは床面上に構築され、幅110cmである。左右の袖が遺存し、左袖の長さは49cm、右袖の長さは72cmである。袖は、床面から最大19cmの高さで遺存していた。袖は暗褐色土の盛土で構築され、左袖の中には構築材と考えられるこぶし大ほどの川原石を数個含んでいた。カマドの底面のほぼ中央は、被熱のため楕円形に赤変硬化していた。範囲は、長軸26cm、短軸21cmほどで、中央部がより強く赤変硬化していた。カマド底面を断ち割ったところ、赤変硬化した部分は2cmの厚さに及んでいることがわかった。カマド内の堆積土は、2層からなる。①は灰黄褐色土、②は褐色土で、いずれにも焼土粒と炭化物粒をやや多く含んでいた。

カマドからは煙道は取り付かないが、カマドの奥壁から北東方向へ75cmのところピットと、このピットからカマド方向に25cmほど伸びる短い溝が検出された。ピットの平面形はややいびつな円形で、直径29cm、深さ22cm、溝は幅19cm、深さ8cmで、ピットの底面と溝の底面との高低差は14cmである。このピットと溝の堆積土には焼土粒と炭化物粒が含まれていた。これらが煙道と煙出し穴と考えられる。

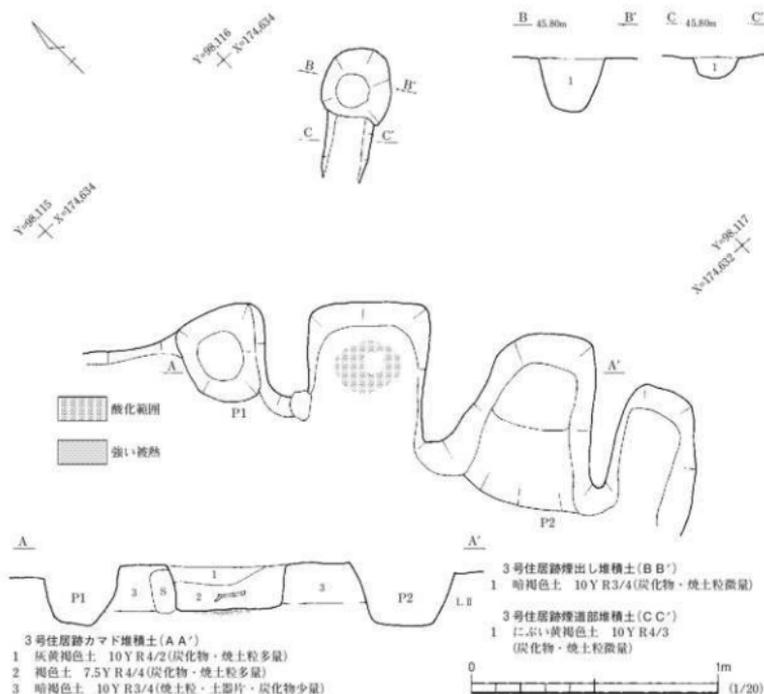


図14 3号住居跡カマド

北東壁際からは、2基のピットが検出された。ピットはカマドの両脇に掘り込まれ、それぞれカマドの袖に接していた。左袖に接するピットをP1、右袖に接するピットをP2とした。

P1の平面形はいびつな円形である。径は、最も大きい部分で33cmを測り、もっとも小さい部分で20cm、床面からの深さは10cmである。壁は比較的急な角度をもって立ち上がる。P2の平面形は、床面中央に向かってわずかに開く台形で、壁に向かって右側に土手状の高まりをもつ。この高まりは、地山を掘り残して作られ、壁から直線的に伸びている。長さ60cm、幅はもっとも広い部分で22cm、高さ8cmである。壁は、北東壁とカマド袖と土手状の高まりに接した部分は急な角度で立ち上がるものの、床面に接する部分のみはスロープ状のきわめて緩やかな角度をもって立ち上がる。規模は、北東壁から床面までが72cm、カマド袖と土手状の高まりの上場までが最大で56cmである。

床面から柱穴は見つからなかった。床面の断ち割りを行ったが、貼床は識別できなかった。

遺物は、P2からややまとまって出土したほか、カマド内から出土した。P2からは、ほぼ完形の土師器の杯が底面から1点出土したほか、底面と堆積土中から土師器の杯と甕が破片の状態で出土した。カマドからは、堆積土の中から甕の破片が複数個出土した。

遺物(図15, 表1, 写真28)

本住居跡からは、土師器128点が出土している。このうち土師器4点を図示した。

1は、ロクロ成形の杯である。体部から口縁部にかけて一部欠損するほかは、ほぼ完形である。平底の底部からやや内湾しながら立ち上がり、口縁部にいたる。体部の外面にはロクロナデ、底部には回転糸切り痕が付され、底部付近に手持ちヘラケズリによる再調整が施されている。内面には、ミガキのち黒色処理が施されている。

2～4は甕である。2は、粘土紐の積み上げにより成形されている。口縁部と体部上半の一部のみ遺存する。ほぼ直立する体部と、短く外反する口縁部をもつ。外面は、強い被熱のため赤変と器面の剥落が激しく調整は明らかでないものの、体部の

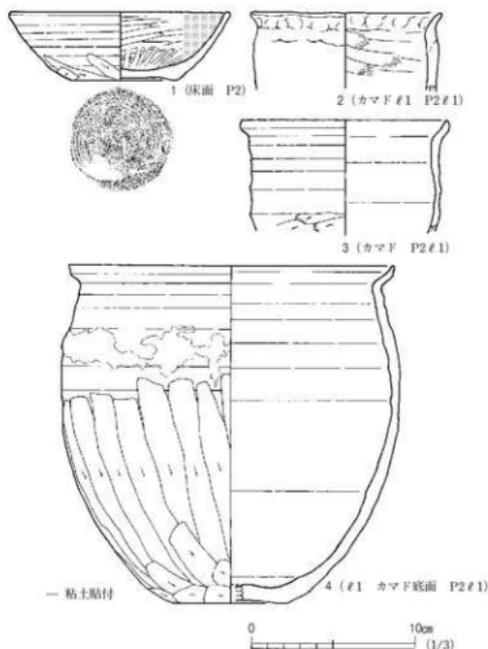


図15 3号住居跡出土土師器

一部に粘土紐の積み上げ痕を残す。口縁部には、内外面に指頭圧痕が残されている。体部内面は、横方向のナデが施されている。3はロクロ成形である。口縁部から体部上半の一部が遺存する。体部上半はほぼ直立し、短く外傾する口縁部をもつ。口縁端部は上方につまみ出されている。体部下半は遺存しないものの、底部に向かってすばまるものと考えられる。調整は、内外面ともロクロナデの後、外面の体部下半にヘラケズリが施されている。被熱のため、外面の一部が赤変している。4は全体の約4分の1が遺存する。平底の底部と上半に最大径をもつ体部、外傾する口縁部をもつ。口縁端部は上方につまみ上げられている。内外面ともロクロナデが施された後、外面の体部下半にヘラケズリが施されている。外面の体部上半と底面の一部には泥土が固着している。

ま と め

本遺構は遺存状態が悪いものの、遺存していた北東辺で2.8mの規模をもつ住居跡である。北東辺の壁にカマドを設けている。時期は、出土した土器からおよそ9世紀と思われる。(青山)

第3節 木炭窯跡

本遺跡からは、2基の木炭窯跡が検出された。いずれもⅡ区の南部に位置する自然の小谷であるS D01の斜面の両側を利用して、互いに向かい合うように構築されていた。

1号木炭窯跡 S C01(図16・17, 写真13~15)

本遺構は、Ⅱ区の南部、H・Iの20・21グリッドに位置する。検出面はLⅣ上面である。本遺構の本体の大部分は、試掘調査の時にすでに検出されていた。これに加え、今回の本調査における本体周辺の精査によって、煙出し穴とその周辺を囲む1条の溝跡を検出した。この溝跡を、1号木炭窯跡付属溝とした。木炭窯跡の本体には、焼土粒と炭化物を含んだ極暗褐色土、1号木炭窯跡付属溝には黒褐色土が堆積し、LⅣとの識別は容易であった。

本木炭窯跡の本体が検出されたのはS D01の南西斜面の上部で、煙出し穴と1号木炭窯跡付属溝が検出されたのはS D01北西側の平坦面である。本木炭窯跡南方約9mのS D01の対岸にあたる斜面には、本木炭窯跡と向かい合うようにS C02が位置する。

本木炭窯跡は、焼成室、焚口、煙道、煙出し穴からなる。焼成室と焚口の天井はすでに崩落して木炭窯跡内に落ち込んでいた。焚口の両側壁と焼成室の奥壁と両側壁はいずれも遺存し、奥壁上部のみは天井の一部が崩落せずに遺存していた。焼成室の天井の崩落後にできたと考えられる陥没孔には、黒褐色や暗褐色の土が堆積していた。以上のように天井部は遺存していないため旧状は不明であるものの、S D01の斜面に露出した基本土層のLⅣ～Ⅵにかけての地盤を等高線に直交するようにトンネル状にくりぬいて窯体とした、半地下式の木炭窯であったと考えられる。

焼成室と焚口の平面形は、イチジク形である。壁は床からほぼ垂直に立ち上がるものの、外傾する箇所や内傾する箇所が部分的に認められる。奥壁と両側壁との境は明瞭ではない。底面はほぼ平

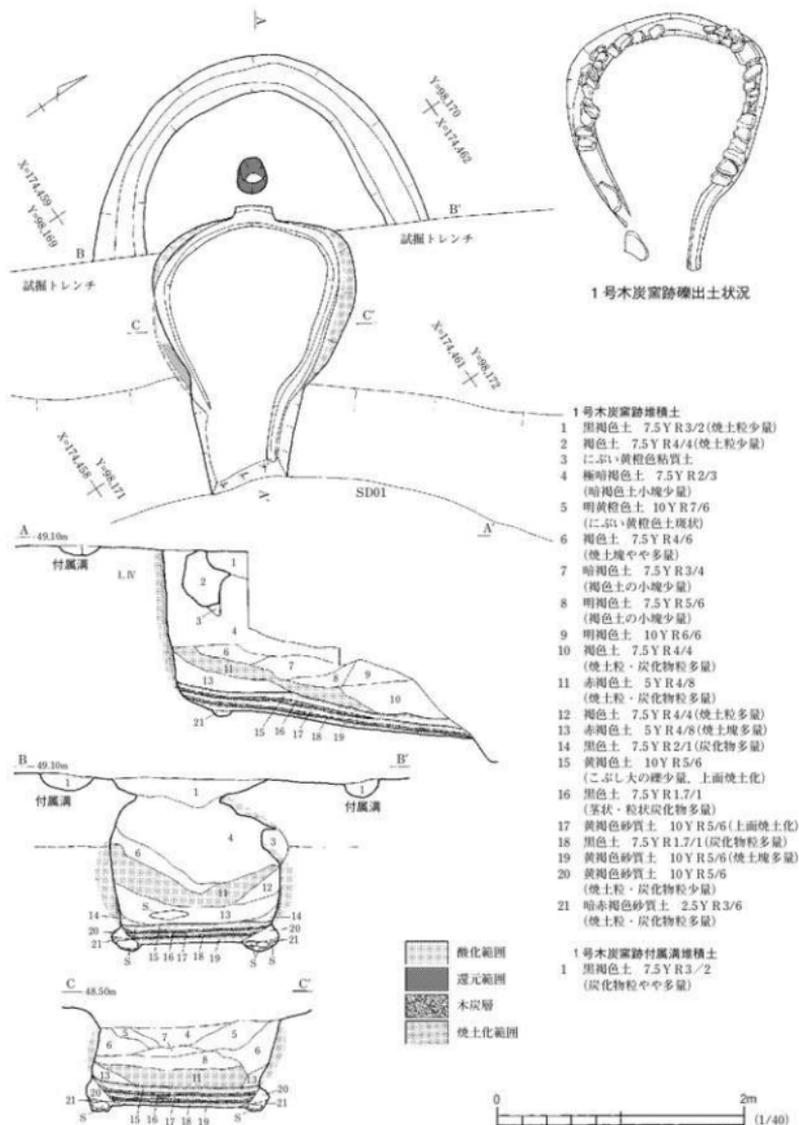


図16 1号木炭窯跡(1)

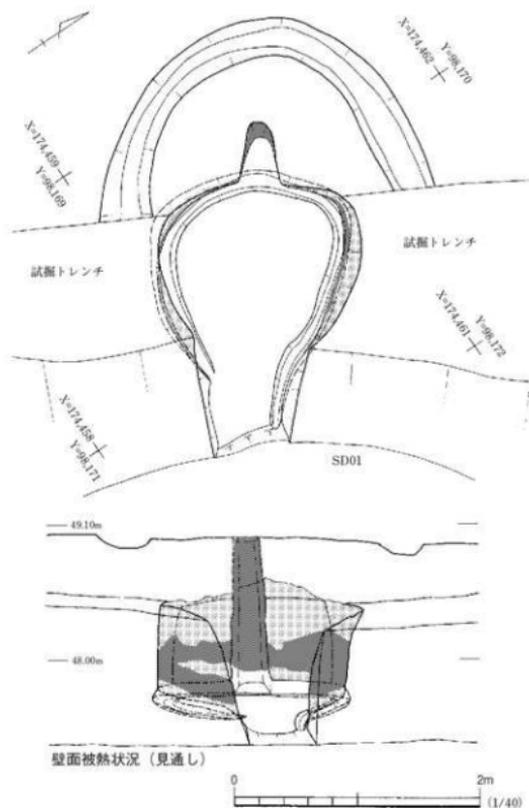


図17 1号木炭窯跡(2)

天井崩落土、窯内堆積土の3つに大別できる。陥没孔堆積土は $\ell 1 \sim 4$ で、 $\ell 1 \cdot 2 \cdot 4$ には少量の焼土粒が含まれる。 $\ell 3$ は天井崩落後も残っていた側壁の一部が再び崩落し、陥没孔内に落ち込んだものである。 $\ell 5 \sim 11$ が天井崩落土である。 $\ell 11$ は、被熱のため強く赤変していることから、本来はこの層の下面が本木炭窯跡の天井であったものと考えられる。 $\ell 5 \sim 10$ までの各層には、塊状の土が多く含まれている。

$\ell 12 \sim 14$ は、本木炭窯跡の操業停止から天井の崩落までの間に窯跡内に流入し堆積した層と考えられる。焼土と炭化物を多く含んでいる。奥壁側が厚く焚口に向かって次第に薄く堆積していることから、土砂は主に煙出し穴から流入したものと考えられる。 $\ell 13$ 内からは底面からやや浮いた状態で扁平な礫が1点出土している。

坦であるが、奥壁から焚口に向かって $5 \sim 10^\circ$ の角度の緩やかな下り勾配がつけられている。焼成室の奥壁のほぼ中央には奥壁を半円柱形に掘りくぼめた煙道が垂直方向に伸び、その上部の天井には地表に開口する煙突状の煙出し穴がほぼ垂直方向に穿たれている。焚口と煙出し穴の中心を結んだ線は、北から 55° 西にふれている。

煙出し穴の開口部の平面形は不整な円形で、径24cmである。煙出し穴の開口部の周囲の一部は、皿状に掘りくぼめられている。焼成室の幅は最大で172cm、焚口の幅は62cm、焚口から奥壁までの長さは234cm、煙道の奥壁を含めると278cm、煙道の幅は34cmである。

本木炭窯跡内に堆積して

いた土は、陥没孔堆積土、

焼成室の底面と壁は、被熱のため全面が強く赤変硬化していた。また煙道の壁の全面と焼成室の壁面の下半が、黒変していた。これは、本木炭窯跡で焼成された木炭に由来する炭素が壁面に吸着したことによって生じたものと考えられる。よって、壁面が黒変している部分は木炭が置かれていた高さを示しているものと思われる。奥壁と側壁の角の部分がほかの部分に比べて若干高い位置まで黒変している。側壁と煙道の壁を断ち割った結果、赤変した範囲は最大で13cmの厚さに及んだ。黒変した部分の厚さは最大で2cmであった。

床面を断ち割ったところ、窯内堆積土直下の赤変硬化した面と本木炭窯跡の掘形底面との間に、炭化物をきわめて多く含んだ層と上面を赤変硬化した盛土層が何層か互層をなして堆積していることがわかった。この赤変硬化した面はより古い操業面で、その直上にそれぞれの操業によって堆積した炭化物をきわめて多く含む土が堆積しているものと考えられた。この断ち割り断面を精査したところ、このような面がさらに2面あることがわかり、すでに調査した本窯跡廃絶直前の操業面を合わせると本木炭窯跡の操業面は3面あることがわかった。新たに見つかった操業面は、廃絶直前の操業面をA面とし、その下位で見つかった操業面をB・C面と呼ぶことにした。

A面は、こぶし大の礫を少量含む厚さ5cmの黄褐色土の客土によって全面がほぼ平坦に整地され、その上面は厚さ3cmにわたって赤変硬化していた。この層を除去すると、奥壁から焼成室にかけての底面に粒状・茎状の炭化物を多く含む黒色土が堆積していた。これを ℓ 16とした。この層の厚さは、1～1.5cmである。

この層を除去すると、B面の赤変硬化した面が検出された。B面は、厚さ5cmの黄褐色砂質土の客土によって全面がほぼ平坦に整地され、その上面は厚さ2cmにわたって赤変硬化していた。これを ℓ 17とした。

この層を除去すると、奥壁から焚き口にかけての底面に炭化物を多く含む厚さ2cmの黒色土が堆積していた。これを ℓ 18とした。 ℓ 18を除去すると、C面の赤変硬化した面が検出された。C面は、厚さ5cmの黄褐色砂質土の客土によって全面がほぼ平坦に整地され、その上面は厚さ2cmにわたって赤変硬化していた。これを ℓ 19とした。 ℓ 19を除去すると掘形の底面が検出された。掘形の底面は、基本土層のLVIの中にある。掘形の底面はほぼ平坦で、奥壁から焚き口に向かって5～10°の角度の緩やかな下り勾配がつけられている。

掘形底面の精査をしたところ、扁平な自然礫が壁際に一巡して並べられた状態で検出された。さらに精査を進めると、壁際に沿って最大幅13cmの溝が掘られ、その中に扁平な自然礫がほぼ隙間なく並べられていることがわかった。溝は焚き口にまで伸び、側壁と奥壁の下部はえぐられてオーバーハングしていた。溝に堆積していた土は、焼土粒と炭化物粒を含んだ黄褐色から暗赤褐色土で、C面の底面の整地層に覆われていた。これらのことから、この溝は窯体内の排水を目的とした暗渠と考えられる。

1号本木炭窯跡の付属溝は、煙出し穴の周囲で検出された。煙出し穴からは55～70cm離れて、これを囲むように半円形に巡る。本溝の両端のSD01に接する部分は、試掘トレンチの掘削の時に掘り

とばされたが、本来の平面形はU字形で、両端はSD01に注ぐように接続していたものと考えられる。溝の幅は最大で43cm、深さは最大で10cmである。

焚口前面のSD01の斜面中腹は、犬走り状の平坦面となっている。平坦面の幅は50～90cmで、等高線にほぼ平行しながら伸びている。平坦面の北東端は、常磐自動車道の二期工事区、つまり今回の調査では未調査の部分に伸びている。南西側はSD01の蛇行に沿って、約11mのところまで自然に消滅している。

本木炭窯跡前面のSD01には土層観察用の畦を残しながら掘り込みを行ったものの、本木炭窯跡に伴うような作業面は検出されなかった。図19に示したSD01のA-A'断面図でいえば、 $\ell 1 \cdot 2$ に焼土粒が含まれており、本木炭窯跡から流れ込んだものと判断された。このことから本木炭窯跡の前面には広い面積の作業面は確保できず、SD01の斜面に犬走り状の狭い平坦面を設けてこれを作業面としたものと考えられる。

本遺構からは、2点の製錬炉の炉壁片が底面の整地層の中から出土したほかは、遺物は出土しなかった。炉壁片は、複数の整地層にまたがっていたため、どの操業面に伴うものかは判断しがたい。いずれも手のひら大の扁平なもので、胎土にスサの痕跡を含み、鉄滓が溶着している。

本遺構は形態や規格から大竹式木炭窯と推察され、近代以降の所産と考えられる。SC02と同じ時期に操業されたものと考えられる。ただし、出土した製錬炉の炉壁片については古代の所産である。これらの遺物については、搬入物と推察される。(青山)

2号木炭窯跡 SC02(図18, 写真16・17)

本遺構は、II区の南部、I21グリッドに位置する。検出面はLV上面である。試掘調査の時に、本遺構の煙出し穴がすでに検出されていた。今回の本調査ではこれに加え、SD01の掘削によって露出したSD01の斜面に、焼成室の断面が検出された。また、煙出し穴の周囲の精査によってこの周囲を巡る1条の溝跡が検出された。これを2号木炭窯跡付属溝とした。煙出し穴の周囲は被熱により赤変硬化していたため、検出は容易であった。

本木炭窯跡の本体が検出されたのはSD01の東斜面の上部で、煙出し穴と2号木炭窯跡付属溝が検出されたのはSD01東側の平坦面である。本木炭窯跡北方約9mのSD01の対岸にあたる斜面には、本木炭窯跡と向かい合うようにSC01が位置する。

本木炭窯跡は、焼成室、煙道、煙出し穴が遺存していた。焚口から焼成室の約半分はSD01の斜面の崩落によってすでに失われていた。焼成室の天井は崩落して木炭窯跡内に落ち込んでいた。燃焼室の奥壁から両側壁の一部が遺存し、奥壁上部のみは天井の一部が崩落せずに遺存していた。

以上のように天井部は遺存していないため旧状は不明であるものの、SD01の斜面に露出した基本土層のLV～Vにかけての地盤を等高線に直交するようにトンネル状にくりぬいて窯体とした、半地下式の木炭窯であったと考えられる。

平面形は不明であるが、遺存していた部分で弧を奥壁側とした半円形である。壁は床からほぼ垂

第2編 大田切遺跡

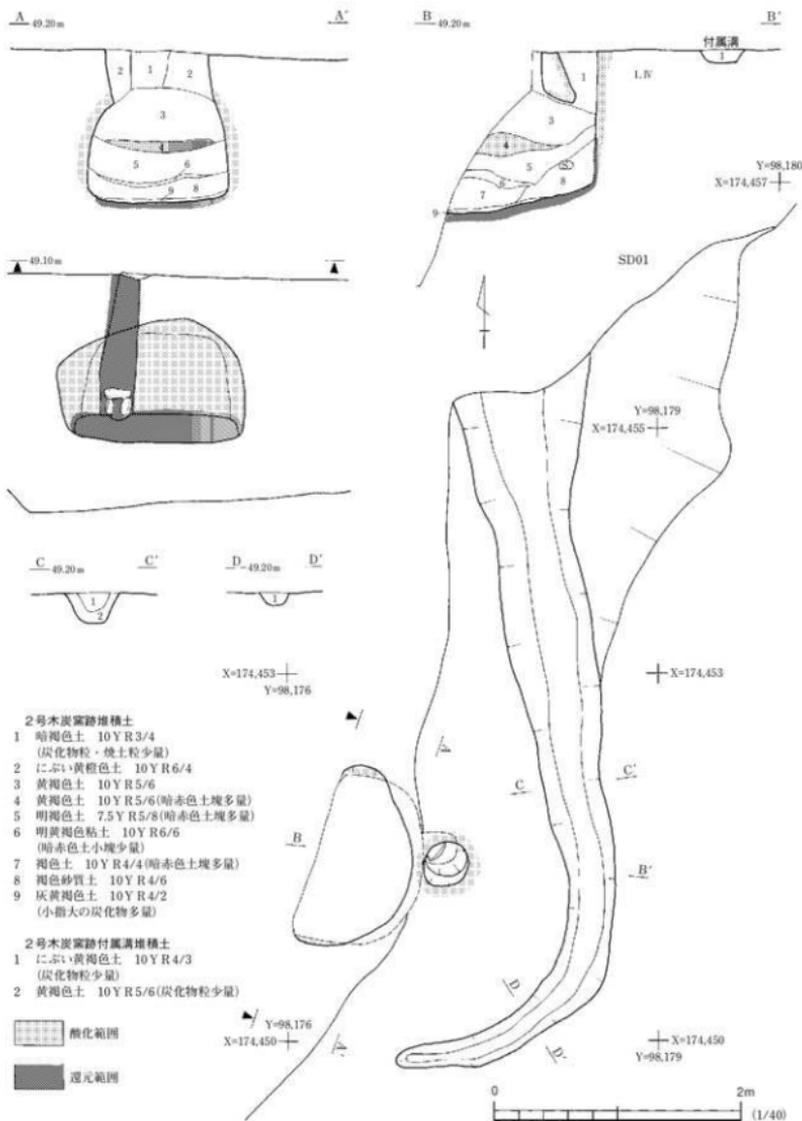


図18 2号木炭窯跡

直に立ち上がるものの、一部に外傾する箇所がある。底面はほぼ平坦であるが、奥壁から焚口方向に向かって約10°の角度の緩やかな下り勾配がつけられている。焼成室の奥壁には、向かってやや左に寄った位置に奥壁を半円柱形に掘りくぼめた煙道が垂直方向に伸び、その上部の天井には地表に開口する煙突状の煙出し穴がほぼ垂直方向に穿たれている。煙出し穴と遺存していた底面のそれぞれ中心を結んだ線は、北から105°東にふれている。

煙出し穴の開口部の平面形は不整な円形で、径35cmである。煙出し穴の開口部の周囲の一部は、皿状に掘りくぼめられている。焼成室の幅は最大で151cm、遺存した底面の先端部から奥壁までの長さは87cm、煙道の幅は29cmである。

煙道の基部には、やや扁平な手のひら大の川原石を3個用いた、鳥居形の吸煙口が設けられている。2個の石は煙道基部の両側壁側に立位に置いて立石とし、その上に1個の石が横位に置かれていた。立石と煙道側壁との間には、黄褐色の土が充填されていた。吸煙口に用いられた石と煙道の奥壁との間隔は15cmであった。

本木炭窯跡内の堆積土は、陥没孔堆積土、天井崩落土、室内堆積土の3つに大別できる。陥没孔堆積土はℓ1である。ℓ2～4が天井崩落土である。ℓ4は、被熱のため強く赤変していることから、本来はこの層の下面が本木炭窯跡の天井であったものと考えられる。ℓ4には、塊状の土が多く含まれていた。ℓ5～9は、本木炭窯跡の操業停止から天井の崩落までの間に窯跡内に流入し堆積した室内堆積土と考えられる。室内堆積土は最大で50cmの厚さをもつことから、天井は比較的長期間崩落しなかったものと考えられる。また、室内堆積土は奥壁側がやや厚いことから、土砂は主に煙出し穴から流入したものと考えられる。

遺存していた焼成室の壁は、被熱のため全面が強く赤変硬化していた。底面と煙道は、全面が黒変していた。側壁と煙道の壁を断ち割った結果、赤変した範囲は最大で12cmの厚さに及んだ。黒変した部分の厚さは最大で7cmであった。

床面を断ち割ったが古い操業面は確認できず、掘形の底面がそのまま操業面になっていることがわかった。掘形の底面は、基本土層のLVである。

2号木炭窯跡付属溝は、煙出し穴の周囲を巡るように検出された。溝は煙出し穴の南方1.3mに起点をもち、煙出し穴を取り囲むようにカーブを描きながら煙出し穴の東方に至り、そこからほぼ北にまっすぐ伸び、SD01に接続する。幅は起点部分で18cm、SD01との接合部分で118cm、深さは起点部分で3cmを測り、SD01との接続部分に向かって深さを増している。

煙出し穴からは、製錬炉の炉壁の破片と思われるものが60g出土している。胎土にスサの痕跡があるものの、鉄滓などは溶着していない。その他には遺物はまったく出土しなかった。

本遺構は形態や規格から大竹式木炭窯と推察され、近代以降の所産と考えられる。SC01と同じ時期に操業されたものと考えられる。ただし、出土した製錬炉の炉壁については古代の所産である。

(青山)

第4節 溝 跡

本遺跡からは、1条の溝跡が検出された。Ⅱ区の南部に位置する自然の流路跡で、樹枝状に連なる2条の支流がある。

1号溝跡 S D01(図19, 写真18・19)

本遺構は、Ⅱ区の南部、G～Kの19～24グリッドに位置する。検出面はLⅣ上面である。

本遺構は、調査前にあった水田が造成された時の埋め立てによって、検出面の土層であるLⅣに由来する客土が堆積土の上部に厚く堆積していたため、当初はLⅣとの見分けがやや困難であった。精査の結果、この客土の広がりが南西から北東に向かって溝状に伸びていることから、客土を機械力によって除去したところ、下層から自然に堆積したと考えられる砂質土を検出し、自然の溝跡であることが判明した。

本溝跡の中央部や東よりの部分は、工事側の都合によって設定された二期工事部分の未調査部分に当たり調査ができなかった。また機械力によって客土を掘り下げると、現地表から3mほどの深さにまで達したこと、湧水が多かったことから、作業の安全を考慮してこの未調査部分の両側を法面としたため、法面下の堆積土の掘削を断念した。溝跡の東端部分も、調査区の広さに対して溝がかなり深くなることと湧水のため掘削を断念し、溝跡の両側面の精査のみを行った。

検出された場所は、東に向かってきわめて緩やかに下っている。また本溝跡の壁面中には、S C 01・02の2基の木炭窯が掘り込まれている。

溝の平面形は、南西側が狭く北東に向かって幅を広げながら、緩やかに蛇行して伸びている。南西端が最も狭く1.7m、北東端部付近がもっとも広く14.5mである。底面は南西端が最も浅く64cm、北東に向かうにつれて深くなり、計測はできなかったものの最も深い北東端で3.5mほどであった。溝の幅と深さから判断すると、上流は南西側となる。

本溝跡内の堆積土の状況は、地点によって様ではないものの砂質土とシルトが交互に堆積していた。4層からなる堆積層は、水流による侵食と堆積作用を頻繁に受けた、自然堆積の様相を呈する。いずれの層もグライ化していた。堆積土内には、こぶし大から人頭大の礫を多く含んでいた。底面と堆積土中から、自然木が少量出土した。

本溝跡からは、製練がのが壁の破片が1,200g出土した。大きさは、細片から手のひら大である。いずれも、前述したS C 01前面から下流にかけて出土している。

本溝跡は、自然の流路跡で、本遺跡の周辺から開析を始める小谷の一つであったものと考えられる。第二次世界大戦後の水田造成の時に埋め立てられるまでは、自然流路として機能していたと推察される。

(青 山)

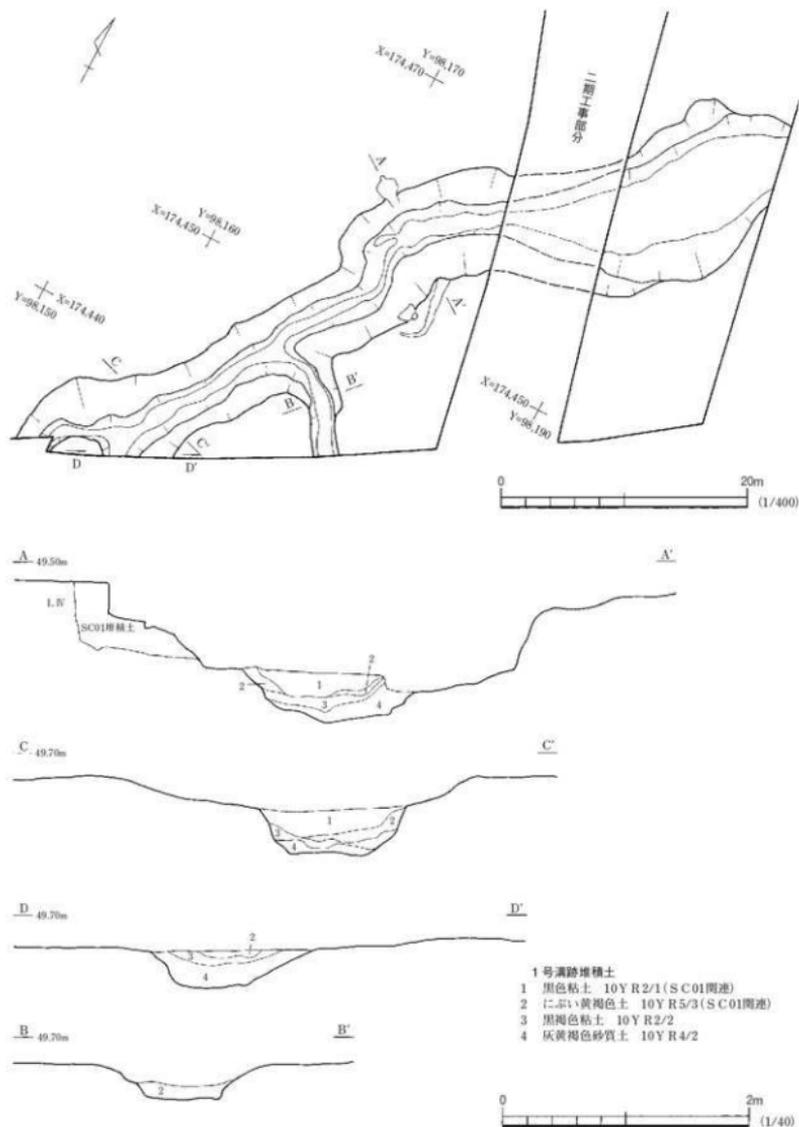


図19 1号溝跡

第5節 道 跡

本遺跡からは、1条の道跡が検出された。平成19年度に調査をしたⅡ区の中央部で確認した。

1号道跡 SF01

遺 構(図20・21, 写真20・21)

本遺構は、Ⅱ区の中央部、G15～19グリッドに位置する。平成19年度に調査した旧町道219号金谷・大富3号線の道路部分の直下から検出された遺構である。舗装道路の砂利を除去した段階では確認できなかったが、旧表土層であるLⅠを取り除いていく段階で検出された。本遺構に伴う溝跡2条の最終的な確認面はLⅢ上面である。

本遺構は、道跡の側溝と考えられる2条の並行する溝跡からなる。主軸方位はほぼ南北で、旧町道219号金谷・大富3号線と一致する。溝の間の道路部分の幅は4.5mであり、これも旧町道と一致する。東西の溝跡は、深いところで40cmの深さがあるが、南に行くにしたがって深さが減じている。このため、Ⅱ区南部では溝跡が消失している。これは旧町道を建設する時に、削平された可能性が高い。溝跡の断面形は壁面の立ち上がりが緩やかなU字形を呈しており、溝の底面から垂直に立ち上がる箇所はない。溝の幅は東側の溝で60cm、西側の溝で70～80cmである。

この溝跡の堆積土は2層に分けられ、基本的にはLⅠと同じ土で埋まっていた。堆積土は攪拌された状況ではなかったが、土層にしまりがなかった。堆積状況から、溝跡は周囲からの流入土で埋まったものと判断される。堆積土には砂利等は混じっていないことから、舗装道路建設時にはすでに溝は埋まっていたと考えられる。

道跡の中央部は基本的にはLⅢ上面が露出していたが、一部では粘土を貼って平坦に整えている箇所もあった。道跡の東半部で掘形とした部分であり、図中では二点鎖線で示している。この掘形部分では $\ell 3$ とした黄褐色粘土は1～3cmの厚さがあり、堅く踏みまみっている。 $\ell 4 a \sim d$ は掘形の埋土である。東半部の低い部分を埋めて平坦に整えている。この土でSX01も最終的に埋没したと推察される。

遺 物(図21, 表1, 写真30)

図21-1・3は西側の溝跡から、2は東側の溝跡から出土している。

1は縄文時代後期の土器片である。波状口縁を有する口縁部から胴部にかけての資料である。波状口縁部には、2カ所の盲孔がある。沈線で区画された胴部には波状の沈線が垂下する。2は近代の磁器片である。

3は基部を有する鉄製品である。図の右側が窄まるように整形されている。両側縁は平坦に整えられている。図の左側には径5mmの孔が穿たれている。詳細はわからないが、何かの部品の一部であろうか。

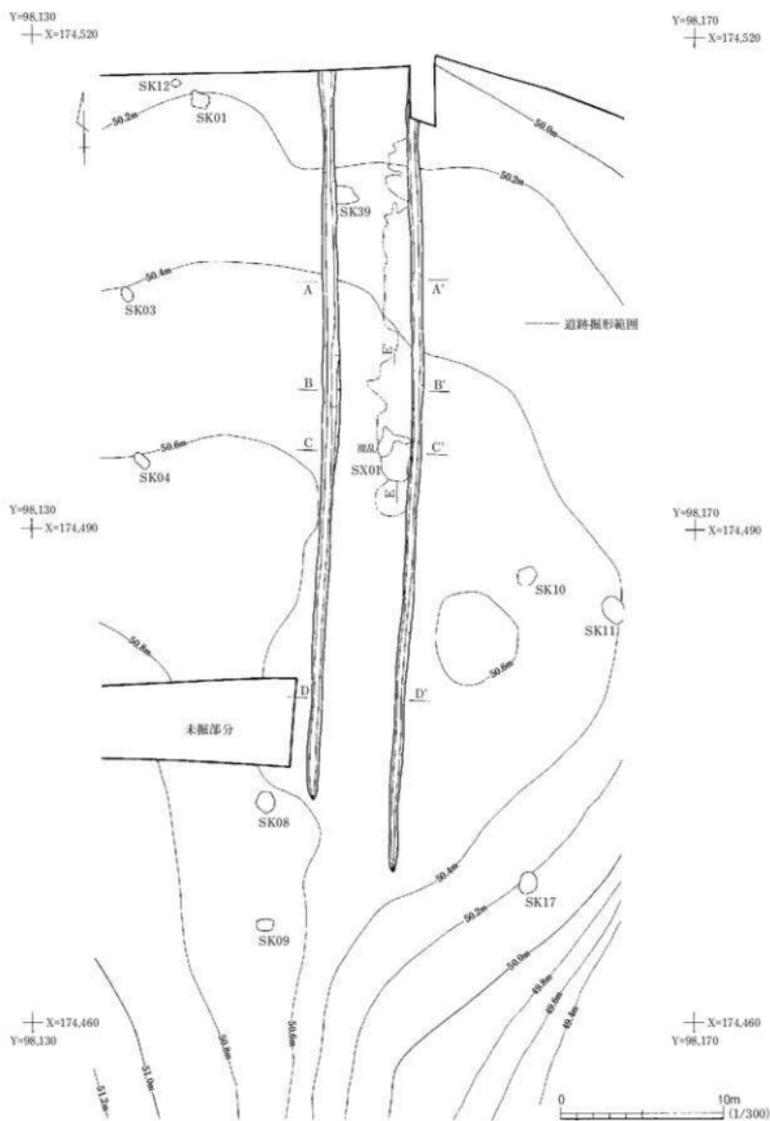


図20 1号道跡

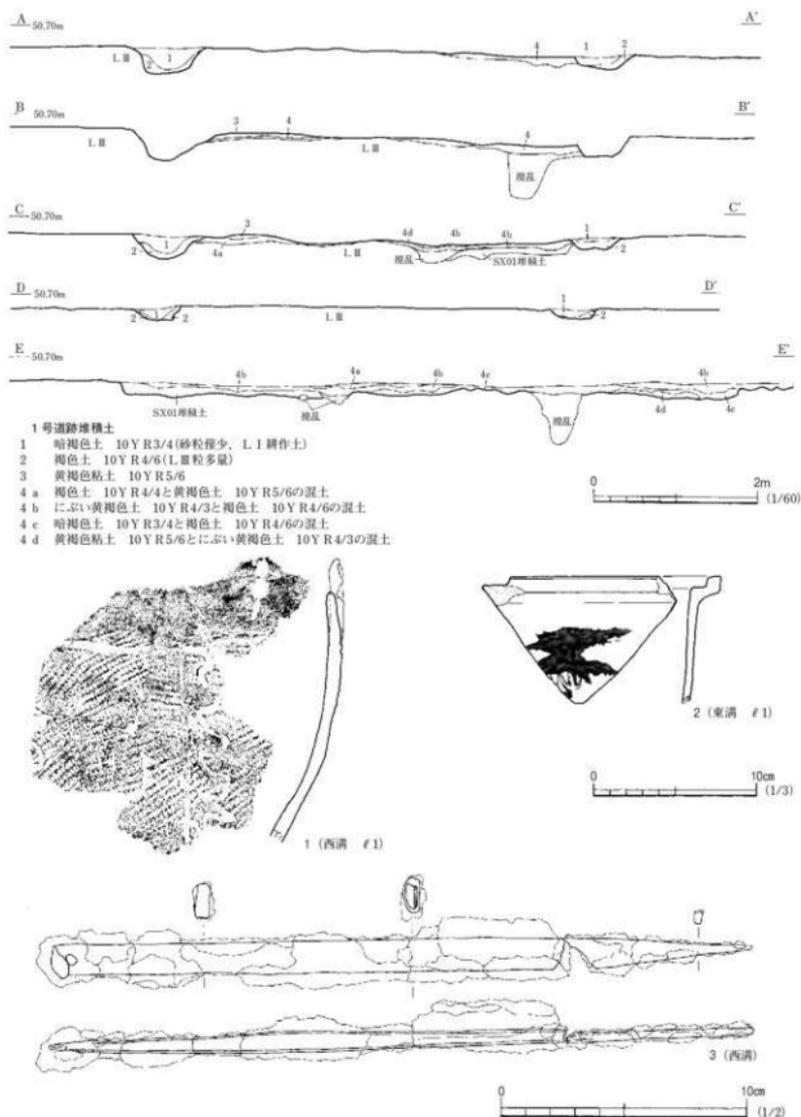


図21 1号道跡, 出土縄文土器・磁器・鉄製品

ま と め

本遺構は幅4.5mの道跡であり、両側には素掘りの溝を有する。堆積土の状況や出土遺物から近代以降の所産と考えられる。(門 脇)

第6節 土 坑

本遺跡からは39基の土坑が検出された。調査区ごとの内訳は、Ⅰ区が16基、Ⅱ区が18基、Ⅲ区が5基である。

1号土坑 SK01(図22, 写真22)

本土坑はⅡ区北西部のF15グリッドに位置し、検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないが、西側にSK12が位置する。

遺構内堆積土は3層からなる。ℓ1は灰黄褐色土、ℓ2は褐色土、ℓ3は黒褐色土で、特にℓ3はLⅢ塊や炭化物・焼土などを多く含み、人為堆積と判断した。

平面形は東西方向にやや長い隅丸長方形を呈し、短軸の midpoint を基準とした主軸方位はN75°Wである。規模は長軸116cm、短軸94cm、検出面からの深さ18cmを測る。底面の形状は凸凹で、周壁は各壁とも40～45°前後で立ち上がるが、南東壁のみ緩やかな段差が認められる。

本土坑から遺物は出土しなかった。このため、その年代については不明である。土坑の形状や内容物などから木炭焼成土坑の可能性が高い。(菅 野)

2号土坑 SK02(図22, 写真22)

本土坑はⅡ区北西部のE16グリッドに位置し、検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの、南東側にSK03・07がある。

遺構内堆積土は2層からなり、堆積状況は不明である。上層のℓ1には炭化物を多量に含む。

平面形は南北方向に長い楕円形を呈し、南側は北側に比して幅が広い。規模は長軸106cm、短軸50cm、検出面からの深さ9cmを測り、短軸の midpoint を基準とした主軸方位はN15°Eである。底面は平坦で、周壁は各壁とも底面から45～50°と緩やかに立ち上がる。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代については不明である。土坑の形状や内容物などから木炭焼成土坑の可能性が高い。(菅 野)

3号土坑 SK03(図22, 写真22)

本土坑はⅡ区北西部のE16グリッドに位置し、検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの、西側にSK07がある。

遺構内堆積土は3層からなり、最下層のℓ3はLⅢなどをブロック状に含むことから人為堆積と

判断した。ℓ1・2の堆積状況は不明であるが、2層とも少量の炭化物を含む。またℓ1は焼土粒を少量含む。

平面形は南北方向に長い楕円形を呈する。規模は長軸89cm、短軸59cm、検出面からの深さ23cmを測り、短軸の midpoint を基準とした主軸方位はN30°Wである。周壁は西壁を除く各壁が60°前後で、西壁のみ約50°とやや緩やかに立ち上がる。

本土坑から遺物は出土しなかった。このため、その年代については不明である。土坑の形状や内容物などから木炭焼成土坑の可能性が高い。(管野)

4号土坑 SK04(図22, 写真22)

本土坑はⅡ区北西部のE17グリッドに位置し、検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの、西側にSK05がある。

遺構内堆積土は3層で、ℓ3に炭化物、焼土粒を多量に含む。

平面形は南北方向に長い楕円形を呈し、規模は長軸114cm、短軸69cm、検出面からの深さ15cmを測り、短軸の midpoint を基準とした主軸方位はN45°Wである。底面はほぼ平坦であり、周壁は各壁とも急斜に立ち上がる。

本土坑から遺物は出土しなかった。このため、その年代については不明である。土坑の形状や内容物などから、木炭焼成土坑の可能性が高い。(管野)

5号土坑 SK05(図22, 写真22)

本土坑はⅡ区北西部のE17グリッドに位置し、検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの、東側にSK04が位置する。

遺構内堆積土にはふい黄褐色土が薄く堆積していたことから、自然堆積であるか人為堆積であるかは判断できなかった。

平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し、規模は長軸103cm、短軸67cm、検出面からの深さ5cmをそれぞれ測り、短軸の midpoint を基準とした主軸方位はN25°Wを指す。底面は一部掘りすぎてしまったもののおおむね平坦で、断面形は浅い皿状を呈する。

本土坑から遺物は出土しなかったため、年代は不明である。土坑の形状や内容物などの特徴から木炭焼成土坑の可能性が高い。(管野)

6号土坑 SK06(図22, 写真22)

本土坑はⅡ区北西部のE15グリッドに位置し、検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないが、東側にSK12が位置する。

遺構内堆積土は4層に分けられ、ℓ1とℓ3が褐色土系、ℓ2とℓ4が黒褐色土に大別される。おのおのの堆積状況は不明であるが、ℓ2は炭化物由来の層で木炭が多く堆積していた。

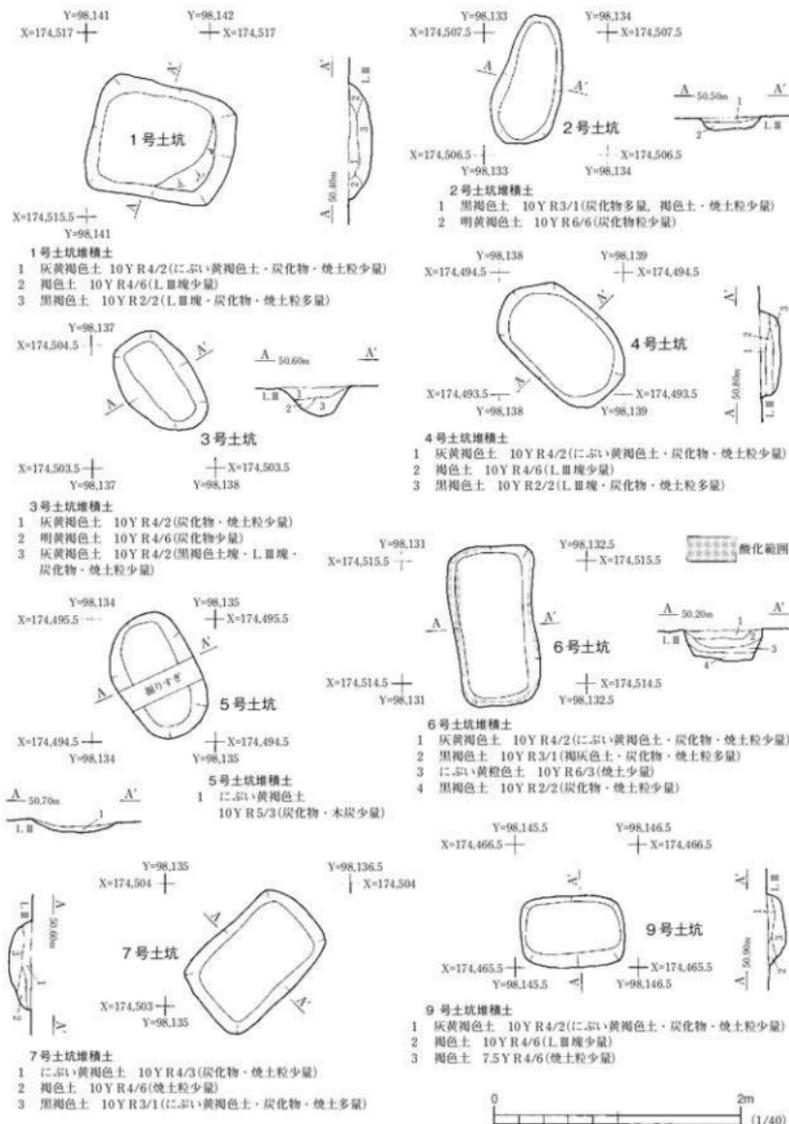


図22 1～7・9号土坑

平面形は整った隅丸長方形を呈し、規模は長軸130cm、短軸63cm、検出面からの深さ26cmをそれぞれ測り、短軸の midpoint を基準とした主軸方位はN5°Wを指す。底面はほぼ平坦で、周壁は各壁とも底面から急に立ち上がる。各壁とも焼土化しており、特に北西壁で顕著であった。

本土坑内から遺物は出土しなかったため、その年代は不明である。土坑の形状や内容物、さらに焼土化などの所見から木炭焼成土坑の可能性が高い。(管野)

7号土坑 SK07(図22, 写真22)

本土坑はⅡ区北西部のE16グリッドに位置し、検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの、北西側にSK02、東側にSK03がそれぞれ位置する。

遺構内堆積土は3層からなり、堆積状況は不明である。おおむね $\ell 1 \cdot 2$ の褐色系土と $\ell 3$ の黒褐色土に大別され、最下層の $\ell 3$ は炭化物や焼土を層状に多く含んでいた。

平面形は整った隅丸長方形を呈し、短軸の midpoint を基準とした主軸方位はN45°Eを指す。規模は長軸114cm、短軸73cm、検出面からの深さ18cmをそれぞれ測る。底面はほぼ平坦で、周壁は各壁とも緩やかに立ち上がる。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。土坑の形状や内容物などの特徴から木炭焼成土坑の可能性が高い。(管野)

8号土坑 SK08(図23, 写真23)

本土坑はⅡ区南西部のF19グリッドに位置し、検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの、南側にSK09が位置する。

遺構内堆積土は6層からなり、その堆積状況などから自然堆積と判断した。おおむねLⅢやLⅣ由来の黄褐色系土が主体を占めるが、 $\ell 5$ のみが炭化物粒を含む黒褐色土である。

平面形は円形を呈し、長軸122cm、短軸125cm、検出面からの深さ49cmをそれぞれ測る。底面はLⅣまで掘り込まれており、若干の凹凸がみられた。周壁は西壁のみ65°前後と急峻に立ち上がるほかは55°前後で立ち上がり、断面形態は鍋底形を呈する。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。土坑の形状や堆積土の特徴などから縄文時代の土坑の可能性がある。(管野)

9号土坑 SK09(図22, 写真23)

本土坑はⅡ区南西側のF20グリッドに位置し、検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの、北側にSK08が位置する。

遺構内堆積土は3層からなり、上層の $\ell 1 \cdot 2$ はその堆積状況や土質などから自然堆積と判断した。 $\ell 3$ は褐色土で炭化物が上層に比して少ない特徴を有する。

平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈し、短軸の midpoint を基準とした主軸方位はほぼ東西方向を

指す。規模は長軸84cm、短軸58cm、検出面からの深さ15cmをそれぞれ測る。底面は平坦であるが、東側に移行するにしたがって若干低くなる。周壁は南壁が緩やかな他は急に立ち上がる。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。土坑の形状や内容物などの特徴から木炭焼成土坑の可能性が高い。(菅野)

10号土坑 SK10(図23, 写真23)

本土坑は、Ⅱ区中央部のH18グリッドに位置する。検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係はない。東側にSK11が位置する。

平面形は不整な円形で、径106cm、深さ9cmである。遺構内堆積土は3層からなり、自然堆積で、いずれも炭化物粒を含んでいた。底面の一部が弱く赤変していたことから、木炭焼成土坑であると考えられる。本土坑から遺物は出土しなかった。年代は不明である。(青山)

11号土坑 SK11(図23, 写真23)

本土坑は、Ⅱ区中央部のH18グリッドに位置する。検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係はない。西側にSK10が位置する。

平面形は不整な楕円形で、長軸160cm、短軸120cm、深さ18cmを測る。底面はほぼ平坦である。

遺構内堆積土は3層からなる。いずれも自然堆積で、ℓ1には炭化物粒と焼土粒を含み、ℓ3には炭化物粒が少量含まれていた。底面の一部が弱く赤変していたことから、木炭焼成土坑であると考えられる。本土坑から遺物は出土しなかった。年代は不明である。(青山)

12号土坑 SK12(図23, 写真23)

本土坑はⅡ区北西部のF15グリッドに位置し、検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの、南東側にSK01が位置する。

遺構内堆積土は2層からなる。ℓ1は炭化物を多量に含む、しまりのない灰黄褐色土、ℓ2にはぶい黄橙色土と明黄褐色土との混土である。堆積状況からℓ1が柱穴の抜取り痕、ℓ2が掘形埋土と判断した。

平面形は、やや東西方向に長い楕円形を呈し、長軸51cm、短軸43cm、検出面からの深さ50cmを測る。また、底面東側には長軸26cm、短軸22cmの小穴を有し、LⅣまで掘り込まれていた。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。その形状などから柱穴状のピットと判断したが、周辺にピットがないことから単独で存在していた可能性が高い。(菅野)

13号土坑 SK13(図23, 写真23)

本土坑はⅠ区北東部のE3グリッドに位置する。検出面はLⅡである。

平面形は不整な楕円形を呈し、北東隅は擾乱を受けている。長軸方位はN33°Wで、長軸156cm、

短軸130cm, 検出面からの深さは最大で16cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、現況から堆積過程は判断できない。出土遺物はなく、本土坑の性格・年代は不明である。(小 河)

14号土坑 SK14(図23, 写真23)

本土坑はⅡ区南西部のE20グリッドに位置し、検出面はLⅢ上面である。遺構の東側のみの検出で、大半は西側の調査区外に伸びる。一部後世の擾乱によって破壊を受けていたが、残存状況は良好であった。

遺構内堆積土は5層からなる。ℓ3は褐色土と暗褐色土と浅黄色土の混土で2~4cm大のブロック状に堆積していることから、人為堆積と判断した。その他の各層については、その堆積状況を明確に判断できなかったが、少なくとも土坑廃絶後に下層のℓ4とℓ5が堆積してそれほど時間がたっていないうちにℓ3を投入して地面を平坦にしたものと推定される。

検出面における平面形は大半が調査区外に伸びるため不明であるが、土坑上位は楕円形、土坑中位から下位にかけては長方形を呈するものと思われる。確認された範囲での規模は東西軸で55cm, 南北軸で115cm, 検出面からの深さ121cmをそれぞれ測る。周壁は土坑中位から下位にかけては垂直に、中位から上位にかけては緩やかに立ち上がる。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえに時期については不明である。堆積土や土坑の形状などから縄文時代の落とし穴状土坑の可能性が高い。(菅 野)

15号土坑 SK15(図24, 写真23)

本土坑はⅡ区南西部のE20グリッドに位置し、検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの、南西側にSK14が位置する。

遺構内堆積土はしまりのない灰黄褐色土の単層で、堆積状況は不明である。平面形は整った円形をなし、直径40~45cm, 検出面からの深さ86cmをそれぞれ測る。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。その形状などから柱穴状のビットと判断されるが、時期については言及できない。(菅 野)

16号土坑 SK16(図24, 写真24)

本土坑はⅡ区南部のG・H21グリッドに位置し、検出面はLⅣである。他の遺構との重複関係はないが、南側にSD01, 東側にSC01が位置する。

遺構内堆積土はLⅡに類似するしまりの強い黒褐色土の単層で、堆積状況は不明である。平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈し、規模は長軸144cm, 短軸58cm, 検出面からの深さ11cmをそれぞれ測る。底面は平坦である。周壁は西壁のみ60°前後とやや急であるが、ほかは30°前後と底面から緩やかに立ち上がる。主軸方位はN83°Wでほぼ東西方向を指す。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。その性格についても言及できないが、堆積土の状況から縄文時代の土坑の可能性が高い。(菅野)

17号土坑 SK17(図24, 写真24)

本土坑はⅡ区中央部のH20グリッド、標高50.1m付近の微高地上に位置し、検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係はない。

遺構内堆積土は2層からなり、 $\ell 1$ は黒褐色土で炭化物や焼土粒を多く含み、 $\ell 2$ は黄褐色土で前者に比して炭化物が少ない。おのおのの堆積状況は不明である。

平面形は隅丸方形を呈し、短軸の中点を基準とした主軸方位はN12°Eを指す。規模は長軸112cm、短軸102cm、検出面からの深さ26cmをそれぞれ測る。底面はほぼ平坦で、周壁は50°前後とやや急斜に立ち上がる。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。土坑の形状や内容物などの特徴から木炭焼成土坑の可能性が高い。(菅野)

18号土坑 SK18(図24, 写真24)

本土坑はⅠ区北東部のE2グリッドに位置する。検出面はLⅡである。

平面形は不整な楕円形を呈し、南側は攪乱を受けている。長軸方位はN65°E、長軸128cm、短軸100cm、検出面からの深さは最大で16cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面には若干の凹凸が認められる。堆積土は2層に分けられる。 $\ell 1$ ・ $\ell 2$ ともに炭化物を多量に含み、さらに $\ell 2$ は焼土塊も多量に含むことから、人為堆積と考えられる。出土遺物はなく、本土坑の性格・年代は不明である。(小 河)

19号土坑 SK19(図24, 写真24)

本土坑はⅠ区北西部のB2・3グリッドに位置する。検出面は、LⅡである。

平面形は楕円形を呈し、北側と南側の一部は攪乱を受けている。長軸方位はN40°Wを指し、長軸128cm、短軸92cm、検出面からの深さは最大で24cmである。周壁は緩やかに立ち上がる。底面には若干の凹凸が認められ、中央部に楕円形のくぼみがある。堆積土は1層で、現況から堆積過程は判断できない。出土遺物はなく、本土坑の性格・年代は不明である。(小 河)

20号土坑 SK20(図25・28, 写真24・30)

本土坑はⅠ区北西部のB3グリッドに位置する。検出面はLⅡである。

平面形は不整な楕円形を呈し、長軸方位はN50°Eである。規模は、長軸196cm、短軸80cm、検出面からの深さは最大で12cmを測る。周壁はやや急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、現況から堆積過程は判断できない。

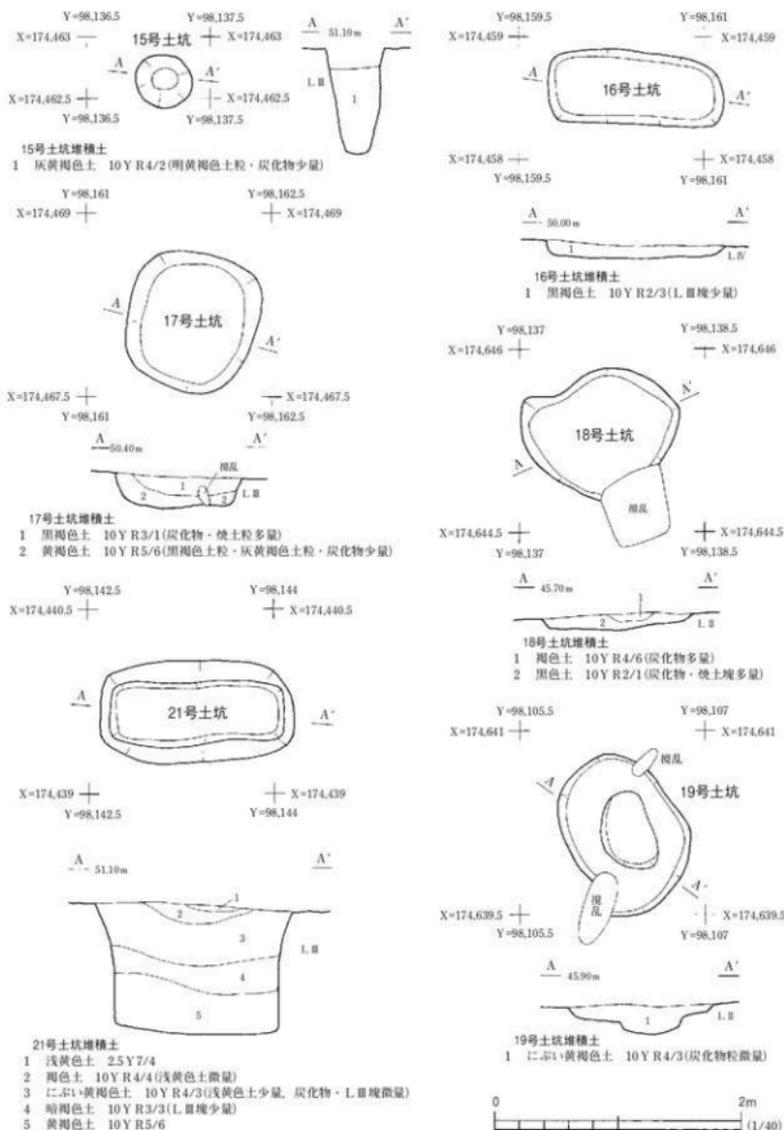


图24 15~19·21号土坑

検出面から縄文土器片44点が出土し、そのうち5点を図示した。図28-1は口縁部片である。隆帯に網目状燃糸文が施されている。図28-2～5は深鉢の胴部片である。2には網目状燃糸文が施文され、3～5には地文に燃糸文が施文されている。なお、1・2・4の内面は赤彩されており、蛍光X線分析の結果、赤色顔料はベンガラである可能性が指摘された(第3章参照)。

本土坑の年代は、出土遺物から縄文時代晩期頃と考えられる。性格は不明である。(小 河)

21号土坑 SK21(図24, 写真24)

本土坑はⅡ区南西部のF22・F23グリッドに位置する。周辺の地形は、南方向に緩やかに傾斜している。検出面は、LⅢ上面である。

平面形は隅丸長方形を呈する。長軸は真北方向に直交する。長軸156cm, 短軸84cm, 検出面からの深さは最大で108cmである。底面はほぼ平坦で、周壁は底面から72cm程のところまでほぼ直角に立ち上がり、そこから逆ハの字状に急傾に立ち上がる。この形状は、本遺跡SK34と同様のものである。堆積土は5層に分けられる。壁際からの流入状況が認められることから、いずれも自然流入土と考えられる。本土坑の性格は断面の形状と深さから、落とし穴状土坑と考えられる。出土遺物はなく、年代は不明である。(小 河)

22号土坑 SK22(図25, 写真24)

本土坑はⅠ区南部のC8・9グリッドに位置し、検出面はLⅢである。他の遺構との重複関係はなく、周囲は遺構が希薄な地点となる。

遺構内堆積土は3層からなる。ℓ1はにぶい黄褐色土で灰に由来する層、ℓ2は黒褐色土で炭化物や焼土を多量に含む。ℓ3は灰黄褐色土と明黄褐色土の混土で炭化物はきわめて少ない。このことから堆積状況はℓ1・2が自然堆積、ℓ3が人為堆積と判断した。特に後者は湧水が著しい箇所ゆえの掘形と考えられる。同時に、ℓ1は東側に厚く堆積し、西側に移行するにしたがって層厚が薄くなる。

検出面における平面形は一部試掘時のトレンチで削平されているものの、南北方向に長い楕円形を呈し、長軸228cm, 短軸158cm, 検出面からの深さ23cmをそれぞれ測る。土坑中位～下半にかけては長軸119cm, 短軸110cm, 底面からの深さ約10cm内外のくぼみを有し、短辺の中点を基準とした主軸方位はN46°Wを指す。掘形底面は若干の凹凸が認められた。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。土坑の形状や内容物などの特徴から、掘形を有する木炭焼成土坑の可能性が高い。(菅 野)

23号土坑 SK23(図25, 写真25)

本土坑はⅠ区南東部のD6グリッドに位置する。南西側35cmにはSK25, 同じく220cmにはSI01が近接する。検出面はLⅡである。

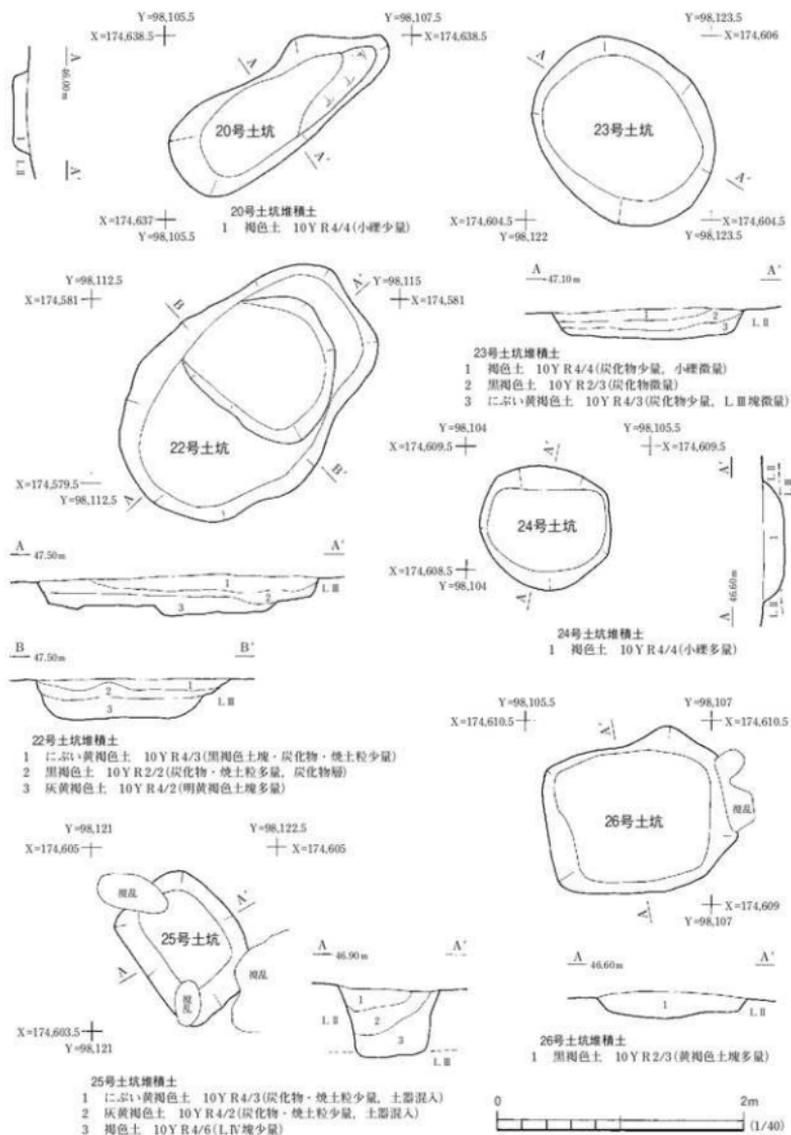


図25 20・22～26号土坑

平面形は楕円形を呈する。長軸方位はN35°Wで、長軸160cm、短軸132cm、検出面からの深さは最大で24cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層で、炭化物を少量含んでいる。いずれも周囲からの自然流入土と考えられる。出土遺物はなく、本土坑の性格・年代は不明である。(小 河)

24号土坑 SK24(図25, 写真25)

本土坑はI区南西部のB6グリッドに位置する。検出面はLⅡである。

平面形は不整な円形を呈する。長軸方位はN82°Wで、長軸104cm、短軸100cm、検出面からの深さは最大で16cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面には若干の凹凸が認められる。

堆積土は1層で、現況から堆積過程は判断できない。

本土坑からの出土遺物はなく、性格・年代は不明である。(小 河)

25号土坑 SK25(図25・28, 表1, 写真25・30)

本土坑はI区中央部のD6グリッドに位置し、検出面はLⅡである。検出時にはすでに木の根による攪乱で壁面などが消失していた。また、西側にSⅠ01、北側にSK23がそれぞれ位置する。

遺構内堆積土は3層からなり、堆積状況は不明である。3層とも褐色系土で、最上層の①には土器が多く含まれていた。

検出面における平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し、短軸の midpoint を基準とした主軸方位はN38°Wを指す。規模は長軸117cm、短軸85cm、検出面からの深さ54cmをそれぞれ測る。底面はほぼ平坦をなし、周壁は急に立ち上がる。

遺物は①からロクロ成形の土師器が24点出土し、このうち1点を図示した。図28-6は遺存度25%の胴部下半から底部を欠損するロクロ土師器の変で、外面には粘土の固着が認められる。

本土坑は出土遺物から平安時代の所産と推定される。その性格は近接するSⅠ01と軸線がほぼ平行することからこの関連施設の可能性がある。(管 野)

26号土坑 SK26(図25, 写真25)

本土坑はI区南西部のB5・6グリッドに位置する。検出面はLⅡである。

平面形は不整な隅丸長方形を呈する。長軸方位はN82°Eで、長軸152cm、短軸132cm、検出面からの深さは最大で20cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸が認められる。

堆積土は1層で、黄褐色土塊を多量に含むことから人為堆積と考えられる。出土遺物はなく、本土坑の性格・年代は不明である。(小 河)

27号土坑 SK27(図26, 写真25)

本土坑はI区北東部のD3グリッドに位置する。検出面は、LⅡである。



图26 27~32号土坑

平面形は不整な楕円形を呈する。長軸方位はN70°Wで、長軸124cm、短軸88cm、検出面からの深さは最大で16cmを測る。周壁は緩やかに立ち上がり、底面には若干の凹凸が認められる。

遺構内堆積土は2層で、いずれも自然流入土である。本土坑からの出土遺物はなく、性格・年代は不明である。(小 河)

28号土坑 SK28(図26, 写真25)

本土坑はI区北西部のB4グリッドに位置する。検出面はLⅡである。

平面形は不整な楕円形を呈する。長軸方位はN20°Eで、長軸220cm、短軸84cm、検出面からの深さは最大で18cmである。周壁は、西・北側の壁はやや急な角度で立ち上がるが、他の壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、LⅡ塊を多量に含むことから、人為堆積と考えられる。出土遺物はなく、本土坑の性格・年代は不明である。(小 河)

29号土坑 SK29(図26, 写真26)

本土坑はI区北西部のC3グリッドに位置し、東側1.7mにはSⅠ03が近接する。検出面はLⅡである。

平面形は不整な隅丸長方形を呈する。長軸方位はN48°Eで、規模は長軸280cm、短軸184cmを測り、検出面からの深さは最大で16cmである。周壁は、やや急な角度で立ち上がる。底面には若干の凹凸が認められ、南隅に円形のくぼみがある。

遺構内堆積土は3層で、いずれも自然流入土である。出土遺物はなく、本土坑の性格・年代は不明である。(小 河)

30号土坑 SK30(図26, 写真26)

本土坑はI区北東部のD4グリッドに位置する。検出面は、LⅡである。

平面形は隅丸長方形を呈する。長軸方位はN65°Wで、長軸164cm、短軸92cm、検出面からの深さは最大で24cmである。周壁は、やや急な角度で立ち上がる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。

堆積土は2層で、いずれも自然流入土である。本土坑からの出土遺物はなく、性格・年代は不明である。(小 河)

31号土坑 SK31(図26, 写真26)

本土坑は、I区北東部のC3・4グリッドに位置する。西側35cmにはSⅠ03が近接する。検出面は、LⅡである。

平面形は不整な隅丸長方形を呈し、長軸方位はN41°Eである。長軸172cm、短軸124cm、検出面からの深さは最大で20cmを測る。周壁は緩やかに立ち上がる。底面は西側に緩やかに傾斜している。

堆積土は1層で、現況から堆積過程は判断できない。出土遺物はなく、本土坑の性格・年代は不明である。(小 河)

32号土坑 S K32(図26, 写真26)

本土坑はⅠ区北東部のC3グリッドに位置し、南西側1.5mにはS I 03が近接する。検出面はLⅡである。平面形は不整な隅丸長方形を呈する。長軸方位はN49°Wで、長軸240cm、短軸120cmを測る。検出面からの深さは最大で16cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層で、いずれも自然流入土である。出土遺物はなく、本土坑の性格・年代は不明である。(小 河)

33号土坑 S K33(図27, 写真26)

本土坑はⅢ区北西部のJ32グリッドに位置する。検出面は、LⅢ上面である。平面形は隅丸長方形を呈する。長軸方位はN68°Wで、長軸112cm、短軸68cm、検出面からの深さは最大で28cmである。周壁はやや急傾に立ち上がる。南東壁以外の壁面に被熱による酸化面が認められ、その厚さは1~2cmである。底面はほぼ平坦である。

堆積土は3層に分けられる。ℓ1・2は自然流入土、ℓ3は遺構底面に堆積する炭化物層で、使用時の堆積と考えられる。

本土坑は、底面上に炭化物層があり、壁面に熱変化が認められることから、木炭焼成土坑と判断した。出土遺物はなく、年代は不明である。(小 河)

34号土坑 S K34(図27・28, 表1, 写真26)

本土坑はⅢ区南東部のM35グリッドに位置する。北方向に傾斜する斜面頂部の平坦面に立地している。検出面はLⅢ上面である。

平面形は楕円形を呈する。長軸方位はN76°Eで、長軸184cm、短軸144cmを測り、検出面からの深さは136cmである。底面はほぼ平坦である。周壁は底面から100cm程のところまでほぼ直角に立ち上がり、そこから逆ハの字状に急な角度で立ち上がる。この形状は、本遺跡Ⅱ区検出のS K21と同様のものである。堆積土は6層で、壁際からの流入状況が認められることから、いずれも自然流入土と考えられる。本土坑の断面の形状と深さから、落とし穴と考えられる。

ℓ1から、かわらけの高台付杯の底部が出土している(図28-7)。内外面ともにロクロナデ整形され、底面には回転糸切り痕が観察される。本土坑の年代は、出土遺物から11世紀以前の所産であると考えられる。(小 河)

35号土坑 S K35(図27, 写真26)

本土坑はⅢ区南東部のL・M35グリッドに位置する。検出面は、LⅢ上面である。

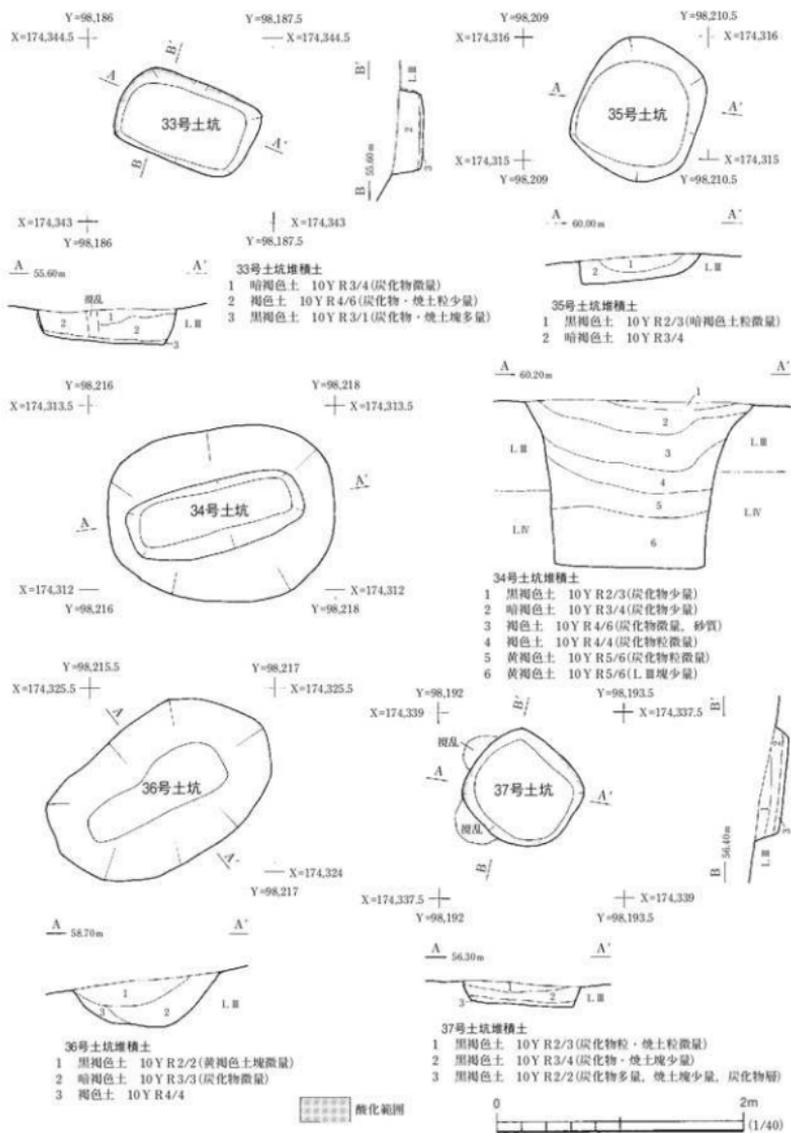


図27 33~37号土坑

平面形は隅丸長方形を呈する。長軸方向はN20°Eで、長軸116cm、短軸100cm、検出面からの深さは最大で20cmである。周壁は、西側の壁がやや急傾に立ち上がるが、他の壁は緩やかに立ち上がる。底面には凹凸が認められる。堆積土は2層で、いずれも自然流入土である。出土遺物はなく、本土坑の性格・年代は不明である。(小 河)

36号土坑 S K36(図27, 写真27)

本土坑はⅢ区南東部のM34グリッドに位置する。検出面はLⅢ上面である。周辺の地形は、北方向にやや急に傾斜している。

平面形は楕円形を呈する。長軸方向はN48°Eで、長軸188cm、短軸120cm、検出面からの深さは最大で40cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸が認められる。堆積土は3層でいずれも自然流入土である。本土坑からの出土遺物はなく、性格・年代は不明である。(小 河)

37号土坑 S K37(図27, 写真27)

本土坑はⅢ区北西部のK33グリッドに位置する。周辺の地形は、北に向かってやや急に傾斜している。K33グリッド北部のLⅢ上面に炭化物の広がりを確認し、ベルトを設定して10cmほど掘り下げたところ、本土坑を検出した。

平面形は隅丸長方形を呈する。長軸方向はN45°Wで、長軸92cm、短軸84cm、検出面からの深さは最大で20cmである。周壁は緩やかに立ち上がる。北西壁隅と北東壁の一部に被熱による酸化面が認められ、その厚さは1～2cmである。底面はほぼ平坦である。

堆積土は3層に分けられる。ℓ1・2は自然流入土、ℓ3は底面に堆積する炭化物層で使用時の堆積と考えられる。

本土坑は、底面上に炭化物層があり、壁面に熱変化が認められることから、木炭焼成土坑と判断した。出土遺物はなく、年代は不明である。(小 河)

38号土坑 S K38(図28, 写真27)

本土坑は、Ⅰ区中央部のC6グリッドに位置し、検出面はLⅡである。重複する遺構はないものの、東側にS I 01が位置する。

遺構内堆積土は2層からなり、堆積状況は不明である。土質からはS K25との共通性が高く、同時期に機能していた可能性が高いと判断した。

検出面における平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈するが、南側および北側は緩やかに傾斜し段差が生じる。長軸126cm、短軸85cm、検出面からの深さ30cmをそれぞれ測り、短軸の midpoint を基準とした主軸方位はN7°Eを指す。底面はほぼ平坦をなし、断面形は鐘底形を呈する。

本土坑から遺物は出土しなかった。したがってその年代は不明である。土坑の形状や内容物などはS K25と類似し、S I 01の関連施設の可能性が高い。(菅 野)

39号土坑 S K39(図28, 写真27)

本土坑はⅡ区中央部のF15・16, G15・16グリッドに位置し, 検出面はLⅢである。本土坑の西側はSF01の西溝により一部が壊されていた。したがってSF01より古い年代の土坑といえる。

堆積土は2層からなり, レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と判断される。特に①は褐色土でLⅡ基調の堆積土で, この点で他の木炭焼成土坑とは状況が異なることが指摘できる。②はLⅢ基調で, 壁の崩落土が主であると考えられる。

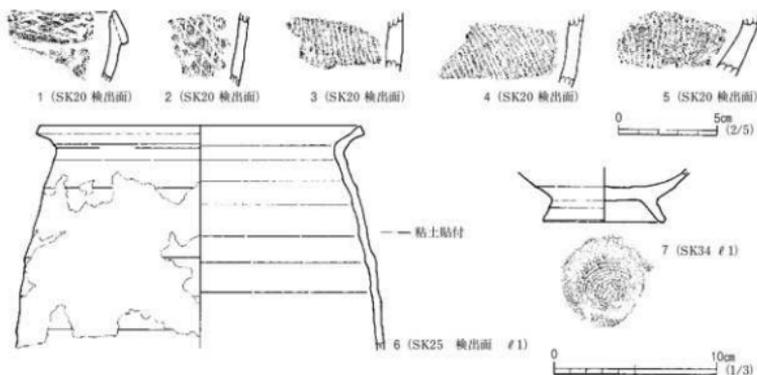
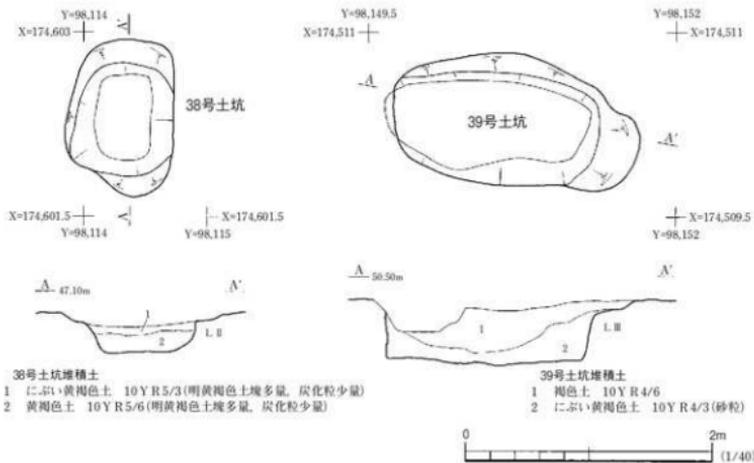


図28 38・39号土坑, 出土縄文土器・土師器・かわらけ

遺構の平面形は隅丸長方形を呈するが、上端の東側を中心に崩落している。周壁は80°程度と急斜に立ち上がり、底面は平坦である。西壁では周壁の下部が抉れている。中端での平面規模は長軸172cm、短軸92cmで、検出面から底面までの深さは最大52cmを測る。本土坑の上端はSF01により削平を受けた可能性があり、元来はもう少し深さのある土坑であったと推察される。

本土坑からは遺物は出土しなかった。したがって年代は不詳であるが、平面形や規模などから落とし穴状土坑の可能性が考えられる。(門 脇)

第7節 特殊遺構

ここでは竪穴状に掘り込んでいるが、竪穴住居跡よりも規模が小さく、カマドや柱穴などの付属施設が認められなかった遺構について述べる。本遺跡ではこのような遺構は1基のみである。

1号特殊遺構 SX01(図29, 写真27)

本遺構はⅡ区中央部のG17グリッドに位置し、SF01の掘形埋土を精査していく過程で検出された遺構である。本遺構の北東部はSF01の東溝によって壊されていることから、本遺構が古いことがわかる。また遺構の北側は風倒木痕であるために、本遺構では北壁の状態が不明である。ここで



図29 1号特殊遺構

遺構の新旧関係を整理すると、SF01が最も新しく、次に風倒木痕、最も古いのが本遺構となる。

堆積土は2層からなり、いずれもLⅢ由来の黄褐色土粒を多く含むことから自然堆積と考えられる。また $\varnothing 1$ はSF01の掘形埋土と混じったような堆積状況であることから、完全に埋まりきらない段階でSF01が構築されたと考えられる。

平面形は長方形を基調としているが、先述のように遺構の北側に様相が不明である。底面での規模は現状で長軸228cm以上、短軸164cmを測り、一般的な土坑の大きさよりも大きく、竪穴住居跡よりは小さい。通常の竪穴住居跡の4分の1位の規模を考えてよい。底面は一部、凹凸があるが、おむね平坦である。周壁は60°位の傾斜があり、平面形の確認は比較的容易であった。

遺物は出土しておらず、年代についての詳細は不明である。ただ近世以降と考えられるSF01の構築段階では本遺構は完全に埋まりきっていないことから、近接した年代の所産と推察される。遺構の性格についても不明である。

(門 脇)

第8節 遺構外出土遺物(図30・31, 表1, 写真31~33)

本遺跡の遺構外からは、縄文土器1,484点、土師器49点、須恵器6点、石器3点、石製品1点が出土している。このうち、縄文土器58点、須恵器3点、石器2点、石製品1点を図示した。

遺構外から出土した遺物の多くは、I区の北端部に接する小谷に面したきわめて緩やかな緩斜面のLⅡから出土した。LⅡの層厚は15cmほどで、遺物が多く含まれていたのは、B~Dの1・2グリッドであった。

縄文土器

図30と図31-1~4は縄文土器である。

図30-1は沈線で変形工字文が、2は横方向の沈線が施されている。3は変形工字文と突起をもつ体部に、外反する無文の口縁部がつく。4は突起をもつ口縁部の下の内外面に横位の沈線を施し、外面に摺糸が施されている。

5~8は、外反し、外面を肥厚させた口縁部で、8を除いて肥厚した部分に地文を施す。6と7は胎土・焼成・色調が類似することから、同一個体と考えられる。

9・10は、粘土の貼り付けによって外面を肥厚した口縁部で、肥厚した部分に横位の沈線を巡らす。口縁端部は面取りされ、内面は横方向の条痕が施される。胎土・焼成・色調が類似することから、同一個体と考えられる。

11~15は、外面が肥厚した口縁部で、肥厚した部分に横位の沈線を巡らす。

16~18は、やや内湾する口縁部で、外面に地文を施す。

19~39は、外面に摺糸文を施すもので、36を除いていずれも体部の破片である。36は、平底の底部である。

40~46は外面に網目状の摺糸文を施すものである。45が外面を肥厚させた口縁部であるほかは、

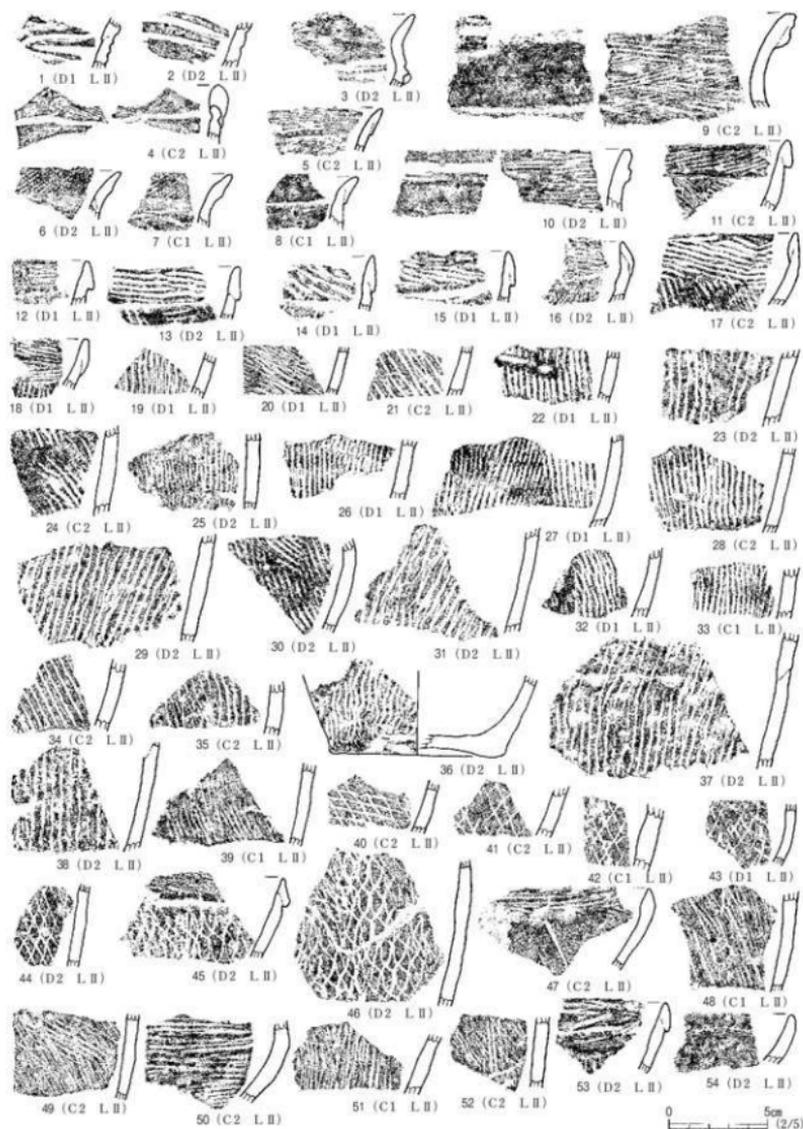


図30 遺構外出土縄文土器

いずれも体部の破片である。

47～53は、外面に条痕を施すものである。47が内湾する口縁部、53が外面を肥厚させた口縁部であるほかは、いずれも体部の破片である。

54は、やや内湾する無文の口縁部の破片である。

図31-1は外面に縦走する燃糸文が施されている。2は縦方向の条線を施す口縁部の破片である。3は磨消縄文が施されたもの、4は波状口縁の下に沈線と隆帯をもつ注口土器の破片である。

須恵器

図31-5～7は須恵器の甕である。5は体部～口縁部の破片で、体部は外面にタタキメ、内面に同心円状のアテ具痕、口縁部は内外面ともクロコナデが施されている。

6・7は体部の破片で、外面にタタキメ、内面に同心円状のアテ具痕が施されている。これらの

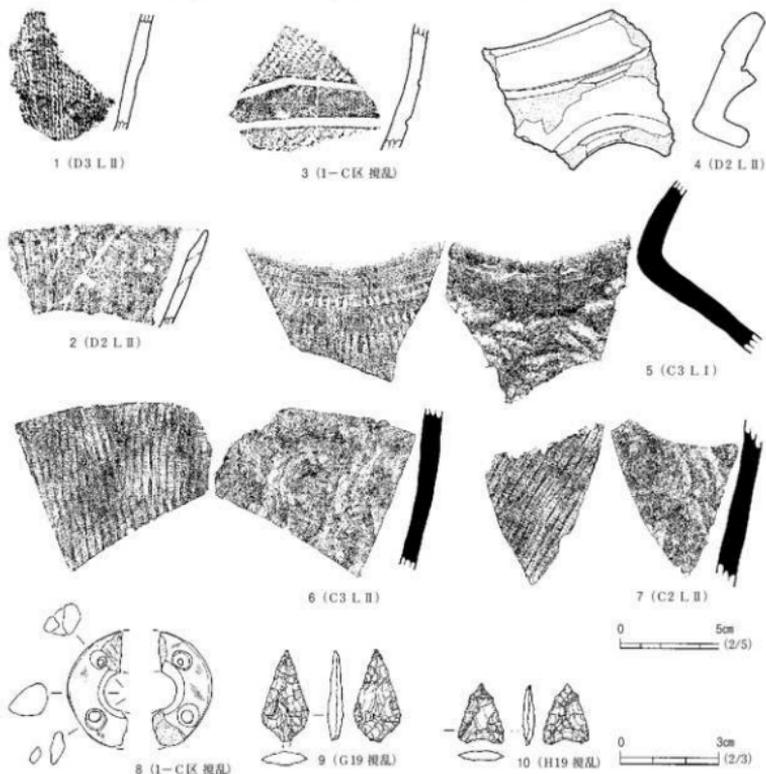


図31 遺構外出土縄文土器・須恵器・石器・石製品

須恵器は胎土・色調・焼成が2号住居跡から出土した須恵器と似ていること、出土位置が近いことから、同一個体の可能性がある

石器・石製品

図31-8は块状耳飾である。2カ所で折損し、それぞれに両面穿孔の補修孔が穿たれている。遺存長3.6cm、厚さ1.0cm、重さ5.7gである。色調は淡黄色で、石質は玉髓である。

同図9・10は石鏃である。9は基部が突出し、長さ2.8cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmを測る。重さは1.2gである。石質は珪質頁岩である。10は基部がくぼみ、長さ1.8cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmを測る。重さは0.6gである。石質は流紋岩である。

(青山)

表1 土器計測表

図番号	出土位置	出土層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度(%)
9-1	S 101	ℓ 2	土師器杯	13.2	5.3	4.1	99
9-2	S 101	b区 床面	土師器杯	(12.9)	—	[3.6]	20
9-3	S 101	床面	土師器杯	—	(6.4)	[1.5]	15
9-4	S 101	床面	土師器杯	—	(5.8)	[2.5]	20
9-5	S 101	c区 床面 カマド	土師器杯	—	(6.6)	[2.2]	20
9-6	S 101	c区 ℓ 2	土師器杯	—	(7.0)	[2.9]	25
9-7	S 101	c区 床面	筒形土器	(9.8)	—	[3.4]	
9-8	S 101	ℓ 2	筒形土器	—	—	[5.6]	
9-9	S 101	床面	筒形土器	—	—	[3.9]	
9-10	S 101	床面	筒形土器	—	—	[3.4]	
9-11	S 101	カマド	土師器甕	(17.4)	—	[5.8]	12
9-12	S 101	d区 ℓ 2	土師器甕	(19.3)	—	[4.5]	5
9-13	S 101	a区 ℓ 2	土師器甕	(17.3)	—	[9.4]	15
9-14	S 101	床面	土師器甕	(11.6)	—	[5.5]	15
9-15	S 101	カマド	土師器甕	(17.0)	—	[4.1]	10
9-16	S 101	カマド	土師器甕	(18.2)	—	[4.9]	10
9-17	S 101	c区 ℓ 2	土師器甕	(18.6)	—	[8.4]	15
9-18	S 101	床面	土師器甕	(21.4)	—	[4.9]	15
12-1	S 102	ℓ 3	土師器杯	(13.6)	(5.4)	4.6	30
12-2	S 102	床面 ℓ 1	土師器杯	(13.8)	(5.3)	3.8	70
12-3	S 102	ℓ 1 ℓ 3	土師器杯	—	(6.8)	[1.5]	
12-4	S 102	ℓ 1	土師器杯	—	(6.0)	[0.9]	
12-5	S 102	床面 ℓ 1 カマド	土師器壺	—	6.2	[10.3]	40
15-1	S 103	床面 P 2	土師器杯	13.1	6.3	4.2	75
15-2	S 103	カマド ℓ 1 P 2 ℓ 1	土師器甕	(11.4)	—	[4.8]	12
15-3	S 103	カマド P 2 ℓ 1	土師器甕	(12.4)	—	[7.0]	20
15-4	S 103	ℓ 1 カマド底面 P 2 ℓ 1	土師器甕	(19.6)	(6.5)	20.5	25
21-1	S F 01	西溝 ℓ 1	縄文土器	(21.4)	—	[17.3]	
21-2	S F 01	東溝 ℓ 1	陶磁器	(25.8)	—	[7.7]	
28-6	S K 25	検出面 ℓ 1	土師器甕	(19.3)	—	[13.7]	25
28-7	S K 34	ℓ 1	かわらけ高台付杯	—	(7.3)	[3.7]	30
30-36	D 2 NW	L II	縄文土器	—	8.6	[4.2]	

第3章 自然科学分析

第1節 赤色顔料の蛍光X線分析

小林 啓(福島県文化振興事業団)

1. はじめに

大田切遺跡からは、土器の内外面及び破断面に赤色顔料が付着する縄文土器が数点出土している。これまで福島県内において、赤色顔料の付着した土器について数件の分析事例が報告されているが(成瀬1988)、その数はあまり多くはない。

縄文時代に使用されていた赤色顔料はベンガラ(Fe_2O_3)と水銀朱(HgS)の2種類であり、各々その発色原因となる金属元素が異なっている。そこで、土器に付着した赤色顔料の種類を明らかにするため、X線分析顕微鏡(エネルギー分散型蛍光X線分析装置)による元素分析を行った。

2. 試料

縄文土器片3点である。(図28-2、図28-1、図28-4、いずれも縄文晩期の所産)文化財の分析は非破壊分析を原則とするため、試料を採取せずに土器そのものを分析試料とした。

3. 方法

試料の元素分析はX線分析顕微鏡を用いて、以下の条件により行った。

【分析条件】X線分析顕微鏡(堀場製作所製XGT-2700)、X線管球:ロジウム(Rh)、検出器:半導体検出器、測定雰囲気:大気、管電圧:50kv、管電流:1.0mA、分析径:100 μm 、測定時間:120

4. 結果

分析の結果、赤色顔料が付着する全ての土器から鉄(Fe)が顕著に検出された(図32)。また、いずれの分析箇所からも水銀(Hg)が検出されていないことから、付着する顔料は鉄由来の赤色顔料「ベンガラ」である可能性が高い。これまでの分析事例から、福島県浜通り地方において縄文後期には水銀朱、縄文時代晩期から弥生時代初頭にはベンガラが優勢に使用されるとの報告がある。(奥山2004)未だ分析例が乏しい現状ではあるが、今回の分析結果はこれを補強するかたちとなる。

ただし、鉄は土器の胎土にも多く含まれていることから、今後、赤色顔料の粒形確認やX線回折分析による結晶構造の解析などを行うことが望まれる。

参考文献

- 成瀬正和 1988 「薄磯貝塚出土の赤色顔料関係遺物」『薄磯貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第19冊
成瀬正和 1993 「赤彩土器・漆塗土器」『久世原館・番匠地遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第33冊
松井敏也ほか 1998 「赤色顔料成分分析」『桜井古墳群上佐佐支群7号墳』原町市埋蔵文化財報告書第27集
奥山誠義 2005 「赤彩土器顔料の蛍光X線分析」『研究紀要2003』福島県文化財センター・白河館研究紀要2003

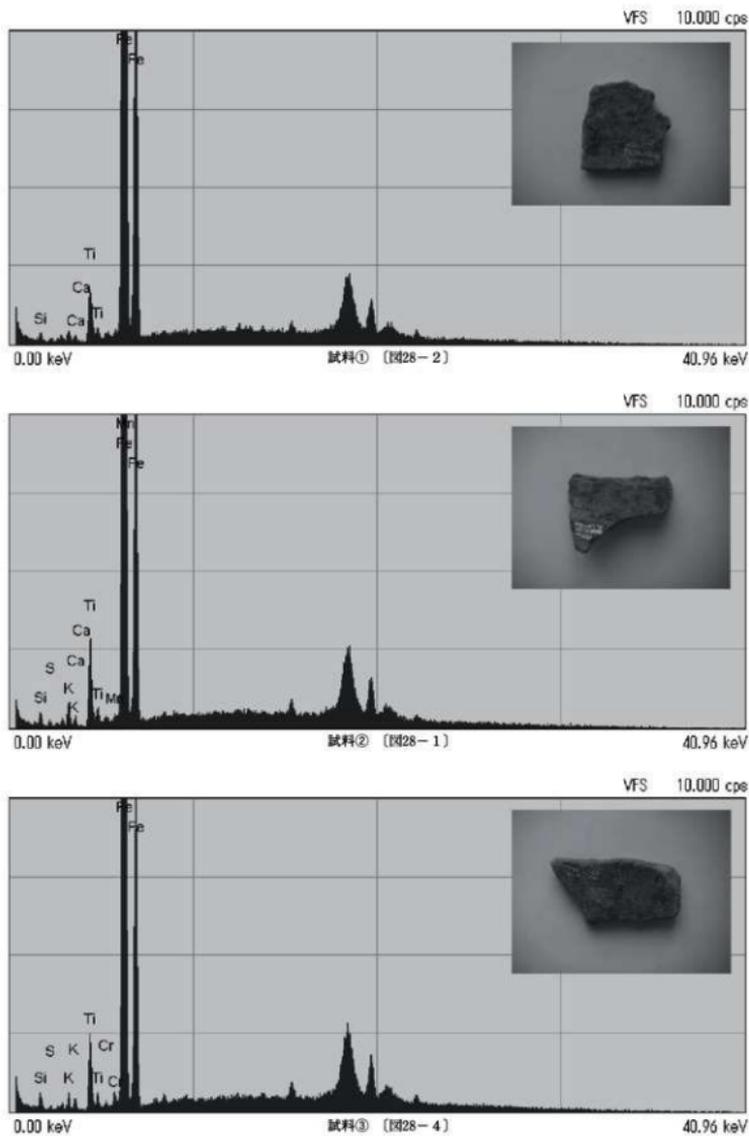


図32 赤彩土器のX線スペクトル

第4章 ま と め

本遺跡は、台地の中央部に立地している。周辺に遺跡は少なく、表面調査によって遺跡とされた範囲内で行われた事前の試掘調査によっても、遺構の分布の見られない部分があって要保存範囲から除外されたため、本調査に際しては調査区がⅠ～Ⅲ区の3カ所に分断される結果となった。

本遺跡におけるもっとも古い人の活動の痕跡は、図30-1・2に示した土器から、縄文時代早期にさかのぼる。ただし、この時期の遺構は検出されず、少量の土器片が出土したのみである。同様に、縄文時代後期の土器が少量出土しているが、遺構は検出されなかった。

ついで見られる人類の活動の痕跡は、Ⅰ区の北端部を東西に流れる小谷に接して検出された縄文時代晩期末葉の土器の集中地点から、縄文時代晩期のことと考えられる。この時期の土器を出土した土坑にSK20がある。

このほか、Ⅱ区のSK14などが縄文時代の落とし穴であると推定される。

次に人の活動の痕跡が現れるのは、平安時代である。3軒の住居跡とSK25などの土坑からなる。この時期に小規模な集落が形成されたものの、短期間で終焉する。これらの住居跡のうちSI01とSI02からは、カマドの構築材や堆積土から製鉄炉跡の炉壁片が複数出土している。このほかSC01とSD01からも炉壁の破片が出土している。SD01から出土した炉壁片はSC01からの流れ込みと考えられ、木炭窯の焚口の閉塞に用いられたものと思われる。

本遺跡内から製鉄炉跡は検出されなかったものの、周辺にこの時期の製鉄炉跡が存在していることを示唆し、これらの住居跡に居住した人物が、付近の製鉄と何らかの関わりを持っていたことを示唆する。本遺跡の北方約600mにある熊平B遺跡でも、平成17年度の調査で平安時代の羽口や製鉄炉跡が出土している。

また、本遺跡の南方1200mにある横大道遺跡からは大規模な廃滓場跡が見つかっており、製鉄炉跡の存在が予想される。横大道遺跡の操業時期は今後の調査で明らかになるとと思われるが、平安時代頃と推察される。したがって、本遺跡の機能時期と一致しており、関連が指摘できよう。これらのことから摩辰ヶ原と呼ばれる台地一帯を舞台とした鉄生産が、平安時代に行われていたことは確実である。今後、調査が行われる横大道遺跡などの成果をもとに議論をする必要があろう。

本遺跡で検出された2基の半地下式木炭窯跡は、近代まで作られていた大竹式炭窯と考えられる。また、Ⅱ区の中央部には遺跡も見つかっており、近代においても製炭を中心とした痕跡が認められた。

(青山)

写 真 図 版

第1編 ^{はら}原 B 遺跡



1 調査区遠景(南から)



2 調査区全景(真上から)



3 基本土層

a AA'(壁から) b BB'(壁から)



4 調査区南側住居群全景(真上から)



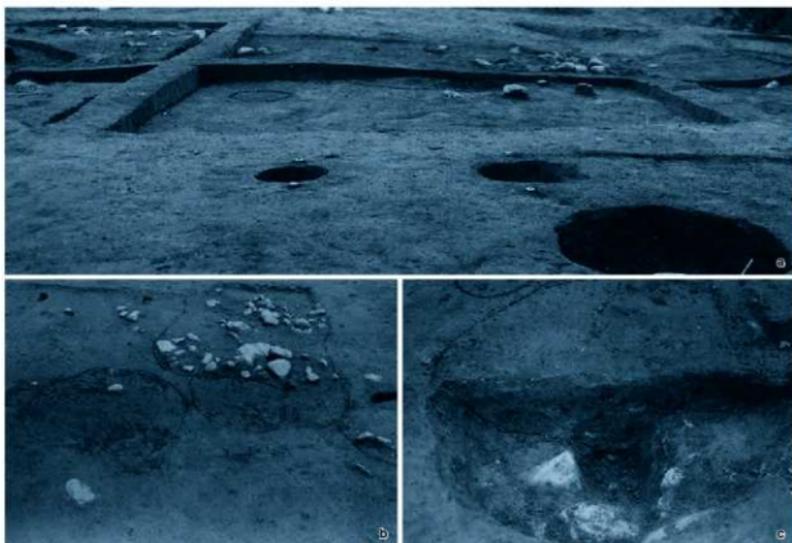
5 調査区北側住居跡群全景(真上から)



6 1号住居跡遺物出土状況(東から)



7 2号住居跡全景(東から)



8 2号住居跡細部

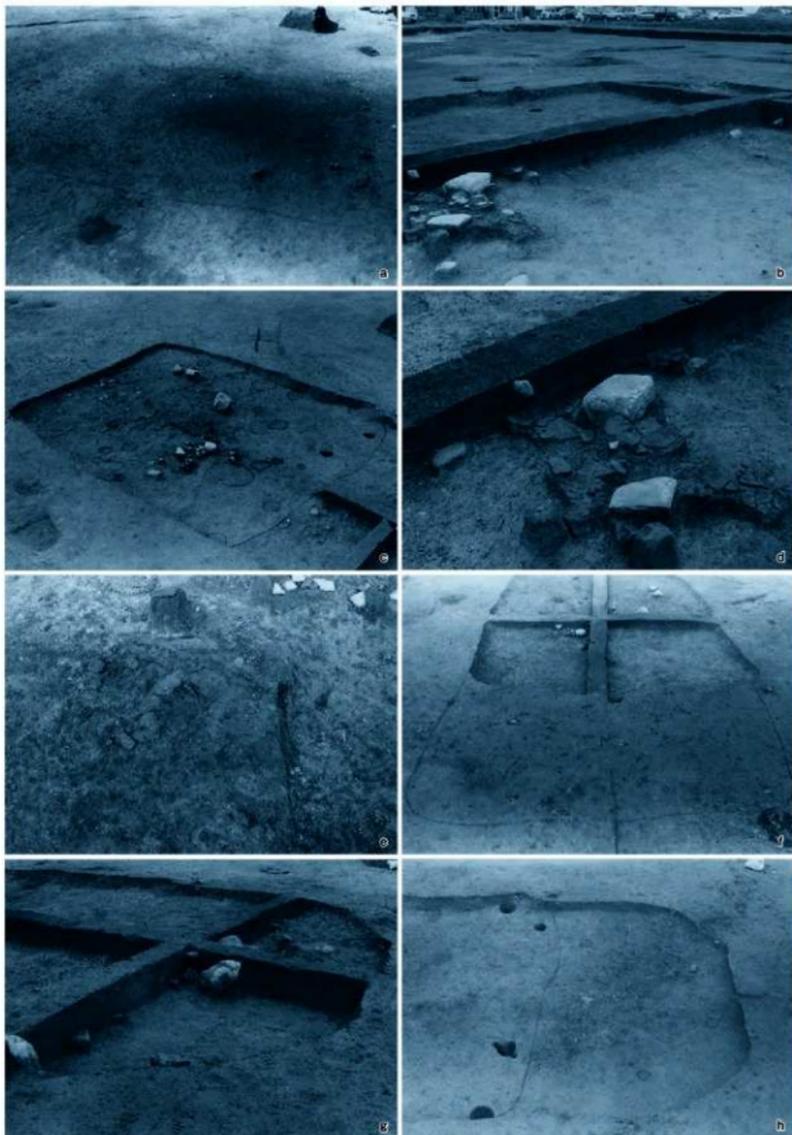
a 断面(西から) b 貯粮池(西から) c P1断面(西から)



9 4号住居跡全景(南から)



10 5・7号住居跡全景(南東から)



11 5・7号住居跡細部

- a 5号住居跡検出(南から) b 5号住居跡断面(南西から) c 5号住居跡ピット検出(南東から)
 d 5号住居跡(南西から) e 5号住居跡が検出(西から) f 7号住居跡検出(東から)
 g 7号住居跡断面(南東から) h 7号住居跡全景(南東から)

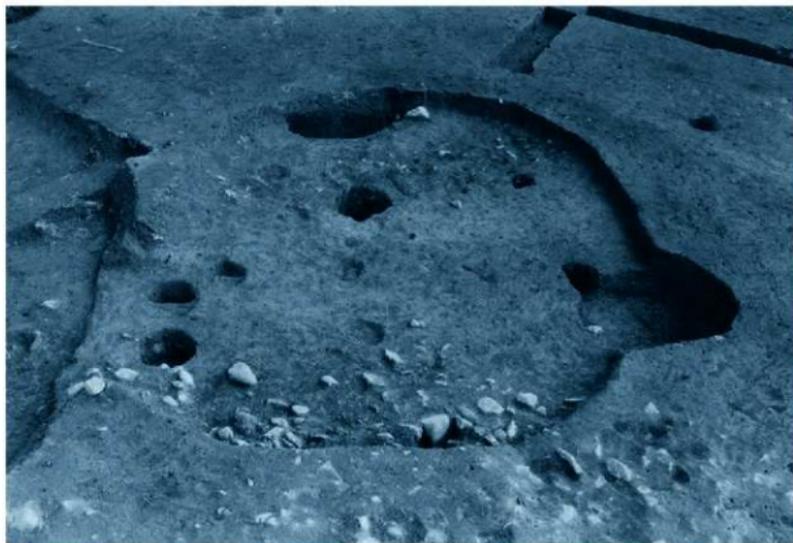


12 6号住居跡全景(東から)

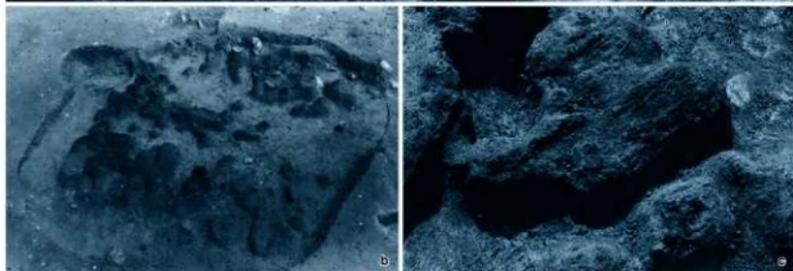


13 6号住居跡細部

a 断面(西から)
b 遺物出土状況(北東から) c 全景(北西から)



14 8号住居跡全景(北から)

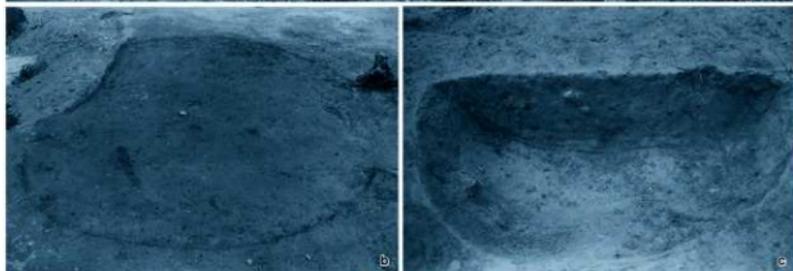


15 8号住居跡細部

a 断面(東から)
b 炭化材・焼土出土状況(南から) c 炭化材出土状況(南から)



16 9号住居跡全景(東から)

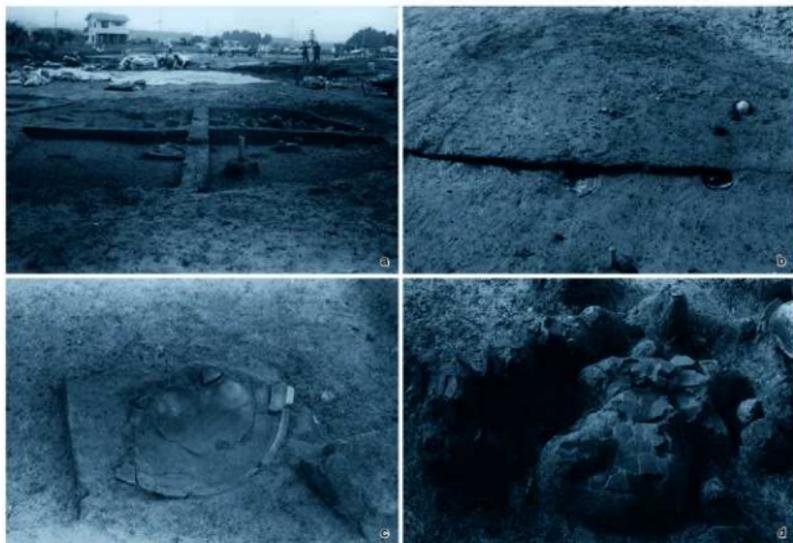


17 9号住居跡細部

a 断面(北から)
b 突出(南西から) c P.3断面(南東から)



18 10号住居跡全景(南西から)

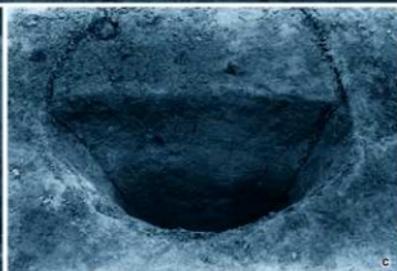


19 10号住居跡細部

a 断面(南から) b 検出(南から)
c 遺物出土状況(東から) d 遺物出土状況(南から)



20 11号住居跡全景(北から)



21 11号住居跡細部

a 断面(南から)
b 遺物出土状況(東から) c P9断面(南から)



22 12号住居跡全景(東から)

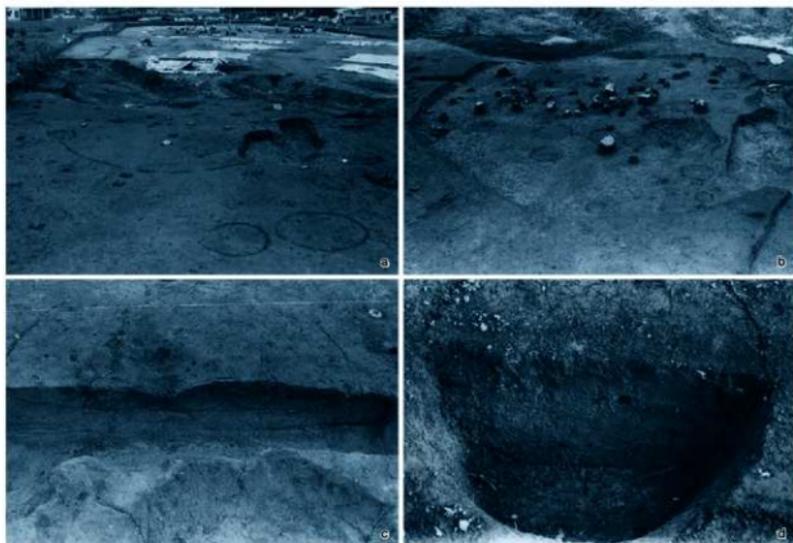


23 12号住居跡細部

a 断面(東から)
b 9号出土(南から) c P3断面



24 13号住居跡全景(北から)

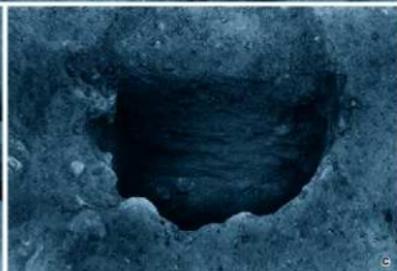
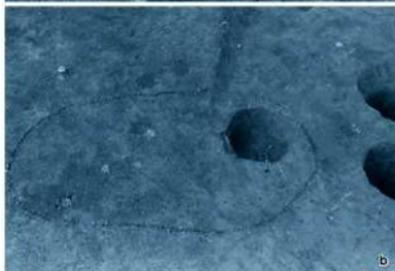


25 13号住居跡細部

a 概出(南から) b 遺物出土状況(南から)
 c 断面掘り(西から) d P21断面(西から)



26 14号住居跡全景(東から)

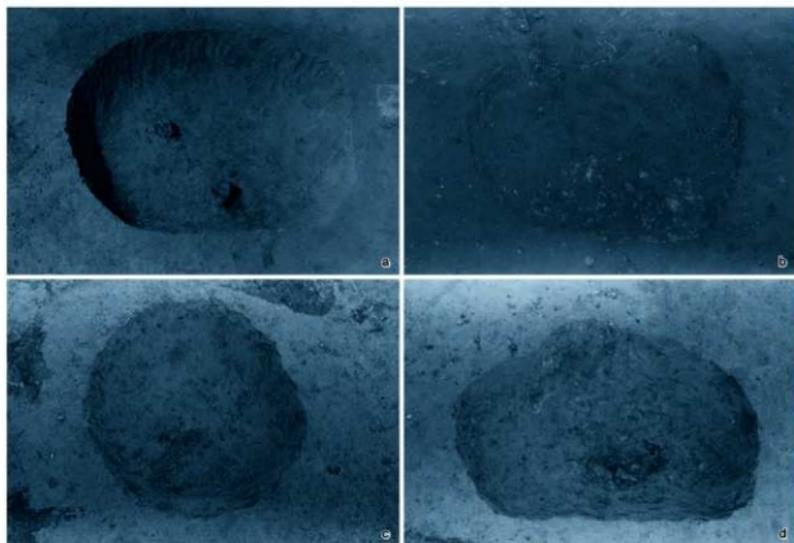


27 14号住居跡細部

a 断面(南から)
b 2号の柱跡(南から) c P1断面(東から)

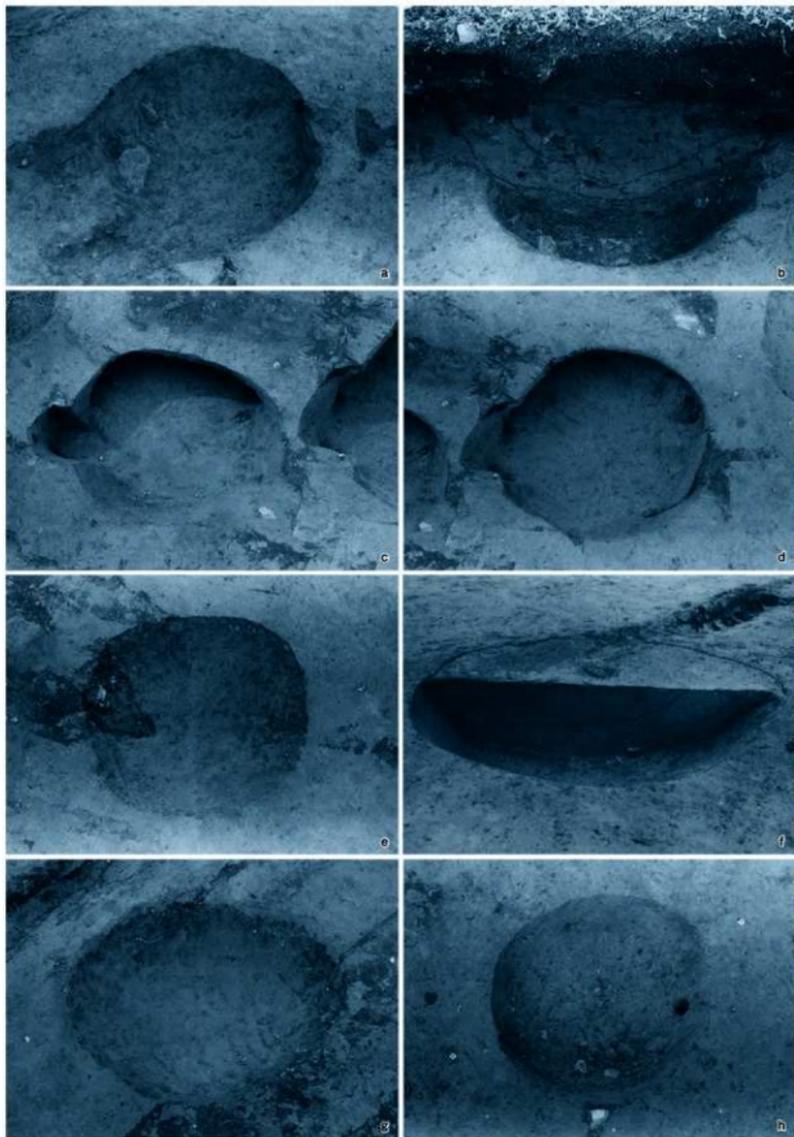


28 調査区中央土坑群全景(南西から)



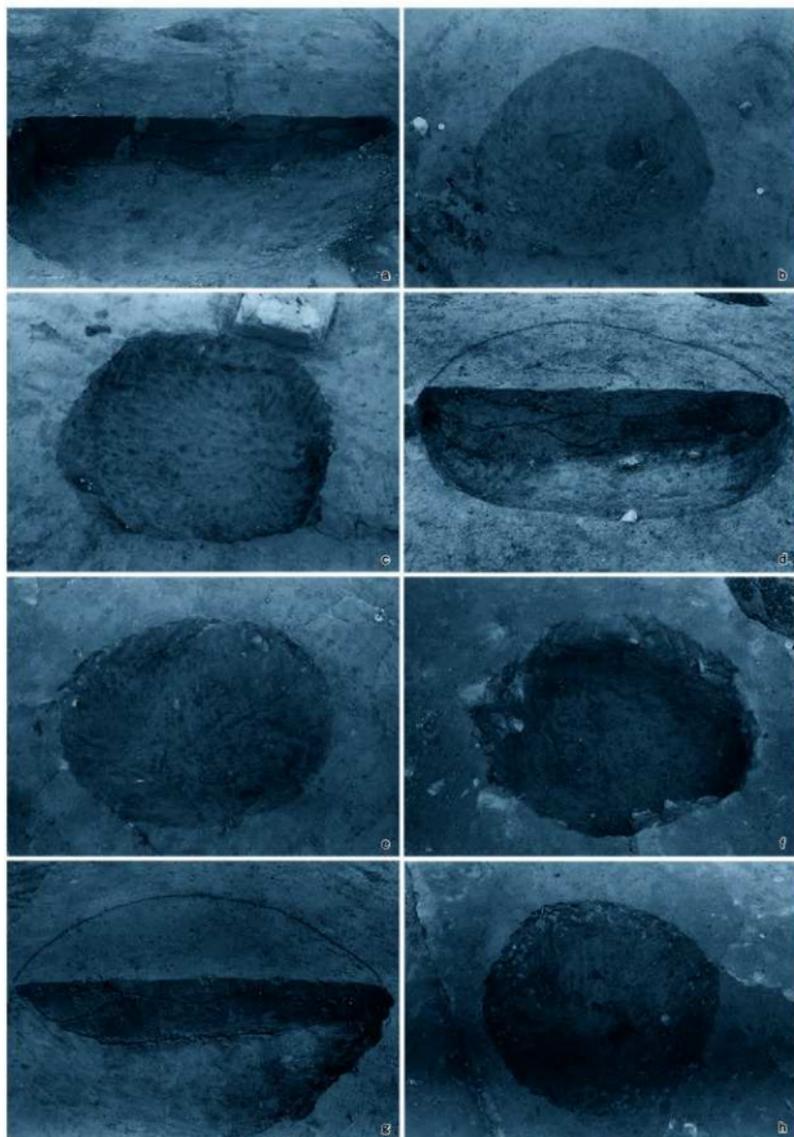
29 1～4号土坑

a 1号土坑全景(南から) b 2号土坑全景(西から)
c 3号土坑全景(南から) d 4号土坑全景(南東から)



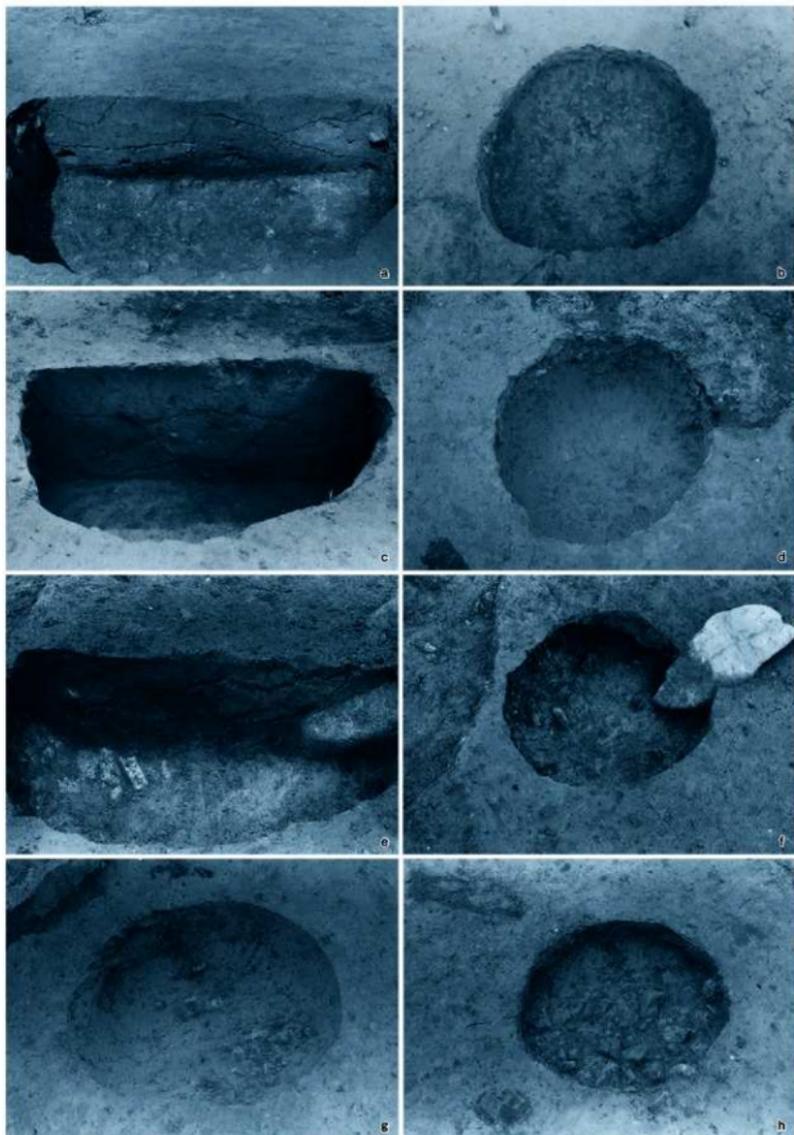
30 5～12号土坑

- a 5号土坑全景(南から) b 6号土坑断面(南東から) c 7号土坑全景(南東から)
d 8号土坑全景(南東から) e 9号土坑全景(南東から) f 10号土坑断面(南東から)
g 11号土坑全景(南から) h 12号土坑全景(南東から)



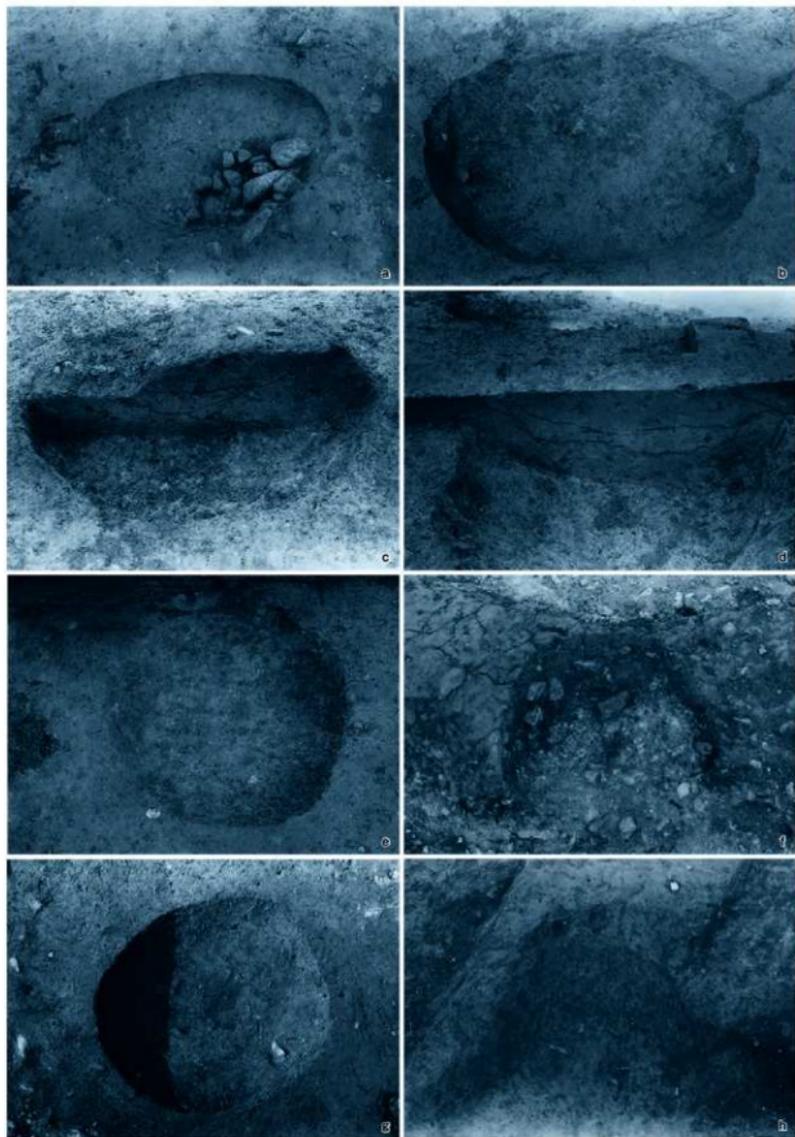
31 13~19号土坑

- a 13号土坑断面(南西から) b 14号土坑全景(南東から) c 15号土坑全景(南東から)
 d 16号土坑断面(東から) e 17号土坑全景(東から) f 18号土坑全景(東から)
 g 19号土坑断面(南から) h 19号土坑全景(南から)



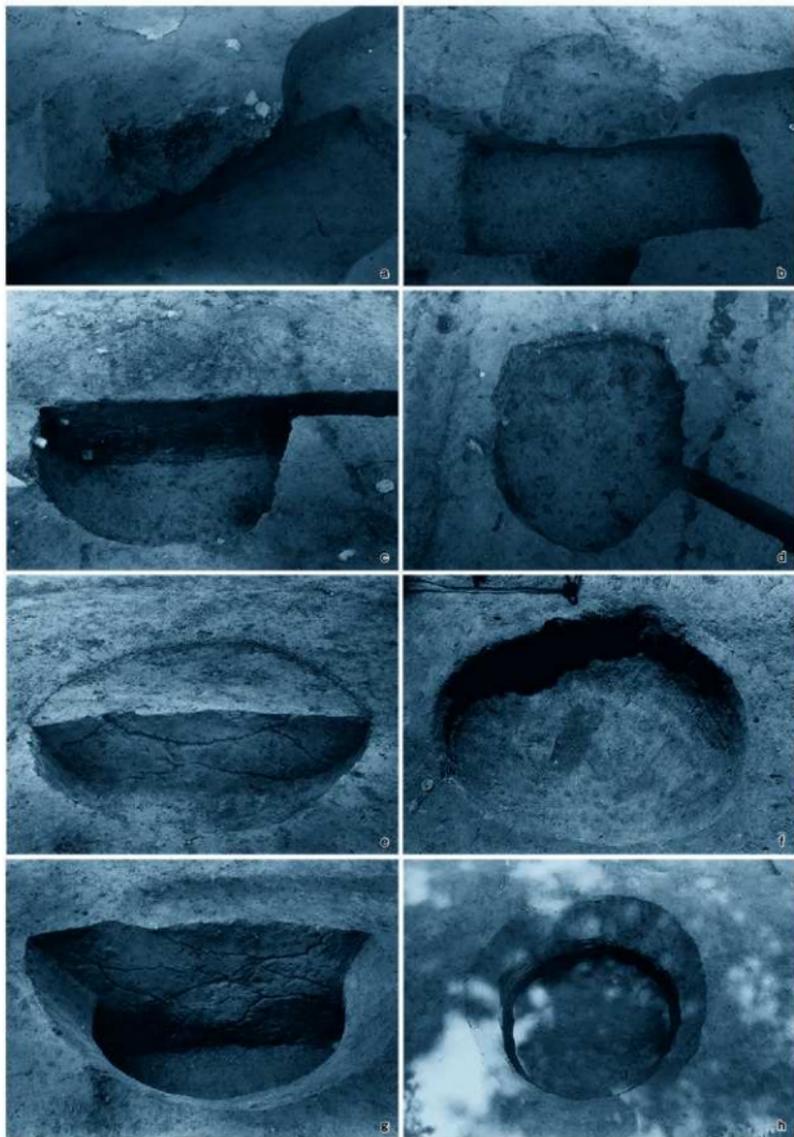
32 20~24号土坑

- a 20号土坑断面(東から) b 20号土坑全景(東から) c 21号土坑断面(西から)
d 21号土坑全景(西から) e 22号土坑断面(南西から) f 22号土坑全景(南から)
g 23号土坑全景(東から) h 24号土坑全景(南東から)



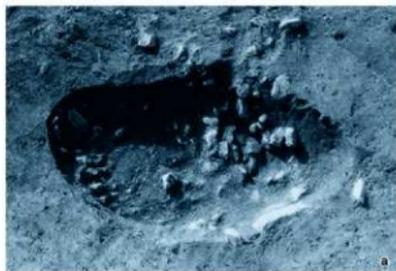
33 25~32号土坑

a 25号土坑全景(南↙东) b 26号土坑全景(南↙东) c 27号土坑断面(南↙东)
 d 28号土坑断面(西↙东) e 29号土坑全景(南↙东) f 30号土坑全景(西↙东)
 g 31号土坑全景(南↙东) h 32号土坑全景(南↙东)



34 33~36号土坑

- a 33号土坑遺物出土状況(西から) b 33号土坑全景(南西から) c 34号土坑断面(東から)
 d 34号土坑全景(東から) e 35号土坑断面(南から) f 35号土坑全景(東から)
 g 36号土坑断面(南から) h 36号土坑全景(南から)



a



b



c



d

35 37~39号土坑

a 37号土坑全景(南东から) b 38号土坑全景(东から)
c 39号土坑断面(南から) d 39号土坑全景(南から)



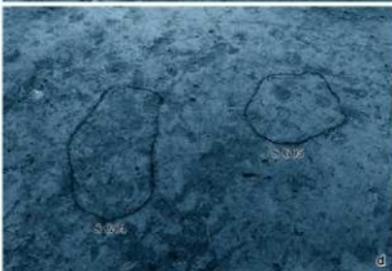
a



b



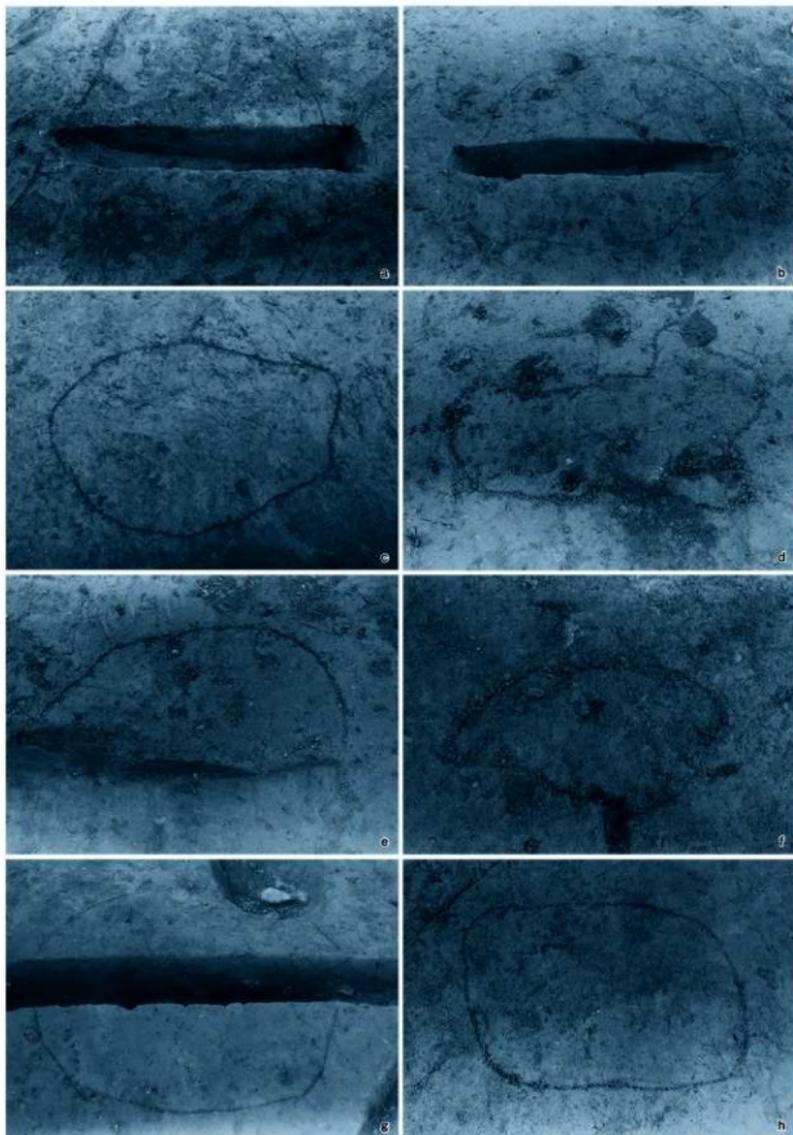
c



d

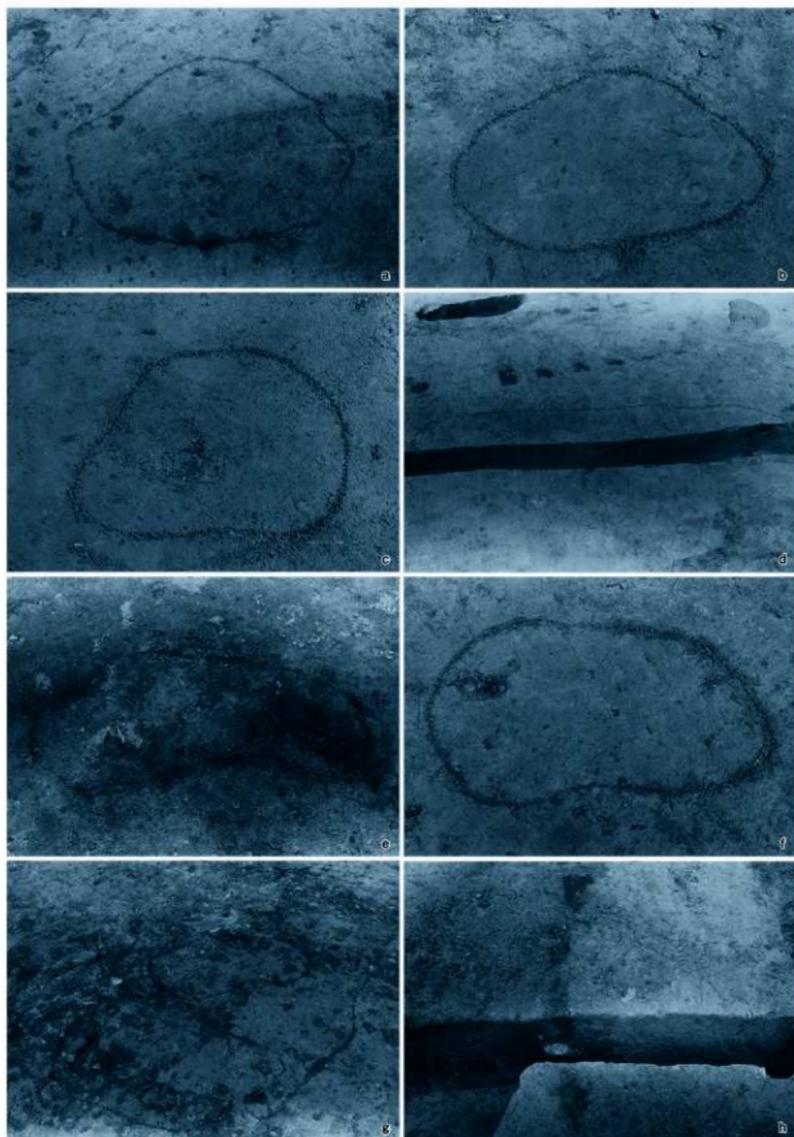
36 1~5号烧土遺構

a 1号烧土遺構検出(南から) b 2号烧土遺構検出(东から)
c 3号烧土遺構検出(西から) d 4・5号烧土遺構検出(北东から)



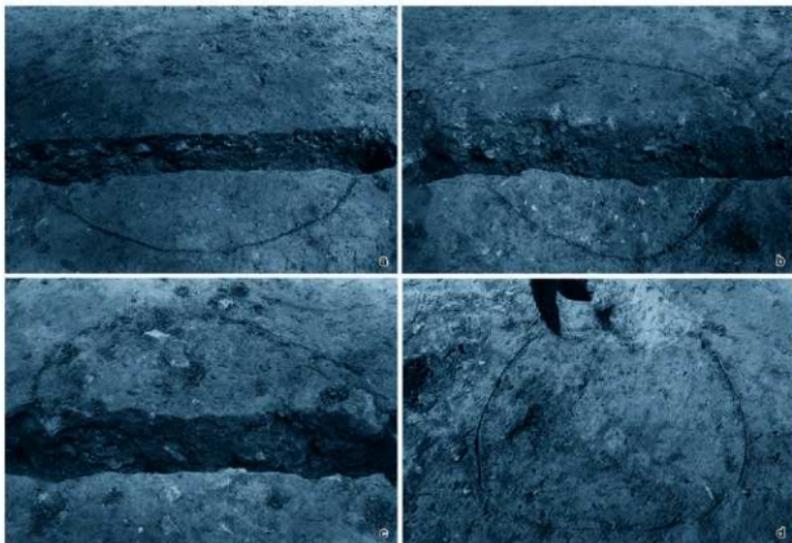
37 4～11号焼土遺構

- | | | |
|---------------------|-------------------|-----------------|
| a 4号焼土遺構断ち割り(南から) | b 5号焼土遺構断ち割り(南から) | c 6号焼土遺構検出(南から) |
| d 7号焼土遺構検出(南西から) | e 8号焼土遺構検出(南から) | f 9号焼土遺構検出(南から) |
| g 10号焼土遺構断ち割り(南西から) | h 11号焼土遺構検出(南から) | |



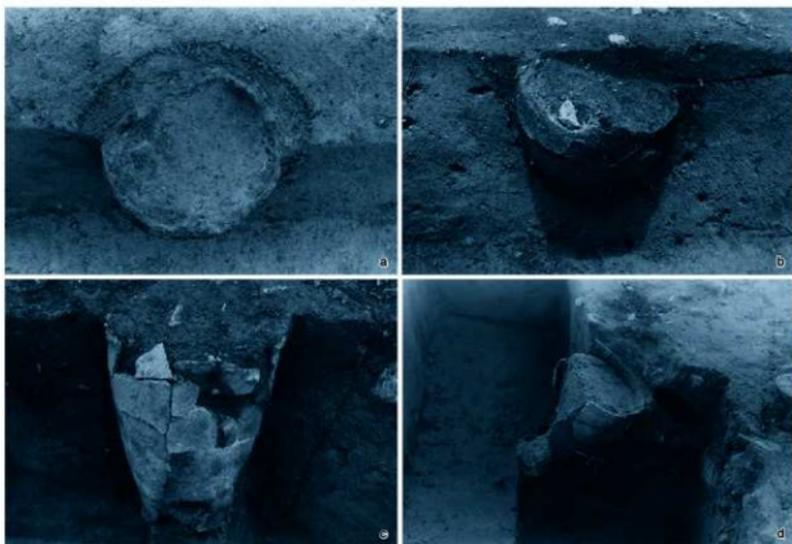
38 12~19号焼土遺構

- a 12号焼土遺構検出(南東から) b 13号焼土遺構検出(南から) c 14号焼土遺構検出(南から)
d 15号焼土遺構断面掘り(南東から) e 16号焼土遺構検出(南東から) f 17号焼土遺構検出(東から)
g 18号焼土遺構検出(南東から) h 19号焼土遺構断面掘り(東から)



39 20～23号焼土遺構

a 20号焼土遺構断ち割り(南東から) b 21号焼土遺構断ち割り(南東から)
c 22号焼土遺構断ち割り(南から) d 23号焼土遺構横出(南から)



40 1・2号土器埋設遺構

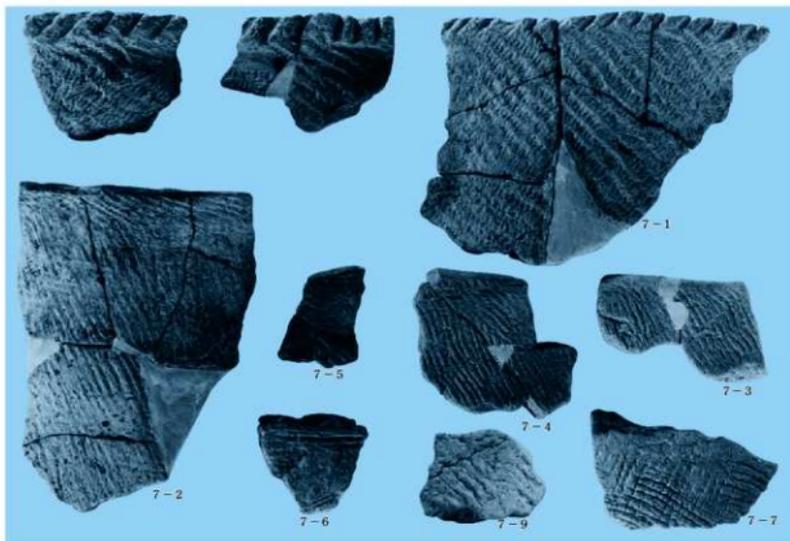
a 1号土器埋設遺構横出(南から) b 1号土器埋設遺構断ち割り(南から)
c 2号土器埋設遺構断ち割り(南から) d 2号土器埋設遺構断ち割り(東から)



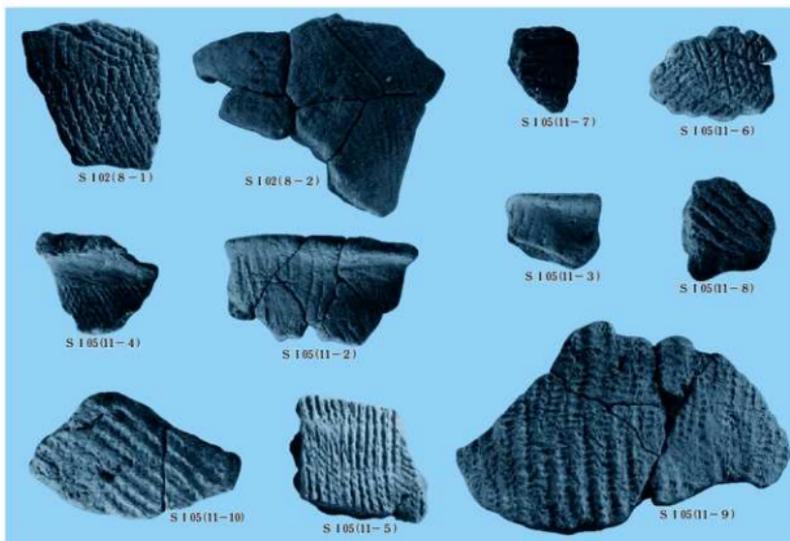
41 1号特殊遺構全景(北から)



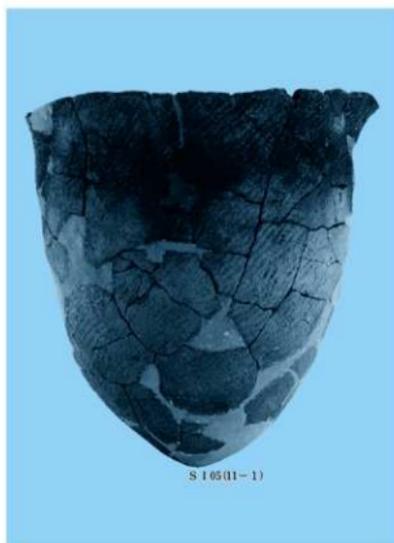
42 2号特殊遺構検出(南から)



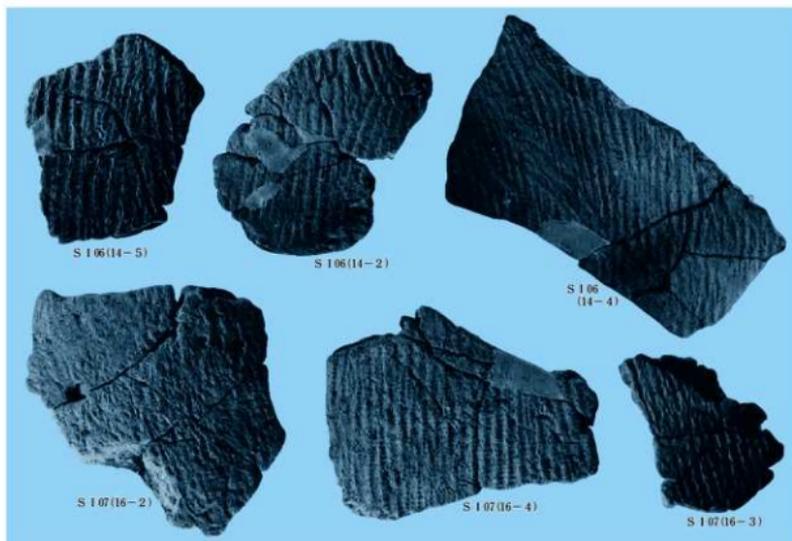
43 1号住居跡出土遺物



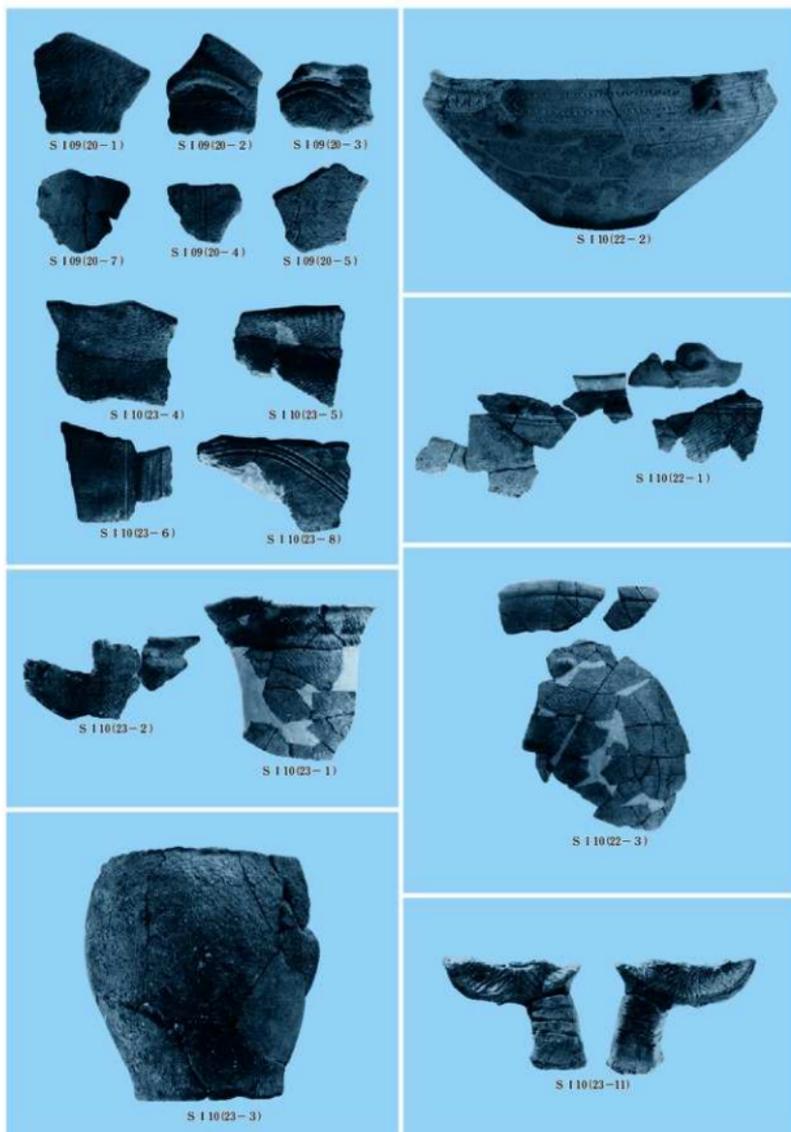
44 2・5号住居跡出土遺物



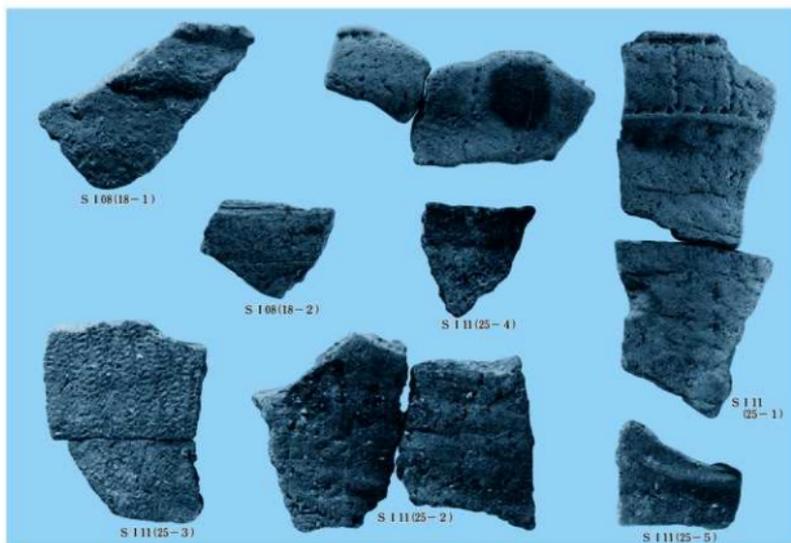
45 5・6号住居跡出土遺物



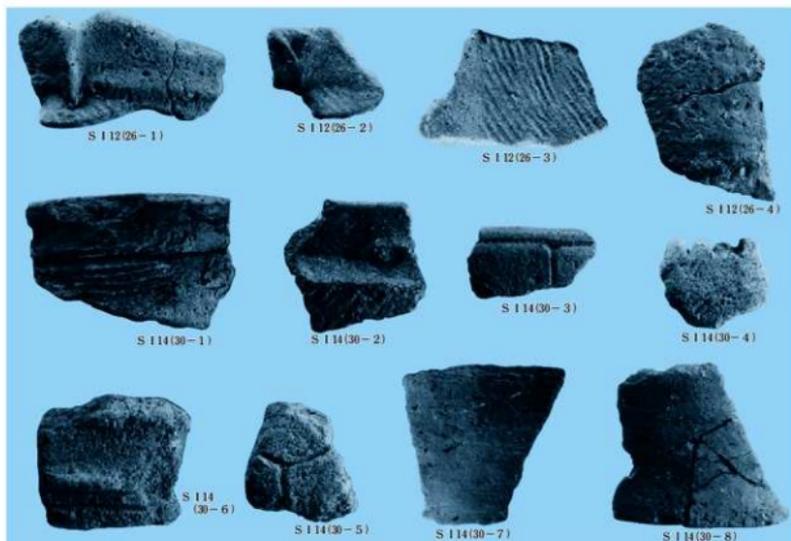
46 6・7号住居跡出土遺物



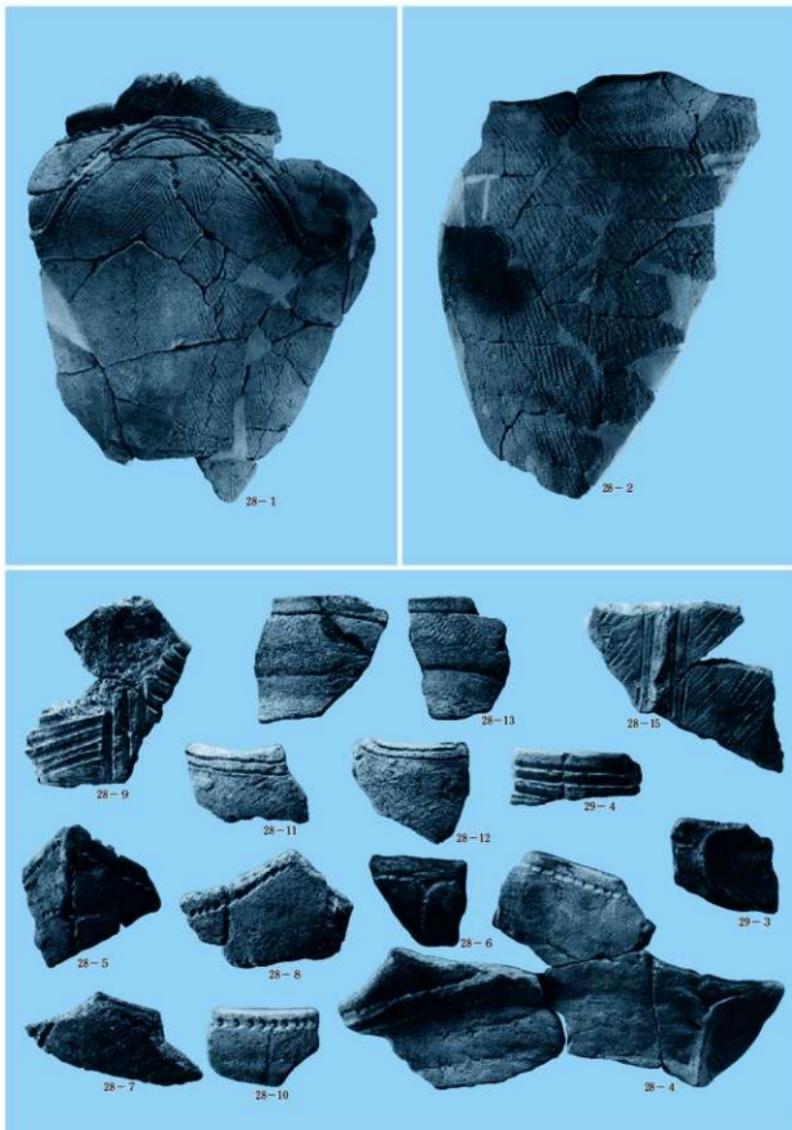
47 9・10号住居跡出土遺物



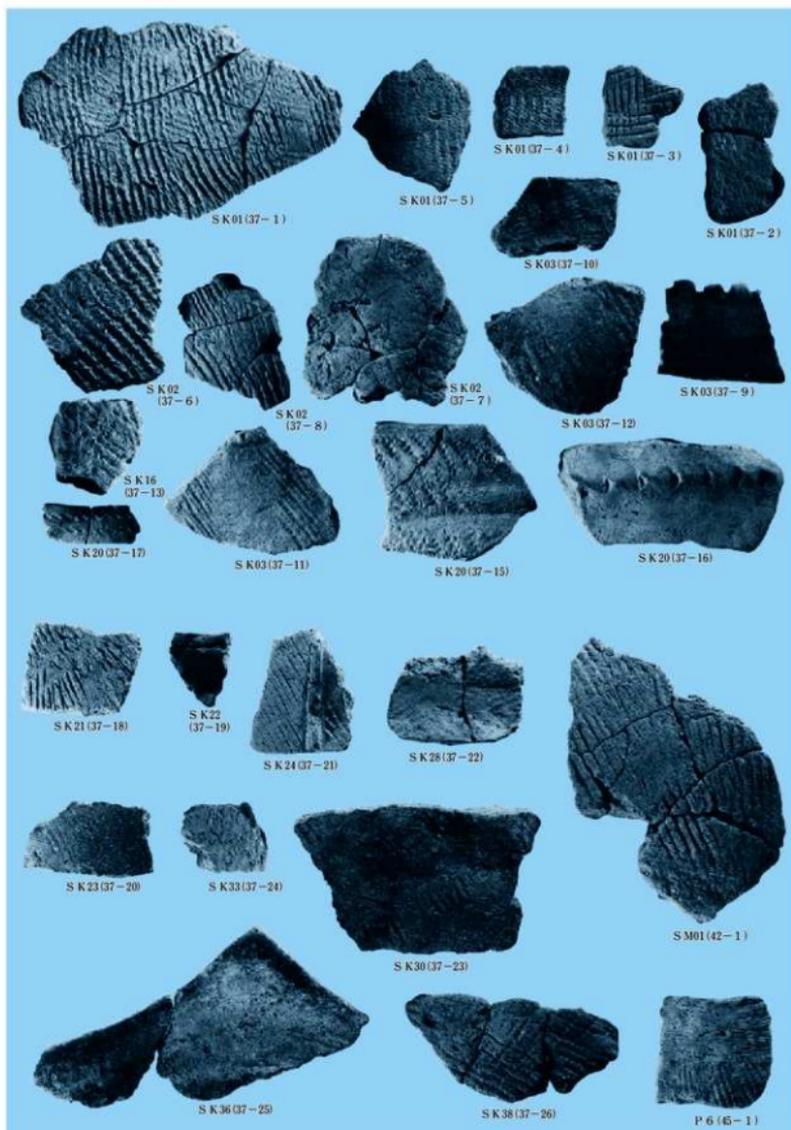
48 8・11号住居跡出土遺物



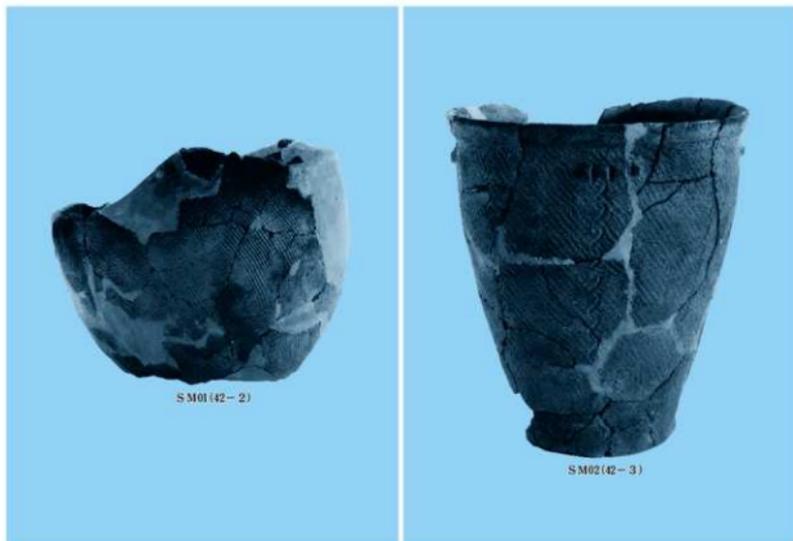
49 12・14号住居跡出土遺物



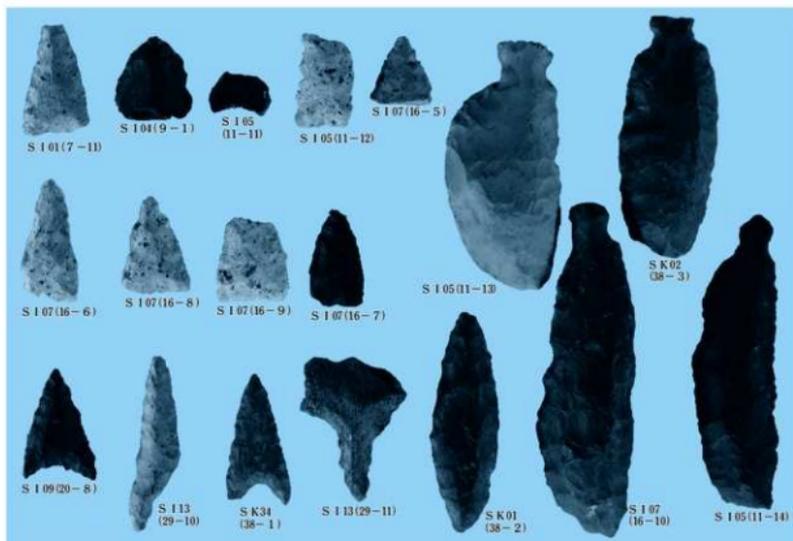
50 13号住居跡出土遺物



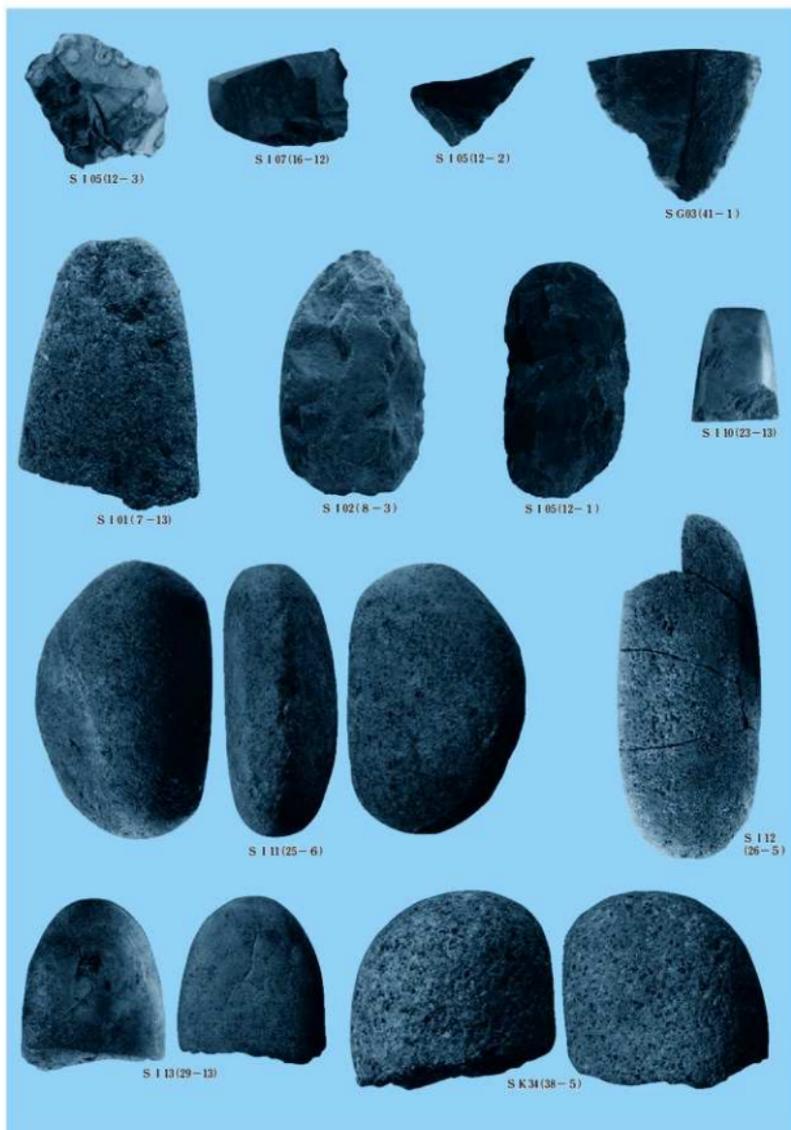
51 土坑・土器埋設遺構・ピット出土遺物



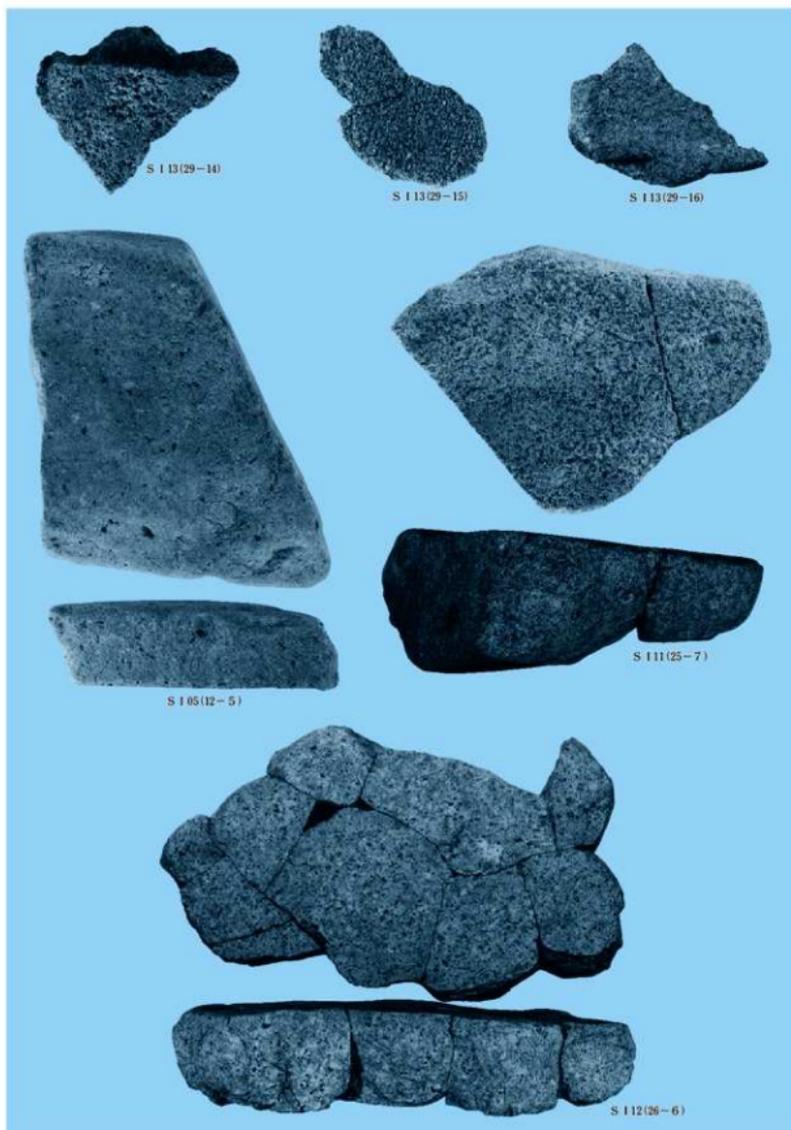
52 土器埋設遺構出土遺物



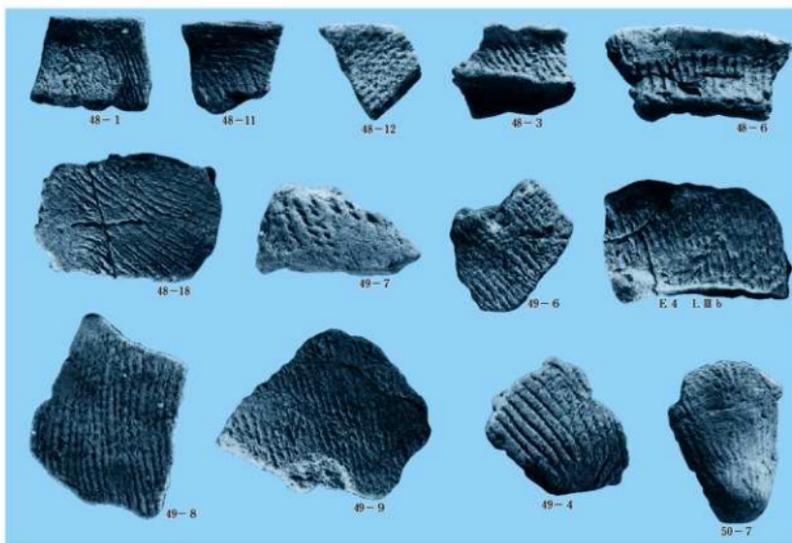
53 遺構内出土石器(1)



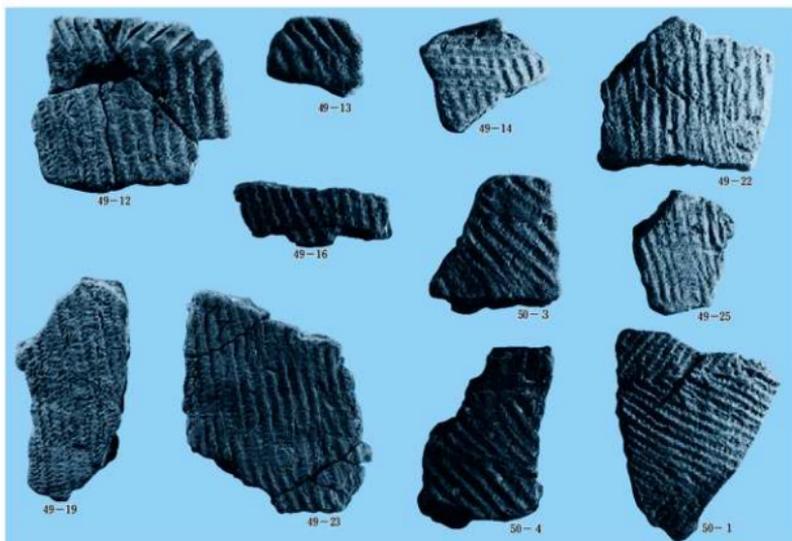
54 遺構内出土石器(2)



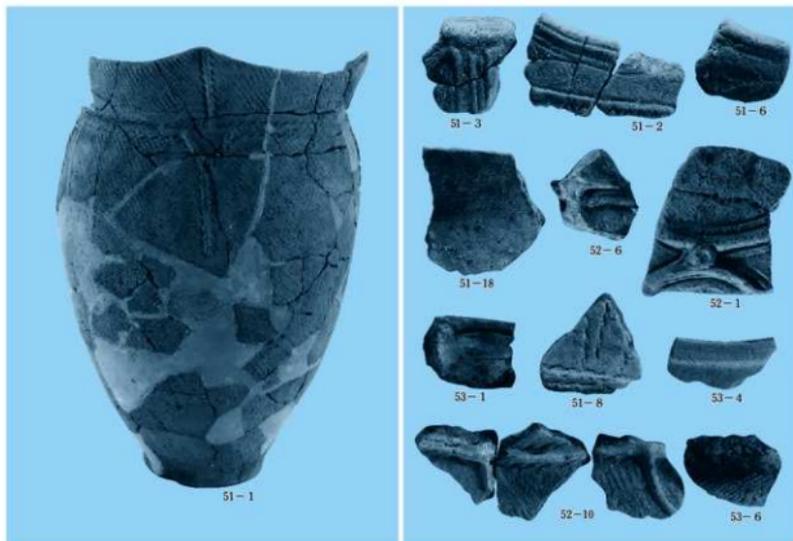
55 遺構内出土石器(3)



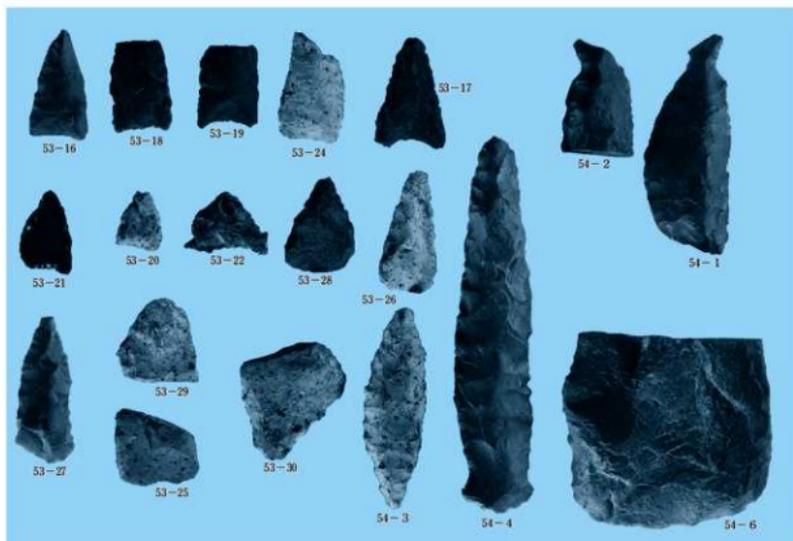
56 遺構外出土土器(1)



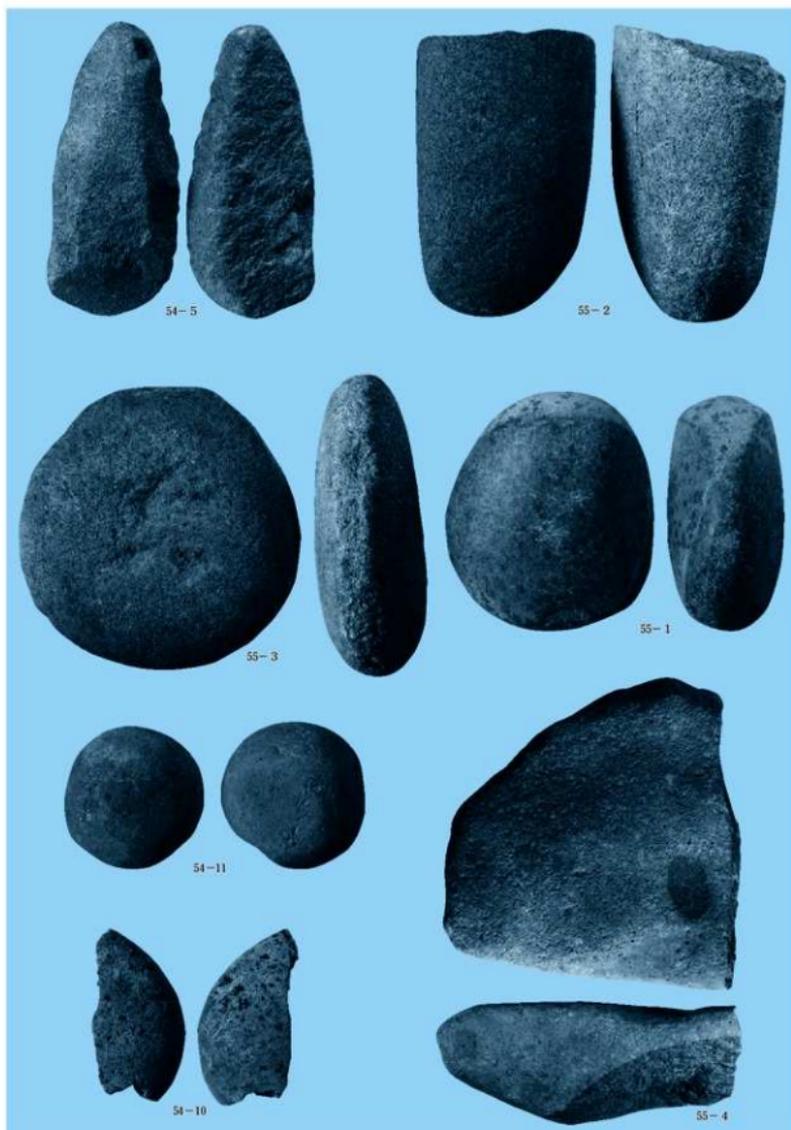
57 遺構外出土土器(2)



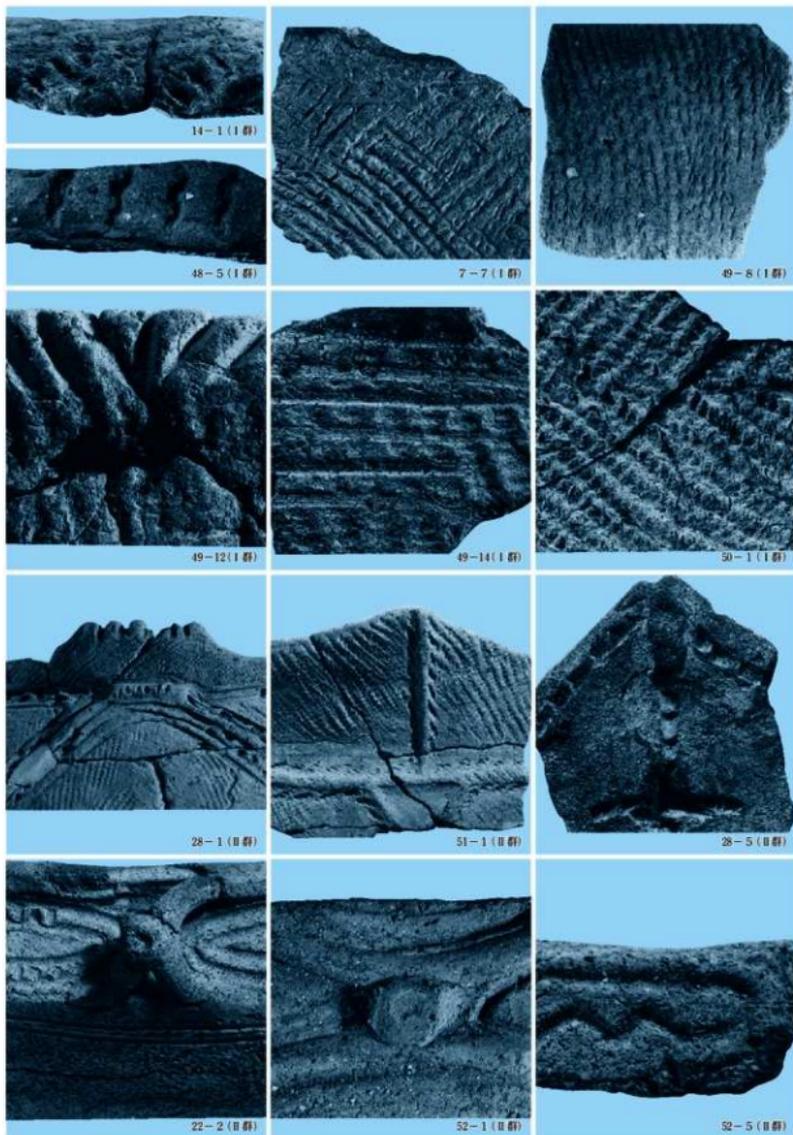
58 遺構外出土土器(3)



59 遺構外出土石器(1)



60 遺構外出土石器(2)



61 縄文土器細部

写 真 図 版

第2編 おお た ぎり 大田切遺跡



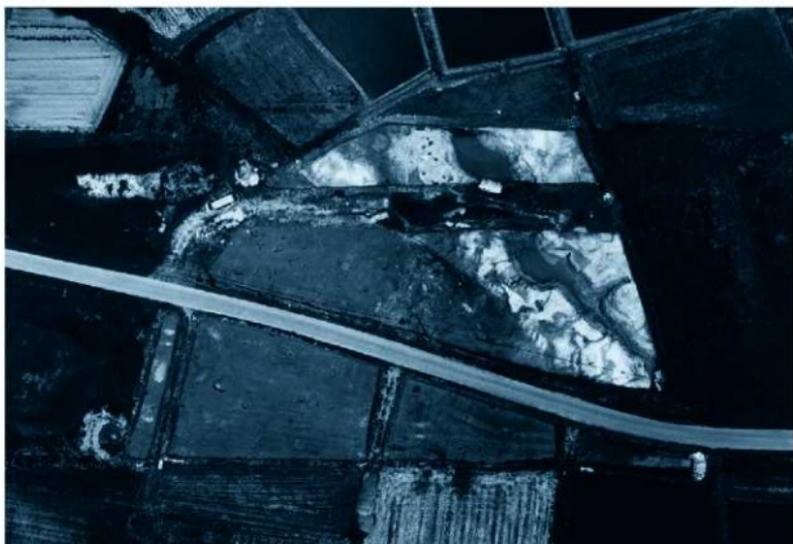
1 遺跡遠景(北上空から)



2 調査I・II区全景(南東上空から)



3 I区全景



4 II区全景



5 Ⅲ区全景

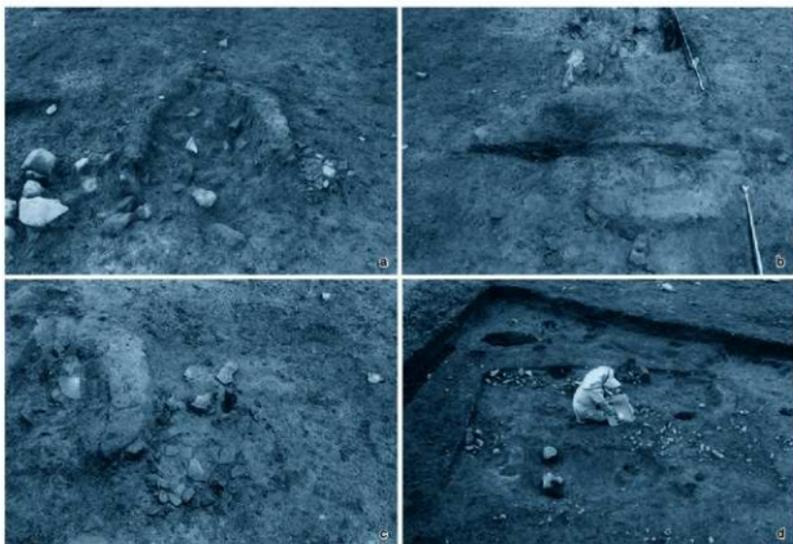


6 調査前近景，基本土層

a 調査前近景(北西から) b 基本土層(地点②)(西から)
c 基本土層(地点②)(北西から) d 基本土層(地点③)(西から)



7 1号住居跡全景(西から)



8 1号住居跡細部

a カマド全景(西から) b カマド断面(南から)
c 遺物出土状況(西から) d 掘影全景(西から)



9 2号住居跡全景(南東から)

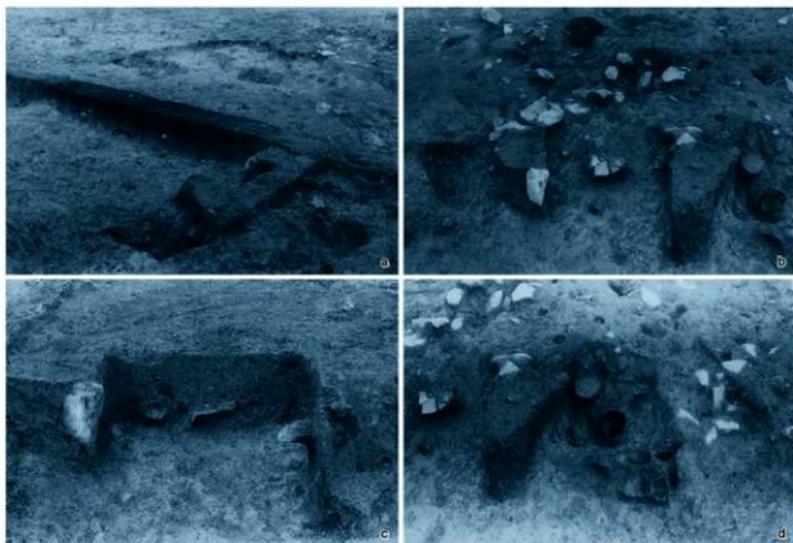


10 2号住居跡細部

a 断面(南から) b カマド全景(南から)
 c カマド断面(南から) d P1全景(南から)



11 3号住居跡全景(西から)

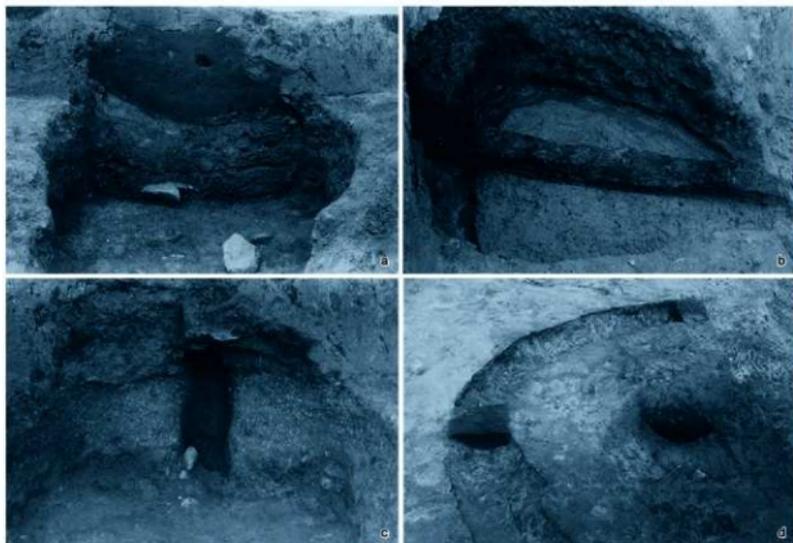


12 3号住居跡細部

a 断面(北東から) b カマド全景(西から)
c カマド断面(西から) d P1遺物出土状況(西から)



13 1号木炭窯跡全景(第1操業面)(南東から)



14 1号木炭窯跡細部

a 断面(南から) b 床面断面(西から)
c 奥壁(南東から) d 煙出しと同床断面(西から)

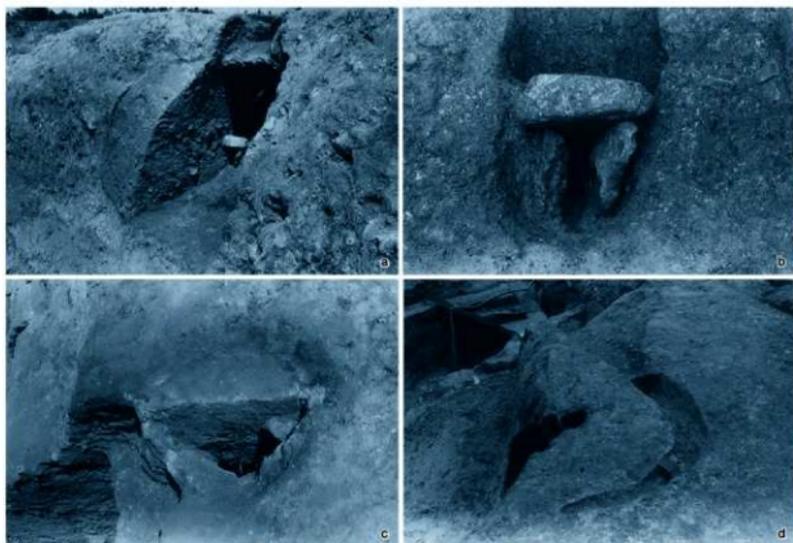


15 1号木炭窯跡各作業面

a 第2層炭面(南東から) b 第3層炭面(南東から)
c 振形・積炭調査面(南東から) d 完版状況(南東から)



16 2号木炭窯跡全景(北から)

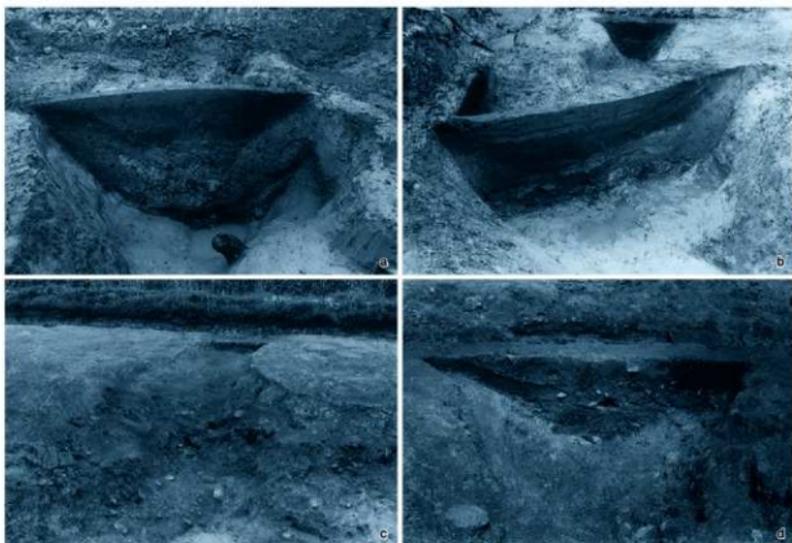


17 2号木炭窯跡細部

a 断面(西から) b 煙道(北東から)
c 煙出し穴断面(南から) d 窯跡全景(南から)



18 1号溝跡全景(北東から)

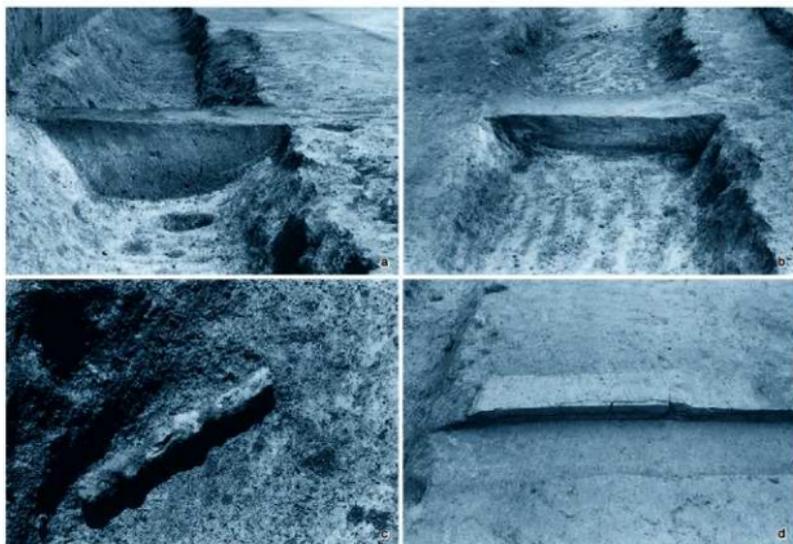


19 1号溝跡細部

a D-D'断面(西から) b C-C'断面(東から)
c 全景(B-B'付近)(北西から) d B-B'断面(南から)

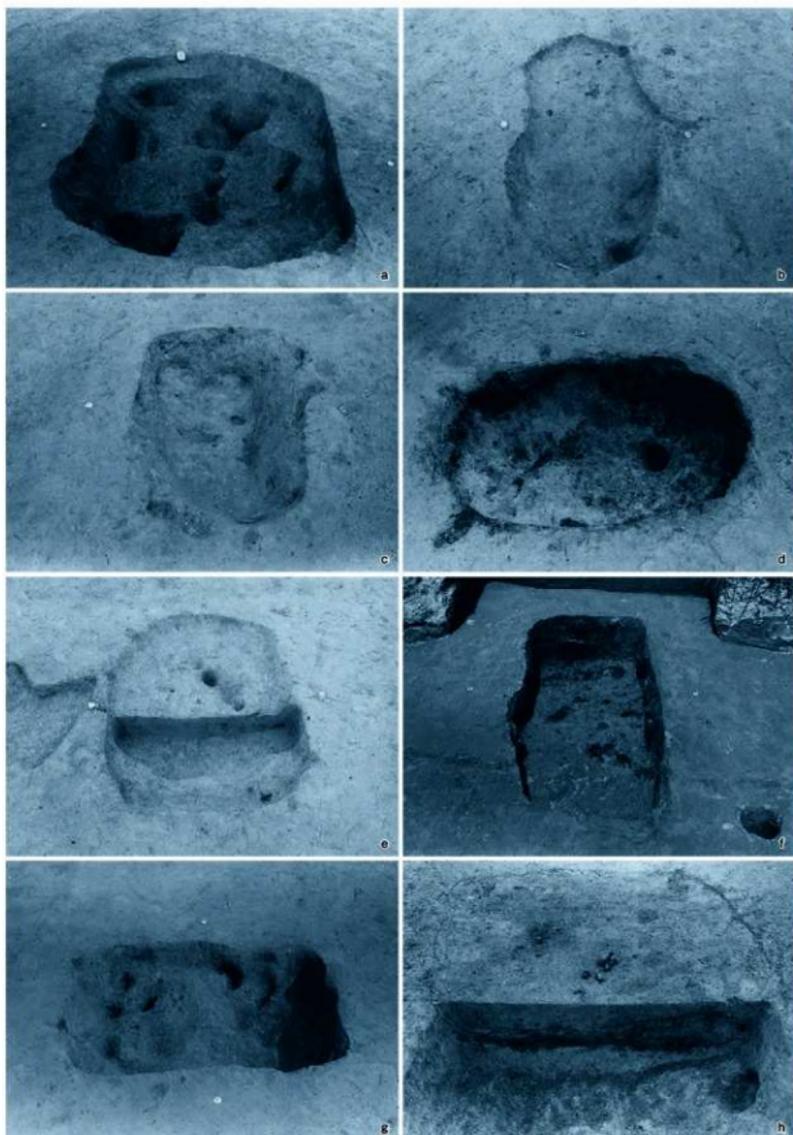


20 1号道跡完掘状況(北から)



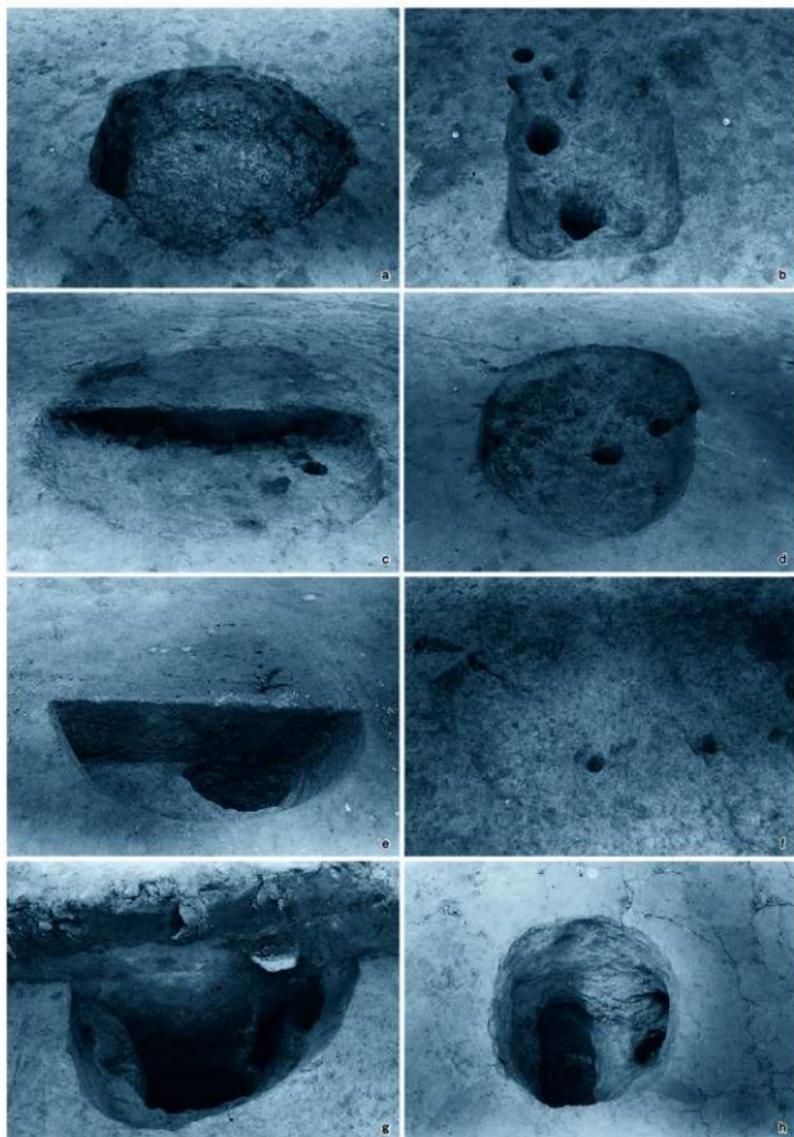
21 1号道跡細部

a 西溝断面(南から) b 東溝断面(南から)
c 遺物出土状況 d 縦断面(南から)



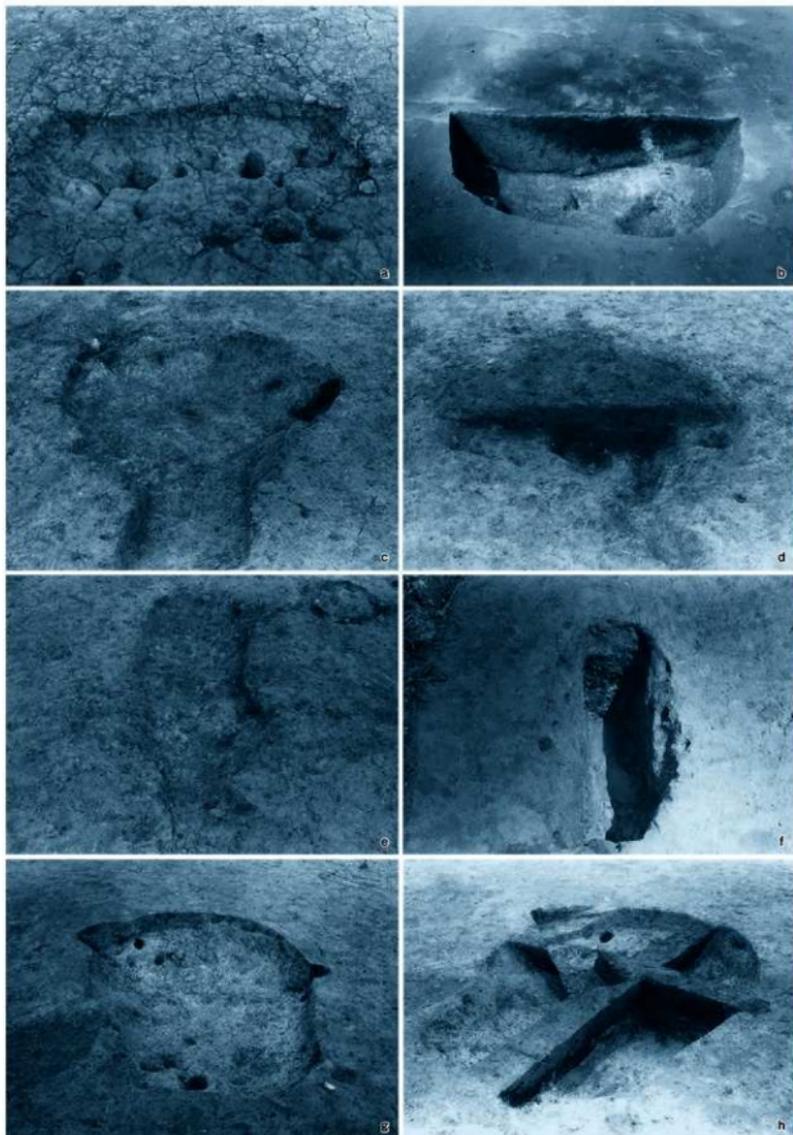
22 1～7号土坑

- a 1号土坑全景(西から) b 2号土坑全景(南から) c 3号土坑全景(南から)
 d 4号土坑全景(北東から) e 5号土坑断面(南から) f 6号土坑全景(南から)
 g 7号土坑全景(西から) h 7号土坑断面(南から)



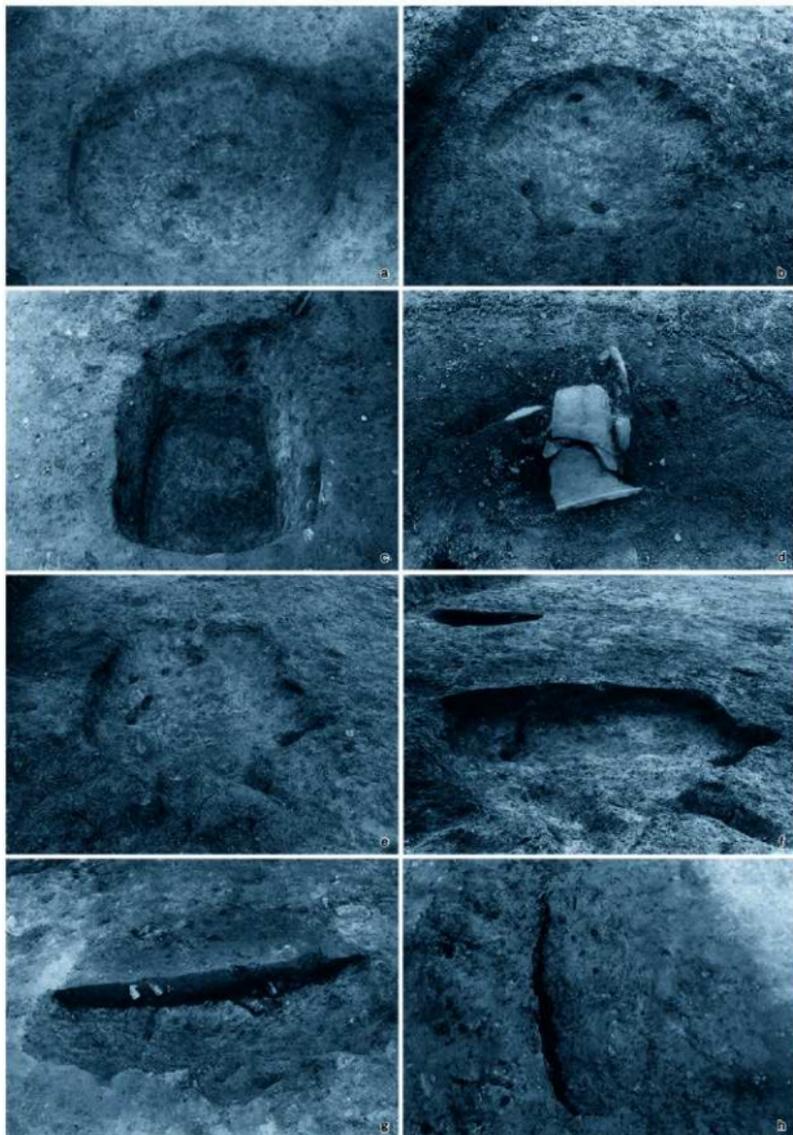
23 8~15号土坑

a 8号土坑全景(南から) b 9号土坑全景(西から) c 10号土坑断面(南から)
 d 11号土坑全景(南東から) e 12号土坑断面(南から) f 13号土坑全景(南から)
 g 14号土坑断面(東から) h 15号土坑全景(東から)



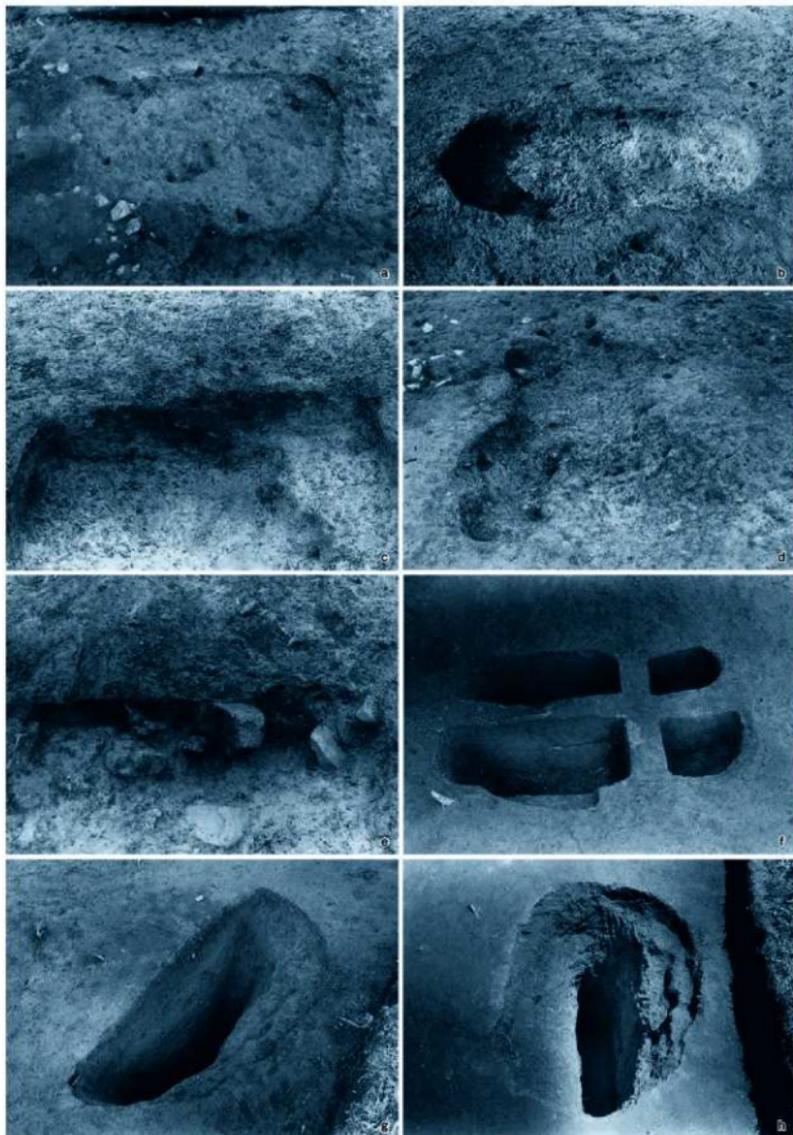
24 16～22号土坑

- a 16号土坑全景(南から) b 17号土坑断面(南から) c 18号土坑全景(南から)
 d 19号土坑断面(南から) e 20号土坑全景(東から) f 21号土坑断面(北から)
 g 22号土坑全景(北東から) h 22号土坑断面(北から)



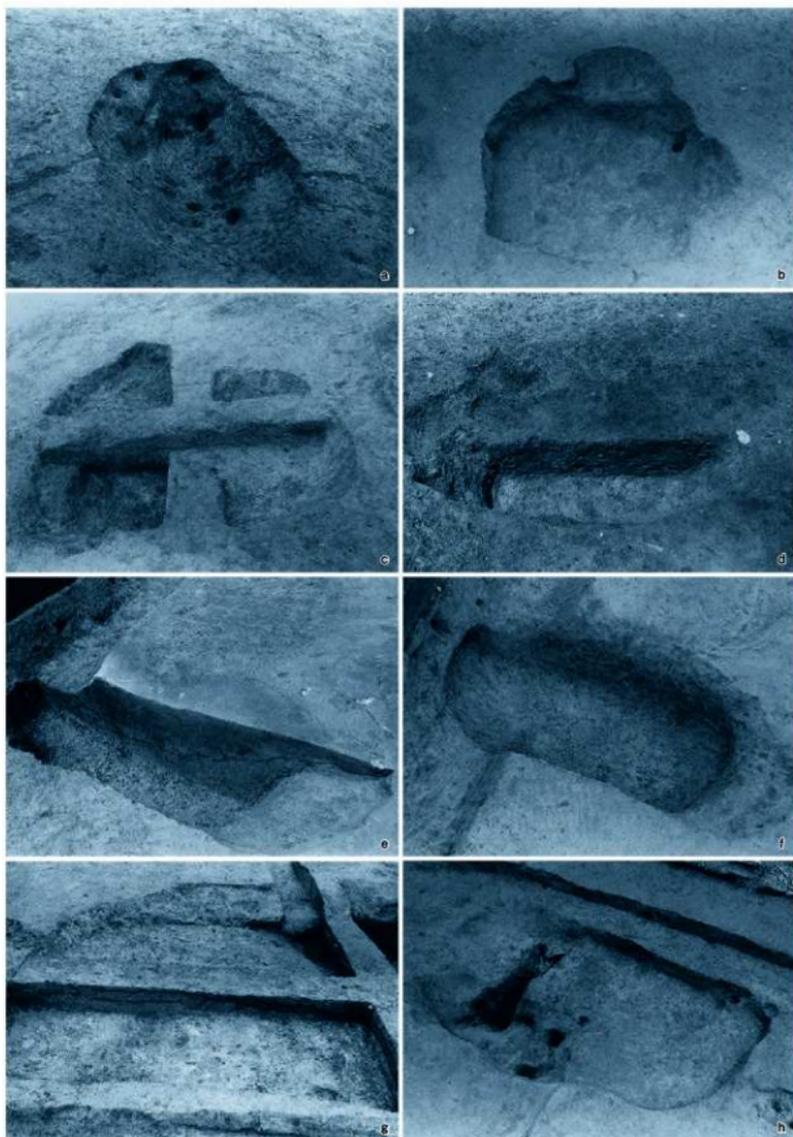
25 23～28号土坑

- a 23号土坑全景
 b 24号土坑全景(東から) c 25号土坑全景(北西から)
 d 25号土坑遺物出土状況(西から) e 26号土坑全景(東から) f 26号土坑断面(東から)
 g 27号土坑断面(南から) h 28号土坑全景(南から)



26 29～35号土坑

- a 29号土坑全景(北から) b 30号土坑全景(南から) c 30号土坑断面(東から)
 d 31号土坑全景(西から) e 32号土坑断面(東から) f 33号土坑断面(北東から)
 g 34号土坑断面(南西から) h 35号土坑全景(南から)

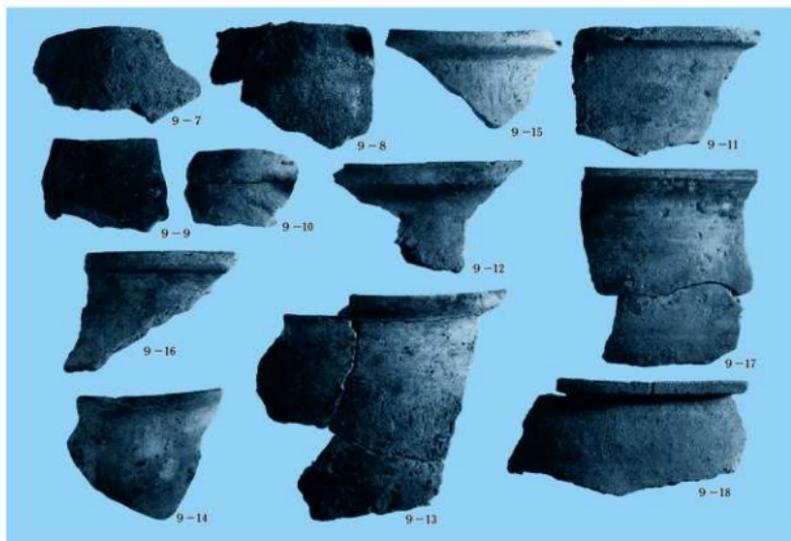


27 36~39号土坑, 1号特殊遗構

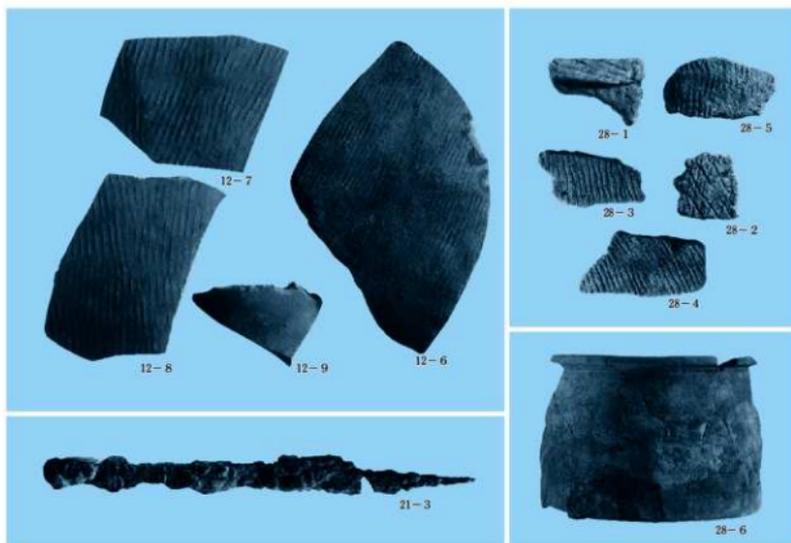
- a 36号土坑全景(北東から) b 37号土坑全景(北東から) c 37号土坑断面(西から)
 d 38号土坑全景(東から) e 39号土坑断面(南から) f 39号土坑全景(南から)
 g 1号特殊遺構縦断面(東から) h 1号特殊遺構全景(西から)



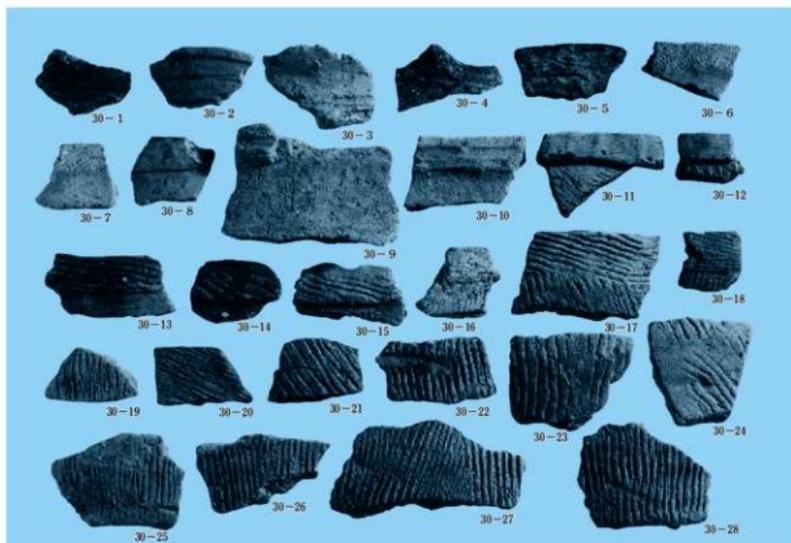
28 1～3号住居跡出土土師器



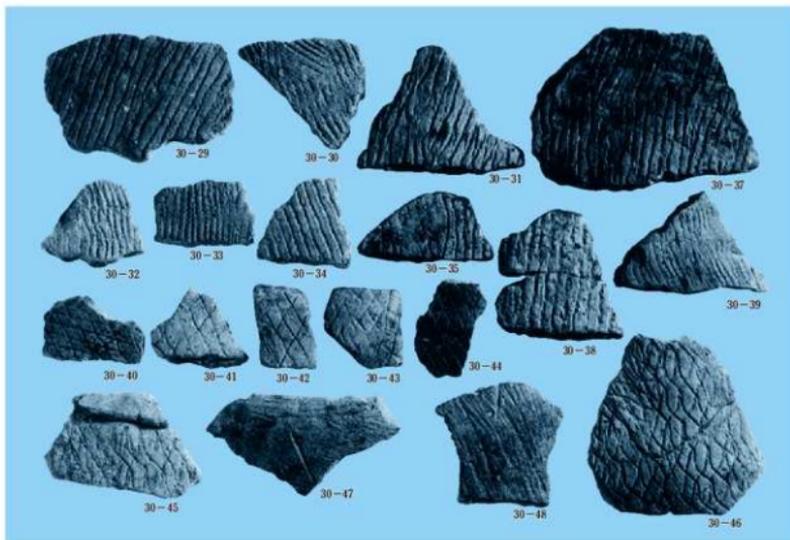
29 1号住居跡出土土師器



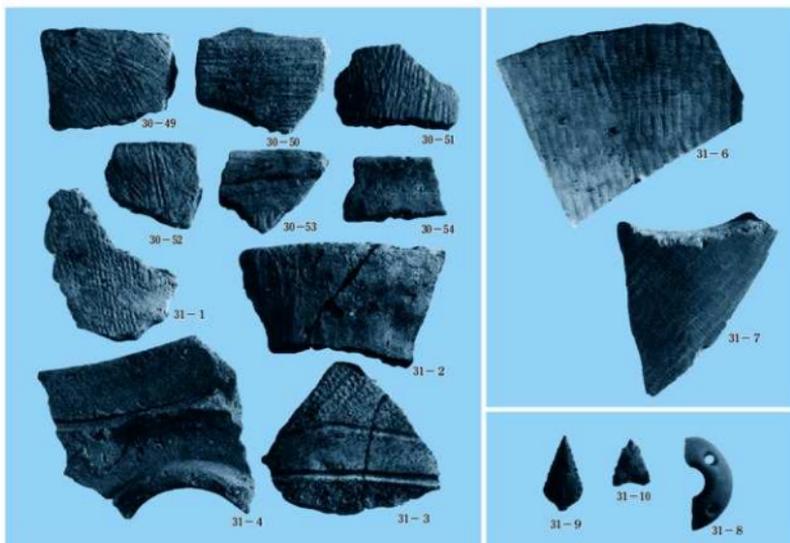
30 2号住居跡, 1号道跡, 20・25号土坑出土縄文土器・土師器・須恵器・鉄製品



31 遺構外出土縄文土器(1)



32 遺構外出土縄文土器(2)



33 遺構外出土縄文土器・須恵器・石器・石製品

報告書抄録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきしょうきほうこく							
書名	常磐自動車道遺跡調査報告46							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第441集							
編著者名	安田 稔・吉田 功・国井秀紀・青山博樹・門脇秀典・小河厚子・佐藤 洋・菅野和博・中野幸大・鈴木裕一郎・関根昌毅							
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部 遺跡調査グループ 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL.024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL.024-521-1111							
発行年月日	2008年2月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
原 B	福島県南相馬市 原町区馬場字原	206	00288	37°36'50"	140°55'40"	2006/4.11-8.11	5,200㎡	道路(常磐自動車道)建設に伴う事前調査
大田切	福島県南相馬市 小高区大藩字大田切	563	00135	37°33'55"	140°56'60"	2006/4.11-8.10 2007/4.12-5.15	8,100㎡ 500㎡	
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
原 B	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 土 坑 焼土遺構 土器埋設遺構 特殊遺構 ビット	13軒 39基 23基 2基 2基 6基	縄文土器 土製品 石器	縄文早期末葉～前期最初頭、縄文中期前葉の集落跡である。これらの集落は、時期の違いにより分布域が異なる。出土遺物は、縄文早期末葉～前期最初頭では燃余土器が主体に見られ、縄文中期前葉では、大木7b式土器に関東系の阿玉台1a式土器が共存することが確認されている。		
大田切	集落跡	縄文時代 平安時代 近・現代	竪穴住居跡 木炭窯跡 溝 跡 道 跡 土 坑 特殊遺構	3軒 2基 1条 1条 39基 1基	縄文土器 石器・石製品 土師器 須恵器 がま片 鉄製品 かわらけ 陶磁器	平安時代の竪穴住居跡からは製鉄炉のがま片が複数確認され、近接の道跡からの搬入品と考えられる。		

福島県文化財調査報告書第441集

常磐自動車道遺跡調査報告46

原 B 遺跡
大田切遺跡

平成20年2月29日発行

編 集	財団法人福島県文化振興事業団	遺跡調査部	遺跡調査グループ		
発 行	福島県教育委員会	(〒960-8688)	福島市杉妻町2-16		
	財団法人福島県文化振興事業団	(〒960-8116)	福島市春日町5-54		
	東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所	(〒976-0042)	相馬市中村字塚の町65-16		
印 刷	株式会社日進堂印刷所	(〒960-2194)	福島市庄野字柿場1-1		
